
星まつり～青潟大学附属シリーズ中学編

舞夜じょんぬ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星まつり〜青潟大学附属シリーズ中学編

【Nコード】

N6727E

【作者名】

舞夜じょんぬ

【あらすじ】

中学三年、修学旅行前日から。南雲秋世の物語です。心底惚れぬいた「花散里の君」こと奈良岡彰子への想いは一年経った今も今だ衰えを知らないまま。全校誰も知らぬものがない甘い恋人同士と想われているけれども、本当のところを誰も知らない。今だ、夏木宗たち「花散里の君親衛隊」たる彼らと同盟を結んでいることとか、まだ目覚めぬ性格良すぎる姫君へのいらだちとか、いろいろと悩める問題はてんこもりだった。修学旅行前に、秋世は夏木に呼び出される。「いいか、彰子のうちはいまとんでもないことになってるん

だからな。青大附中ではお前があいつを守れ！」彰子を巡る少年たちとの繋がり、そして秋世の家庭に秘められた信じがたい事実……

第一部 1

明日、放課後、一年前に話をした場所に来い。 夏木 宗

昨日の夕方、我が姫より、

「あ、そうそう。ナツキ がね、この手紙あきよくんに渡してだつて！」

ふっくらあまん風の笑顔で渡された。恋敵同士に手紙を渡しあうというのはちよつとなんだと思うのだが、それを違和感なく受け止められるのがこの姫たるゆえんだつた。

受け取る自分も、

「なんだと！ あの野郎なんの用なんだって？ またなにかちよつかい出すのか！」

気色ばむ必要もなく、

「なんだろうなあ、彰子さん、あいつに俺のことどういう風に言ってるの？」

なんでもない風に尋ねるのがおちだ。

「ナツキ に？」

ふたつわけのふんわりした笑顔で答えられたらもう、何も言い返せない。

「もちろん、あきよくんには学校ですごく大切にしてもらってるよつて。ナツキ もそれ聞いたら、よかったなって言ってたし。ナツキ いつも言ってるよ。ちゃんとあきよくんが私のことを大切にしてくれているのがわかるから、安心だつて。ありがとう、あきよくん」

感謝までいただいてしまったではないか！ これで文句言える奴

がいるのか？

たとえどんなに腹の中では言いたいことが渦巻いていたって、

「彰子さん、やだなあ、なんか俺、照れるよこれ」

とくねくねしたくなるしかないじゃないか。

だがしかし。「手紙」と言えたものではなかった。一文のみ。

明日、放課後、一年前に話をした場所に来い。

これだけだ。

やたらと太いマジックペンででかかと。

秋世は彰子に一言だけ、

「よかったあ、果し合いじゃなくてさ。俺あいつに決闘申し込まれたかと思ったよ！」 とおどける程度にとどめておいた。 「そっかあ、よかった」と微笑まれたらもう、余計なこと言う必要なんてない。

あとは自分の腹の中で、

畜生、なんでよりによってこんな雨の中、恋敵のそこへ行かねばならないんだよ！

それも修学旅行の前日にだぞ！

ちゃんと約束は守ってるだろうが！ お前らにちゃんと彰子さんのクリスマスは譲ったよな？ 初詣を俺が貰ってどこが悪いっていうんだ？

毒々しい言葉をわめき散らしたとしても、ばちは当たらない。

秋世は天に向かって傘を軽く揺らしてみた。メアリー・ポピンズがゆらゆらと空から降りてくる気分で「チムチムチエリー」をBGMにして。落ちてきたのは星屑ではなく雨粒のみ。せっかく気合入れてまとめた前髪にびしゃっと落ちこちてきた。

明日は修学旅行だつてのに、大丈夫か、この雨は。

天気予報では明日からしばらく快晴だと担任が言っていたけれど、全くもって当てにはならない。車酔いしやすい同級生が恨めしげに天を見上げていたのはご愁傷様、としか言いようがない。秋世もそ

れほど乗り物に強いほうではないので、できれば晴れている方がいいに決まっている。

どろどろの空を見上げて後、秋世はすぐ青い傘を肩にひっかけた。背中がぬれて冷えてくる。胸ポケットに押し込んでいる我が姫君の写真をそつと覗き込み、指先で軽くこすった。去年の生徒手帳で彼女が使った写真を、三年に上がってから即、頼み込んでいただいた代物だ。持っているのは自分だけだ。少なくとも、あいつは持つちやいない。

さあさ、行きまっせ！ どっちにしたって明日からは独り占めなんだからな！

気合をつけてたつたと歩いた。やはり我が姫・奈良岡彰子のパワーは偉大なり。元氣全開だ。あら、空の合間にちらりと青空が覗いたように見えた。すぐ隠れたけど、これもやっぱり彼女の力なり、か。勝手に決め付けると秋世は傘を背負ったまま走り出した。

指定された場所は、一年前の決戦の場。忘れるものか。ブレザーを羽織ったまま秋世は傘を持った手で前髪を拭いた。湿気が髪に籠って、かなり臭う。帰りに携帯用のシャンプーとヘアムースを買っていこうと決める。朝は早いからきつちりと髪型整えて、いい男ぶりを見せ付けたいところだ。他の野郎どもがさんざんむかつく顔をみせるだろう。けど、孔雀と同じだ。いい女を振り向かせるため絢爛豪華な羽を広げてみせる、それは生き物の本能ではあるまいか。孔雀の気分を味わうのも、なかなか乙なものだ。

「おい、こつちだ、こつちむけ」
大量の木材が積み重ねられた叢に突っ立っていると、背後から声が聞こえた。

「あ、お久しぶりっすね」
わざとのどかに返事を返してやった。
ガ克兰の袖口と裾のところに、白線が二本入っている独特の制服。

髪の毛はかりかりのスポーツ刈り。

夏木宗。通称「ナツキ」。別名「花散里の君ファンクラブ」会長。

南雲秋世最大の恋敵なり。

一年間、一度も顔を合わせなかったわけではない。

わざわざ青大附中の校門まで彰子を迎えに来たりとか、学校祭の時にはわざわざ「ファンクラブ一同」と集団で彰子を取り囲み臨時の「お茶会」をひらきやがったりとか、声こそかけないものの存在感だけはたつぷり植え付けられている。秋世の立場が規律委員ということもあり、いろいろと他校生徒とのトラブルを避けるべく見張る必要があつて、あまり話をするのもためらわれた。しゃべる気も、本当のことといえばあまりなかったが。

誰が好き好んで恋敵と語り合う気になれるんだ。

ただでさえ彰子は「あきよくんもナツキも、私にとっては大切な友だちだから」と言い切っているじゃあないか。そう「大切な友だち」ときた。それを今すぐ、「恋人だろうが!」と迫ることを、今の段階では許されていない。自分自身の自然な本能からしたら、もういわゆる「恋人」の範疇まで入ってみたいと思うのだからいけません、姫の思いはまだまだ発展途上中。ゆっくり、楽しく、素敵な思い出を積み重ねて、いつかは騎士ナツキから我が姫を奪い取りたいものと再認識するのが常だった。

まあな、今のところは「友だち」だもんな。

にこやかさは我が姫にたがわず、お得意なのが南雲秋世の天性だ。

「ちょっと来い。話がある」

「そりやもう、話したいから来たんであつて」

「ざけんじゃねえ、早く来い」

さつさと話をつけて戻りたいのは秋世も一緒だった。修学旅行の準備がまだ全然終わっていないというのもあるし、今回は頼りのば

あちゃんが入院中なもんだから自分ひとりで片をつけなくてはならない。規律委員長が影のファッションリーダーである伝統を守るためにも、それなりのおしゃれをしなくてはいけない。ファッション雑誌チエックも怠るなかれ。規律委員長は単に、余計な持ち物を取り上げたり、スカートの丈をチエックしたりするだけが仕事じゃないのだ。

こんなところで本当だったら、恋敵と雨の中、にらみ合いなんてしたくないのだ。

夏木は両ポケットに手をつ込んだまま、応援団団長風に肩を怒らせ、自分から近づいてきた。

わざわざ秋世が近づくまでもなかったのが意外だった。

「ほんと、お前なんかになあ、しゃべりたくねえよ、けどしゃあねえ、彰子のためだ」

「いや、しゃべりたくないならこちらは別にいいんだけどさ」

わざと平静を装う。こいつ、見るからに鉄砲玉、といった感じの男子でもって、手が早い。うっかり秋世がとぼけたこと口走ったら即、ストレートパンチが飛んでくるだろう。単純明快、空は青く雲は白。善悪白黒はつきりしているこの性格。正直、秋世のつるんでいる奴にはあまりいないタイプの人間だ。

肩を揺らすようにして、夏木は南雲の顔を真っ正面から見据えた。うつむくように若干瞳を寄り目にして。

「どうせ彰子はしゃべってねえだろ」

「だから何を」

「家のことだ」

悔しくも聞いていない。「いい友達」の限界か。秋世が黙っていると夏木はにこりとせす、

「彰子だなやっぱ。お前に心配かけたくねえんだ、あいつは」

かけてくれたっていいのに、かけてくれないんだよ、ああそっさー！

しとしと、雨と一緒に芯まで染み込んでいきそうな冷たい雨、め

げる。

「いいか、これだけ言っとく」

ずいぶん長つたらしい前置きだったが、結論は単純だった。

「彰子のうち、今、まじでやばいからな。お前、あいつにやなこと全部旅行中忘れさせる。いいな」

やなこと？

秋世が尋ね返そうとすると、夏木は顔をびんびんに張ったまま、言い放った。

「ろくでもねえことが今、お前の知らんところで起こってるんだ、いいか」

いいもなにも、何がなんだかわからない。頷かないことには話を進めてくれそうにない夏木。

秋世は大きく深呼吸して頷いた。

「OK、その件は自信もって引き受けました」

いいことばかり、姫に植え付けてお返ししましょうってな。

計画はすでにことまかに立てている。

夏木の言う「ろくでもねえこと」とはおそらくだが、彰子の家族を巡るいろいろと面倒な問題のことだろう。公立中学の教師である父と眼科医である母。この二人の馴れ初めとか毎日のお笑いいっぱいの話題とか、そういう話だったらたくさん聞かせてもらっている。こういう親に彰子が育てられたんだと納得するような両親だった。とにかく、笑う。語る、面白い。下手な漫才師見ているよりずっと面白い。しかし夏木の言うのはそういう話題ではなさそうだった。第一、小学校時代からのお付き合いときてるし、さらに夏木の現在担任でもある彰子父。秋世にはわからない部分が多々あるのもまた事実だ。

「俺もあんまりそのあたり、聞いてないんだけどあれっすか。彰子さんち、相変わらず嫌がらせされつづけてるのか？」

約束した以上は聞きたいこともそれなりに聞き出したい。夏木もがちつとした目を相変わらずに、

「やっぱり知らねえのか」

肯定のお返事だった。

「彰子、全然言わないからだろ。あいつ、下手なこと言うと周りに心配かけると思い込んでやがるだろ、ったく、んなこと心配するなつて言いてえよ。時也の言う通りだ」

もうひとりの恋敵にあたる名前を出した。名倉時也とは、夏木と同級生ながら、朴訥で少々弟っぽいところのある奴。彰子の崇拝者であることは言うまでもない。

「青大附中の奴で、彰子の事情知ってる奴、いねえのか」

「ああ、たぶん俺だけ」

このあたりは自信を持って断言してしまおう。夏木の言う通り、彰子の性格は「大好きなみんなに余計な心配かけさせたくないから、内緒にしとくね！」だった。秋世からしたらぜひ、この機会にぜひ、一歩でも二歩でも距離を詰めて、語り合いたいことの一つなのだが、彰子曰く「話しても面白くないこと、楽しくないこと、どうしようもないことは口に出さないほうが、いいこと多いもんね！」だという。けど、それを受け止めてやるのが「恋人」たる地位のものだろう。残念ながら今のところ、秋世も夏木もその「恋人」地位にはたどり着いていない。歯噛みしたくなるのは男心なりか。

「そうか、なら、なおさらだな」

事情通であろう、夏木の口調はさらに強まった。雨音に負けないくらいの怒鳴り声。周りには誰もいない。他に誰もいないから、安心して怒鳴ることができるといふのだろう。

「いいか、南雲」

「ははあ」

「今、俺らの学校は勘違い父母の連中で馬鹿なことになっちまってるんだ。原因作ったのはま、俺だがな。なら先生も彰子と同じで全然なんも言わねえけどな、どうやらうるさい保護者連中に吊るし上

げくつてゐらしいんだ。去年からずっとな」

なんで吊るし上げ食っているのか、その理由を背負っているのが夏木、本人にあり。

そのくらいは聞いている。

「けどあの事件からはもう一年経っているんでは……？」

「ねちっこいんだ、あの親ども」

なんでも、彰子の悪口を言った女子に対し、「花散里の君」親衛隊長たる夏木が鉄拳を食らわしたところ、当たり所が悪くて大騒ぎになってしまったという事件。いわば傷害事件なんだから、もちろん相手に恨まれたり謝ったり顰蹙かつたりするのは仕方ないことだろう。秋世からしたらなんで一年もねちっこく恨まれなくてはならないのが理解できなかった。担任である彰子の父……通称「なら先生」……が、教え子夏木をかばったり他生徒に頭を下げたりするのもごくごく自然なことだろう。仕事だし。一度ちゃんと頭を下げたら、あとは「子ども同士の出来事」としてなあなあに済ませるのがふつうじゃないのか？ 青大附中だったらきつとそうになっているだろう。そういかないから、こうやって夏木がふんぞり返って秋世の前に立っているというわけだ。

「相変わらず、あの、手紙を投げ込まれたりとか？」

「毛虫だとか、塩とか、生ごみとか。よく続くよなあ、あれって思うぜ」

「で、夏木はどうしてそれ知ってるわけなんで？」

「あたりめえだろう！」

すぐ近く、小学校時代の幼なじみ、かつ「花散里の君」親衛隊長。

「毎日、なら先生んちに行って、ごみ捨てたりしてるの、俺と時也だ」

ああそうですか。すなわちファンクラブの活動として、嫌がらせの後始末を買ってでてるというわけですか。

秋世は傘に響く雨音を、全身で受け止めた。背だけは一握りくら

い伸びているようだが、相変わらずのがきつばさは抜けていない。秋世の方がずっと背が高いはずだ。なのに、この威圧感というのはなんだろう。十五歳男子としてそれなりに、けんかもしてきた殴り合いもしてきた、でもどうしてこういう雰囲気飲まれてしまうのだろうか。自分でもわからなかった。青大附中の中では少なくとも経験する機会のない空気が雨の隙間に満ちていた。

「いつもだったら俺と時也が彰子を守ってる。おめえの出る出番はねえ。だがな、旅行中はお前だけが頼りなんだぞ。いいか、そんなきざつちい顔ではたして彰子を守りきれるかわからねえが、もしあいつを泣かすか落ち込ませるか、馬鹿女子どもにけりいれられるかなんかして帰ってきたら、俺はお前をとことんぶつとばすからな。その辺、覚えとけ」

ぶつとばすと言われても、その意図することがわからない。

秋世は無理矢理笑顔をこしらえた。

「あの、ぶつとばすとは？」

「約束しただろ。青大附中にいる間は、南雲、お前が彰子を守るんだってな」

確かに。

できれば、それ以外の場所でも守らせてほしいなとは思っているのだが。

「こちらは俺たちに任せとけ。お前はな、とにかくあのとんでもない奴らのことを、旅行中全部彰子に忘れさせて、大口開けて笑わせやってくれたらいいんだ。話はそれだけだ！」

後ろ向け、後ろ！ 背中をぴんと伸ばしたまま、ガクランをなびかせて夏木は大腿で去っていった。この雨だというのに傘を持たず、しかも例の迷彩柄自転車を引き連れて。雨音はさらに激しくなり、傘を持っていても背中、スラックス、ともにずぶぬれになっていくのがわかる。秋世はただ黙って見送り、そつと敬礼の真似をするのが精一杯だった。

「花散里の君」親衛隊長に向かって。

彰子と夏木との間に結ばれている絆は、秋世の知る限り「恋愛」めいたものではなかった。

単なる「大切な友だち」に過ぎないだろうと読んでいる。

同時に秋世との間にも同じ色合いの糸が結ばれている。

どうしてそういう色なのか秋世にもよくわからないのだが、彰子にとって「特別な男子」は「恋」ではなく「友情」にとどまるものらしい。彰子の性格からしてそういう傾向が強いのは気づいていたけれども、しかしだ。

この関係、なんだよほんと。二股じゃなくて、三股だろう！

このねじれた関係、疑問を持たなかったわけではなかった。

一応、青大附中において、南雲秋世と奈良岡彰子との関係は「学校内でもっとも熱いカップル」という扱いを受けている。たまたま秋世が規律委員長だったことと、以前かなり恋愛沙汰で派手な動きをしたこともあって全校生徒から注目を浴びている状態でもある。

はつきり言ってしまうと、もし彰子以外の女子でそういう扱いをされたとしたら、秋世は即、その子から離れたくなるだろう。露骨に周りからひゅうひゅう言われると、大抵の男子はなえるはずだ。どんなに顔を見て、可愛いと思ったところで、「いやあ、お前女子ばかりとくつついてるんじゃないよ」と男子たちから馬鹿にされるのだけは避けたい。男子の付き合いの方が女子とのお付き合いよりも大切なものだと思っていた。もちろん彰子と「お友だち」になるまでの考えだった。

現代の「美少女」という概念からすると、彰子の顔立ちは決して美人でもないし、可愛くもないらしい。そりゃあ、彰子がグラビア雑誌のお姉さんみたく水着姿でビーチに横たわることとはまずありえないだろうし、そういう写真の対象にも決してならないだろうとは思う。だが、それ以上にまんまるでふつくらした「あんまん」タイプのほっぺたとか、笑うと線になる目元とか、一緒に座るとほかほ

かしてくるような身体つきとか、秋世の好みにすべてぴったり合った彰子の外見。これをどうして受け入れられないといえようか！さんざん周りから「お前ももっと、まともな女子選べよ」と勘違いした助言をいただいたがあっさりと無視したのは、ひとえに秋世の好み概念に他ならない。むしろ、他の野郎どもが彰子に手を出さないでくれたからこそ、現在の自分がいるとすら思えてくる。もし、青大附中に入学後即、彰子のよさを一発で見抜ける野郎と出会ったらもう手を出すことは出来なかったはずだし、彰子の性格上一度付き合った相手をふることは絶対ないだろうし、秋世にも望みはなかったであろうし。

ほんと、運良かったよなあ。

たまたま秋世が、当時付き合っていた組の女子と別れていたこと。

たまたま彰子が「彼氏いないよ！」と宣言してくれたこと。

たまたま彰子の外見を好む男子がほとんどいなかったこと。

偶然が偶然を呼び、今や自分の理想の女性が側にいる。

たとえご本人が「いい友だち」程度の認識だったとしてもそれはそれ、これはこれ。

恋敵が二人もいて、虎視眈々と狙っている状態だとしても、あいっらは青大附中には……学校祭などを除いて……入ってこれないはずだ。

そうだよな、彰子さんは、青大附中の中では、俺だけだもん

な。
ほんの少しだけ自信を取り戻した後、秋世はゆっくりと歩き始めた。雷鳴らしき音がかすかに斜め右の方向から聞こえてくる。傘に落ちちまって感電してしまっただけならいい。これから早く、ばあちゃんの入院している病院に走って行って、顔を見せておかなくてはならない。いつもだったらばあちゃんがやってくれた荷物作りもしなくてはならない。両親は仕事で忙しいからはっきり言って当てにならない。そうそう、土産を誰に買ってくるかもこれからリ

ストップしねばならないではないか。やることは山ほどある。

隊長、どうもな。ご期待以上に、姫を守らせていただきます。

第一部 2

あんな子になんて、買うもんでない。もつたいない。

待合室の席はかなり混雑していた。薬調合してもらうのを待っている人、赤ちゃんをだっこしたお母さん、杖を小脇に抱えて話し込んでいる年配の婦人、病院独特のすっぱい匂いが立ち込めている。秋世が椅子の脇をすり抜けようとすると、おしゃべりに興じていた老婦人に「ちよつと、ちよつと」と呼び止められた。

「あらあら、風邪引くわよ。これで頭拭いてちょうだいよ」

「あ、ありがとうございます」

ぺこりと頭を下げ、ハンカチを受け取った。新品、使われてない。使うなんて、できやしない。戸惑う秋世に、老婦人は面白そうに笑いながら、

「いいのよ、お互いさまでしょ。そのハンカチ、持って行っているわよ」

「すみません」

遠慮なく使いなさいよ、の意だろう。大体七十代前後。もしかしたらあちゃんと一緒に話をしたことがある人かもしれない。もしもこれがばあちゃんだったら、「遠慮しないで受け取るときなさいよ、秋世、受け取ってあげることが、お礼になるんだからね」と言うだろうし。素直に感謝の意を表すことでとめておいた。実際前髪はもう、雨でぐつしより、天然シャワーを浴びっぱなし、タオルなんてありやあしない状態だった。ありがたいといえばありがたい。秋世はもう一度、老婦人へ「ありがとうございます！」と笑顔向けることにした。

いい人だよなあ。

改めて思う。もともと秋世はこうやって、見知らぬ人から親切にしてもらったことが多かった。どうしてかわからないけれども、困っ

た時とか悩んでいる時とか、さりげなく手を差し伸べてもらえる得な性格だった。世の中いろんな奴がいるというけれど、好き嫌いはともかく、みんないい人だってことには変わらない。あとではあちやんに報告しておこう。

ばあちゃんが先月から入院している病院はいわゆる「末期患者」中心の看護をしていると聞いている。秋世が知りたがったわけではない。同じクラスの水口要が余計なことをべらべら彰子に話し掛けてきたのを、たまたま耳にただけだ。

なあにが「あそこはもう、手遅れとかさ、治らないとか言われている人が送られるとこなんだよ。だからさ、お年よりがすっごい多いんだよ！」だ。ったく、病院ともあるうものが、治らないって決め付けて入院させるわけねえだろうが！

どうも最近、この水口……通称すい君……の言い草が、気に触る。決して間違ったことではないと、理解してはいる。

秋世のばあちゃんがそこに入院していることを知ってて嫌味を言っているわけでもないということも、頭ではわかつているのだ。理屈ではない。理由なんて本当はない。

エレベーターを待ってみたものの、戸が開くたびに車椅子や杖を付いたパジャマ姿の患者さんたちと目が合い、なかなか乗り込むことができない。若さを活用して、六階の病棟まで階段で上がるしかなかった。途中、白衣姿の先生と顔を合わせ、いつものように「お世話様です」と挨拶する。向こうも何度か秋世と話をしたことのある人なので、「学校の帰りか？」と軽く声をかけてくれる。確か、青大附属から医大に進学した人だと聞いている。なんとなく後輩を見るようなところもあるのだろう。

「はい、明日から修学旅行なんですよ」

「へえ、けどあの雨じゃあなあ」

「やむつて言ってるけど、どう考えたってやみませんよねえ」

たぶん二十代後半だろう。根拠はない。クラス担任の先生と同じ

くらいかなと思ったただけのことだ。先生はふつと口を尖らせて息を吹いた。

「ははあ、だからだなあ、てるてる坊主作ってたんだなあ」

「は？」

「まあ行ってみるや。おばあちゃん待ってるぞ」

はあどうも、と頭を下げ、秋世はあと一階分の階段を昇った。

看護婦さんたちに声をかけられつつ、秋世はいつもの病室へと向かった。ばあちゃんの様態が最近あまり芳しくないとは聞いていたけれど、毎日顔を見ている限りそんなんでもないんじゃないかと思う。白内障もあつて目が見えなくなっているのは今までもそうだったし、疲れやすくいつも布団に入っているのもここ数ヶ月そうだったし、病院に入ったからといってそれほど悪くなったようにも思えない。八人部屋の戸口脇に置かれているベッドがばあちゃんの居場所だ。クリーム色のカーテンを開けて、一声かけた。

「ばあちゃん、起きてる？」

仕切り代わりとなっているカーテンをもう一度閉めた。

「秋世かい？」

「うん、来たよ」

顔は見えないはずだった。ばあちゃんはすぐに身体を起こした。

秋世の手をささっと取った。

「こんな手、冷たくなってどうしたの」

「外が大雨でさあ、もう土砂降り」

「明日、修学旅行なのにねえ」

枕もとに小さくまとまっているのは湯のみと歯ブラシと携帯用ラジオだった。ラジオは秋世の持っていたものだった。そろそろ単三電池が切れているころだろうと思って、替えのを用意してきた。

「けど明日雨やむって言ってたよ。まあ大丈夫だと思うけど」

「秋世、引き出しのとき見なさい」

言われる通りに開けた。ピンクのティッシュでこしらえられた、

いわゆる「てるてる坊主」の形したものが五つ転がっていた。ちなみにピンクのティッシュなんてどこで手に入れたんだろう？

「看護婦さんがねえ、使ってちょうだいって持ってきてくれたんだよ」

「へえ、粋な計らいするじゃないかあ」

さりげなく親切な人たちに囲まれている。この病院がすい君の言うような「末期患者」専用のところであろうが、関係ないと秋世は改めて感じる。

「五つ作っておいたんだけどねえ、これでやめばいいよねえ」

「うん、やめばな」

「これ、窓のところにつるしておきなさい。いつもそうじゃないの。遠足とか運動会とか、いつもこれでお天気にしてきたじゃないの」言われてみればその通りだった。ばあちゃんはいつも、秋世関連の行事でお天気がよくないと困るとき、「おまじない」ということで大量のてるてる坊主をこしらえてくれた。縁起かつぎと言われればそれまでだけど、実績があるのだから素直にそれは受け取るべきだと秋世は思う。

「そうだね、ありがと」

「そうそう、もうひとつはあんたの可愛い人にあげなさい」

可愛い人？

硬直する。いくら家族でも、彰子のことに触れられるとびくつとしてしまう。

もう一年も付き合っているし、何度か家族ぐるみでお食事などもしたりしているし、別に隠すことはないのだが。なにせばあちゃんは、秋世が初めて彰子をデートに誘った時の様子まで知っている。今まで別の子と付き合った時はそういうことなかったのに、なぜ彰子に限って、と疑問が湧かないわけでもないのだが、それはやっぱり自分のばあちゃんだからだろう。勘だろう。

「あ、でも」

「いいからいいから。今度また遊びに連れてきなさいよ。ほんとほ

ら、奈良岡さんとこのお嬢さんいい子だからねえ」

「うん、ああ」

この辺も曖昧に答える。顔を讀まれていないから少し楽だ。

「ああいう子がねえ、娘になってくれたらねえ」

話が完全に飛んでいる。初めてのことでないのでその辺は秋世も流しておく。

「ほんと、世の中はうまくいかないねえ」

それ以上ばあちゃんは愚痴めいたことを洩らさなかった。なにがうまくいかないのか、とか、秋世の母さんのことは「義理の娘」じゃないのかとか細かいことを突っ込むのは、しない方がいい。

「あのさ、さつきさ」

明るい話にそらすため、秋世は手にもったままにしていたハンカチを広げた。

「待合室で、ハンカチくれた人がいたんだよ。ばあちゃんと同じくらいの人でさ。俺がびしょぬれで入ってきたからさ、それで顔拭けつて。いい人だよなあ。あ、ちゃんとお礼言つといた」

「そう、いい人ねえ」

ばあちゃんの言葉はいつものように穏やかだった。変わりはなかった。

「いい人ばかりだよなあ、ほんと」

「そうだね。秋世がいい人だからだよ」

なのかなあ。

「いい人でいれば、かならずいい人が寄ってくるもんだからね。秋世、あの可愛い人とはいいいお友だちでいなさいよ。私の見る限り、混じりつけのないいい子っていう人は、あの子みたいな子の言ううんだからねえ」

ずいぶん彰子も評価されたものだ。初デート時に秋世をそっちのけにして彰子は、ばあちゃんたちに取材されたいらしい。「秋世くんの恋人」ってどんな性格なのか？と興味津津でいろいろ聞かれたらしい。そのお答えが非常に満足行くものだったらしく、それ以来ば

あちゃんは彰子が大のお気に入りだった。まあ、自然のままの彰子そのものだったから、当然といえば当然だ。ただひとつ間違いがあるとすれば「恋人」ではなく「大切なお友だち」なのだが。

いかげん彰子に絡む話を聞かされると、ついさつき行なわれた「雨の中の会話」に意識が引き戻されてしまう。秋世は話をそらすことにした。

「ばあちゃん、土産さ、どんなもんがいい？」

「いいよ、病院でお菓子食べたら、看護婦さんたちに叱られるからねえ」

食事制限が出ているらしい。

「じゃあ、他に欲しいものない？」

食べ物だめとなると、正直、秋世は思いつかなかった。

「そうねえ、でもいいよ。お金は大切にしくちゃだめだよ」

「けどさあ」

言いかけてまた気がついた。目が見えない以上、見て楽しむものは意味がない。ラジオ用の電池をラジオの側に置いてしばし黙った。絵葉書も、民芸品も、だめってことだ。

「いいよ、秋世が無事に帰ってくれば、それで十分だよ」

「けどなんか買ってくるから」

「ほらほら、あの子にその分、女の子の喜びそうなものをプレゼントトしてあげたら？」

「けど旅行一緒だし」

また彰子の話に引き戻される。舌打ちしたい。

「秋世、思いがけない時のプレゼントの方が、女の子はねえ、喜ぶのよ」

いや、もちろんそれは言われなくてもわかってのことだが。

ばあちゃんに言われるのがくすぐったいだけだ。

「じゃあとにかく、なんか考えとく」

ばあちゃんに顔見られなくてよかったと改めて思う。とってもだが、青大附中の規律委員長とは思えない顔しているに決まっている。

「土産ものリスト作っておかないと忘れそうだし。ばあちゃんと、父さんと母さんと、あと昭代と」

口にしたとたん、ばあちゃんの頬から柔らかいものがすっと消えた。

「あんな子になんて、買うもんでない。もったいない」

あんな子。

決して失言したわけではなかった。

どうしても、秋世のお土産必要リストに入れておきたかったただけだ。

言葉に詰まった。すぐに気を取り直した。知らんぷりして話を続けた。

「うん、とにかくなんかよさそうなもの見つけてくる。ばあちゃん、そうだ、テレホンカードとかだったらさ、うちに電話するのにいいだろ？　いくらでも使えるし」

「いいっていいって。うちに電話する必要、そうそうないしねえ」
さつき見せた角張った表情はすぐに消え、またばあちゃんは穏やかな口調に戻っていた。

禁句はいつまで経っても禁句なのだろうか。

秋世はピンクのてるてる坊主を鞆にしまいこんだ。

決してばあちゃんを理由もなく嫌ったりする人ではないし、それ以上に優しいと思う。

家族には優しいけれども外にはきついとか、その反対とかいうこともない。

秋世がもし、ひとりっ子だったとしたら、決して感じたりはしなかっただろう。

でも実際に、自分には妹がいる。

昭代という名の妹がいる。

あきよ、という名の。

彰子にいつも呼ばれている自分の呼び名を、妹に対しては相手の名として呼ぶ。

まあな、全然最近は会ってないもん。

どういふものが好きで、どういふことをすると喜ぶのか。そのあたりも全くわからない。彰子を初め、他の女子に対しては若干なりとも理解できないこともないのに、なぜか妹に対しては全く感ずることがない。ほとんど顔を合わせない兄妹だし、それは仕方ないことだと思う。

けど女子にだったら、お菓子でいいだろ？

彰子さんじゃないけど、おせんべいとかでいいだろ？

妹、というよりも女子、として対処しようと思った。みやげ物リストには、入れておく。

かなり早めの夕食時間、運ばれてきた院内食を食べ終わるまで待った後、秋世はそのまま家に戻った。まだ誰も戻ってきていない。子どもの頃から、家で迎えてくれるのはばあちゃんだけだったし、父さん母さんはふたりとも別棟の会計事務所に籠っている。忙しいということは、繁盛しているんだろう。とりあえずはつぶれることもないんだろう。別にいてもいなくても構わないし、寂しいとも思ったことはない。テレビの音が一切聞こえず、かすかに雨音が響くだけの家に戻るたび、ぐつと息が詰まる思いがするのまた本当のことだった。ばあちゃんの部屋の前を抜けて、秋世は自分の部屋に入った。すぐに言われた通り、窓辺にてるてる坊主をぶら下げた。彰子用の一体をどうしようか迷ったけれども、そちらも一緒にぶら下げた。五体のでるてる坊主は窓に流れる露でぬれて、すぐにへろへろしはじめた。

蒸し暑い部屋を少し空気入れ替えたくて、秋世は窓を開けた。寒いくらいの風が吹き抜け、うち一体のでるてる坊主が外へ飛ばされた。

しかし、こんなに詰めないとまずいものなのかよ。

面倒だ。「旅行前のしおり」に載っている通りのものを詰め込むのはいいが、その他のこだわり物としてドライヤーとか、ヘアムースとか……あまりどぎつい匂いがするものは校則違反扱いされるので無香料の目立たないものを使おう……。トランプとか。当然お菓子やガムも押し込んでおく。靴下、ポケットティッシュ、下着にジャージ、写生用のスケッチブックと色鉛筆。だいたいそんなところだろうか。ミニサイズのグラビア写真集をどうするか考えたが、必要ないと判断し置いていくことにした。思ったよりも荷物がぱんぱんで、歩く格好に似合いそうにない。秋世の美的感覚には若干反する。忘れてた。酔い止めだ。

いつもばあちゃんから貰っていく酔い止めの薬を用意するのを忘れていた。一応、食事の時にはあちゃんから薬のありかは確認しておいた。枕もとに置いてある和紙製の三段引出しの中だと聞いている。忘れないうちに持ってきておこう。ばあちゃんの部屋から引出しごと持ってきた。

確かこん中にあるんだよなあ。

もちろん今まで、許可なく他人さまの引き出しに手を触れたことなんてない。ばあちゃんの許可あってこそそのものだ。少しシャンプーに近い匂いのする小箱に手をかけた。中には見慣れた薄荷の薬と、薄い和紙に包まれた写真らしきものが一枚、入っていた。

写っているのが誰か、だいたい見当はつく。

たぶんばあちゃんと一緒に並んでいる、自分だろう。

青大附中に入学した時、ばあちゃんと並んで制服姿で撮ってもらった写真だろう。

そんなもの見ても楽しくもなんともないので、秋世はさっさと枕もとへ引き出しを返しておいた。

ばあちゃん子だと、小さい頃から言われてきた。

食事を作ってくれるのもばあちゃんだったし、朝起こしてくれる

のも、雨が降った時学校に迎えにきてくれるのも、やっぱりあちやんだった。

不思議だとは思ったことなんてなかった。とにかく父さん母さんは寝る暇なく働いているし、帰ってきて顔を合わせることもほとんどなかった。

かといって無視されていたと思ったことはない。

寂しいと感じたこともない。

その点、「父子家庭だから可哀想」という同情を嫌う同級生の言葉に大きく頷いてしまう。

すべてを社会のありきたりな視点で見ると文句を言いたくなってしまう。

父さん母さんのことを嫌ったりする気はないし、ましてや反抗なんて面倒なこととする気はない。だってほとんど、顔合わせる機会ないんだから。自分のやりたいこと、ちゃんとしっかりやってるから。ばあちゃんを大切にしておあげることくらい、たいしたことじゃない。話を聞いてもらったり聞いてあげたりすることも、病院に付き添っていく時に荷物を持ってあげること、決して恥かしいことじゃなかった。

お小遣いをいつもくれるから、というわけでは決していない。今回の修学旅行においても、秋世は一銭も貰っていない。人より甘やかされたからというわけでもない。父さん母さんの方が秋世に対して甘いと思う。まあ父さんの場合、中学入学前にコンドームの箱をくれたくらいだから、それなりに秋世の日常をチェックしてはいたようだけどもだ。

たったひとつだけ、パズルピースが欠けているのを除いては、いたってふつうのうちだと感じていた。

昭代のこと以外。

めずらしく母さんが帰ってきた。正確に言うと、事務所から「中抜け」してきた。

いつも仕事を立てこんでいる時、母さんは父さんと秋世の食事を用意するために戻ってくる。いつもだったらばあちゃんが用意してくれるものを、母さんが事務所へ運ぶのだが、できるわけもないので当然作ることになる。また当然秋世に料理の腕を求められても頭を抱えるだけなので、全部母さんがひとりで準備することになる。手伝ってもいいのだが、邪魔になるだけというのもよくわかってるので、そのまんまにしておく。

「しゅくん、明日の準備やってあげようか？」

「いい、いい」

短く答える。母さんとは今ひとつ、会話が続かない。悪い雰囲気になるわけではないのだが。昨日の残り、カレーライスでレンジで温めた後、盛り付けたご飯にかけて持ってきた。

「昨日の分だから、たぶん悪くなつてないわね」

「食べられる、大丈夫」

ばあちゃんがなくなつてから、夕食のレパートリーが狭まった。さすがに毎日カレーライスではないにしても、一日置いてカレーチヤーンハンになったり、オムライスのソースにカレーが出てきたりと姿を変えて登場する。飽きなくもないのだが仕方ない。食べるだけでした。

「ばあちゃんどこ、行ってきた」

スプーンをくわえ、紅しょうがをルーに混ぜ込みながら秋世は報告した。

毎日通っていることだから、別に申告する必要もないとは思っただが。

「そう、元気だった？」

母さんだつて昼休みを使って病院に顔を出しているはずだし、その辺はわかりきっていることではないか。頷いておいた。

「そう、ならいいけど。何か言つてなかった？」

「別に」

ラジオの電池はちゃんと持っていったし、とりたてて頼まれたこ

とはなかった。首を振ると母さんは、

「おばあちゃんも環境変わって少し疲れ気味なのよ。だから、変なこと言い出しても気にしないでね」

「変なこと、言ってないけど」

「それならいいけどね」

入院したらそりゃあ疲れるだろう。いくらあの病院で看護婦さんがピンクのティッシュをてるてる坊主に用意してくれたり親切にしてくれても、やっぱりうちに帰って来たいに決まっている。入院生活というのは、結構しんどいものだ。秋世も幼年時代の記憶でいやというほど感じている。

「俺、いない間、ばあちゃんのことよろしく」

「ほんと、しゅうくんはおばあちゃんっ子だもんね」

残りカレーの入っていたタッパを洗いながら、母さんは背を向けたままはつきりと口に出した。

「お母さんには、何も無いの？」

「別に」

嫌味じゃない。ほんとに、ない。それ以上会話もなく、秋世は食べ終わった皿を流し場まで持っていく、「はい」と渡した。皿を一枚か二枚犠牲にしてもいいのなら、洗い物の手伝いくらいはするのだが、母がそれを求めないのだから何も言わない。食器が壊れるのをよしとしないのだろう。

「じゃあ、明日朝四時半に起きるから、先に寝てる」

「目覚ましをかけておくのよ」

もちろんだ。父さん母さんが起きる時刻に起こしてもらえれば十分だ。

母さんは皿をすべてきれいに洗い終え、食器入れに立てた。毎日使う食器のうち、マグカップとか湯のみ、茶碗などはふたつきの食器入れへ、平べったく並べておいた方がいいものは食器棚へと分けて置かれている。秋世のコップや茶碗はふたつきの食器入れ行きと決まっている。棚の奥にもう一組、手付かずのマグカップと茶碗が

しまわれているのを、秋世は知っていた。

「母さん、俺いないあいださ、昭代呼べば」

「え？」

振り返った母に、秋世は背を向けた。

「俺の代わりに、ばあちゃんところに見舞いに行ってもらえばいいじゃん」

予想した通りの答えが帰ってきた。

「なに馬鹿なこと言ってるの。早く寝なさい」

寝なさいったって、まだ夕方六時だつてのに。いくらなんでもそれはないだろう。

とりあえず、旅行用の小遣いだけしっかり頂戴し、秋世は自分の部屋へ戻った。階段を昇りきったと同時に、玄関のドアが閉まる音がはっきり聞こえた。

妹。

血を分けた妹、のはずだ。

なのに、一緒に過ごした日々は数えるほどだった。へたしたらいとこたちよりも会う回数が少ないかもしれないかもしれない。顔を合わせるとなんか秋世の言うことを聞いて、「お兄ちゃん」と呼んでくれたこともあった。「あつた」と過去形なのは最近の状況がだいぶ変わってきているからだ。小学校六年で、最近はやがて顔を合わせても、ふいと向こうを向いてしまう。わざわざ秋世が自分から「あきよ、こつち向けよ」と声を掛けていやいや、というの現状だった。友だちがいる時を狙って話し掛けるようにしている。それだと昭代が逃げられないから。もしひとりの時だったら、走って帰ってしまうから。

そう、帰ってしまう。おじさんおばさんのいる家に。

原因は秋世の方にある。幼い時、秋世は小児病棟に入っていた。記憶にほとんど残らないくらい幼い時の話だ。入院している時、両親が帰ると大泣きしたとか、検査で注射されるのがいやで病院の中

を逃げ回ったとか、口にあてがわれた呼吸器らしきものが妙に気持ちよくてはまったとか、そういう程度の思い出しが残っていない。思い出したくもないんだろう、きつと。

その間に昭代が生まれた。

秋世が退院してからもしばらく昭代は、母方の親戚の家へ預けられたままだった。

いわゆる伝染病だったというのもあっただろうし両親も秋世の病気のことが最優先だったし、いろいろ大変だったのだろうとは思う。また、おじさんおばさんには当時十歳の女の子がいて、もうひとり子どもが欲しかったという事情もあったらしい。この辺は秋世も詳しい事情を聞いていないのでわからない。もちろん顔を合わせる機会はそれなりにあったけれども、本当に家へもどってきたのは秋世が五歳、昭代が二歳の頃だった。物心はついて、お兄ちゃんと呼んでもらえる時期というのがこの頃だった。

たぶん、この時期が一番、昭代を妹と思えたのではないかと思う。半年後、なぜ昭代がふたたびおじさんおばさんの家に引き取られたのか、その理由もわからない。

やんちゃな男の子独特のいたずらが昭代にとっていやなことだったのか、それとも何か理由があったのか、その辺はわからない。ただ、気が付くとおじさんおばさんの腕に抱かれてにつこりと手を振っている昭代を見送っていた。すぐに戻ってくると思っていたのに、気が付けば年に二回、礼儀正しくお泊りしていくお客様として、待つことになっていた。

秋世の「妹」も、いとこ以上に遠い「女の子」に代わった。

何度かばあちゃんに尋ねたことがある。いや、父さん母さんにも、「どうして昭代、あっちの家にいきっぱなしなんだよ！」

と文句を言ったことがある。ばあちゃんには、

「もし昭代が帰ってきたら、今度は秋世がおじさんおばさんのところにやられるかもしれないよ。それでもいいのかい？」

とからかわれ、両親にも、

「大きくなったら、戻ってくるけどその時は秋世がいじめちゃだめだよ。髪の毛ひっぱったり、やんちゃしたらだめだよ」

反対に言い聞かせられた。たぶん自分が……記憶ないけど……昭代を泣かしたりしたことが原因でおじさんおばさんのところに引き取られたんだろう。そう思うと返って自分の居場所がなくなりそうで、黙っていた。なんとなく事情があるんだろうが、父さん母さんは決して追い出したわけではない。大人の事情できつと預けられているんだろう。いつか帰ってきたらその時に話を、昭代本人から聞けばいいことなのだ。余計なことは考えないで置こう。これが秋世の当時下した判断だった。なのに。

あんな子になんて、買うもんでない。もったいない。

ばあちゃん言葉が、耳に響いてならない。雨でぬれたてる坊主。ただの紙くずの塊。雨はまだ、やみそうにない。

第一部 3

あいつに抜け駆けされてたまるかよ。

お目当ての「ふたりつきりデート」は残念ながら果たせぬまま、修学旅行も三日目に差し掛かっていた。もともと彰子の性格上、「女子たちをおっぱりだしたまま自分だけぬくぬく彼氏といちゃつきたい」ことをするようなことはないし、秋世も男子連中との付き合いが大切だ。周りでは「学内一番のラブラブカップル」と勘違いした噂を流されているが、とんでもないってことである。

俺たちほど良識溢れたお付き合いしているカップルっていないでないか？

自問自答してみる。

ほら、どっかの問題起こしたカップルは、男に荷物持たせたままその辺歩いているし、また別のカップルは廊下で痴話げんかしているだろ。ラブラブっていうのはああいう状態のことを言うんだ。少なくとも俺と彰子さんとは違うだろ。

もともと保健委員ということもあって、彰子は忙しそうだった。

面倒見のよさそうな温かさができたての大福餅みたいですぐにかぶりつきたくなる。

こっそり誰もいないところでぎゅうつと握り締めたくなる。

しかしそのやわらかなお手手はすべて、他の面倒を掛け捲る同級生、他のクラスメート、また他の連中に差し出されている。秋世に差し出されていない……とは言わないが、もっとたっぷり絡んでくれたっていいだろう。まあしかたない。まだ二日間ある。四日目の自由時間こそ本命本音の勝負だと秋世なりに覚悟はしている。

「南雲、悪いな、明日はふたりつきりだな」

「ああ、やっとな」「お前、そっちの気もあつたのかあ？」

同級生の東堂が肩に腕を回してくる。明らかに誤解である。秋世

は腕を振り払い、たつぷりと微笑み返してやった。かえって気持ち悪からう。

「俺は好みがうるさいんでね、その辺はよろしくな」

「まあなあ、お前って昔から、わからねえよなあ」

種明かししてしまえば、東堂と四日目の夜、ふたり同じ部屋に泊るといっただけのことだ。ビジネスホテルのツインルームで、いろいろと親友同士が固まったり集まったりと、まあいろいろするわけである。しかし秋世の場合、特にだれそれとくつつきたいとか、そういうこだわりはほとんどなかった。あえていえばいまひとつ相性の悪い連中と組みたくないという程度のことであり、その辺も評議委員たちが把握して進めてくれた。東堂に襲われたらどうするか。ひとつ、正絡めでも練習しておくか。

「ははん、そうねそういうことかよ」

「何、納得しているんだよ、気持ち悪いな」

「お前ほんつと、惚れぬいてるもんなあ」

事実なので言い返しはしない。よくクラスメートで、男女関係のことでもからかわれたりすると顔を真っ赤にして否定する奴がいるが、あれこそ間抜けなことではない。事実だったらひゅうひゅう言われようが何しようが、堂々と受けてたてばいいことだ。また、全くの誤解だとしたらきちんと人前で言い放てばいいことでもある。そんな難しいことではない。東堂がちろつと鞆を見る。

「保健委員会は平和なのか？」

妙な質問だと思う。でも青潟大学附属中学ではごくふつつの会話でもある。

「まあな、ユアハニーのおかげでいたって平和」

にやにやしながら東堂は頷き、彰子を指差した。大きな風船がこるがっていくように、彰子は女子たちみんなに声をかけて、笑顔で何か言っている。むかつくことに、今は水口と笑いあっている。

「そうか、それならどうでもいいな」

「規律委員会はどうなんだよ」

「評議よりはまし」

納得して頷く東堂の、のびかけてきたあごひげをちよいと手の甲ですりすりしてやる。

「とにかく、お互いいろいろ大変だなんてことっすね」

東堂は納得したのかよくわからない顔のまま、頷いた。

「南雲みたいなのがなんで、規律委員長なんだろうなあ。世の中、楽しいよな」

ただ今時刻は八時を少し回ろうとしている。食事も終り、みな男子連中がすっぱだかで風呂に入った後、湯上り浴衣でそろそろと口ビーをうるついていた。いつものことだが、秋世が歩いているとかならず女子の声で「南雲くんよ」と囁く声がする。彰子と付き合うまではそれもなかなか楽しいことだったのだが、今では困りものでもある。かといってうるつくことができないのはさらに困る。秋世なりに聞こえない振りをするしかない。もともと関心のない女子の顔は記憶に留めなくせがついている。

秋世がここにいるのには訳がある。

彰子さん、こねえかなあ。

なんとでも言ってほしい。修学旅行三日目にして、交わした会話の寂しさを。

しかもみな、ふたりきりになるチャンスがほとんどないではないか。

よく他の男子どもが「彼女になった途端、しつこく口出してきてさあ、むかつくぜ!」とか、「なにをべったりするんだろな」とかありとあらゆる相手の悪口を言い放つところに出くわすが、彰子と出会って以来、そういう会話に混じることはほとんどなくなった。不思議なことだが秋世の影響で他の連中の恋愛もだいぶまともに流れるようになったみたいだった。原因は不明だ。秋世としては単純に「彰子さんの威力はすごい」と決め付けて終りとしたい。

だが、どうしてもたったひとつ、彰子に足りないものがある。

どうして、俺だけのものにならねえのか、ってことだな。

独占欲。そんなもの、あるわけないと思っていた。

他の女子と付き合っていた頃も、一度も手放した時の喪失感を恐れたことはなかった。

酷い男だと言われるかもしれないが、本音なのだ、しかたがない。いくら夏木との契約で「共同で彰子を守る」ことにしたとはいえ、百パーセントでない以上飢えた狼のおなかは空くばかり。きちんとばあちゃんに教えてもらった通りに浴衣を着付けて、はだしのままスリッパを擦って歩く自分がいる。髪の毛もちゃんと備え付けのドライヤーで乾かしておいたし、いつ彰子とバッティングしても構わない。

彰子と付き合い出したのは一年前のことだった。

一目ぼれした入学式のことなんて覚えていないし、その後すぐ情報を仕入れるため彰子の住む街まで出かけて衝撃的事実を知りあきらめたこともある。外見が「おでぶちゃんのぶさいくちゃん」だった彰子だが、やはり見る奴は見ているものだ。小学校時代の彰子がアイドルだったことを知ってから後、秋世は作戦を長期に切り替えた。あきらめたわけではないと、強く言いたい。

会った瞬間のことも、正直記憶にない。

ただ、むしようにぼちゃぼちゃした二の腕をつかんで、

「あのさ、俺、南雲秋世っていうんだけど、この学校で一番先に男子の名前、覚えてほしいんだ」

とか臭いナンパのセリフをぶつけたただけだった。客観的に言えばもちろんグラビアアクイーンなみの美人とか、アイドル歌手なみの美少女とか、たくさんいるだろうしそれは秋世も認めなくはないただ、そのタイプはすべてイラスト、写真で残っていれば用の足りる人ばかりだった。

奈良岡彰子は、生身のぼちゃぼちゃ姫でないと、秋世には意味が

なかった。

その後規律委員会という、いかにも自分らしくない委員に当てはめられたのは担任の意図だろう。入学早々シャツの襟を軽く立てて、前髪にはしつかりブロー剤を使ってかため、自分なりに似合いそうな程度の着崩しファッションをしていったのが目に留まったのだと、担任・菱本先生は言う。

「お前、あのままだったら不良化の兆しのプリントそのままだった
だろ？ 親心だぞ」

「今なら感謝してますって」

なんだか面倒くさくてならなくて、それでも委員会活動をしつかりしてみたら思ったよりも楽しくて、何よりもここが「規則がちがち、定規が友だち」の世界ではなく、「影のおしゃれクラブ」という巢窟だったことが一番の理由だろう。もともとファッションやヘアスタイルなど、外見に関わる話題が好きだった秋世にとってはまさに天国。前髪の長さとか髪型の統制とかそんなのは学校側から出されたものをそのまま通しておけばいい。その抜け穴をどうやってみつけるか、それが後半の話題。いつしか机にはみな、小ぶりのスケッチブックが開かれていて、秋世は暇さえあれば色鉛筆でファッション画を殴り書きする。女子の一部は暇さえあれば家庭科の授業を派手にやらかしてくれて、オリジナルの小物類を何気なくこしらえてくれる。刺繍まで入れてくれるときた。上級生との会話もほとんどがファッション雑誌の流れについて。それを軽薄という奴がいたら、それはしかたあるまい。頭下げるしかないだろう。

おしゃれな格好も身についてきて、小遣いをもう少し上げてほしいと思った矢先、初めて一年上の女子に声をかけられた。小学校の頃、それなりにお付き合いの経験もないわけではなかった。キス経験も、かすかながら、ある。でもその時、会った相手……水菜さんという名前だった……の真剣な顔に思わず頷いてしまった。南雲秋世の女漁り伝説、開幕ってことである。不本意ながら。

水菜さんとは三ヶ月続いた。厳密に言うと彼女が青大附高に進学するまでの間だった。その間にそれなりにキスはするようになったし、卒業間際に水菜さんの方から「したいなら、いいよ」と匂わせるようなセリフを口にされた。たぶん、まあ、あのことかな、とは思っていたけれども、なぜか「ラッキー」と乗れなかった。水菜さんともデートをしたり、いっしょに話をしたりしたけれども、彼女が飽きるまではとりあえずいるけれども、飽きたら次、と考えていた。できればさっさと終わってほしいと、脳天気にも思っていたわけだった。結局校舎が変わり、環境が変わると水菜さんも連絡をよこさなくなった。それが寂しいと思ったことは、なぜかなかった。

途中、放課後呼び出され女子たちから告白されるという冗談めいたことが日々続いた。ひとり、ふたりのうちならまだしも、一日五人なんてきた日にはどういう顔をしていいかわからない。水菜さんと付き合っていた頃もみなわれ先にという感じだったし、二年以降はとにかくすごかった。

「南雲の奴、女漁り好きだよな、最低だよな」

クラスの相性合わない男子が唇を尖らせて悪口言っていたのを、耳にしている。

たいして傷ついたわけではないにしても、不本意ではある。

漁ったわけではないし、ただ「付き合って」といわれていやじゃないからご希望に答えただけだ。

秋世は一度も、裏切ったことはない。

ただ、相手の子があまりにも真剣そうな顔をしていたら、最初からお答えできそうにないから軽いタイプの女子と付き合うことになるだけのことだった。やはり軽い気分で「もしよかったらちよっとおしゃべりするだけでもいいから、ね、付き合わない？」と誘ってもらえるほうが楽だった。秋世の判断は今思うと正しかったはずなのだが、やはり状況が変わるとなるとも言えないのもまた事実なのだろう。

自分で、奈良岡彰子を選ぶまでは。

廊下をばたばたと女子連中の足音が響き、素早く背を向けた。これからクラス連中とまとまってまた馬鹿話をするのも悪くない。ただし、明日こそは彰子を捕まえて、しっかりデートコースを歩かなくちゃいけない。青大附中の修学旅行では、一通り自由行動中行かねばならない寺とか観光地とか遺跡とかがチェックポイントとして上がっている。その場所でスタンプを押すことが義務だ。しかし裏を返すとスタンプさえ押せば、あとはやりたい放題というのもまた本当のこと。幸いクラスの評議委員がしっかりと計画を練ってくれて、午前中のうちに全部スタンプを押し切った後、午後は好き勝手に過ごすというプランを立ててくれた。みな、それぞれに、予定を立てて夢を見ているらしいと聞く。仲良し同士で固まって洋服屋に向かう女子たちもいれば、ゲームセンターでたむろう男子たち……秋世のことでもある……もいる。修学旅行とはいえ、やはり基本は人間関係だと常々思う。

彰子にも、早い段階で提案しておいたのだが、やはりクラスの女子たちがいろいろ口うるさいのだろう。

「いいよ、あきよくん。男子は男子同士のほうがほっとするんじゃないかな」

無理しなくて、とは言ってくれたが。無理したいんだ、こつちとしては！と怒鳴りたい。

「私、ほら、ちよつと動くと息切れしちゃうでしょ。去年の宿泊研修でもあきよくんが手、ひっぱってってくれて山昇ったでしょ。あれと一緒によ。ゆっくり、ゆっくりまわりたいんだ。だから足ひっぱっちゃうの、なんか、ね。今度青潟へ帰ったら、その時ゆっくり何かしようよね」

彰子さん、その「何か」って何なんですか？

やっぱり断られていても、やはりあきらめは簡単ではない。

彰子には彰子なりの事情があるだろう。だが秋世にも秋世なりに

意地がある。

よっし、まずは姫を捕まえて、デートコースをご案内だ！

この時のために、すべてデータを集めて、出発時刻やバス時刻表まで全部用意したのだ。

野郎仲間……東堂たち……にも了解を得た。秋世のたつての頼みをみな受け入れてくれたありがたい仲間である。

あとは、姫、奈良岡彰子、ひとりのOKが必要なだけだ。他の奴らは秋世のことを「王子さま気取り」だとか「女たらし」だとか好き勝手なことを言うようだが、正直自分のどこが「王子さま」なのか「たらし」なのかがわからない。

しばらく秋世は両手を懐手にしたままうろろしていた。

女子たちの群が通り過ぎたと思ったら今度は男子連中の塊がどどんと流れてきた。

「おおい、どうした南雲」

「まあ人生いろいろと」

これで納得してくれる仲間たちに感謝だ。彰子の姿は相変わらず、見えなかった。待つ、とにかく捕まえて、話をする。湯冷めしてきただ。秋世は一度、大きくくしゃみをした。

「南雲、南雲」

裏返った声に振り返った。周囲の男子連中はみな多かれ少なかれ、声変わりの時期だった。元の声がボーイソプラノタイプの奴ほど、その違和感がでかかった。すぐ後ろに、上下ジャージ姿、秋世の喉あたりまでしか背のない男子が立っていた。真ん丸い目ととんがらせた唇。まだ幼さが残っているのは、こいつが「クラスの赤ちゃん」と以前呼ばれていた水口要だからだろうか。

「なんだ？ すい、どうした？」

わやわやする気持ちを一呼吸して押えた後、秋世は穏やかな規律委員の顔に整えた。学校社会を生きていく以上、この表情も必要だ。「ねーさん、今、先生の部屋にいるよ」

「はあ？」

自分の気付かないうちにさっさと風呂からあがってしまったというわけだろうか。

気づかなかった自分に舌打ちした。なによりも、お子様水口に教えられるというのが、なんとなく、いやだった。

「悪いな、どうも」

ご機嫌よく返事をしたつもりだったが、水口は動かない。ずっと秋世の顔を見据えるようにして、

「外、変な車が留まってるんだ」

「留まってる？」

鸚鵡返しで返事をする。

「日の丸がでかく書かれてるんだ。黒い、ほら、窓に網のかかった車」

なんだそれは。秋世には全く意味が理解できなかった。水口が何かを懸命に伝えようとしているのはわかるのだが、それ以上に「ねーさん」と「日の丸」の繋がりが見えてこない。

「その車に乗った奴が先生の部屋に入ってさ、その後でねーさんが呼ばれてた」

「つまりなにか？ 彰子さんと関係あるんだな？」

そう言ってくればいくらでも話を聞くのに。なぜかむしろ水口に対して苛立ちが泡立つ。

「だから呼んだんだよ。ちよつと来いよ」

この修学旅行期間中、ひたすら「ねーさん、せーりつてなーんだ！」とか言ってクラスの女子を辛かったりエロ写真みてそのパーツに関する用語をでかい声で発音していた奴とは思えない、真面目な顔だった。

一応、こいつ、学年トップだもんな。

とにかく穏やかに話を聞こうと心に決め、秋世は水口の肩に手を置いた。

「あのさ、ねーさんがさ」

声変わりが中途半端とはいえ、それなりに男っぽくひげも生えてきているのは、こいつが男になりつつ証なのだろう。彰子も話していたものだ。

「すいくん、最近どんどん大人になっちゃって、お姉さんは寂しいなあ」

とか言つて。

「要領よく話せよ。学年トップだろお前」

言葉が冷たくなりそうなのは、やっぱり自分の奥のシグナルがちかちかしているからだろうか。

「俺、さっき部屋の前通ってきたんだけどさ、そしたらすつこい言い合いしてるのが聞こえたんだ」

「言い合いって誰がだ？ すつこい言い合いってことは、彰子さんじゃあないんだな」

「そうだよ、もちろんそうだよ」

話の繋がりから考えると、「日の丸の車」から降りてきた奴らのことだろう。

「相手は菱本先生と、すつこい言い合いか？」

「そんなの少し考えればわかるよなあ」

思いつきり頭をはたいてやろうと思ったが飲み込んだ。

「とにかく話せ、それでどうした」

「そしたらさ、菱本先生がさ『ご家族の了解がないと』かなんとか言い返して、相手が『どうすれば信用してもらえるんだ』とか言うて」

ますますよくわからなかった。

水口の言い方にかなり問題があるとは思う。こいつには学年トップの明晰頭脳がきちんと頭蓋骨の中に収まっているはずなのだが、どうも日常生活能力に疑問付がつく。中学二年まで寝小便が直らなかつたとか、つい最近まで女子に対してべったりあまつたれたりとか、とにかく思春期の男子としてこれは問題なんではないか？と言

いたくなるような奴だった。

なによりも彰子を「ねーさん」というより「母親」扱いするのはどうかと思う。

秋世なりに彰子にも「ちょっと、ありやあすいくんを甘やかしすぎだよ」と助言したりもしていた。かえって最近の親離れならぬ「彰子離れ」には、秋世としてもほっとするところもあった。

しかし、今の表情は、見慣れた水口のものではない。

こんなに変化するもんかよ、と思うほどに。

圧倒されている自分にまた、ちくちく刺さるものを感じつつ、秋世は頷き返し話を聞いた。

「廊下に響くくらいでかい声で話してるから、全部聞こえたんだけどさ。なんか、ねーさんのおやじさんが、倒れたらしくって」

「倒れたあ？」

思わずどすの利いた声で返事してしまった。自分らしくない。彰子の父さんといえば、小枝タイプの細いおじさんで、秋世に対してもいつも優しく接してくれる人だった。後日、その人がライバル・夏木たちの中学担任教師でかつ、非常に面倒見のいい先生だと聞いたが、素直にそれは頷けた。彰子は気持ちを父さん母さんのミックスで、体格だけは母さん……病院勤務の眼科医で、ピンクフリルが一杯のドレスに身を纏った明るいおばさんだ……に似たのだろうとだけ、思っていた。

ただ、夏木を巡るいろいろな事情がからんで、彰子の父さんがかなりしんどいことになってしまった。この事件については秋世も詳しいことを教えてもらっていないが、教育に関する思想の問題やPTAの抗議なども混じって、一年経った今でも問題は片付いていない。秋世が彰子の父さんと顔を合わせる時にはその心労など全く感じることなく、脳天気「いつもありがとう」と声をかけてもらったりする。時折、秋世の両親とも連絡を取り合っているらしいが、やばいことは一つもしていないので怖がることはひとつもない。このままお医者さんのお婿さんとしてもぐりこむのもひとつの方法か、

と最近は思っていた。

「倒れたって、病気がよ」

「病気でなくちゃ、倒れたって言わないだろ」

秋世なりに必死に言葉のピースを組み合わせてみる。

「そりゃあそうだけどさ、それで彰子さんはなんて言ってるんだ？」

「そんなの聞けるようだったら、南雲なんて呼ばないよ」

だからなんでそうかつときそうなことをこいつは言うのだろう？
怒りっぽい性格ではないと自覚はしているのだが、なぜか水口の言葉にはいらいらが募ってしまう。

「だから、お前なら知ってるかって思ったんだよ。なんか話からすると、ねーさん、早く帰らないとなんないのに、帰れないみたいで」
「ちよつと待った！」

やっと頭の中がざくつと割れた。

「すい、お前なんて言った？ 『早く帰らないと』 って言ったよな

！」

「うん」

力の抜けそうな返事だ。こういうことをもつと早くしゃべると秋世は言いたい。

「つまりなにか。彰子さん、修学旅行やめて帰るのかよ！」

冗談じゃない。なんのための三日間だったんだ。かちわられた頭の中は、きつと海辺の砂浜ですいか割りされた時のように、ぐつちやぐちやになっているに違いない。

悔しくも水口の表情は暗いながらも自信に満ちている。秋世の顔に何が浮かんでいるのか、きつと読み取っているに違いない。かくしてもかくしても、どうしようもないものを。

「だってそうだろう？ 心臓が悪くなったんだっただけに帰らないとまずいよ。集中治療室に入っているらしいんだよ。うちだってそうだけどさ、集中治療室に入ったら家族呼ばれてずっと、待合室で寝てるんだよ。毛布に包まって床ですらっと並んでさ」

さすが水口病院の跡取り息子だけある。悔しくも秋世は医療知識も

病院の実情も全くわからない。

「だから早くうちに帰さないと、おやじさんが死んじゃう……」
「黙ればけが！」

完全に自分の声が裏返った。思いつきりぼつこりと頭を殴ってやった。まずい、学校の校則では一応、暴力行為はご法度だ。守られていないことを前提としている規律委員長としては、校則破りに抵抗なんてありやしない。

「とにかく、今、話し合いしてるんだな！ まだ」

「さっき聞いてきたんだから当たり前だよ。痛いなあ、だから南雲はばかなんだよ。暴力的だなあ」

「お前のようにエロ言葉を絶叫している馬鹿野郎よりはずっとましだ！」

浴衣が汗ばんできているのがわかる。手の中がべたついてきているのがわかる。

「貴重な情報確かに受け取った。それは感謝する。お前、言うなよ、余計なこというんじゃないぞ」

「それは、南雲に言いたいことだよ」

秋世を完全に見くびっているとは思えない言葉に、思わずもう一発鉄拳をお見舞いしたくなってしまったが、それは必死に押えた。最初の一発はしゃれですむけれど、二発目は暴力になりかねない。自分でもこのもやついた気持ち、水口相手に押える自信がない。

後ろについてくる水口を追っ払いたい。早足で廊下を歩いた。しつこくも水口も、しつかり走って秋世を追っかけてくる。すれ違う女子たちが「南雲くんだよ、ほら」と囁くのが、ただの騒音にしか聞こえなかった。

男性教師の泊る部屋は、男子の部屋沿い一番奥だった。

しつこくくつついてきた水口に、確認がてら指を指すと、奴はこっくり頷いた。やっぱりくそ真面目な顔は変わっちゃいない。

「声、聞こえないな。終わったのかあ」

「聞こえるよ、南雲本当に心配してるのかな」

ぐつと喉元の罵倒文句を飲み込む。耳を済ませると、決して罵り声ではないにしても、真剣に話をしている様子がうかがえた。ひそひそ、ふわふわと、言葉の意味が聞き取れないながらも話はしている、といった風の空気が、ドア越しに伝わってきた。

後ろにしっかりと水口がくつついている。

完全に封印された状態だ。

あいつに抜け駆けされてたまるかよ。

夏木も、水口も、すべてに。

秋世はドアを開いた。学校用の明るい笑顔を用意して、トーン高く呼びかけた。

「すいませーん、先生。規律委員会のことでちよいと相談あるんだけどいいですか」

んなもの、なんてない。

すぐにでっち上げることくらい、なれている。

ノックを義務で二回した後、秋世がスリッパを脱いで引き戸を引いた時、そこには確かに彰子がいた。少し目のあたりが黒ずんでいたけれどいつも通りという気がした。目の前には菱本先生が膝を握り締めるようにしてこっちを見ていた。そして四つの眼が、いきなり秋世を見上げた。

「お前かよ……」

真っ黒い背広姿の、眼光鋭い五十くらいの男性がひとり。

その隣にいるのは、確かに修学旅行前さしで話をした、あいつの姿だった。学生服に白線を入れた独特の格好が和室の中では、妙な迫力を示していた。

第一部 4

だって、奈良岡さんと一緒に、あすこの高校受けるって言うた
だろ！

よりによって会いたくもない奴が目の前にいる。しかも秋世の格
好は、いなせな湯上り浴衣姿。相手はごついガクランとの対決だっ
たら、まず最初の段階で勝負終わってしまう。

腰のところを掴むようにして、後ろから覗き込もうとするのは水
口だった。後ろ蹴りしてやりたいところだが、さすがにここは大人
の部屋だ。留めておく。

「あ、ごめん、先生、ちょっとまずいっすか」

まずいと言われても引つ込む気はなかった。

彰子に満点の笑顔ビームを送ると、ちゃんと暖かく返ってきた。

反対に野郎側から氷点下ビームらしきものがこちらに飛んできたが、
そっちは無視した。

「どうした南雲、あとではだめか」

菱本先生は少しばかり口をつばめて答えた。三十目前の熱血先生
で、いつもだったら熱く「おお、どうした、お前なんか相談あるの
か？ 人生の先輩としてなんでも聞いてやるぞ！」みたいなことを
言い放つ人だった。秋世なりにこの場の雰囲気がしめつぽいものだ
とは認識していたものの、少々場違いだったことは否めない。まず
はこの場の事実関係を知りたかった。「ひえ、いやいや、お邪魔し
ちゃったようでも。あれ、そこにいるのは夏木くんでしょうか
？」

てめえに名前呼ばれたくもない、と言いたげな面をして夏木は秋
世を睨みつけている。お互い様である。彰子がわざわざ夏木に確認
を取ってくれた。

「そうだよ、あきよくん、ナツキーのこと知っているんだよね。先生、そうなんですよ」

不快を隠せない表情ながら、夏木は肯定も否定もしなかった。

菱本先生だけが大きく溜息を吐いた後、

「そうか、十分、証人は揃っているんですね。南雲、こちらのおふたりとは知り合いか？」

「はい、そりゃあもう」

三日前にちゃんとお会いしたんですから、と言ってやってもよかった。この部屋に敷き詰められた畳の匂いみたいなものが、重たくじとつとしていて息苦しかった。いつもの秋世らしい態度はあまりよろしくないだろう。

夏木の隣に正座している五十過ぎの男性……おそらくこいつの父ちゃんだろうと思う……にも念のため頭を下げておいた。無表情のままこくつと秋世に挨拶してくるとこみると、自分の息子と秋世とが彰子を巡る三角関係にあることを知らないらしい。まあ、夏木の本音としては話したくもないだろう。

「だから、これで文句ねえだろ、彰子の先生」

「こら、宗、少し黙れ」

教師とも思わないこの態度、それでいて彰子の父さん先生にはめちゃくちゃなついていると来ている。夏木の持つ「大人」に対する尊敬基準とはどういうものだろう。

彰子が時々困った笑顔を見せているのが気がかりだった。水口の話が正しければ、彰子の父さんが体調を崩してしまつて、即、青潟へ帰らねばならないはずだと聞く。せつかく明日のデートを完璧にセッティングしておいた秋世からしたら非常に切ない。しかし愛する彰子の一大事、祈りを込めて見送つてやるのが筋だろう。帰り荷物を持って出発をせすになぜか恋敵夏木、およびその父上と膝と膝付き合わせているのだろう？

「とにかく、奈良岡さんの状態を考えると、彰子ちゃんをすぐに青

湯へ帰してあげてほしいというのが私の気持ちです。確かに、この格好とこの状態では、誤解を招くものはあるでしょうが」

誤解？

夏木の父ちゃん、片手にサングラスを握り締めている。しかもいかにもという感じの真っ黒いレンズ。見るからにマフィアとかその筋の人、の要素大だ。背から漂ってくる空気が、夏木本人のとは違い、びしっとくるものも感じる。菱本先生との間に漂う「大人と子ども」とは違う雰囲気だということだけは、肌から感じた。

「だから、彰子、お前早く荷物まとめるよ！」

大人と大人の会話に割り込む中学生ひとりが騒いでいる。我慢の限界、ばちばちとはじている様子だ。いつものことだがそれでも彰子は静かに微笑むだけだ。泣き崩れてもおかしくない状況なのに、なぜこうも落ち着いているのだろう。

秋世にはそのあたりもよく理解できなかった。

「うん、ありがと。でもナツキー、きつと父さん大丈夫だと思うよ、こうやってみんな心配してくれるんだからね。おじさん、本当にありがとございます」

話が見えるようで見えない。秋世は袖口に片方の握りこぶしを突っ込んで、腕組みをしたまま突っ立っていた。後ろにくつついている水口が邪魔だった。

菱本先生は全く、秋世たちの存在を意に介していない様子だった。「彰子さんのお母さんからの一筆書いたものがあれば、また違うのですが、そのあたりはいろいろと難しいものがございまして」

「だから言っただろ！ 俺が証人だ！」

拳骨を食らわせる音が鈍く聞こえた。当然、サングラス片手の夏木父が息子に鉄拳を食らわせた。あまりにも素早い制裁に秋世も息を呑んだ。ぼこつとか、いかにも漫画の吹きだしじゃないかって感じの音だった。

「ナツキー！」

慌てる彰子が手を夏木に差し出そうとする。

「あいつてえ、けど父ちゃん」

「黙れ。今度は手加減しないぞ」

手加減って、あれでも手加減してるのか？

さすがに夏木の髪の毛を膨らませるようなたんこぶは浮かんでいなかった。かなり後々尾を引きそうな音だった。見ている秋世の方が耳のあたりじわじわ痛くなってきた。

「せめて、お母さんと病院で連絡を取ることは出来ませんか。それさえできれば」

「状況が状況ですので、奥さんはなかなか身動きできる状態ではないですね。それもあって今回、ああいう形での送迎となったわけですが」

状況が状況？

ますますわけがわからなくなっていた。自分の頭脳がさび付いているとは思わない。でもなんでこうもわけがわからないこと言うのだろうか、このおじさんは。

「とりあえず、旗は立てずに走ります。今から移動すれば、深夜出航の連絡船には間に合うでしょうから、彰子ちゃんに迷惑をかけるようなことはないはずです。どうか、私のことを信じていただけませんか」

すでに秋世はいてもいなくてもいい、空気のような存在となっているらしかった。

空気は素直に循環するしかない。

「じゃあ、とりこんでるみたいなんで、また後できます」

菱本先生はちらと目の端で秋世を見て、唇をぴくぴくと動かした。OK、の意と見た。

去り際、我が花散里の君に秋世なりの「元気を出してスマイル」を送ったつもりだが、受け取られていたかどうかは定かではない。夏木が父親と同じような「近寄るんじゃねえ」的気を出していて、びんとはじかれてしまいそうだった。後ろにへばりついているはずの水口に一言、

「さあ、後だ後だ」

振り返った。言葉が最後まで出なかった。
水口はいなかった。

あいつ、どこ行きやがったんだ？

こんなわけのわからない状況に引きずり込んだのはひとえに、水口要、こいつのせいだ。

彰子がどれだけ家族の一大事に苦しんでいるか、想像できないわけではない。

しかし恋敵と顔を合わせるはめになるとは。

大人の事情だよな。

全く見当がつかない。いったい何があったのか、どうして迎えに来てくれているのにさっさと帰そうとしないのか、どうして夏木までおまけにくっついてきているのか。

部屋を出るとまた、他のクラスの女子たちが秋世に向かい、曖昧な笑みとひそひそ話をしているのが見えた。なぜか勘に触った。眼をそむけ、いつものようにスマイルスマイルを振りまく気に、どうしてもなれなかった。東堂曰く「南雲の営業スマイルは完璧だよなあ」とのことだが、別に意識しているわけではない。する気がなければ、なんにもしない。自分はきわめて感情に正直な奴だと思う。「憂いある、って言うのかな、南雲くんやっぱりこうしてみると、かつこいいよね」

かつこよければ彰子を独り占めできる、それなら大喜びでかつこつけさせてもらうのだが。

腰に巻きつけた兵児帯を横っ腹叩くように扱いた後、秋世はもう一度廊下を隅から隅まで見渡した。もう少し情報を得るために、水口を見つけて、もう一度絞らねばならないだろう。同時に今仕入れた夏木父と菱本先生との会話を頭の中で整理したかった。まだ、部屋に戻らなくても言い訳がしやすい時間帯だったのは運が良かった。

秋世は旅館内みやげ物売りコーナーへと足を向けた。

背の低い女子の頭だけが眼についた。ずうっと歩いていると、ひとりと、同じくらい低い男子のぼつちゃん刈りの姿を発見した。青いジャージをだらつと着たまま、背中を向けている。自動販売機の手前に並んでいるカード式公衆電話のが緑色に光っていた。水口だということはずぐに知れた。片手に握り締めているテレホンカードの枚数は、ざっと勘定してみても二十枚くらいはありそうだった。青湯あたりに長距離電話していると見た。背中ごしに近づいた。

無防備なのか、性格チャイルドなのか。かなりでかい声で水口は喋り捲っていた。

「そつだよ、そつだよ。だから、今からうちの病院に連れてって南平先生に頼めないの？　だって、まずいに決まってるよ、だって、心臓だろ。心筋梗塞だろ？　まずいよ、すぐやらないと。だから、俺、電話番号教えてもらえたらすぐにかけるよ。すぐ連絡すればいいだろ？　だからあの、その」

「どういつもこいつも、意味不明な言葉ばかりつぶやきやがる。

推理必要な言葉をコレクションするはめになりそうだった。

気持ちが糸のこぎりみたいにぎいこぎいこ言い出す。まだ秋世が背中にくつついているのを気がつかない水口。背中は夏木父子と異なり、隙だらけ。後ろからばっさりやられても、文句言えまい。

「無理だって、そんなあ、だって、一緒に学校行くんだよ、一緒に行くのに、なんでだよ」

胃がただでさえ痛いのに、なんでこいつまで、秋世のわからない言葉をたくさん呟くんだろう。彰子に關してのめどうして自分がかめなくなってしまう理由がわからない。水口の幼いエロ発言行動も「しよせんクラスの赤ん坊が」と大目に見ていられる自分が、彰子がらみになるとつい、かっとなってしまう。

水口のわがままいっぱいに唇尖らせている様子を覗き込もうとした寸前、出た言葉に、秋世は瞬間フリージングされていた。呼吸

も一緒に何もかも。

「だって、奈良岡さんと一緒に、あすこの高校受けるって言っただろ！ 約束したんだよ！」

あすこの高校？

あすこの高校受けるって言ったって、「あすこ」ってどこだよ。

青大附高しか行かねえだろ？ 青大附中から行くとしたら。

何、こいつ、意味不明なこと言いやがるんだ？

言葉が掴めない。次から次へとテレホンカードを差込口に入れていく水口の指は、むかつくくらい慣れていた。もう使い切ったらしいテレホンカードの絵はみな、「献血ありがとう」だとか「祝・開業祝」だとか、水口のご家庭特有の医療系ムードが漂っている。

彰子と水口の会話が盛り上がっていて、秋世が決して入り込めない話題が、「医」の世界に関することだった。将来、ふたりとも医学部を目指していることは重々承知しているし、それはそれでいいことなんじゃないかと感じているはずなのに、なぜかもやもやしてしまう。じれったい自分がいる。

「そうだよ、だからだから、奈良岡さんのお父さんのいる病院、連絡して、うちで手術してくれよ。そうしたら……え？ もう終わってるなんてことないよ、だって集中治療室につて」

さらにわけのわからない医学用語、病名、その他いろいろ飛び交い出した会話を秋世はもう聞く気なかった。ただぼんやりと、でくの棒みたいにつたつて聞いているだけだった。

「うん、わかった、じゃあまたあとで」

最後の一言を言い終わり水口が両手で受話器を置くまで秋世は息を吞んでいた。

振り返って初めて水口が、

「南雲、なんで？」

慌て出したのを、秋世は手首をぼきんと折りたくなるくらい握り

締め、

「最初から事情、もう一度話せ」

声を絞って、響かせた。

答えによつては複雑骨折の一つくらいさせてやってもいいかもしれない。

水口はしばらくためらい口を開こうとしない。

呼び水をやるのが一番いいだろう。秋世は自分なりの仮説を立てることにした。

「つまりだ、彰子さんを巡る事情つてのはどういうもんなんだ？

さつきお前が言ったのは、彰子さんの父さんが心臓悪くして倒れたつてことだよな。今、集中治療室に入ってるつてことだよな」

「そうだよ」

簡単に答える。しかしそれ以上のことは言わない。

「だから、あのふたりの親子が彰子さんを青湯へ連れ帰るために迎えに来たということだよな」

「わかつてたらもういいだろ」

「良くないから俺を呼んだんだろ？ さつきさあ」

懐が少し開き気味で、秋世の美意識に反するはだけ具合だった。

襟が緩んで胸元が冷えてきて気づいた。襟元を直した。さつき水口が使ったテレホンカードを電話の上から手に取った。枚数を数えた。六枚あった。

「俺、わからないんだけどさ、すい、なんで菱本先生すぐに彰子さんを帰そうとしないんだ？」

「わからない」

尋ねた後で秋世も無理難題だということに気がついた。自分にわからないことが水口にわかるわけないだろう。与えられている状況証拠は同じものだ。水口にしかわからないことを尋ねたほうがいい。秋世なりに判断し、質問の方向を変えた。

「お前、今の電話どこに掛けてた？」

言うまでもない。ぼそりと答えた。

「うちだよ」

「なんでだ？」

男子がホームシックにかかって母さんの声を聴きたくなる、なんてことはまずありえない。特に修学旅行という解放区そのものの場所、そんなうつとうしくなるようなこと、誰がするだろうか。特に最近、大人への目覚めはなはだしい君がなぜだろう？

「しょうがないから」

「もう少し長くわかりやすく説明してもらえないかな」

今度は自分の仮面の中でも一番の穏やかバージョンたる「規律委員長」風にしゃべってみた。他に「付き合いのいい男子ののり」と「ファンでいてくれる女子たちむけ」などいろいろなものがあるけれど、水口の口を開かせるにはやわらかに攻めないとまずい。背伸びしていてもやはり、「お子さますい君」だということは変わっていないかつたらしく、水口は少し息を吐いた。

「彰子さんの父さんが受けた手術って、そんなにすごい大掛かりなものなのか？」

心筋梗塞だとか言っていた。心臓の病気だということくらいしか、秋世にはわからない。ただ、すぐ手術しなくてはいけないものなのだからきつと大変なんだろう。集中治療室なる言葉も混じっていた。秋世なりに想像つかないこともないけれども、とにかく一刻を争う状態であることは確かだろう。

水口の表情が少し和らいだ。

「急性心筋梗塞だったら、即、集中治療室が用意されている病院へ輸送して、すぐに手術しないといけないって決まってるんだよ。南雲、そういうことも知らないの？」

ちくしょう、悪かったな、知らなかったよ。

ちくりちくりと針のようなものが突き刺さる。

「今の話でねーさんの父さんどうなってるかわからないけど、本当だったらすぐ、帰らなくちゃだめなんだよ」

「じゃあなんで、お前電話した？ それとだ、もう一つ教えるよ」
秋世が一番知りたい質問を投げかけた。

「あすこの高校、って何さ？」

「高校？」

「お前、そう言ってただろう？ あすこの高校受けるって、なんだそれ？」

荒れそうな波を自分の中で押し留めながら繰り返した。

「青大附高じゃ、ねえの？ すい、答えろよ」

口を尖らせたまま、水口は秋世をぐいと見上げた。がんつけた、が一番近い。

水口に思わずびくつと一歩退きなくなるのを耐えるなんて、なんたる屈辱か。

秋世はすい君の言葉を待った。

「ねーさんから聞いてなかったんだあ、南雲」

廊下の向こう側に人影がちらついていた。誰かにふたりは見られている。規律委員長様と学年トップとの会話に、怪しいものが混じっているなんて誰も思っていやしない。

いま、この瞬間にこいつを張ったおしてやりたくなつたとしても、「俺たち医学部のある学校に行きたいから、行きやすい学校受けても変じゃないよ」

「けどじゃあなんで青大附中にいるんだ？」

水口は病院の跡継ぎ坊ちゃんだから別にしても、彰子が受けるなんて話、今まで聞いたことはなかった。青潟市内の高校でも医学部進学に有利な学校なんて秋世は聞いたことがない。さらに言うなら青大附中は、真実はともかくとしてエリート学校とされている。高校まで進学した後、それから医学部のある大学を受験する奴は、確かにいるだろう。ばあちゃんの担当の先生がまさにそうだった。でも中学卒業の段階では、警察沙汰にでもならない限りそれなりに進学させてもらえるはずだ。理系が大得意でかつ、我がクラスの隠れたアイドルである彰子が、追い出されるわけがない。

自分で自分が壊れてくるのがどうしてか、わからない。
こんな荒れている自分を感じてしまうのは初めてだった。

唇をへの字に曲げ、勝ち誇った風に水口はさらに続けた。

「青潟じゃないんだけど、医学部受験用の私立高校があるんだよ。全寮制になってるんだけどさ、そこを受験しようってねーさんに前話したんだよ。ねーさんも考えるって言ってくれたからさ、この前ちゃんと学校案内手に入れて渡したんだよ。ふうん、南雲、付き合ってるのか言って、そういうの知らなかったんだあ、そうかあ、そういうことかあ、俺しか、知らなかったんだなあ」

なにこいつひとりで感動してやがるんだ。拳に力が入った。何もこの「クラスの赤ん坊」すい君に本気で噛み付くのもばかばかしい。今は修学旅行、先生の監視も厳しい、しかも規律委員長、騒ぎを起こしたくはない。理性がちゃんと働いているのが自分の性格のほずだった。

「けどさ、ねーさんとこ、もし父さんが倒れちゃったら学校受けられなくなるかもしれないし」

「受けたって受かるとも限らんだろうが！」

必死に押えるのは自分の中の仮面を守りたいから。

今その仮面をはがしてしまったら、腐りきったどろどろした液体が流れ出してしまいそうだから。

さっきの夏木に対しても、今日の前の水口に対しても。

そして、今まだ部屋の中で菱本先生と話し合いを続けている彰子にも。

すべてが秋世ひとり、蚊帳の外。

「受かるよ。ねーさん、ちゃんと問題集買って勉強しているって。大丈夫だよ南雲。ねーさんあまり古典とか得意じゃないって言うってたから、俺がちゃんと家庭教師してやってるんだよ。うちの親たちも、ねーさんのこと好きだから、協力してあげられるしさ、それにその高校、受験結果の成績によって、ちゃんと奨学金がもらえる

んだよ。そのこともあつて電話したんだよ。南雲、なーんも知らないんだなあ。俺てつきり、南雲には話してるのかなって思ってたから、わざわざさっき教えてやったのにさ、ふうん、そうかあ、そういうことかあ」

「すい、いいかげんこつち来い！」

水口の奴、完全に秋世のことを馬鹿にしきっているのが見え見えだ。

学校内で最高のらぶらぶカップルと噂され、彰子は一時期一方的にやきもちを妬かれ、えらく大変だった去年一年間を思いっきり否定するようない方を許したくはない。規律委員長ではなくて、一個人南雲秋世として当然の行動だと、今は思える。調子付いた水口の襟元を絞り上げて、ぶん殴ってやればさぞすつきりすることだろう。もう一度両手を握り締め、一呼吸置いた。だめだ、壊れたら、仮面が砕け散ってしまう。

「ほら、向こう見てみなよ。ねーさんたちが移動してるよ」

泣き虫すい君はちつとも動じなかった。

「そんな怖い顔しないでさあ、ほら、あっち行ってみようよ」

荒れきっている自分のが惨めだったらしい。秋世は指された方向に水口の言う通り菱本先生と彰子、夏木親子がまとまって立ち話しているのを確認した。駆け寄った。

ちらつと横目で彰子の横顔を伺うと、やはり頬の真中が少しくぼんでるように見えた。

俺の眼には、ちゃんと映っている。

彰子の感じているはずの痛みを、ほんの少しでも受け止めているような気がした。

「あきよくん」

それでも彰子は秋世を見るなり、いつものあどけない笑顔に頬をほてらせた。見るからにそれが作り物とわかるのだけど、秋世のために精一杯というのが鈍感男子なりにも感じてしまう。ブラウスに

赤いリボンを結び直すような仕種をして、秋世の隣にいる水口にも微笑を返した。

「すい君、いい？ あんまりエッチなことばかり言ったらだめだよ。修学旅行中なにやってたか、あとで他の男子諸君に聞くからね」かなり無理してくりくりしたほつぺたをこしらえているのを、水口はきつと気づいていないんだろう。奴はすっかり唇を尖らせ、びいとな音をさせた。ガキである。状況把握していないぞ、こいつたしなめたいのと、少しほつとしてるのが混じって秋世は言葉を出すことができなかった。ただ、彰子の隣にしっかりとくっついてる白線ガ克蘭姿の夏木にだけ、軽く礼をした。

「おめえなあ、俺との約束、ちゃんと守ってたのかよ」

「おかげさんで」

夏木父と菱本先生が三步ほど離れたところで話をしている。何度も菱本先生が頭を下げている。きちつと背を伸ばしたまま、一度しつかり頷いている夏木父。ちらりと秋世の方を見た。

「彰子、早く荷物持つてこい。いくぞ」

「うん、わかった。じゃ、しばらくお世話になるね」

お世話になるだと？

頭の中で言葉を繰り返す秋世。

なんでみな、わけのわからないことばかり言い出すのだろう。ガ克蘭、ジャージ、制服、そして浴衣。四人とも同じ言語世界の間なのに、秋世だけが異国人状態で取り残されているかのようだった。

「彰子さん、行くのか」

「うん、あきよくんもすいくんもありがとうね。私のお父さんだもの、大丈夫」

いや、本当は何が起こったのか、それを知りたいだけなのだが。肝心要のことを彰子も言ってくれなかった。懐に風が吹き抜ける。秋世なりの言葉をまた搜した。

「詳しいことは学校に帰ってから、またゆっくり話すからね。ナッ

キー、ほんとうちの学校の人たちって、いい人ばかりだよ。もちろんナツキーもだよ！」

三人の顔をそれぞれ見渡して後、彰子は両手をぱちつと合わせた。「そうだ、あきよくん、お願いなんだけど」

「なんなりと、どうぞ」

「今から私が帰ること、他の人たちにはまだ内緒にしてもらえないかな？」

せつかくの姫の頼みだというのに、また肩透かしだ。そんなことわかってる。当然だろう？ そう言いたいのをこらえる。彰子の背中に伸びる影が、父親の病気だということを知っていて、ぶつくさ文句たれることなんてできやしない。たとえ、どんなに腹ペコの狼だったとしても。

「ああ、いいよ。けど、菱本先生には話したの？」

「うん、私も帰ってみないとどういうことになってるかわからないんだけどね。でもきつとうちの父さんのことだから絶対大丈夫！修学旅行終わったら、ちゃんとみんなの前にいつもの私になって戻ってくるからね。すいくんも、ね」

いつもの私じゃないのかよ。

明るすぎるほど楽しげに振舞う彰子に、秋世はどことなく、黒い影を見た。

いつもの彰子とほとんど雰囲気が変わらないだけに、苦しかった。

玄関先まで秋世と水口は並んで彰子たちを見送った。

女子たちには幸い全く気づかれずにすんだという。

たまたま荷物を取りに行った時、みな別の部屋にいたからだという。

「じゃ、気をつけて」

「明日のデートは、帰ってからたっぷりしようよ、彰子さん」

気障といわれようがなんと言われようが、そんな重苦しさを打ち消すにはいつもの秋世なり、「彰子へ限定スマイル」決めるしかな

い。夏木と水口の視線が氷点下に冷えていくのを覚悟の上、秋世は人差し指を自分の唇に乗せ、すぐに彰子へ投げた。

「さあ、早く行って来い！ 彰子、先に乗ってるぞ！」

夏木は背を向け、腰に両手を当てて指を玄関に向けた。父親の真後ろにひつついたまま、ぴんと背を伸ばし歩き始めた。見送りながら秋世は、もう一度彰子の無理している笑みをまぶたに焼き付けた。

泣いたって、いいのにな。

手を差し伸べることもできやしない。浴衣と制服のTPOレベルと同じ差が、確かに見えた。

第一部 5

お前だけだもんな、最後までやったことあるのさ。

修学旅行四日目の予定はきちんとこなした。彰子と過ごす予定だった自由時間も、幸い東堂たちとゲームセンターでたむろったり、名産品を食いまくったりして時間をつぶせた。いないならいないで最初っからないことにしておけばいいことだ。秋世なりに割り切つてはいた。いつまでもうじうじしているよか、旅行が終わって後の予定をみっちり立てるほうがいい。その点開き直りは早かった。

「そうだ、噂聞いたか？」

とことん遊びほうけて後、ホテルに到着した秋世に、地獄耳情報を持ってきてくれたのはやはり、親友東堂だった。

部屋にまずは荷物を置いて、制服のまんまねところがつた秋世に。「立村がさ、清坂以外の女子とデートしてたらしいぞ。ただいま噂の真っ最中」

「ふうん、そうなんだ」

正直、他人の恋路には興味が薄いタイプである。秋世なりの考えで言えば、恋愛よりも考えたいことというのは人それぞれたくさんあるわけだ。もちろん昨日の夜は彰子のことと埋め尽くされたけれども、一眠りすればきちんと収まるところへ気持ち治まる。延々と一人の人のことばかり考えるよりも、もっと楽しいこと、興味ぶかいことに専念したくなるのは、男としてごくごく普通のことだ。ただし、そのネタに拳がっている立村という奴が、「男としてごくごく普通」の感覚とは違うことを知っているだけに、まったく興味がないとは言えなかった。自分に火の粉が飛んでこないように、「

ふうん、そうなんだ」ともう一度だけ繰り返した。

東堂もその辺、心得ているようだ。秋世と三年近くつるんでいるわけではない。

「なんでも、第一スタンプラリー場所の教会で、B組の女子と二人つきり、仲良く手をつないで別行動を取ったんだとさ。やるねえ」

「B組かあ」

あの、がり勉集団の固まっている、B組か、とは繰り返さないで置いた。東堂もそのあたりは理解してくれているはずだ。

「それ見て、D組連中大騒ぎ。羽飛が立村を追いかけて首根っこ捕まえようとしたが、果たせず謎のままだつて噂」

「りっちゃんは今戻ってきているだろ。直接聞けばいいじゃん」

単純なことだと秋世も思う。クラスの評議委員を務め、現在は評議委員長という地位についている立村上総は、秋世にとってもいい友だちだ。かなりの部分、親友に近いんじゃないかとも思っている。ただ、東堂と違うのはほんの少しだけ「弟分」めいた部分のりしろになっているところだろうか。同学年ながら、なんとなく年下の後輩に対しての気遣いが必要な瞬間を、多々感じる。その点東堂は秋世とまったく同じ、のりしろのいらない付き合いに徹することができる、楽だ。もし東堂が「自分の彼女以外の女子とデートしてきた」という話だったら、即、取材活動を始めただろう。それができないのは、立村の性格のりしろが、注意必要だつてところからかもしれない。

ほんとかなあ。

十五歳男子としては、自然な衝動たるデートだけれども、相手が意外な奴、というのも気になる。

「東堂相手だったらどんなことやつたかって聞いちゃうんだけどなあ、俺も」

「へ？」

秋世は東堂の肩に両手を起き、思いつきり抱きついた。誤解を招くいちやつきぶりと言われそうだ。

「そうかあ、南雲、お前こういう趣味だったのか」

「そ、ただいま欲求不満」

亀の子みたいに首根っこにかぶりついた。どすんと東堂もベッドの上になっころがり、背中では秋世を押しつぶそうとする。

「ねーさんなーんもさせてくれねえんだもんなあ」

「ご存知の通りでござんす」

「媚薬がほしい今日この頃っすなあ」

保健委員で、彰子とは相棒の東堂。尻で思いっきり腹を撫でてきた。

「だから、食欲であふれかえってるってわけっす」

「早く食う準備しようぜ、南雲よお」

ここで真剣に「ねーさんのこと、心配なのか、南雲」と問わないのが東堂だ。

「奈良岡さんのことが、心配なんだよな、ごめん」と謝る必要もないのに気を遣おうとするのが立村だ。

人それぞれなかなか個性のあるいい奴だ。

ほこりっぽい格好のまま、食事を終わらせた。本当はこれから修学旅行最大イベントの「蛍狩り」が行われる予定だったのだが、だんだん降りしきる大雨により急遽中止になってしまった。小雨程度だったらまあ、「こっちの水があまいぞ」といいながらも傘さして眺めるのも乙だったろう。しかし天気予報によると「局地的大雨」になる恐れありだという。ほたるおっかけて、自分が流されてしまったら元も子もない。秋世は自分なりに納得して、蛍狩りをあきらめた。彰子がいらない分、あきらめもそんな苦痛なく、切り取ることができた。

「りっちゃん、食う？」

隣の席で無言のまま好奇の目にさらされている立村に、漬物を指差した。

「あ、うん、ありがとっ」

他の男子たちからも、「おいおい、浮気の報告はしたのかよ」と突っ込まれているのだが、まったく返事をしようとしなない。

髪の毛はきちんとまとまっていて、ちゃんと身だしなみも整っている立村。

秋世の友だちの中では、おしゃれの方こそ違うにせよ、ファッションにきっちり関心を持っている男子の一人だ。

少しだけ日焼けしているように見えるけれども、もともと色が真っ白いだけに顔が赤らんでいるだけなのかもしれない。

一部では「蠟人形」とか「マネキン」とか言われているけれども、もともとの顔は整っていると秋世なりに見ている。状況が許せば、秋以降にでも「青大附中ファッションブック・秋号」あたりに特別ゲストとしてファッションモデルやってもらってもいいかも、と思ったりしている。もちろん本人の説得が不可欠だが。正式なトラッドファッションがきつと似合うと思うのだ。あまり崩さない、それでいて真面目で、礼儀正しい着こなしが可能だと思うのだ。

「りっちゃんさ、今度なんだけど」

思い立って秋世はしょうゆを押し付けつつ、訊ねた。

「俺と一緒にファッションのお勉強いたしませんか？ どうでしょう」

「なにするんだよ」

少しご機嫌悪そうだが、周りの「浮気者！」視線よりは心地よさそうだ。立村は箸で器用にかぶの漬物をつまんだ。

「いやさ、そろそろ規律の方で『青大附中ファッションブック』の作成準備をしないとまずいかなと思ってさ」

「別に、いいけど」

言葉は少なかった。まあいいのだ。要は困らない会話でお茶を濁せば。すべて真実を暴露させようとして、突っ込むことが正しいと秋世は思わない。いろいろ事情が人にはある。その事情を聞き出すのにちょうどいい時期がかならず来るはずだし、話せることだったら相手の方からしゃべってくれるだろう。のりしろなしでべたっ

と張り付くのは、やっぱりこいつには向かないのだ。

立村は少し、物言いたそうにしていたが、女子たちの「いったい何考えてるのよこいつ！」と攻め立てる視線に参ったらしく、

「じゃ、今日はこれだけでいい。ごちそうさま」

と両手を合わせた。かなり茶碗のご飯、および味噌汁、ハンバーグが残っている。食欲ないんだろう。きつと。

やっぱり、旅行終わってからだな。

秋世もお茶をすすりながら、長期戦に切り替えることにした。

「でさ、聞いてみたのかよ、南雲、立村にさ」

部屋に即、戻った後、秋世は浴衣に着替えた。ジャージで寝ている奴もいるし、いろいろ楽なのかもしれないが秋世は浴衣の方が好きだった。袖も短く丸まっているし、帯も思ったより簡単にくるくるまかさる。今日は別に外をうるつくわけでもないのだから、多少裾が広がってようがかまわない。東堂も同じく、胸毛を若干のぞかせる格好であぐらをかいていた。保健委員は意外と清潔感を求めてこない。かなり大雑把な性格と秋世は見ている。本人はどう思っているかわからないが、同じことをどうやら彰子も思っているらしい。「東堂くんはわかりやすいからいいよねえ」と。

「聞ける状態じゃないよ、ありやあ」

短く答えた。東堂はベッドの上に腹ばいになり、秋世の足元に這いつくばった。

「そりゃあそうだろうが、みなもう周囲から興味津々状態が続いてるんだぞ、あいつ」

「人それぞれあるだろ。それに見た限り、清坂さんとは別れてないみたいだしさ」

立村が二年の六月から現在にいたるまでお付き合いしている女子の名前だ。それなりににこやかに食事していた様子を確認していた。「いや、わからんぞ、女子はなあ」

「東堂よ、お前さ、自分と人がおんなじと思うの、やめなさいね」

一年前はかわいい年下の彼女がいたのに、最近思いっきり振られてしまい心の傷がまだいえていない、哀れな東堂に。

「俺とは関係ねえよ。いやいや、南雲。お前だってそう思ってたか？」

「いやそれは」

言葉に詰まった。東堂も、秋世と同じアンテナを持っていると見た。前からこの立村上総という奴には、普通とは違う感覚が備わっていると思っていたのだが、それは別に不快感を持たせるものではなく、いつも自然に受け入れられていたものだった。しかし、どうも今回に関しては違和感が抜けない。たぶん東堂の言いたいのはその辺だろう。

「あのふたりがいまだに付き合い続いているってのが、まず奇跡だよ」

「言いたいことはね、よくわかるよ東堂先生」

「絶対別れるぞって思ってたけどなあ」

「人にはそれぞれ、相性つてもんがあるんでしょや。俺みたいにね」

「いや、ねーさんとお前は別だけだな」

珍しく東堂が秋世の恋に感想を口にした。ほんと、これは珍しいことなのだ。のりしろなしの付き合いで、こういうことというのは珍しいのだ。

「へえ、それはどうして」

秋世は他人の噂よりも、自分に対して相手がどう考えているかを知りたいと思う性格だった。

テレビのワイドショーよりも、地元ローカル番組の地域密着ニュース。

「せっかくだ、教えてくれよ、正直なところをとことんと」

「なぐちゃん珍しい奴だなあ」

聞かれるとうれしいのでしゃべってくれるのが、東堂のわかりやすい性格でもある。

「つまりさ、ねーさんってさ、ぶっちゃけた話、女子みたいにべたべたしないだろ。あ、ねーさんは女子だけどさ」

「うんうん、言いたいことわかるよ」

東堂はあぐらを書き直し、すね毛を一本、また一本と抜いた。

「反面、南雲ってな、どうでもいい子にはどうでもいい態度取るけど、好きな子にはべったりだろ」

「人と場合による」

「そこらへんのバランスが、絶妙だよなってしばし思うわけ」

「ふうん、そうなんだ」

男子たちの意見は非常にわかりやすい。あまり深いことを考えない男だったはずなんだが、彼女に振られたことによって精神ががりがりと削られたらしい。

秋世が求めているような言葉を、少しずつ掘り起こしてくれる。

「たとえば、さっきの立村と清坂。あの二人はどうみても、立村が尻に敷かれてるよな。評議委員長様とは思えないあの扱われ方、涙を誘うぜ」

「言いたいことはすぐわかるぞ」

「さっきみたいにデートをした後、立村はきつと、清坂に頭を下げるであろうということが想像できるわけだよ、俺としてはだ」

頷くことしかできない秋世。東堂もやはり、秋世と同じ目でクラスの評議委員カップルを見つめているということだ。自分が言葉にしないでいいことがたくさんだ。

「たとえどんなにうんざりしていても、まずはお付き合いせねばとあせる気持ちが生じると俺には伝わってくるわけだよ、すなわちだな」

秋世に、東堂はとどめを指した。

「愛し合ってねえよなあ、あの二人」

愛し合ってるって、すげえこというな、東堂。

返事をせず、秋世はもう一度ごろんと横になった。さっさとシヤ

ワーを浴びて後、テレビでも観ながらごろごろしたいところだったけれども、なんだか気持ちが高まっているようで落ち着かない。中途半端な遊び方はかえってストレス溜めるだけだったのかもしれない。せっかくだったらイラストブック持ってくればよかった。

「なんてつかさ、南雲、俺もあんまりさ、うまいこと言えねえけど、やっぱり感じるってあるよなあ。好きあってるって奴はさ。けどあのふたり、どうもな」

「人様のことを突っ込んでると、今度は自分が餌食にされるぞ」

「まあそうだ」

はは、と声をあげて東堂は笑った。

「この歳になると、いろいろやばいこともあるしなあ」

東堂がかつて付き合っていた年下の女子と、すったもんだの末別れたのは知っていた。

あまりそのことについては男子連中も聞いていないし、東堂自身も話していなかった。ただ、どうしても彰子と同じ保健委員ということもあって、ちらほらと噂だけは耳にしていた。つまり、その、求めてはならないところをつい調子に乗って、求めてしまったのがまずかったという結論だ。健康な男子からすると極普通のことを、女子には受け入れてもらえなかったということだろう。秋世も彰子にはしょっちゅう似たようなことをしているわけだが、そのあたりは暖かく掌で解かされ、笑顔で還元されてしまう。男子にとっては口惜しくも、まあしかたないかなと笑える終わり方となる。東堂はきつと信じてはいないだろうが、彰子に一度もキスすらしていないことを、どう説明すればいいのだろうか。いや、夏木、名倉の存在をおお世話したことすらないのだ。青大附中のベストカップルそのものの顔をしながらも、秋世が現在、三股関係のままだということを、親友の東堂にすら話していない。

俺たち、愛し合ってるように見えるのかねえ。

問いたくなかった。

「東堂先生よ、俺たち、愛し合ってるように、見えるか？」

「お前らがそうでなかったら、どうすんのみんな」

やっぱり、見えてないんだ。

親友にも、気付かれていない溝が、確かにあった。

いつもそうだ。秋世はすべて、何もかも与えられている人間だと周りから思われているふしが、確かにある。

「あんな性格のいいかわい子と別れるなんてねえ」

水菜さんを初め、いろいろな女子と別れる時いつも言われた言葉だった。

「なにを好んで奈良岡さんなわけ？」とも。

「きつと恵まれすぎてて変わったものでないと満足できないのよ。あの脂肪の塊って人を抱きしめて気持ち悪くならないのかしら」とも。

恵まれてるのかねえ、俺って。

「どうした南雲」

「俺ってさあ、何でもほしいものが手に入るように見えるわけ？」

「なんだよ藪からぼうに」

秋世は浴衣の前を思いつきり広げたままつぶやいた。当然、東堂に向けてだ。

「なあんでも、持ってて、幸せ一杯なように見えるわけなんだよな」
「ものによりけりだろ」

さすが親友、そのあたりは理解してくれているようだ。秋世は頬を枕につけたまま笑った。ほおが少しひくつとする。

「奈良岡のねーさんはなあ、まあ、時間の問題でしょが。なあ。あのご面相だったら南雲以外の奴が手を出すこともねえだろうしさ。性格で狙われるのはそれこそ大人になってからだろうしさ。その点も十分、南雲なりに考えてるんだろ」

わかってねえなあ。

もちろん、話してないのだから、わからなくて当然なのだ。東堂

には、彰子のファンクラブが小学校時代の有志によって結成されていることとか、もともと人気者だったということしか話していない。保健委員としてもそのあたりは把握してくれている東堂に、それ以上の話をする必要を感じない。

「ほしいもんなんて、入ってねえよ」

急にくたつと気力が萎えてきた。東堂がテレビのスイッチを入れ、先にシャワー浴びるからな」

言い捨ててユニットバスへ飛び込んだ。本日のお宿はビジネスホテル、ツインルーム。修学旅行最後の宿にしては実にビジネスライクなムードだった。

少し居眠りしていた。体が重たかったのはやはり眠った証拠なのかもしれない。

「おいおい、南雲、起きろ、ほらほらなんつう格好しとるんだ、ご開帳だぞ、ファンの女子たちがこんなとこ見たらどうするんだ」

部屋に本来いないはずの大人の声がする。薄眼を開けると真上には、担任・菱本先生の汗ばんだ顔が浮かんでいた。化けものかと思っただ。慌てて裾をあわせ

、起き上がる。正座を一応、ベッドの上でした。まだ東堂の奴、シヤワールームから出てこない。

「先生、何しに來たわけっすか」

「ほら、今日は最後の夜だろ。少しは膝を突き合わせてさあ、な」
うざってえ、というところだろう。本音ならば。まんざら菱本先生という人を秋世は嫌いではなかった。三十路寸前ということもあるし、若干説教くさいところも無きにしも非ずだが、話は通じる。恋愛関連のネタも、結構わかってくれるみたいだ。秋世のようにそれこそ「女つたらし伝説」を派手に流布させていた奴に対しても、「お前も大変だよなあ、モテる男の運命だ、今のうちに覚悟しとけ！」と笑って話してくれる。軽く言われると「ま、いっか」という気持ちにもなる。二年以降彰子との付き合い一本になってからは、

どうやら両家をうまく取り持ってくれているらしい。両親、教師にばれて困るようなことを幸いか不幸かしていないので、その辺も今のところはありがたい。

「いやあ、膝つきあわせたくても、俺、酒ねえですよ」

「ばあか、それは十年後のお楽しみだ」

軽く頭をはたかれた。

「東堂、早く出てこいよ！」

「はい」

のどかな声がシャワールームからする。きっと時間稼ぎしようとしてるんだろう。気持ちはこちらにもよくわかる。

しかたない、秋世はいつもの人懐っこい仮面を取り出しかぶった。昨日のことだが、お前、何か言いたいことあったか？」

さっと思い出した。そうだ、すっかり忘れていた。彰子が夏木親子に拉致されて船に乗せられていったというところでもない事件だ。どうして忘れていられたのか不思議だ。他の女子たちが不安げに「ねえ、彰子ちゃん彰子ちゃんが」と噂していたのだが、それに対して正式な話を一切することができず、ジレンマだったのだ。

「奈良岡さんのことつすよねえ」

勘がいい先生だ。大きく頷いた。秋世の座っているベッドに腰をおろした。

「たぶんな、お前にはあとで奈良岡から話が出ると思うんだが」

一呼吸置いて、

「お父さんがな、体調を崩して入院しているんだ」

「だいたいそんなところかと思ったけど、で、今大丈夫なんすか」

菱本先生はかすかに笑った。おそらく、生命の心配はないんだろう。

「一応な、お元気だ。入院はしているが、元気だ。奈良岡からもさつき電話あつてな、みんなにごめんとっておいてくれってな」

あきよくんに、じゃねえのかよ。

身勝手とわかっていても、むつとくる。まずい、仮面がはがれて

しまう。夏木の勝ち誇った面を思い出すと、また胃がきゅうつと締めつけられる。

「ただな、青瀉に戻ればわかることだと思うが、少々新聞沙汰になっ
ていることもあって、あまり詳しい話ができないんだよ」

「新聞ざた？」

警察沙汰じゃないのか？ 聞き返すと、

「いや、これも詳しい事情はまた後で説明するがな。奈良岡のお父
さんが倒れたきっかけになったのが、ちよつとした会合の場だった
そうなんだ。本当はたいしたことないんだが、話を大きくしないた
めにまずは入院してもらおうという。ほら、あるだろ。政治家が何か
悪いことやらかして、即、入院してしまうっていう。あれだよ」

「じゃあやつぱり悪いことだったんじゃないっすか」

またいらいらしてくる。たぶんはつきりした事情を彰子も、菱本
先生も、当然ながら夏木も知っているのだろう。水口ももしかした
ら、若干はつかんでいられるのかもしれない。蚊帳の外に追いやられて
いるのは秋世だけだ。今、少しずつ菱本先生が話してくれているも
の、それが本当なのかどうかも定かではない。もつと詳しくわか
りやすく、とねだれば「それ以上は家庭のプライバシーだ」とか「
警察沙汰だから」とか言われるだろう。飲みこむしかない。

菱本先生は膝のところを二度、三度とつまんだ。

「どうなんだろうなあ。とにかく、奈良岡は元気だし、ご家族も大
丈夫だが、ちよつと大変なんだってことだけはわかってやってほし
いんだよな。南雲、それはお前だったらできるだろ？」

まあな。

言いたくないなら言わなくてもいい。それが秋世なりのスタンス
だ。

相手が口に出すまでは待つ。

しかし、彰子に関してのみはそれが通用しない自分もいる。

俺以外の奴がもつと詳しいこと、知ってるのにさ。なんでだ
よ。

先生相手用の仮面がぐらぐらとはがれそうだった。こくりと頷きごまかした。

「わかりやした。まあいつかってどこっすね。元気がなにより！」
「さすがお前、規律委員長だな！　どこかの誰かとは大違いだ！」

かわいそうに、りっちゃん、また何かやらかしたな。

隣の部屋でおそらく、菱本先生のご訪問を受け、さんざんおちよくられた後の立村上総について思いをはせた。菱本先生の明るく熱血な性格を楽しく受け入れられる奴もいれば、激しく嫌悪してしまう男もいる。後者の性格たる立村にとって、このつつこみはしんどいことだろう。この先生も大人なのに、どうして立村の扱い方を理解できないでいるんだろうか、とふと思う。秋世が早い段階で気がついて、丁寧のにりしろをつけてつながるようにしているのに対し、菱本先生はいつもべたつと紙前面に糊を広げて、立村を覆いつくそうとしているのだから。

ちょうどそこへ、時間を稼ぐにも限界だったらしい東堂が風呂上りスタイルで現われた。秋世とは違い、それほどファッションにこだわるでもない。ぬれた髪のまままで、髪の毛をかきながら、

「お、どうも、先生、どしたの」

やっぱり秋世と同じく、まんざら菱本先生嫌いではない奴だ。

「東堂、来い来い、ちよつと座れ」

今度はターゲットを東堂に移している菱本先生。めんどくさそうだがそれでも、ふむふむ頷く東堂。

「お前な、ちよつと、あせりすぎたんだろ、そうだろ」

ちよつと待て、東堂お前、どこまで話してるんだ！

秋世だってそこまで聞いていない。東堂はそれでも嫌がるでもない。こっくり頷いて、ぼそつと告げた。

「若いつて、恥じっすね」

なんで先生に言えるんだ、こいつ。

別にいいのだ。東堂はそういう奴だと思えばいい。しかし、も

つと先にしゃべってくれてもいいであろう相手が側にいるのにだ。

具体的に何をしたかは秋世も聞いていない。ただ、年下の彼女にキスかそれ以上か、何かを求めて振られたというそれだけの事実のみだ。「何か」が何なのかについては、礼儀として耳に入れちゃいない。

「南雲も知ってるんだろ」

「いや、たぶん知らないと思うんです」

「じゃあまずいか」

ここでもし、「言わないでおくんなせえ」といったとしたらすぐに、秋世は東堂をぶんなぐることだろう。みな、内緒にしすぎると違うんだろうか。いくら秋世があまりつつこまないように、と心しなくてもだ。友だちではなく、なぜ先生に先に打ち明けるわけなんだ。さすがにそのあたりも秋世の親友たる東堂は理解していたように、激昂させるようなことを口にはしなかった。

「いや、言うつもりだったし、この場で」

「別にいいよ、無理せんでも」

「いや、隠しとくのはなんかな」

二ヶ月隠しておいてなんだそれは。

秋世がゆつくりと口を開こうとしたとたん、東堂は告げた。はっきりと、信じられない言葉を混ぜた。

「俺さ、結婚の申し込みをして振られたんだわ、ったく、笑えるよな、先生」

結婚？

付き合い、ではない。今確かに東堂は、「結婚」と言っただけだ。秋世の耳が狂ってなければ、の話だが。

「付き合いじゃねえんだろ？ 東堂、結婚ってなんだ？」

「文字通り、その通り」

菱本先生の顔を覗くと、苦笑いするように秋世と東堂の顔を見や

りながら、

「惚れた女にそう思えるってことは、素直に偉いと思うぞ。男としても、勇気あるなと尊敬するぞ」

菱本先生だつてそろそろなあ、年貢の納め時だろ。

彼女がいるかもしれないと噂の菱本先生がだ。

「だがな、断られたのは当然だとも、今は思つてるだろ？」

「はい、まあ、先走りすぎたかなと」

ますますわからない。秋世は東堂の顔がだんだん真つ赤なりんご状態で晴れ上がっているのに驚いた。いや、赤い風船を膨らませている状態といえは近いだろうか。

「あんな、東堂、別れたきつかけって、プロポーズかよ」

どもりながら秋世は尋ねた。

「親經由つてのが、今思えば、まずかった」

さらに絶句だった。一緒にばかやって洋服屋をうるついたり、ボーリングやって勝負したり、女子の顔のレベルで盛り上がったりしていた東堂が、いつのまにか陰でそんなすごいことをやらかしていたとは思わなかった。まさかとは思うけれども、つつこんだ質問をしてしまう。

「腹でつかくしたわけじゃ、ねえよな」

「まあな。じゃあ俺退学してるじゃねえか」

「じゃあなんでだよ」

側に先生がいるのによくもまあ、しゃべるもんだ。もしやこいつ、先生に協力してもらったとか言わないだろうな。秋世なりに推理してみたがつかない。東堂は先生にも、秋世にもそれぞれ目配せしながら、

「やっぱ、責任取りたいって思ってたし、南雲みたいに家族できちんと付き合えるかどうかでも大切だなって思ってたからさ。ちゃんと相手の親宛てに交際申し込み書みたいなものを送りつけたってわけだわ。恥じ、だよなあ」

笑いでごまかそうとする東堂に、菱本先生は軽く奴の頭を撫でた。

「教師としては、非常に正しいと思う行為だが、女子にそれは通用しねえよなあ。わかる、わかる」

なにか「非常に正しい」のだろうか。秋世なりに考えてみると、「正々堂々」たる態度でかつ、「教師の問題」に達しないということだろうか。

秋世の知らないところでみないいろいろあるものだ。自分なりに言いたいことはあるものの、それはそれとして割り切れるものがあるはずだった。東堂とは入学時代かなり親しいつもりでいたがお互いかくしておきたい感情というのは誰にでもあるもの。秋世はいつもそれを掘り起こしたいとは思わなかった。聞かれたら答え、相談されたら助言する、それだけでいいと思っていた。

ただ、教えてもらえそうなこととか、相手が自分から言いたくてならなさそうなことは、こちらから水を向けるのもまたよしだ。ひざを開き加減にし、その間に両肘を押し付けるような格好で、秋世はあごをちょこんと手の中に乗せた。

「ふうん、そうなんだ、わかるんだ」

繰り返してみた。菱本先生も気を遣っているのかそれとも面白がっているのかにやついたままだ。きっと東堂にとってもそういう笑いが出てくる程度の話なんだろう。

「教師としてはだ、それは当然だと思っただよ。だがな東堂、相手の反応もこれから考えないとまずいつてことを学んだよな」

「はあ、ったく、まさか隠されてるとは思わなかったしなあ」

東堂と菱本先生はふたり、楽しそうに恋愛論議をはじめた。幸い秋世は聞き役に回るのみですんだので、それ以上のことを口には出さずにすんだ。それはそれでいいだろうと秋世も思った。

大体の事実関係は話の中でつかんだ。

つまり、東堂は二年に入ってから付き合っていた一年後輩の女子と、かなりあつあつの日々を送っていたらしい。秋世もそのことをちらっと聞いてはいたけれど、相手の女子についてはまったく面識

がなく、話を聞くだけにしていた。男子の付き合いというのはそういうものだ。女子のように「ねえねえなんとかくんが、かんとかくんがねえ」と打ち明けごっこをめつたにしない。例外ももちろんいるが、それは相手の性格見が必要だ。たとえば立村の場合とか……。たまたまその彼女は、結構派手目な性格だったらしく、今年に入ってから少しずつ不良化の兆しを見せてきたらしい。これも東堂の言い方によるが、秋世からしたら単純にちょっとはめをはずした程度なんじゃないだろうか。スカートが短くなったとか、ほんのりと目立たない学校用メイクをして通うようになったとか。規律委員としては取り締まらねばならないが、プライベートではそれほど言われるものでもないだろう。

彼氏たる東堂としては、やはり心ざわめいたのだろう。特に、他の同級男子たちの視線を意識させるような言動を眼にして、「これは俺がなんとかせねば！」と義憤に燃えたらしい。秋世からすれば、単なる嫉妬としか見えないが東堂の希望どおり、思っておこう。

何度か彼女に対して「スカートを短くするのはやめろ」とか「けばい化粧をするな」とか、口うるさい教師めいた口調でいろいろと注意をしたが、当然言うことなんぞ聞きはしない。それどころかちよっかいかけてきた男子たちと仲良くデートを繰り返したり、時には街でナンパされてみたりと、かなり激しい行動の繰り返し。とうとう彼氏・東堂としては行動を起こさざるをえない。自分なりの方法でもって……このあたり具体的な表現を避けた様子だが、たぶん交際に関する手紙を親に送りつけたというところだろうか……彼女に言うことを聞かせようとしたらしい。

問題は、彼女自身が東堂の「愛情」をあっさり「束縛」と受け取ってしまったところにあるようだ。

寝耳に水の彼女両親は、即、学校に東堂の出した手紙を手に、担任教師へ問い合わせたという。たまたま東堂も保健委員としてはきちんと仕事をしていたし、学内でも堂々と彼女をエスコートしていたし、「節度」を保っていたこともあって、教師側からの厳しい指

導は特になかった。ただ、東堂の担任・菱本先生に話が流れてしまい、仕方なく話を引く張るはめになってしまった。つまり、先生指導のもと「今後の交際」について明言させられたというわけである。これはしんどいよなあ。

東堂はそれなりに愛情を感じていたようだし、手紙を出した以上は当然責任を取りたいと強く訴えていたのだが、彼女はそこまで一切求めていなかった。軽い気持ちだったのに相手の方が盛り上がったしまったたまったもんじゃない、とばかりに、菱本先生の前で決別を宣言してしまった。東堂は担任教師の前できっぱり振られてしまったというわけだ。

最悪じゃん。

それを笑って話すことができるのが、東堂たるゆえんだらう。

「まあな、俺もいい人生勉強をしました」

「これからまだいい出会いがあるさ、がんばれよ、東堂」

秋世も素直にこっくりとうなづいた。なんだか、奴らしい。

しばらくたわいもない話をした後、菱本先生は部屋から出て行った。やはり、ほたる狩りが中止になった分、生徒との交流を深めようとする努力が暑苦しいくらい伝わってくる。

「俺たちは別にそれはそれでいいけどさあ、かわいそうだなあ、立村は」

「想像するだけ笑えるな」

東堂と顔を見合わせて思いつきり笑った。

「そうだなあ、あいつと菱本先生、天敵だもんな」

評議委員の立村と菱本先生とが仲よろしくなく、三年越しのバトルを繰り広げているのは周知の事実だった。

秋世からするとそれほど問題あることを先生は言っていないのに、立村の方が過剰反応をする、といった感じだろうか。

たとえば今のような会話を交わした場合、秋世や東堂だったら「ふうん、どうも、ありがとさん」ですむだらう。

立村ならそうはいかない。

「まず絶対に無視しまくるか、にらみつけまくるか、黙って席を立つか」

「いやいや、今夜は逃げられませんぜ」

「つたくもって、そのとおり」

秋世の顔を見ながら東堂はひざをたたいた。

「そうなんだよなあ、あいつどうしてそういうところうまく流せないんだろうなあ」

「お前にそれ言われたかあないよ」

軽口をたたきながら、秋世は窓辺を覗き込んだ。遠くの建物に黄色い明かりがたくさんついているのがわかる。雨交じりの音は窓ガラスにべったり耳をつけないと聞こえないけれども、かなり激しいホテル前の道路には水が勢いよく横に流れている。

「東堂悪い、テレビ入れてくれよ」

「はあ？ 天気予報か」

「そ、なんかすごい雨だぞ、俺たち帰れるかなあ」

「閉じ込められたらしゃれにならねえぞ」

とかいいながら東堂はテレビのスイッチを手を伸ばしつけた。まだ報道番組の時間帯ではないせいか、二時間ドラマの濡れ場面面白くなってしまった。別に恥ずかしがって切ることもない。東堂とふたり、まずはじっくり見入った。話の内容を追ってみると、どうやら刑事と犯人の女との禁じられた逢瀬らしい。

「すげえよなあ、やつぱし、腕立て伏せ」

「ほんとなあ、仕事とはいえ、うらやましい」

ぼそつと秋世はつぶやいた。同い年の連中でもし、「濡れ場」に興味を持たない奴がいたら絶対嘘つきだとつっこんでやるだろう。

素直にすごいと言える。東堂もごくごく自然に眺めながら、

「なあ南雲」

と続けた。

「こういう時ってさ、やっぱり、快感なのかねえ」

「おいおい、いきなりなんでだよ」

「いや、さ」

東堂の言葉は次の瞬間、菱本先生に決して言わなかったものを発していた。

「お前経験してるからわかると思うけどさ、もむ場所って人によって違うのかねえ」

もむ場所？

俺が、経験してる？

あえて表情を変えずに聞いていたので、東堂には感づかれなかったはずだ。

「いやさ、あいつ、もう経験してたからさ。そんなにしたいんだったら俺が全部やってやるって、やったんだけどさ」

「やったって、いわゆるあれっすか？」

「Bまでしかいけねえよなあ。やっぱし、それが、まずかったのかもしれねえな。やっぱし」

てか、お前、やったのか、Bまで？

「南雲くらいしか経験者いねえからさ、あえて聞くけどさ」

東堂はいかにも当然といった顔で、さらに続ける。

「どういう風にすれば、女子って悦ぶのか？ わからねえよほんと。適当にさ、今のテレビみたいなことやってたけどさ、ぜんぜんうまくいかなかったさ。結局さ、へたくそって言われちまってさ……」

菱本先生はたぶん気づかなかっただろう。「それなりのこと」というのがどういうことだったかを。

「こういうことってさ、教えてもらいようがねえもんなあ、たぶんあれが、致命傷だったと思うんだ。ちくしょう、俺さ、もっと早く南雲にテクニク教えてもらえばよかったってつくづく思ったよ。

お前だけだもんな、最後までやったことあるのさ。二年上の先輩と

最後まで行っただもんな」

やっぱりそう思われてるのかよ。

否定はしないでおいた。話を合わせるのは慣れている。

やっぱり俺は、女っただらしだと思われてるんだな。

第一部 6

だつてさ、りつちゃん、清坂さんに一人で、みやげ物、選べるか？

真夜中から早朝の間、大体四時くらいだったろうか。

なんとなく東堂と、深夜洋画劇場の刑事物を観ながらベッドに横たわり、とりとめもなく話をしていた。そのうちにだんだんまぶたが重くなり、テレビの電源をつけっぱなしにしたまま眠ってしまった。部屋にはがんと、フランス語と拳銃の発砲音だけが響いていた。かなりひどい雨音も、防音ガラスの効果ありで、ほとんど気にならない程度。すっかり眠りほうけていた。かなり室温も高かったせいかな、掛け布団をかけるのも暑苦しい。

「おい、南雲、南雲」

だいたい色の甘い灯りに覆い被さる東堂の顔。

とりわけ暑苦しいったらない。

「さわやかじゃない目覚めだなあ」

「ちよいと、耳澄ませ」

「はあ？」

目をこすり、目やにを取る。秋世は身体を起こさないまま、東堂の顔を見上げた。まさに襲ってくださいとばかりのポーズ。野郎相手にモーニングキスなんてやっていられるか。

「隣の部屋から、ちよつとな」

心なしに東堂の声もひそめがちだった。

「どっちだよ」

「こつち」

バスルームの方を指差した。

「さつき便所に行った時にな、やたらと女子の声が聞こえるんだよな。あとばたばたとさ」

「ばたばた？」

まだ頭が十分働いていないと自分でもわかる。秋世は少しこめかみが痛くなつた。寝癖がついているかもしれない、とふと思った。

「女子、いるかもな」

「いるわけねえだろ、ここはむらい男子の一系列」

「けど聞こえるんだよ、本当に」

東堂つたらずいぶんしつこかった。こいつがもともと、嘘を言い立てる奴でないことは、秋世も知っている。しかしなぜ女子の声が聞こえるというのだろうか。隣の部屋はと考えて、はっとたどりつく。ああそうだ、隣は立村と羽飛の部屋だ。

「テレビ、消してみろよ」

「OK」

即、放映中のラストシーンをぶちんと切った。すでに雨はやんでいるらしく、かすかに薄青色の色が窓にさしてきていた。この調子だと雨は降らないですみそうだ。船もゆれずにすみそうだ。

「女子の声？」

「そう、女子だぜ女子」

「誰だろ？」

「さあ」

そりゃあそうだよな、わかるわけないよな。やっと頭のコンセントがつながり始め、秋世は上半身を起こした。まだだるさが抜けていないのは寝不足のせいだ。耳を済ませると空調のかすかな響きだけが聞こえるのみだった。

「東堂、今、聞こえたのかよ」

「いや、ちよつと前だ」

秋世が眠りほうけている間のことらしい。東堂も腕をぼりぼりかきながら、

「なんかなあ、しゃべってるんだよ。どういふことかわからんけど。ただ女子っぽい甲高い声でなあ」

「でもどうしてだよ」

「知らねえよ」

しかたない。寝ぼけ頭のまま、秋世は状況を把握することに努めた。

東堂の言う隣の部屋は立村と羽飛が寝泊りしている。修学旅行四日目は、気心知れた仲間がツインルームで泊まるというお約束となっていて、秋世は当然のように東堂と組んだ。同じことが立村と羽飛にもいえたようで、このあたりの組み合わせはあっさりと決まった。

もちろん真夜中、仲間同士一室で語り合うことも可能だろうし、見つかったら担任から一発二発殴られるだろうが、それほどでもない。なにせ男子同士。別にいいじゃないかと。秋世も東堂もそこまでエネルギーがなかったというのでやらなかったというそれだけだ。そうだ野郎同士だったらなんも問題がない。

しかし、東堂が言うには「女子の声」がしたという。

ホテル三階には男子、四階には女子と分けられているにもかかわらず、なぜなのだろうか。もちろん、恋する彼女がいるのならば夜這いもしたかろう、ふたりつきりで愛も語りたいだろう。しかし、教師たちの部屋をうまく通り越して部屋にもぐりこんだとしても、帰り、どうやって脱出するというのだろうか。明日の朝、青潟へ帰るための連絡船に乗りこむため、相当早い時刻に目を覚まさねばならないのだ。あと二時間くらいしたら、そろそろ準備をしないとまずいだろう。もし、その時に三階どこかの部屋から、女子の甲高い声が聞こえてきたりしたら、どう言い訳するのだろうか。秋世はそこまで危ない橋を渡る度胸がない。もし仮に彰子の部屋へ入り込むチャンスがあったとしても、朝までいっしょにいることはまずしないだろう。どんなに遅くても、どんなにすることとしても、万

難排して自分の部屋に戻るだろう。

それをしないで、なぜ、女子がいるのだろう？
いやそれ以前の問題だ。

「あの部屋、羽飛たちの部屋なんだろう？ 誰がいるんだよ、いるとしたら」

「清坂かあ？」

現在立村の彼女たる女子の名前を挙げた。可能性は、ある。

「ということは、立村と羽飛と、清坂さんとか、あるなあるなそれ」
もつと言うなら、羽飛と清坂とは幼馴染なのだ。ある年頃になると疎遠になりがちな幼馴染の関係とはよくある話だが、この二人にはそれが通用しない。羽飛いわく「たまたま女子が話の合う奴だっただけでなぜ、そんなことにこだわるんだ？」とのことだが、秋世からしたら単純明快、「幼馴染でかつ自分の大切な子」ただそれだけじゃないかと思う。なぜ、立村と親友づきあいしている羽飛が、宝物の清坂美里を提供しようと考えたのか、自分なりに答えは出ているけれども、秋世はそれを口に出す気もなかった。ただ、とばかりをくらった立村に、軽い痛みを覚えるだけだった。

ふたり、十秒ほど黙った。声は聞こえない。空耳ではないのか、と問いたい。

「空耳、なのか？」

「グラス持ってきて、耳に当ててみるか？」

洗面所のガラスコップをわざわざ持ってきて、底に耳を当てる東堂。

「やめとけよ、それ、盗聴罪に問われるぞ」

「じゃあ、お化けとか」

「のろわれるぞ」

今、お互い軽口をたたき合い、笑い話に落とし込もうとしているのが秋世の意思だ。頭の中ではそれなりに物事が整理されてゆき、もしかしたらこういうことなのでは、という答えが導き出されようとしているのだが、事実をそのまま決定付けてしまおうとあとあと面

倒なことになりそうでいやだった。決して秋世と羽飛という奴が、入学当時から犬猿の仲だったこととか、相手のしくじりに長じてけりを入れるような真似をする気もないという両方が理由だろうか。親友の親友が、親友であることはまずない。そういうものだ。

なんとなく気づいてくれたのだろうか。東堂がガラスコップの底を手の甲でたたきながら、

「せっかくここいらで、羽飛にぎゃふんと言わせるチャンスだと思わないのかねえ、規律委員長さま」

「そういうせい真似は俺、しないの、それが今年の規律委員会のモットーなのさ」

「そういうもんかねえ」

あつさり流して、しばらく首をひねっていた東堂だが、

「まあな、立村が巻き込まれてる可能性、大だもんな。あいつあれでも前科者だもんな」

「そういうこと」

意味の伝わる笑いを返した。「前科者」まさにその通り。立村が一年近く前、二年の宿泊研修時にしかした「バス脱走劇」は今でも記憶に新しい。同時に羽飛と清坂を通じて行われた立村へのきつい報復処置も。このあたりの事情についてはまた聞きでしかないし、ある程度は秋世の予想も含まれている。本当のことについてはおそらく把握しきれないだろう。

「どうすんだろうな、もしだぜ、もし清坂と立村、羽飛の三人で熱く語り合ってたりにしたら。まあ立村は停学か」

「下手したら退学かもな」

とはいえ、多分大丈夫だろうと見積もってもいた。なにせ青大附中にはかつて、「二股愛の王者」と呼ばれた人が在籍していたのだ。附属高校には進学しなかったものの、それでも青潟市の公立高校ではトップクラスと言われる青潟東高校に合格したつわものだ。小学六年の夏に初体験を済ませた後は、本能に走る生活だったとかでな

いとか。それでも無事三年間青大附中生活を勤め上げたのだ。まず、よつぽどのがない限り退学はないだろう。

「まあ、あの三人ならあることかもなつて感じかなあ」

「幼馴染と、彼女とか」

東堂はにこりともせず、しばらくだいたい色の灯りにガラスコップを透かした後、

「けどな、どっちにしてももしばれたら、しばらくは地獄だよな」

「まあなあ。来年以降の修学旅行は男女別行動を義務付けられるかもな」

俺たちには関係ないけれども、後輩たちが哀れなり。

秋世は横たわった。

「とりあえずさ、東堂先生よ。万が一、の時に備えての相談なんだけど」

裾をひっくり返したままで、

「どうするべきだと思う？」

「やっぱり、弾劾でしょうや」

青大附中の人間ならば、誰でも発想することを東堂は答えた。その通りだろう。東堂の言う通り、クラスの誰かが道を踏み外すようなことをしでかした時、必ずクラスの代表格に当たる奴が「弾劾裁判」を起こすのが陰の慣わしとなっていた。もちろん校則にも載っていないし、いわば非法な行為だ。学校側の処分がいまいだったこととか、教師たちがお目こぼししてごまかした出来事について生徒側が納得いかない場合は、とことんつるし上げるのが約束だった。幸い秋世は被告人席についたこともないし、自分自身で開くことを要求したことなんてあるわけがない。しかし、「こつそりと男女部屋でいいことしていた」……かどうかは定かでないにしてもだ……がクラスメート全員にばれたとしたら、知らぬ存ぜぬのだんまりでは済まされまい。先生たちの下す処分と共に、三年D組の弾劾裁判は行われるであろう。

「南雲としたら、やりたかあねえよなあ」

「まあな」

短く答える。

「羽飛だけだったらまだしもなあ」

「個人的感情で物事を判断してはいけないのであります」

わざときっぱり、答えてやる。

「けどさ、もし完璧にはれなかったとしたらだ」

秋世は天井を見上げたまま、明るい橙色のふたつみつと揺らいでいる灯を指差した。

「弾劾やる必要もねえんじゃないのかなあ」

「最初っからばれなかったら、ということか」

「そついうこと」

勘の鋭い友達に感謝だ。秋世はこれ以上、自分の考えていることを東堂に説明する必要がなくなった。答えがあつさりと返ってきた。

「最初っから、ばれないようにすりゃあいいいんだなあ」

「そゆことそゆこと」

さすが我が親友よ、人の心の痛みがやたらめつたらわかる奴よ。

秋世はもともと、人のしくじりを利用して甘い汁を吸いたいか、きっかけをつかんでのし上がりたいとか、そういう野心が薄い方だった。これは自分でも以前から自覚していたことだが、大人になって社長になりたいとか、スターになりたいとか、パイロットだとか、そついったトップクラスに進みたいという気持ちが沸かない性格だった。男子として、かなり珍しいタイプだと周りからは言われている。当然、成績も気持ちに比例して横ばい状態だが、まあ赤点を取らないだけいいじゃないかと開き直っている。

今回の「あわや女子が男子部屋に侵入か？」事件を耳にして、実際の状況を確認したとしても、それをチャンスにウマの合わない奴をつるしたくはなかった。できるならば、青大附中独特の悪風習「弾劾裁判」を消し去りたい、という気持ちすらある。かつて付き合ってきた女子関係のよしなも、幸いみな性格のいい子ばかりだった

こともあり、それほどの問題は起きなかったが、もしかしたら自分も足を踏み外していた可能性がある。彰子をもし、他クラスの女子がひどいやり方で攻め立てて登校拒否状態にしたとしたら……その時は規律委員の仮面を捨て去って、南雲秋世当人が直接殴りこみにいくだろう。直談判という奴だ。

ただ、百パーセントこの「弾劾裁判」という方式を否定しきれないのは、かつてかなりひどいやり方をして、クラスメイトを叩き落そうとしたある女子の存在が頭の片隅に残っているからだ。自分に付き合いをしつくかけてきて迷惑していると、他クラスの女子にうわさを撒き散らし、最終的にはその男子に対して精神的苦痛を与えたという、一年三学期のある事件だ。その時対処したのは秋世ではなく別の男子だった。だが、言われもない「女つたらし」伝説を撒き散らされた奴の気持ちを慮れば、本来ならば情報を得た秋世の方から、規律委員の名を持って弾劾裁判を要求すべきだったのでは、と今は思う。

いや、そんなことはどうでもいい。

今、隣の部屋で三人語らっているのを無理やり引っぱがして、弾劾裁判まで持つていく必要はないような気がした。人様のことだ、どうでもいい。むしろ将来後輩たちが、余計な規則でがんじがらめにならないよう、ばれないように対処を行う方がいいのではというのが、秋世の判断だった。

もちろん、隣の部屋のうち、一人が三年D組内での天敵・羽飛貴史というのもひっかからないわけではない。これをネタにちょこちよこつついてやるのも、ひとつの手だろう。しかし、そんなことしたって個人的嫌がらせに終わるだけだろう。目的もないのに相手をつるすのは、あまり意味がないし、面倒だし、自分の手も心も傷だらけになるだけだ。

「けどさ、なんもやってねえかなあ」

ぼそりと、東堂が親指を立てて言う。秋世も今度は両手の親指を立てて答える。

「やってたらさあ、お前、廊下いっぱいにあの声が響き渡るぜ」

「うわあ、相当なもんか？」

「あたりまえだろ。それも、言っちゃあなんだが三人でだったら」
怪しい想像をしつつも、絶対そんなことありえないと断言している自分がいた。

少なくとも、立村がそんなこと、できるわけがない。

デジタルクロックの蛍光緑色が光っている。一応目覚まし用にセツトしておいたのだが、すっかり寝坊してしまうとも限らない。ばあちゃんの教えもあって、秋世は旅行用時計を枕もとに用意していた。手のひらに隠れるくらいの大きさが、音がけたたましい。「くそするせえ時計」とは、東堂のお言葉である。

「もっかい時計セツトしておいてだな、俺、もっかい寝ていいか？」
「OK、一時間後にグットラック」

やっぱり、睡眠欲には負ける。枕もとに東堂はガラスカップを置いて、ごろんと秋世のベッドにもぐりこんだ。こちらの方が第三者的に見ると、誤解を招く光景だとは思うのだが。秋世もしかたなく、東堂のでかい顔を避けるようにして、寝返りを打った。

夜這いかあ。りっちゃん、体力あるよなあ。

東堂は一分も立たない間に鼻いっぱいのいびきをかきはじめた。これをやられると寝るわけにはいかない。秋世もいやおうなしに物を考えることとなる。

けどさ、ありえねえよ。りっちゃんに限ってさ。

羽飛と清坂は幼馴染同士、家族旅行もいっしょだと言う噂を聞いている。はんばでない仲良しでありながら、なぜ付き合わないのか？あまりにも近すぎるからという説もないわけではないが、一番の理由は「清坂が羽飛にやきもちを妬かせるため」だという。本当かどうかは定かではないし、別に聞くつもりもない。ただ、清坂の彼氏が立村であり、いろいろありながらも一年以上恋愛のお付き合い合

いをしているのは確かなのだから、そのあたりには関心がある。

りっちゃん、本当はどうなんだろうな。

なにが、どうなのか。

立村の恋愛事情も、本人の口から聞いた限りよくわからないものだった。たぶん一番理解していないのは、本人ではないだろうか。たまたま清坂に付き合いをかけられて、恋愛未経験の立村は「友情の証」として受けたという、それだけのことだ。だったら本気の子と出会った段階でご清算になっても不思議はないのだが、いまだに続いているのは、

本当に好きな子、いないのかなあ。

この一言に尽きるだろう。

いや、厳密に言くと、いないわけではない。

このあたりも秋世はかなり鋭く観ているつもりだ。

四日目の夕食前、たまたまホテル内のみやげ物売り場コーナーで、立村は他クラスの女子と二人、大きな手鏡をいじっていた。浮気相手ではないらしいということだけ確認して、さっさと通り過ぎようとした秋世だったが、その時立村の発した言葉、

「あのさ、これ絶対、杉本の好みだよ。あまりうるさい柄、苦手なんだよ、それとさ、お菓子もたぶんんだけど、こだわったものではないと杉本、おいしいなんて言わないよ。だから絶対これがいいと俺は思う。これにしようよ。なんとかさん」

「なんとかさん」のところには、いつしよにいた他女子の名前が入る。顔ももう覚えていない。「なんとかさん」は抵抗したさそうに首を振って、もっとピンクピンクしたファンシー小物を指差していたが、結局立村が「いや、これの方が絶対いい！これにしようよ。もしあれなら俺一人で買うよ」と押し通してしまった。押しの弱い評議委員長として有名な立村が、どうしてこうも意地になって地味な和風手鏡（大）を購入したのか？面白い見ものではあったけれども、そこにすべての答えが表記されていて、しばらくは提出される予定もないことを理解するには時間がかかった。

だからさ、りっちゃん、言ってしまえばいいのにさ、清坂さんにさ。

「友だち」なんだろう？ それだけなんだろう？

何度も、それこそ数限りなく口元にこぼれかけた言葉だった。

秋世だけではない、他のクラス女子たちも同じことを考えている様子だった。それこそ二年の六月に立村が清坂と付き合い始めてからは、

「なんで清坂さん、立村なんかと付き合いたがったんだろうねえ」

「あんなじめつとした男子、私だったら即、けり、だけどね」

「きつと、羽飛にやきもち妬かせたいんだよねきつと」

女子たちの意見とは若干違う。立村擁護の寄りで言わせていただけでなく、秋世も思う。

りっちゃんに、清坂さんは、合わないってさ。

だってさ、りっちゃん、清坂さんに一人で、みやげ物、選べるか？

これも噂だが、立村は去年のクリスマスに「ちりめんのハンカチーフ」らしきものをプレゼントしたという。かなり高額なものだったという。しかしながら、色がモスグリーンでかつ、地味な花模様が星模様が金粉で施されているものだという。きつと、どこぞの老舗でご用意したものなのだろう。けど、そこに深いものは感じない。真っ赤なギンガムチェックのワンピースか、キュートスタイルの膝丈スカートにしゃきつとしたブラウスを合わせ、銀色のヘアバンドでまとめるという感じの清坂さんのため、選んだとは言えない。

むしろさ、あの手鏡の方が、ずっとずっと、意味あるよ。

値段はちりめんのなんたらよりもずっと安いかもしれない。けど、ちゃんと、「だれだれのために」という意思がある。果たして相手にそこまで読み取ってもらえるかわからないが、たぶん立村は渡すことだけで満足するんじゃないだろうか。そう、秋世が自由時間の合間を見計らって、真っ赤な色付きリップクリームを購入した時のように。

彰子さんには、俺と一緒にの時だけ使うようにって、念押しとなくちやな。

祖母にも言われていた。「歳を取ってもね、女の子は口紅を忘れないものなのよ」

校則違反だし、他人さまの目の前でこの色っぽいふわふわ唇をさらけ出させるわけにはいかない。規律委員としてそれは注意しなくてはならない。ちゃんと、プライベートタイムにだけ、のお約束だ。

彰子さん、どう思うかなあ。

菱本先生の言葉で彰子の状況がそれほど心配すべきものではないとわかっただけに、今橙色の灯りの下、彰子を夢見るのは楽しかった。朝の、面倒な処理の問題なんてどうでもよかった。

「あきよくん、ありがとう！」って、それからすぐ塗ってさ、それからすぐさ。

妄想が走ると同時に、すたと眠りにおちた。

耳たぶをひっぱりあげられるようなベルの音が響いたのは、意識からいくとだいたい五分後だった。時計の針およびデジタル文字は「五時半」を指していたが、たぶん眠りに吸い取られたあとなんだろう。血迷って東堂がドラキュラになった跡もない。秋世はそっと目をこすった。東堂の姿は隣になく、少し安心した。人それぞれとはいえ、今のところ秋世には男子に性的興味が沸かない。

「おい、東堂？」

声をかけてみる。いない。

「東堂、朝のお通じか？」

返事なし。しかしかすかに人氣がユニットバスの方からする。スリッパのする音だろうか。秋世も近づいてみた。ノックを試みた。もし朝の快便中だったらそれは失礼、なのだがそれだったら返事くらいするだろう。ノックが二回、帰ってくると同時にドアがきゅうと引かれた。東堂が反対の手で戸を開けて、もう片方の手でコップの口を壁にくっつけ、底の方に耳をぺったりくっつけていた。

秋世の方をちらりと覗き込み、くそまじめな顔でもって、

「やばいぞあいつら」

「盗聴かよお前」

「しゃれじゃないぞ、本当にまずい、これやらかしたら四人退学だぞ」

「はあ？」

東堂の顔は決してふざけていない。そのあたりの呼吸も秋世にはいつも伝わっているはずだ。非常事態か、と確認しようとする前に、東堂はつぶやいた。

「隣にいるの、古川だわあ、我がクラスの誇る、下ネタ女王様」

「古川？」

まったく意識の範疇外、名前が頭に入ってこない。

「今、羽飛としゃべってる」

「立村は？」

頭に張り付いている一人の名前を秋世は尋ねた。東堂は黙って首を振り、

「今、女子の部屋にいるんだと」

女子の部屋にりっちゃんが？

盗み聞きの良し悪しの問題ではなかった。秋世の頭の中で組み合わさるはずのジクソーパズルが一気に落っこちてばらになった。隣にいるのが羽飛、清坂、立村の三つ巴だったら絶対にありえないことが、二人つきりという設定になるとまったく別の話になってきてしまう。もし、自分だったら、もし、彰子の部屋に自分がいたら、「南雲、まさかと思うがな」

東堂の言葉がとどめだった。

「俺、同じ状況下だったら、絶対最後まで終わらせてるよな。だろ？」

かもしれない。

振り返った先のベッドには、誰もいなかった。それが今の、秋世の

現状だった。

第一部 7

けど、りっちゃん、好きでもない子に、やれるかなあ。いや、俺も、そういう人に、まあなあ。

三年D組の下ネタ女王・古川こずえといえば、とにかく明朗活発かつ口も達者、腰も軽くひよこひよこクラス内で動き回るので、大変目立つ存在ではあった。立村の恋人である清坂美里とも親友同士、その係わり合いで羽飛ともよくしゃべる仲でもある。もっと言えば二年の頃は同じ班仲間だったし、秋世の隣席でもあった。なんと言えはいいか、とにかくスケベ話の引き出しはたくさん持っている女子だった。「ねえ、彰子ちゃんを押し倒したりなんか、してないよねえ、南雲」と、からかい口調ではなくまじめな顔して問い詰められた時には、秋世としても複雑な気持ちを抱えざるを得なかった。もちろん「規律委員たるもの、自分の本能を抑えられねえでどうしますって、古川の姐さん」と返したけれどもだ。同じようなネタを毎朝立村に振っている様子を覗き見ると、秋世としてはいつも笑いをこらえるのがしんどくなる。

「立村、あんたのために言うんだけどさ、どこか婦人服関連の店にアルバイトに行ったほうがいいと思うんだよねえ」

「なんだよそれ」

「だって覚えられるじゃないの、女子の服の脱がせ方。本条先輩があんたに手取り足取り教えるわけじゃないでしょうが」

あきれ顔で立村が、ため息をつきながら、

「そんなの習ってどうするんだよ」

「だってさ、いざ本番となつて、どこからはずせばいいのかわからないうちにおつたつてしまつてはにくつたら、あんたどうするの。あんたの性格上、前もつて予習すべきところはしておかないと、実戦でしくじるでしょ。そういうところがあんた、ガキなのよねえ」

「余計なお世話だ」

たいていの場合立村の方が強引に話を打ち切り、唇をかみ締めるような格好で頬杖をつく。古川に背を向けたまま、誰か別の奴に声をかけようとするのだが、そのあたりのいかにも照れ隠し、というのがいつも見え見えで、たいてい別の形でからかわれるはめになる。哀れなり。

もつとも、古川からしたら立村よりも羽飛の方がいい男に見えるらしく、毎年バレンタインデーにチョコレートをプレゼントする姿もまた年中行事だ。秋世からしたら、何好んで最初から相手にしてくれない奴にしつこくアプローチしなくてもな、と思うのだがその辺は女子の気持ちゆえ触れないことにしておく。

下ネタ好きでありながら実は結構純情な、この古川こずえという女子、男子の認識としては仲間意識をもちたくなる相手である。秋世もクラスの女子ではかなり仲良く話すタイプのひとりだろう。少なくとも清坂美里よりはまだネタが尽きないですむ。しかし、「下ネタ女王」の定めということもあって、どうしても避けられないのは「女子ではあるが、女には観られない」という一点にあるだろう。「ねえ、朝一番、しっかり抜いてきた？」と挨拶代わりに声かけてくる女子に対して、恋愛感情を持つことは正直、不可能だろう。これは男子たち共通の認識である。かわいそうだが、羽飛も男子である以上、おそらくそうだろう。

もつとネタを一般的女子の話題に絞込めば、顔立ちや愛嬌あるタイプなんだから、それなりのファンがついてくるだろうに、もったいないものだ。

古川こずえに関する秋世の認識は、その程度だった。

東堂をまずバスルームから引つ張り出し、秋世はもう一度ベッドに座らせた。自分は立ったまま、両手を懐に入れ、腕を組んだ。

「すべての情報をさらけ出してほしいんだけど」

「ああ」

言葉を選ぶようにして、東堂は両膝に手を置いた。

「つまり、羽飛と立村、清坂と古川が共謀してだ、男女カップルになるよう入れ替わったって話らしいんだ。かいつまんで言っちゃまうと」

「男女カップル？」

「だいたい話の内容が見えてきた。そうか、でもどうしてだ？」

「その辺も良くわからねえけどさ、とにかく今、隣の部屋には古川と羽飛がいて、女子部屋には立村と清坂がいるらしい。それで今、お隣さんたちがどうやってもう一回入れ替わりを行うかを、真剣に討議していた最中だったんだ」

「どんな風に？」

「俺もあんまり詳しく聞いてねえよ」

ガラスコップを耳にくつつけて聞いている程度の音声では、具体的情報を得るのは難しいのだろうか。歯がゆくなる。外の朝日がだんだん橙色に染まってきて、窓辺のふちを照らしている。もうだいぶ、日が昇ったというわけだ。さわやかな朝、ラジオ体操を第二までやってしまいたくなるような天気だつていうのに、なんともまあ、ねちねちした話である。

「とにかく、じゃあ今の今も、あいつらツーショットなわけか？」

「そういうことだと思う。けど、どうやってあいつら、入れ替わったんだ？」

「聞いてみねえとわからねえよ」

秋世なりにだいたい状況は把握した。おそらく最初の段階で秋世が考えていたものとは、まったく異なる展開を迎えていたというわけだ。男：女＝2：1ではなく、純粋な一対一となったら、あとは本能と理性との相克に任せるしかない。もし秋世が同じ状況下で東

堂と入れ替わりを行い……まあ、東堂が入れ替わりを了解してくれるとしたら、例の後輩女子のみだろうが……彰子とふたりきりになったとしたら、果たして何をしていただろうか。東堂がいみじくも口走った通り、「何もしねえなんてことはねえ」だろうと思う。そつと手を触れたり、投げキッスをしたり、偶然に任せて背中から抱きしめてみたり、その程度のことはこの一年間でなんとか達成した。中学三年の男女交際レベルとしては、まあまあのところだろう。水菜さんとの関係以上のことをまだ求めるには早すぎる。決して先生たちのわめく「健全なお付き合い」という観点からではない。彰子がまだ、目覚めていないから、その一言につきる。もし彰子があれば、拍子で「もつと進んでいいよ、あきよくん」と微笑んでくれたら、もうその段階で秋世は理性なんてあの世におっぱり出すだろう。それが男子というものだ。女子たちにはそんな本性をちらとも見せるつもりなんてないが、所詮青大附中のアイドルも男だってことだ。

「さあて、困ったぞ」

秋世は立ったまま、天井を見上げた。たぶん上の階に、もう一組のカップルが眠れぬ夜を過ごしていたはずだ。

「どうやって脱出するんだろうなあ」

「そうだよな、それが問題だ」

東堂も大きく頷いた。これがもし、相当女つたらしで知られる奴とか、とことん嫌われ尽くしている相手とかだったら、とことんたたきのめすチャンスにするんだろうが、それができないししたくないのだ。果たして立村がどうして退学すれすれの「不純男女交遊」いや「男女同衾」を狙ったのか、そのあたりは理解できないように理解できる。あいつだって男だ。純粹に、彼女とふたりつきりで何かをしたい、と思うのは男子として共通の認識だ。同時に親友の羽飛と古川が組めば、お互いふたりつきりの時を得ることなんて簡単だろう。どうやって脱出したのか、女子部屋ではばれてないのか、そのあたりはまったく見当つかないけれども、おそらくなにかの偶然が味方したのだろうということにしておく。

「退学には、したくねえよなあ」

「うん、そうなんだよな、そこところが最大の問題なんだわ、東堂先生」

秋世も東堂に頷いて見せた。

「どうやってばれないようにするか、ってとこさな」

「一番難しい問題できたよなあ」

本当に、よりによって最終日にこんな問題が飛んでくるとは、だ。もしも男女比2：1の状況だとしたら、秋世はまず立村あてに電話をかけ、「お前らはすでに包囲されている、あきらめて出て来い」みたいなことを呼びかけ、それから相談するだろう。羽飛をはさんでいるというのは面倒だが、それでも立村の言うことはちゃんと聞くだろう。評議委員長と規律委員長の相談ならば、序列の勝利。うまくいく。

しかし、現段階において、立村が隣にいないとなると話は違ってくる。

まず犬猿の仲たる羽飛との話し合いがうまくいくわけないだろう。秋世は自分なりに譲歩して話をするつもりだけれども、どうも羽飛の方がやたらとつかつかつてくる傾向にある。以前立村のしでかした一件がもとで、羽飛が殴る寸前まで攻め立てていたことがあった。いつもならば秋世も知らん顔しているのだけれども、暴力沙汰になるのはやはり避けたくてしかたなく、割って入った。いや、たいしたことをしたわけではない。奴の隠された感情みたいなものを、さりげなくささやいてやったに過ぎない。清坂に対する独占欲みたいなものを、立村にからめてぶつけているだけじゃないのか、と耳元に残した程度のものだ。それでもかなり奴は荒れまくっていたところみると、凶星だったのだろう。

秋世側が冷静に対処しても、エキサイトした羽飛との会話が成り立つとは思えない。

ことに、あいつの最愛なる幼馴染が絡んでいるとなれば、なおさ

らだ。

一応彼氏の立村以上に羽飛は、清坂美里に対してこだわりつつけている。あれが男女の友情だとしたら、いったい本当の意味での恋愛とはどういうものなのか、ずっと秋世は問い掛けてしまいたくなる。あれはどう見たって、「愛」だろう。

しかしそんな「お前の清坂に対して感情は愛だろう！」と議論するひまなんて、まったくくない。へたしたらあと一時間も経たないうちに廊下には男子女子があふれ、七時半集合のロビーに集まらねばならなくなる。ずっと部屋にこもっているわけにもいかないだろう。エレベーターを使わないわけにもいかないだろう。さてどうする？ どうやって人目につかないように脱出する？ 立村も、恋人の清坂……秋世の疑問は胸に秘めておく……と二人きりのところを観られたら実際はとにかく、何をしていたか散々突っ込まれてもしかたないだろう。いや、もしかしたら、ほんの少し、はあったかもしれない。その後始末、果たしてできるだろうか？ 秋世でももし、彰子と、ふたりきりだとしたら？ 部屋を掃除し、いかにもという小物類……もちろんそういうことをしたかどうかにかかっているが……や髪の毛が落ちてないかを確認するだろう。口裏合わせももちろんきっちりやるだろう。はたしてあの四人がそこまで考えているかどうか？ もしくは始末できるかどうか？ 秋世にはまったく想像がつかない。

まずは、ぎりぎりまで様子見だな。

秋世は東堂の隣に座った。大きくため息をついた後、枕もとの折りたたみ時計にねころがる格好で手を伸ばした。

「鳴る前にしまっとくか」

「はあ？」

「とにかく、あいつらも馬鹿じゃねえだろうから、様子見だ」

「様子見たってあたどうすんの」

「あいつらだって、ばれたくないだろうから、それなりになんかす

るだろうよ」

そう思ってもらわないと、まずい。羽飛と古川、清坂はとにかく立村ならばとにかくきりぎり、何か手を打とうとするはずだ。それをサポートするのが、今の秋世にとって一番ベストなような気がした。同時に隣の東堂の肩に腕を回した。ホモと言われてもしかたない。

「あのさ、東堂先生」

「わかってるって、隠せてことだろ」

「ちゃんとわかってやんの」

「あたりめえだろ」

東堂は秋世と羽飛がうまくいっていないことを知っている。同時に立村となぜか共感していることも気づいているはずだ。特別「俺たち親友だろ！」みたいな女子っぽいりとは関係ないのに、すべてを理解し、すべてを飲み下してくれているところがある。女子とふらふらいちやいちゃしていると思われる、二年前の秋世から最近の「彰子さん命！」の秋世まで、どちらとも友だちでいてくれる稀有な存在だ。

「俺はどうすりゃいいの」

「どうもしなくていいよお、ただ、知らん振りしてくれりゃあいいの」

「知らん振り、ねえ」

だいぶ外も日差しが増してきた。ベッドにくっついていたいが無練を断ち切り腰を上げた。立ち上がり、勢いよくカーテンを開けた。少し低めの位置に見える向かいのビルには、まだ人氣がまったくなかった。車が一台つつと通り抜け、いっしょに新聞配達らしき自転車車が追いかけていくのが見えた。そういう時間だ。秋世は窓辺を眺めながら、まだ腰掛けたままの東堂に説明した。

「おとなりさんは正直さ、どうだっていいの。お互い自分らで始末できるっしょ。でもさ、りっちゃんはどうかなあ、かなりあぶなっかしいって気がするんだよなあ。第一、普通のデートだって慣れて

ない奴なんだぜ」

「でも一夜いたら、することはしてるかも」

「かもな。けどちゃんと後始末できるかどうかってあぶねえよ。俺さ、一応これでも規律委員だし、うちのクラスから退学者だしたくねえの」

「規律委員」なんて似合わない言葉だろう。

これからシャワー浴びて髪のマブローして、しっかり決めて出発しようと思っているのにだ。こんな奴が規律委員やっている青大附中、たぶんどこか間違っていると思われるかもしれないだろう。秋世は続けた。

「だからさ、これから東堂に頼みたいのは、このことを一切内密にしてもらってことだけなんだ。無事に終わったらその後、学食のかつ丼定食おごらせるとか、何かしてもらうことでやらにしてもいいしさ。けど、将来の後輩たちが必要な締め付けでめげないために、なんとかこの件は穩便に済ませたいってとこ。俺はそう思ってるけど、問題は他の奴らだよな。他の連中がどう思っているかにもよるからな」

「まあな」

「だから、これからの予定はさ」

秋世はまずシャワーを浴びて、時間のかかりそうなヘアブローに専念することにした。かばんから無香料のブロー剤と愛用のドライヤーを取り出し、ついでに下着類もタオルにくるんと混ぜた。

「俺、まずは最後まで部屋に残って様子みるわ、そこんところよろしく」

「オーライ。それにしてもお前、また風呂入るのかよ」

風呂じゃない、シャワーだっていうのに。男のおしゃれに関するこだわり、東堂とは共通しないらしい。

風呂場の防音は思ったよりも利いていない。東堂が盗み聞きできた状態というのも、シャワー浴びながらだいたい見当がついた。た

ぶん、自然と耳に入ったのだろう。東堂を「やーい盗聴魔！」と責めるわけにはいかなかった。秋世なりにこれからのことを考えるには、ちょうどいい時間帯だった。

まずは、あいつらが外に出るか出ないかを確認した上で、俺が最後に部屋を出る、と。

その後で四階を覗いてみて、りっちゃんがいるかどうかを確認だな。

とりあえず思いつく案とすればこの程度だった。たっぷりシャワーソープをあわ立てて、汗臭さのない女子受け満点な状態に保つ。髪の毛ももちろん丁寧に洗い上げる。このあたり、女子よりもヘアケア、スキンケアに命を賭けているのではと自分でも思う。

きわめて優等生的発想で彼、彼女たちの行動をサポートし、何事もなかったかのように第五日目の行動を開始する。これがベストだ。ベストのはずだった。

けどさ、どうなんだろうな、りっちゃん、ほんとなんもしてないのかな。

東堂にも話した通り、秋世は彼、彼女らが旅行中のいわゆる「不純異性交遊」をやらかしたとは思っていなかった。少なくとも羽飛、古川に関してはとてもだが想像しがたい。下ネタ好きなキャラクタ―は実をいうとカモフラージュなんだということくらい、ある程度女子と付き合った経験のある秋世には手に取るようにわかる。そういう風にして興味本位の男子連中を遠ざけている嫌いがなきにしもあらず。同時に友だちづきあいのみにとどめてしまい、恋愛沙汰には発展しないよう無意識のうちにコントロールしている。そういうところが古川こずえには感じられる。そういう子がだ。いくら「どう？ 立ってる？ びんびんしてる？」とか言いながらも、自分から迫って唇を差し出しながらあるとは思えなかった。あるとしたら羽飛が理性失って押し倒すくらいだろうが、そういうことがあればもつとこの部屋にもうるさく物音が響いているはずだ。東堂だって即、秋世をたたき起こしたはずだ。

しかし、真上にいるらしい、立村と清坂とは？

絶対やりそうにないって気、するけどな。

秋世の知っている立村だったら決して手を出したりしないだろう。もちろん友だちとして思うにだ。でも、秋世自身が彰子を目の前に同じシチュエーションに相成った場合どうするか？ と考えると優等生的発想では納まらないだろう。これは東堂も同じだろう。誰もそうだが、理性と本能の相克からは逃れられないはずだ。

古川と羽飛は単純に友だちだが、立村と清坂は一応公認の彼氏彼女だ。

もしかしたら、手を握り合い、キスくらい軽くしたかもしれない。いや、それだったらそれでいい。秋世だってそのあたりは経験済みだ。唇を一度二度重ねた程度で、愛が深まるなんていう幻想は、女子だけのものかと言いたい。自分にとってキスをするということは、愛の証ではなく、ただ性的排泄の欲求を満たすだけのものだ。たとえ立村が清坂をたいして好きでないとしても、性的排泄の欲求に駆られてしまったらそのくらいしても不思議ではない。

でも、それ以上のことは？

普段の立村を知っていれば決してありえないことだけど、でも、本当にどうなるかわからない。このあたりは秋世も断言できない。それこそ隣の部屋にいて、本当にそういう物音を聞き取ることのできる場所だったら、秋世も「ほーら音なんてしてねえじゃん、やってねえよ」と一笑に伏すことができるのだが、それができない未知の部屋である以上、しかたがない。玉虫色の想像に任せるしかない。

けど、りっちゃん、好きでもない子に、やれるかなあ。

いや、俺も、そういう人に、まあなあ。

水菜さんのことが思い出される。そうだ、水菜さんとは、キスと、それ以上のことを途中までした記憶が残っている。その時どういう気持ちだったか、どういう感情が残っていたかなんて、正直覚えていない。身体の自然な反応が心地よく、でもこれ以上進んでし

まうのがどこか恐ろしいと思えて、自分からやめたはずだった。その時の水菜さんがどう思ったのか、そこまでは考えなかった。考えたらまた、別のことに心が揺らぎそうだったからだった。彰子を知るまでの自分が、いかに本能に任せた行動ばかり取っていたのか。また彰子を恋人にしてからの自分が、ちゃんと物事の考えられる大人の感覚を持っていたことを知ったこと。自分には、確かに物事を感じ、人の心を思いやる能力が隠れていたのだと、初めて気づいた。彰子さんに対しての俺だったらともかくさ、りっちゃんがなあ。

人様のことをあまりとやかく言ってもしょうがない。秋世なりに最善をつくすのみだ。秋世はすばやくワイシャツに着替えて髪の毛のブローに取り掛かった。前髪をさっぱりした感じで根元だけ上げ、少し光りを持たせるように弱い風で乾かした。

第一部 8

なんでシャワー浴びてたってわけなんだ？ やった後なら、やはり、浴びるだろうな。

世の中の出来事は、予測できないことの方が少ないんじゃないか、というのが秋世の経験則だった。確かに想像できないこととか、自分ではどうしようもないことも起こるけど、自分がまあなんとかなさ、と割り切っておけばほんと、なんとかなることの方が多かった。記憶のはるかかなたとはいえ、小さい頃大病を患い入院していた時だって、結果としては生きてこれたわけだし、ぜんぜん勉強なんてしなかったのにいつのまにか青大附中に合格してしまったり、一番服装違反しまくりそんな自分がなぜか規律委員長の任を受けたり。信じられないこともあるけれど、自分が「まあなんとかなるさ！ 悪いようにはならないさ！」と決め付けて行動すれば、たぶんうまくいく。

だから、最後の最後に隣の部屋から古川こずえが血相変えてエレベーターに駆け込んでいったのを見送った時も、それほどあせりはなかった。ドアを細く開けて、古川の姿が角のエレベーターに乗り込んだ段階で、秋世はゆっくりと荷物を抱えた。そっと足音立てないように……別に立てたの見られても困らないけれども……昇り方面ボタンを押した。

予定としては、たぶんこんなもんだらう。

フェリーに乗り込めないくらい遅くなるんだったらまずいけれども、他の連中から聞いた限りだとかかなり余裕を持って時間は組まれ

ているらしい。そういえば彰子に乗せたあの日の丸カーは無事、青
潟に到着したのだろうか。

青潟についたらすぐ、彰子さんに連絡せねばな。

改めて誓う。

なんとかなるさ、悪いようにはならないさ、秋世の、そして彰子
の考え方。

彰子さんは笑ってたしな、菱本先生も心配ないって言ってた
しな。

たぶん、大丈夫だろう。秋世は少し重たくなりかけのまぶたを軽
くつまんだ。眠気覚ましにはよく効くのだ。本当はモーニングコー
ヒーを一杯、ゆっくりといただきたいところだがそんな冗談口走る
余裕も本当はない。頭を軽く振って秋世は、まず目下の問題を片付
けることに専念した。

そうだ、ひとりで片付けるのに、骨な奴が約一名、いるわけだし。
一度一階まで降りた後、また三階に昇ってくるエレベーター。も
しもその前に通り過ぎたエレベーターに乗っていたとしたら、もう
立村は無事集合場所へ到着したはずだ。だったらラッキーだろう。
もちろん。無理に秋世が心配することもない。

けど、やっぱり、念には念を入れてだな。

秋世の性格上、怪しいと思ったことはきちんと調べておかないと
気がすまない。

たとえ自分の胸の内に収める覚悟だったとしてもだ。

りっちゃんが、ちゃんとして脱出できたかくらいは確認してお
かないとな。

三階、止まった。昇りのエレベーター内には背広姿の男性がい
つしよに乗り込んでいた。まだ朝早いのに、ずいぶんなことだ。大
人になるってこういうことなんだろう、きっと。秋世は四階の丸い
ボタンを押した。後ろでえへんと咳払いの声がした。思いつきりむ
かっていたんだろう。さっさと上の階に戻りたいのに、中学生ごとき
に割り込まれて頭にきたんだろう。

秋世は四階に下りた。すでに四階女子たちの姿はまったく見えず、観るからに静かな状態のように思えた。ところどころ扉が開いていて、ベッドのカバーが入り口の大きなごみ箱みたいなものに放り込まれていた。係の女性らしき人たちのしわざである。

こりゃあ、まずいぞ、おいおい。

男子なのに秋世がうるついてもそれほど違和感を感じなかったらしく、無言で過ぎた。

清坂さんの部屋ってどこだったっけ？

かばんの中から旅行のしおりを取り出してもいいが、時間がもったいない。

だいたい見当をつけて往復した後、気配がなければ降りるつもりだった。

一番奥の部屋手前、ちょうどそのあたりの扉がかすかに開いたのを、秋世は見逃さなかった。内側に開くようになっていた扉の前で秋世は立ち止まった。隙間から覗き込んでいる、見慣れた同級生の顔を見つめた。目と目が合った。

あらら、りっちゃん、やっぱりここかよ。

瞬時に秋世は、足を踏み出しかけ動けず立ちすくんでいる立村に、さわやかな「いい奴スマイル」をプレゼントすることにした。

「りっちゃん、お迎えだよ、さ、行こうよ」

どうしようもなくばつが悪いだろう。わかるわかる。

でもここで何も無い顔して無視するわけには、残念ながらいかない。

「そろそろこの部屋もさ、掃除のおばさんたちが来て、覗きに来るよ。早いとこ行こうよ。どうせ俺たちしかこのあたり、いないみたいだしね」

言葉が出ないのは、完璧動揺している証拠だ。やっぱり、非常事態において立村の性格はマイナスに働くことがよくわかった。しょうがない。秋世は扉のノブを握り、ぐいと押し開けた。覗き込んだ

部屋の中は、少し空気が水っぱかった。しけている、といった方が近いだろうか。同時にシャワーソープの香りがかすかにした。なんだ？と眺めていたらその香りの発信源がすぐに見て取れた。立村の奴、後ろの髪の毛が思いつきりはねている。前髪がぬれて固まっていた。制服はほとんどしわのない状態でしっかり着こなしているけれども、襟元と袖がかなり、ぬれてしみになっていた。

さては、もしかして。

男子にしては色白さんで、かつほっそりした身体つきの立村は、見た目ちよつとボーイッシュな女の子のように見える。もちろん女っぽいというわけではなく、歌舞伎の女方がプライベートを過ごしていたらこんな感じかな、という程度の雰囲気だが。顔立ちも目元がひとえに見えて実はしつかり二重で、やたらと瞳がらんらんとしているところとか。それ以外がみな、がりがりと絞りこまれているような体格の持ち主だから、たぶん男らしいという雰囲気はあまり感じられないだろう。女子たちから人気がないのは、そのあたりに原因があるのではないかと秋世は思っている。話してみれば、内気ではあるけれども自分の考え方をしつかり持っていて、ちよつとやさつとではゆれない芯を持っている、少し意地っ張りな奴だとわかるのにだ。外見で損をしている奴の典型かもしれない。

今だって、本当は秋世に何か言いたくてならないのだろう。薄い唇をかみながら、目をうるうるさせている。そこところが面白いので、秋世はじつと立村の瞳を覗き込んでやる。

「りつちゃん、もしかしてさ、さっきまでシャワー浴びてた？」

「え？　なんで」

すっかり秋世の手の内に入ったも同然だ。男のおしゃれに関して悪いが自分の方がずっと先輩だ。足元の荷物はしつかりまとめられている。たぶん、秋世のようにしつかりと無香料のムースとか、そういうおしゃれ品は持ってこなかっただろう。

秋世はまず、自分の茶色いかばんの脇に押し込んだはずの、無香料ムースを取り出した。結構潮風で髪形セットしたのが壊れてしま

い、トイレで手直しする時のために必需品だった。まだまだ残っている。チューブごと手渡した。

「髪の毛がさ、思いつきり後ろ、はねてるんだけど」

「はねてる？」

「うん、これ使って早く直せばいいじゃん。においしないよ。無香料だし」

秋世は自分が普段使っている時のように、手にとる真似をして手ぐしで髪の毛をいじって見せた。完全に凍り付いている立村が手を明らかに震わせながら、チューブから透明なジェルを手のひらにのせ、後ろの髪の毛に塗ったくっっている様子は、実に笑えた。

ほんとはそんなに無理して寝癖直さなくていいんだけども。

なんかわからないが、立村を見ていると秋世のからかい虫が目を覚ましてしまう。

決して悪意なんて食いたくない虫だけど、ちょっとつついてやりたくなる。

「OK、じゃ、行こうか」

「なぐちゃん、あのさ」

何かを言いかけジェルをそのまま差し出した立村。もうそろそろ移動しないと、今度こそほんとにお掃除の人に発見されてしまう。

秋世なりに時間配分と集合時間ぎりぎりの読みはしているのだから、立村の言い訳をここで聞く余裕はないってことくらいわかっている。もちろん聞きたくないわけなんて、ないのだが。

「話はあとで、船の中で、たっぷりと」

楽しみは、あとあとにとっておこう。まずは無事に片付きそうだし、なんとかなるさ。

秋世は立村の黒いかばんの柄をひっぱり、廊下まで引っ張り出した。べたついたのだろう、指をまだ髪の毛にからませている立村。髪形はいつもと違って、若干シャープな雰囲気に見える。もともとおぼっちゃん雰囲気の立村にしては、イメージチェンジ成功ってところだろうか。また、からかい虫がけけ、と笑い出すのを感じる。

「それにしてもさ、なんでシャワー浴びてたの？」

自分で言いかけて、あっと飲み込んだ。

おちゃらけ気分が一瞬、ふうつと消えた。

シャワー、なんで浴びてた？ りっちゃん？

朝一番にすつきりシャワーを浴びたいと考えるような奴は、秋世以外男子でいるとは思えなかった。女子だってそうたくさんはいないだろう。そんなことするくらいだったらまずぐっすり睡眠を最優先でとりたい、そう思うのが一般的だろう。たまたま秋世は、子どもの頃から身だしなみに対して個人的にこだわりがあったから、多少遅刻しようが宿題忘れようがしっかりと朝風呂に入る習慣をつけていただけだ。自分があまり普通じゃないことをしていることは自覚している。

立村とは、そのあたりの話題を振ったことも振られたこともなかった。

まあ、たまたまなんだな、と聞き流せばよかったんだろう。廊下を二人で、無言で歩いている間、秋世はもう一度立村の髪の毛をちらと見た。まだぬれている様子だった。こうやって見ると、やっぱり立村は実際の年齢よりもみつつくらい年下に見える、とおぼろげに感じた。みつつ、というと下手したら小学六年くらいだ。やせているからおさらだ。

エレベーターのボタンを押そうとした立村より早く、秋世は手を伸ばした。五階に止まっていたエレベーターがすぐに降りてきた。グットタイミングだ。

「あのさ、りっちゃん」

「なんだよ」

すっかりしょぼくれてしまっている様子の立村に、エレベーターのドアが開くまでの間、どうしても聞きたくてならないことを、あえて飲み込んだ。

「さっき、たまたまさ、古川さん見たんだ」

「え？」

明らかに動揺したって顔つきだ。立村の性格はもともとポーカーフエイスを気取りたがるくせに、顔には感情が丸見えてところだ。入学した最初の頃は秋世も立村のことを、「ずいぶん無感情な奴だなあ」と思っていたけれど、なんのことはない。そうしていないとすねたりいじけたりむくれたりしているところが人の倍以上現れてしまう。だから、懸命に隠している、それだけなんだと。やはり、今回の読みは当たっていた。秋世は確信した。

「勢いよく走ってエレベーターに乗り込んでいたとこ、見たよ」
エレベーターのドアがささつと開いた。やはり背広を着た男性がしかめつつらをして秋世たちが乗るのをにらんでいた。お邪魔してごめんなさいね。まずはこれから質問すべきことを頭の中で整理しておこう、そう決めた。

腕時計で確認したところ、思ったよりも集合時間に遅れずにすんでいたことにほっとした。

予定通りとはいえ、やはり最後の最後に登場して顰蹙を買うのはできるだけ避けたいところだ。しかも規律委員長と評議委員長の組み合わせ。ただでさえ目立つ。

後ろの背広おじさんには悪いが、一番先に飛び出さないとまずいだろう。秋世は立村を背にして、しっかりとエレベーターが開くと同時に足を踏み出した。目の前のロビーにはすでに、半ば整列完了状態の青大附中生徒一同がそろっていた。ざっと見た感じだと、秋世たちが最後らしかった。菱本先生がちらと秋世たちの方へ視線を向け、ぎろりとにらみつけた。お怒り、ごもつとも。先手だ先手。いつもの「先生受けする仮面」を即くつつけて、笑ってみせた。

「すんませーん、先生、ちよつと一風呂浴びてきたわけで、かなり遅刻しました、申しわけないです！」

実はいつも、学校でやっている言い訳だ。

嘘じゃないところが、説得力があると自分でも思っている。

「なんだあ、南雲、規律委員長ともあろうもんが！ 十分近く遅刻だぞ。こういう場合、お前だったら違反カード何枚切るんだ？」

ひとつの違反につき一枚しか切れないだろう、と突っ込むなんて野暮なことはいない。前髪がうまくまとまっているのを指先で確認した後、秋世は後ろに控えている立村の方にもちらつと目を走らせた。すっかり萎縮しているんだろう。目をきよときよとさせて、自分のお仲間たちに合図を送ろうとしている。見つめ合って伝え合っている、というのが一番正しい状態だろうか。列後ろに頭突き出して、目をまんまるくしている羽飛。女子列先頭で点呼を取りながら立村に何か言おうとしている清坂、はつきりと何か文句を言っているようだが、言葉が聞き取れない古川。それぞれ、立村に「予定が違うだろうが！」とあせりと怒りをぶつけたくてならないんだな、という感情がよく伝わってきた。かわいそうに立村、これからバスで、羽飛といっしょに乗り込むはめになるだろう。突っ込まれるだろう。同情、同情。

「罰掃除、お任せあれです。もう一人、相棒もいるし。ぴつかぴかに磨きますよ！ な、りっちゃん？」

完全に自分が追い詰められていると自覚状態の立村に、秋世は肩をぽんとたたいてやった。

「さ、りっちゃん船の上で、掃除の段取り、相談しような」

「なぐちゃんあのさ」

「ま、あとであとで」

秋世にもやはり、少し時間がほしい。

なんで、りっちゃん、シャワーなんか浴びてたわけ？

夜の疑惑にからむ三人の視線を無視して、秋世は東堂のそばに滑り込んだ。

「無事、任務完了」

「お疲れさん」

バスの中では、二人で仲良く座ることになる。東堂もまた、秋世にさりげなく目で合図を送ってきた。

「ま、これから詳しく、な」
東堂にもどこまで話していいのか、そのあたりも少し整理せねばなるまい。

バス道中は実に静かだった。旅行初日から四日間やたらとハイテンションな連中だったのに、さすが五日目となると気力体力精神力みな萎えるんだろう。ひたすら、ただ、寝ていた。立村も羽飛も、その他大勢もみな、目をしっかと閉じていた。まあ立村の場合はもとと乗り物酔いしやすい体質のため、具合悪くなる前にさっさと寝てしまうのが得策というところもあるようだ。秋世も決して酔いにくい体質ではないのだが、毎回祖母からもらう薬を飲んで事なきを得ていた。

「南雲、例の件なんだけどな」
「はいな」

静まり返った中で、秋世の耳元へあやしい声をかけてくる東堂。
「だあれも、気づいてねえみたいなんだわよ」
「そっか、よかったよな」

三年D組内の平和はまず守られている確認を取った。
「でも、本当のとこどうなのよな」

「さあ、俺にはわかりません」
「正直なところ、お前、どう思う？」

なんだよこいつ、好きものじゃないか。秋世なりにあきれ果ててしまふのだが、まあそれも仕方あるまい。最後までいかなかったとはいえ、キス以上の経験はしている東堂だ。好奇心もりもりというのもわからなくはない。

「いったか、いけないか、か？」
「経験者の目で見て、いかがかと」
「まず、ないでしょう」

少し間を置いた後、秋世は小さくつぶやいた。
りっちゃんがさ、経験しているとは、まず思えねえよ。

接してみた感じからして、たぶん八割方はありえないだろうという確信がある。

しかしその一方で、どうしても頭からぬぐえない。

なんでシャワー浴びてたってわけなんだ？

秋世がどうしても割り切れない理由。

まだ水っぱい朝の日差しに頬をさらしたまま目を閉じた。

やった後なら、やはり、浴びるだろうな。

自分のかつての経験……未経験ではあるにしてもゼロとはいえない水菜さんの……を思い起こすと、確かに最後まで完了したら身体をきれいにしたくなる衝動を感じてしまうだろう。

さつきちらつと見た立村の表情を想像するに、やはり八十パーセントありえないと見た。あのおどおどした態度といい、言葉を発せられないような不安げなまなざしといい、どうみても「経験者」には感じられないものだった。秋世も実質、最後まで進んだわけではないのでなんとも言えない。ただ、経験している男子先輩たちの様子や話し振りを見ると、やはりどこことなく、違うのではとかわなくもないのだ。

たとえば、本条先輩だよな。

一年上の、元評議委員長を務めた押しの強い先輩。立村が一途に慕っている、いわばあいつにとっては兄貴分に当たる人だった。秋世とはたまたま家が近かったこともあって、先輩後輩というよりも年上の友だちという感覚でしゃべったりしている。だから若干立村との関係とはずれがあるかもしれない。

とにかく、この人は女性関係が半端じゃない。中学三年において、二人以上の女子とC以上の関係を持っているだけではなく、数もこなしている。詳しい事情についてはあまり深入りしないようにしているけれども、向こうが話してくる内容からしてその辺のアダルトビデオなんて目じゃない、という気がする。もし相手を妊娠させちゃったらどう責任取るんだ？と人事ながら心配になっちゃおう。秋

世も武勇伝を聞かされるたびに、世の中本当にいろいろな人がいるものだと感じることしきりだった。

本条先輩は、腹にしかと根柢のある自信を確かに持っている。性格上のものもあるのだろう。そうでなければ評議委員長を務めるなんてこともできなかっただろう。「俺は男なんだ！」という迫力のようなものが伝わってくる。他にも本条先輩以外のいわゆる「童貞を捨てた」先輩たちや小学時代の友だちも同じような雰囲気を感じる。「女を知る」経験の意味はそこらへんにあるのかもしれない。他の連中よりも一歩早く、大人になった。自信のようなものが身体にまわりついていて体温から伝わってくる。

秋世にしても似たようなものだった。水菜さんといっしょに夜を過ごす寸前となった冬のことも、その時何をしたかは覚えていないけれども、確かに他の連中よりも階段をひとつ昇ったかもな、という感覚は残っている。どうして最後までいかなかったのか、そのあたりの感情だけは定かではないけれども、他の男子たちがひやひやあ女子たちをからかったりしている様子を静かに眺められるようになったこととか、告白してくる女子たちの目に同じような感情を見出せるのかとか、いろいろと考えてしまいたくなるのは確かにある。

男子にとって「童貞を捨てる」というのはかなりのステータスとなる出来事だ。

立村には今回、いわゆる「男になった」というような押しの強さがまったく感じられなかった。その直感が秋世の「決して立村は今回その手の経験をしていないだろう」という読みになっている。

ひっかかるのが「シャワーをなぜ浴びる？」という疑問、それだけだ。ふたりつきりで何もなく、ただ語り合っている程度だったならそんなことをする必要もないだろうに。素直に服を着替えて、さっさと知らん顔して出てくればいい。なんで髪の毛まで洗う必要があったんだろう？ 下種なかんぐりだけど、「やはりそのにおいがかがれて感づかれるのはいやだ」という意思表示なのだろうか。

りっちゃん、どうなんだろうな。このあたりつつこんでみるか。

窓から海辺が光っているのに気づいた。即、寝てしまったからか気づかなかった。

「そろそろ降りる準備をしろよ、寝るのは船に乗ってからだぞ」
菱本先生の若干寝不足めいた声がバス内に響いた。明らかにこの先生も、五日間ろくに睡眠もとれていなかったのだろう。もし立村たちのご乱行がばれたら、さらに眠りが削られるはめになるだろう。生徒だって先生のことを心配していないわけではないのだし、秋世の選んだ方法は間違っていない。生徒だけではなく、教師の規律正しい生活も守ってやるのが、規律委員の仕事じゃないかと秋世は思う。

まずは、深い事情をじっくり聞かないとな。他の連中にばれないように。
なかったことにはする。でも、やっぱり聞くべきことは聞いておきたい。

どうしても、そうしないと気がすまない、そう叫ぶ自分がいた。

バスから降りた後、すぐに立村の肩をたたいて一声かけた。

「ということで、罰そうじ当番のことなんだけど、相談したいんだけど、いいかな？ りっちゃん、目が死んでるよ、どうした？」

「本条先輩と同じ顔、するなよな」

バスでの睡眠では明らかに足りなかった、不機嫌そうに立村が答えた。

やっぱり、意識しているんだと思って、思わず笑いたなくなった。バスから降りて後、他クラスから船のタラップを昇りながら、秋世はさらに話し掛けた。思いつきりこのあたり、つつこんでみたい、いじめてみたいところでもある。

「りっちゃん、どうしたのかな。顔色悪いよ」

「もともとそうなんだからしょうがないだろ」

「だから、乗ったらすぐに甲板に出ようよ。それの方がりっちゃんも、いいだろ？」

「そういえばさあ、俺もあまりりっちゃんと、この旅行中、話、しなかったもんなあ。一時間じつくり、語ろうねえ、よろしく」

さりげなく軽やかに尋ねていく秋世に対し、立村の態度はやはりぎこちなかった。

いつものようにあっさりと「ふーん、そうなんだあ」と笑って終わらせてもいいはずなのに、秋世の言葉にだんだんどろどろしたものが混じっていくのが、自分でも感じる。こんなマイナスの気持ちを、立村相手に感じたことはかつてなかったはずだ。

さつさと寝たくてたまらなさそうな菱本先生およびD組一同を船室に残し、秋世は甲板に立村を押し出した。昨夜のどしゃぶりが信じられないくらい風いだ海だった。

立村はそつと頬のあたりを手の甲でこするようなしぐさをし、ちらつと秋世をにらむような視線を送ってきた。文句言いたそうなんだが、言えないのが悔しそうだ。足元からがたごととモーターの回る音が響き、腹にくる。ひとつため息をついた後、立村は髪の毛をかきあげるようにして、白いペンキの壁にもたれた。じつと青濁側の景色を眺めていた。

もう、完全に髪の毛は乾いている。後ろの方だけムースがつきすぎて割れているのがご愛嬌だ。それでも青大附中に戻れば立村評議委員長、生徒会よりも権力をもつ存在の、はずなのだ。自分に与えられた肩書きにまだなじめないで、長すぎる袖やスラックスの裾を折り曲げているような、そんな感じが立村そのものだった。

からかい虫にまかせて、秋世はまず一言、自分のまんまでたずねてみた。

「りっちゃん、朝のシャワーはどうだった？ 寝癖直し、結構使えただろ？」

「青潟についたら返す、ありがとう」

じろつとにらみ、またすぐに視線を海の方こうに戻した。ご機嫌、最悪だ。また笑いたくなる。もつとつっこんでやりたくなる。

「けど、やっぱりどんな時でも清潔を守るってところが、りつちやんの性格だよなあ。ひとつ、聞いていいかな？」

「答えられることと答えられないことがあるけど、それでいいなら」

答えられないことを聞きたいんだよなあ。

さらにギャラリーが増えていく。やたらとカップルの多い我が青大附中。男女コンビのそれぞれが、海を眺めている。

「じゃあ聞くけど」

ふつと、潮のにおいで息がつまりそうになる。やんちゃなからかい虫がそのまんま、秋世の本音をぺらぺらしゃべってくれた。

「シャワー浴びなくちゃいけないようなこと、したの？」

立村ほど、感情をストレートに読みやすい奴はそうそういない。一度あごをひくようなしぐさをした後、足元をじっと見下ろした。唇はぎゅっと一文字。答えはなかった。

第一部 9

りっちゃん、いたせりつくせりのチャンスって、なんだよ。

尋常ならざるいじけようになんだかこちらの方が悪いことしたような気分になってきた。ちゃんと予防線は張っておこう。

「あと、今のうちに言っとくけど、たぶんあのこと、俺以外にはばれてないと思うよ。保証はできないけど」

立村は床を見すえたまま一言だけ搾り出した。

「最初の質問の答えだけど、してない」

事実がどうであれ簡単に白状なんてしないだろう。秋世なりに第一の突っ込みを用意した。さらりと言うのが自分のやり方だ。残念そうな顔をしながらも、

「もったいない。いや、別にいいんだけど、りっちゃん本当に、してなかったわけか？」

「あたりまえだろ。俺だって退学になりたくない」

「じゃあなんで？ 俺だったら絶対、逃さないけどなあ」

「そっという問題じゃないだろ」

妙に意地になっているところがまた笑えた。もう事実関係なんてどうでもいい。こちらは余裕かましているのに、生真面目に言いかけそうとする立村は秋世よりもみつつよつつ年下の後輩っぽく見えた。本条先輩もこれじゃあ心配するだろう。旅行前にも「俺の弟分のことなんだが、悪いが、面倒みてやってくれよな。あいつ、ほら、追い詰められたらまたひとりでつぶしらんともかぎらんしな」と電話がかかってきたのだから。

「じゃあ、証拠を拝見」

たいていそのあたりのまずい情報を仕入れた際、男子同士でチエ

ツクする項目は、やはりゴムのありがた。ゴムというよりも、一般的に言う「男性用避妊具」とも言う。最先端の性教育にこだわっているらしい青大附中で保健体育を学んでいるからこそ、できることあつけらかとたずねた。思った通り、立村の横顔には血がささつと昇ってきているのが見え見えだ。笑える、下ネタ女王の古川が毎朝からかいたがる気持ちもよくわかる。

「なんだよ証拠つて！」

「変なところ見たりしないから安心しろよ、りっちゃん。ほら、こういう時に使うものつてあるだろ？ それ使つてなんてないよなあ」
手もみしながらもう一度秋世は立村を見上げた。泣きべそかきかけているけれども、必死に崩れないように唇噛んでいる立村の表情がくるくる変わって面白い。

「……わかった、見せればいいんだろ」

胸ポケットから手帳を取り出すと、立村は秋世に差し出した。目をそらしたままだった。押し頂く。持った感じ、表紙のカバーがさりげなく厚ぼつたい。隠しているのはたぶんこのあたりだ。開いてみるとやはり、白い紙に包まれた「あれ」が鎮座ましていた。

男子の常備品で二年最後の保健体育授業の際、男子たちにだけ配られたものだった。

「避妊」は男子としての常識であり同時に覚悟でもあるとのことのお言葉が印象に残っている。

もつとも秋世からしたら、三年ほど遅すぎる情報でもある。

それにしてもな。

普通、真つ正直に渡したりなんてしないだろう。しかも使つてないものをなんて。

りっちゃんらしいよなあ。

こいつは百パーセント白だ。

せっかく他の連中よりも一歩前に進めるチャンスなんだから、いかにもあつたんじゃないかということまで話を膨らませてもいい

のにだ。もし秋世だったら、事実関係はともかくとして頭ひとつぬきんでた、という自信を見せびらかすために少々大げさなことを口走るかもしれない。男として、それこそ「昼行灯評議委員長」が今まで馬鹿にされていた連中よりも一気に大人になった証明として。そこまで頭が回らなかったんだろ。その点、くそまじめというか不器用というか、純情過ぎる。

思わずため息つきたくなった。

本条先輩が心配するのもよくわかる。ここいらで少し、知識を補充してやらないと、「本番では絶対に困るだろう。友情の証として、ここいらで少し付き合ってもらおうとしよう　からかい虫と肩組みながら、秋世は少し考え込むような振りして話を進めた。まったく困った奴だ、と言う風に、ため息を本当についてやった。

立村ときたらもう、耳まで真っ赤になっている。

「りっちゃん、あのさ。これはまずいよ。肝心要の時に使えないじゃん」

「使うもなにも」

「学校でよっぽどのことがないと使うことないだろ。こういう時はだいたいさ、ズボンのポケットに入れておくとかさ、専用のケース使うとか、そちらの方がいいと思うなあ。それに一番の問題はさ、こうやって持ち歩くと、袋が擦れるだろ。りっちゃんは紙に包んでいるけど、やっぱりさ、肝心な時に破れてしまったら、意味ないじゃん、そういう時のために三ヶ月に一回は交換した方がいいと思うんだ。ま、だいたいのところはわかった。じゃあさあ、せっかくだし、もう少し詳しい事情を教えてほしいんだけどさ」

本条先輩から教えてもらっていない可能性大だ。目がきよときよとしてくるだけではない、言葉を何か発しようとしているのだが、うまく舌が回らず戸惑っているという感じだった。立村が片手を差し出して生徒手帳を返してほしそうな身振りをするので、秋世も馬鹿丁寧にあたんで手のひらにおいてやった。大きく息を吸い、肩を

少しだけこわばらせ、もう一度ゆつくりと吐き出した。秋世の方をまた泣きそうな瞳で見つめた。

「事情聞いてどうする？」

「いや、俺だけの楽しみにしたいかなあと。ほら、修学旅行中いろいろあったからさ、ひとつくらい他人の話を肴に盛り上げるのも乙なものかなと思ったただけであって」

「自分のことを棚に上げてかよ」

「それはお互い様、そうかあ、じゃあさ、こうしよう」

真剣な立村には申し訳ないけれども、つつこんでいると秋世としては面白い。もう少しかいかい虫のえさになってもらってもいいだろう。どうせばらす気なんてさらさらない。どうせ何にもなかったんだってことがわかったんだから、あとは秋世の胸に秘めておけばいいことだ。なんだか懸命に言い訳のチャンスを探してあたふたしている立村を見ると、なんだか「ほら、りっちゃん、もう少し要領よくやり方考えろよな」とあったかいアドバイスをしてやりたくなる。きつと立村がこういうお坊ちゃん性格にもかかわらず、青大附中の評議委員長に選ばれたのは、周りが気持ちよくかまいたくなるような部分がにじむからだろう。男子には一種の屈辱的表現でもあるけれど、立村には「かわいらしい」という形容詞がよく似合う。

「俺の質問に答えられるとこだけでいいからさ、穴埋めをよろしくそのくらいならば、いいだろ？ イエスノーだけでいいからさ」

どうせわかりきっていること聞くだけだ。

どういう反応するかを見たいだけのことだ。

「わかった、そんな中途半端なことするくらいなら、俺から話すよ」

反応はやはり予想通りだった。

真剣な表情はさらに、研ぎ澄まされていく。

「けどひとつだけ条件あるんだ」

整った口元がきりりと引き絞られていくところは実に見物だった。

一呼吸置いた後、立村はそつと秋世にまた、泣きそうな目を向けた。助けてほしいに違いない。余裕を持って秋世は問い返した。

「なにになに？」

「このことは俺ひとりが悪いんであって、他の奴は関係ないんだ。だから、関係した人たちにはこのことで一切、話を振らないでほしいんだ。あとはほんとに、全部白状する」

「そうか、かばうときたか」

「そういうわけじゃないけどさ。ただ、このことは全部俺の責任だし、それでまた、誰か、退学になったりしたらいやだから」

思わず吹き出しそうになる。もつとも立村の心境が笑うどころじゃないことくらい見当ついているのでその辺はこらえた。

もちろん、女子とふたりつきりで「一夜」を明かしたのは停学に値する扱いだろう。しかも仲間を巻き込んだときたら、そりゃあ顰蹙だろう。

ただ、立村がそういうことを自分の下劣な本能だけとするわけがない。何か理由があるはずだ。立村はもしかして、秋世が友だちとしてではなく、規律委員としての権限を振り回したいと想像しているのではないだろうか？ もしそうならば、勘違いもいいかげんにしろと頭をぶん殴ってやるのが筋だ。でも立村にはそれができない瞬間、立村自身がこなごなに砕けきってしまうのではないか、直感しているからかもしれない。

秋世はゆつくりと、腹にひとつ、収めた。ざんげを聞く準備をした。

「いいよ、りつちゃん、まずは俺に、ざんげしなさいや」

まず一呼吸置いた後、ゆつくりと語り始めた。途切れ途切れになるのは、のどが詰まって風邪気味だったからかもしれない。部屋の中あれだけ乾燥しているのだから、ふたりつきりで語り明かしたら、のども痛めるだろう。

「昨日の夜、うちの担任来ただろ、部屋にさ」

「うんうん」

「あの時、またいつものことだけど、いろいろあつてさ」

ははん、それがきっかけか。

仔細を話しはしなかったけれども、秋世には大体見当がつく。なにせこの立村と担任菱本先生とは犬猿の仲ときた。別に菱本先生はそれほど厳しいことを話しているわけではないし、秋世が立村の立場だったとしたら「ふーん、そうっすか」で流せるのだがそれができないという。たぶん、また人生の先輩として「アドバイス」をしたのだろう。けど大人には理解できないんだ、先生側のアドバイスが、生徒側からしたら「余計なお世話」と感じられるのが。秋世や東堂のように、感謝感謝雨あられ気分でこちらから菱本先生を「面倒みてやっている」のとはわけが違う。

「たまたま、女子の部屋で羽飛が話をしていたら、まあ、向こうもいろいろ失礼きわまること言われたらしいんだ」

「どんなこと」

「向こうの名誉の問題もあるし言えないけど」

清坂美里が何を言われたかは正直どうでもいい。話を促す方が先決だ。立村も早く解放してほしいんだろうが、秋世には逆らえないらしくてぼそぼそと続けた。

「だったら少し、なんか話をしに行ったほうがいいかなと思って、行っただって、それだけだよ。ほんと、すぐ帰るつもりだったから」

「だから古川さんも羽飛の部屋に来たってわけか」

ちらつと秋世の方を見て、舌打ちする。

「だから、本当はすぐに向こうへ話をして、それから部屋に戻るつもりだったんだ。けど、タイミングがずれて、いろいろ話しているうちに、眠くなってさっさと寝てさ」

話をフィニッシュに着地させようとしているが、そうは問屋が卸さない。

秋世は合いの手を入れた。

「ストップ。本当に、寝ること、できたのかなあ、りっちゃん」

「寝たにきまつてるよ」

「だってさあ、仮にも自分の彼女がだよ、隣にいるんだよ」

「いたって関係ないよ。俺もまさかなあとは思ってたんだ。朝いきなり、りっちゃんの部屋から古川さんが出てきた時にはさ、それもものすごいスピードで駆け抜けてったんだからさ。何かあるぞと思うずにはいられないよな。あのホテル、内側ロック形式だったから中に入っていない限り、開かないだろ？ 一応、これでも規律委員だからさ、部屋の点検とかなんとかしたほういいかなってのもあったのと、まあ白状するとひとりいろいろと片付けたいものもあったりしてさ、たとえばあの写真とか、りっちゃん、ちゃんとあれ、処分した？ ほらあのきれいなおねーさんの写真」

読み通り、立村は何も言い返せずまたくっとうなだれた。かわいそうに。ちよいと言い過ぎたかなと思うのだが、せつかくのこの機会、もう少し楽しませていただこうぞ。

「まあいろいろとばたばたやってたわけっすよ。髪の毛もまとまらなかったしさ。そろそろ出ようかなと思っていたらいきなり古川さんの大移動じゃないですか。俺も変だなあと思ったんだけどさ、なんとなくひらめくものがあつてさ。だから四階まで行ってみたつてわけ。いや、ほんとこれ直感。まさか俺だって、りっちゃんが髪の毛ぬらしてさ、せっけんの香りに包まれて現れるとは思ってなかったしさ。なんで朝っぱらからシャワー浴びるのかなとも思ったけど、それが必要なことしたあとだったならしょうがないかなと思うわけであつて。ただ、なんかなあ、もしこれみたのが本条先輩だったらどういふこと言ってるかな、とふと思ったんだ。俺、本条先輩にも言われてたんだ、りっちゃんのことよろしくつてさ、だから、かなあ」

勢いよく、ハイテンションで続けた。そんなに落ち込まなくてもいいのに。こちらはちよつとだけからかってやりたいだけなのに。お互い、女子に感じるものとか本能めいたものは隠したいだろうけど、それが辛いんだつたら素直に言ってくれればいい。別に他の連

中にばらすつもりなんてさらさらない。まだかたくなに言葉を飲み込む立村に、ちょっとばかり厳しく接してやりたくなった。空を見上げてまた唇をかみ締める立村の顔はまさに、追い詰められたねずみ状態だ。

「じゃあもつかい最初の質問に戻るけど、今、すつごくストレスたまってる？」

「え？」

「だからさ、シャワー浴びたくなるのもそりゃあ当然だと思ってただけ。俺もそうしただろうし。ちなみに彼女が出て行った後だろ」

婉曲な表現だったので通じなかったのかもしれない。立村は横目で秋世を見返した。不承不承に頷いた。どうも肝心要のところまで話が進まない。じれったくなる。しかたないので秋世はもう一発、変化球を投げてみた。

「そつか、以上大体わかりました。あのさりっちゃん、ひとつ聞いていい？」

「なんでもどうぞ」

もう投げやりだ。やけ状態が口調にもにじみ出ている。このあたりでそろそろ解放してやらないと、また立村はすねてしまうだろう。やりすぎたかな。

「女子ってさ、どうなんだろう？ 朝、目覚めた時、何するのかわかるか？」

「顔洗ったりするんじゃないのか、あと着替えしたり」

さらに言い方がぶっきらぼうになっていく。こういうの、普段の立村には絶対に見られない。秋世もそうだが、いつも「穏やかな評議委員長」もしくは「クラスの昼行灯」といった仮面を使い分けているような感じが、立村にはした。その仮面をはがしたところをたまたま何かの拍子で秋世は覗き込み、そこからつつと何かが染み込んでいった、それがふたりの友だち意識なのかもしれない。今の立村ならば、もう少し殻を破って何かを流しそうな気がする。もう

ちょっと、つついてやりたくてならなかった。

「やっぱり、おめかしは、最優先なんだなあ、わかる、わかる」

「けどシャワーは浴びてなかったよ」

ここでわざわざ「シャワー」という単語をなぜ出すんだろう。自分がこれから突っ込まれるっていうのに気づかないんだろうか。きつと気づいてないんだろう。もう、パニック寸前なんだろう。せつかくひつかかってきたんだから秋世も投げ返した。

「必要ないからなあ。そうかあ、衣擦れの音とかも響くわけなんだなあ。それはつらいよな」

「ああ、そうだよ、よくわかるよな」

「そうかそうか、じゃあすなわち、りっちゃんは彼女がいなくなつた後に、着替えなりシャワーなり浴びたってわけっすね」

「そこまでわかればいいだろ」

完全にすねてしまった様子だ。

そろそろ、いいか、だいたいわかったしな。

「りっちゃん、よくわかりました。ほんと、よくこらえたなあ」

秋世は自然ともれてきた笑い声を立てた。最後の「よくこらえたなあ」には、ひとえに実感がたつぷりこもってしまった。そうだろうそうだろう。女子とふたりつきりで、しかも一応は「自分の恋人」とだ。一夜を明かして、そこではなにもないときた。これだけすねまくっている立村のことだから、きつと何にもしなかったんだろう。自然に、うつうつした夜を送ることになったのだろう。自分がもし彰子とふたりつきりで、天女の微笑みで眠っている姿を見たら、当然自制なんて、できるわけがない。当然お初、頂戴するため行動をとっているに違いない。これが十五歳、男の本能だ。

立村はゆっくりと顔を上げた。唇がだいぶ乾いて震えていた。

あらら、こりゃあまずいぞ、りっちゃん血が昇ってるかも？

「それなら聞くけど、なぐちゃん。お前、経験したことあるのかよ」

経験、かよ。

はつと自分でも呼吸が止まりそうになり、自分でも慌てているのがわかる。いいかげんに装った言葉をつなげた。

「けいけん、って、すなわちりっちゃん、いわゆるそのあのそれですか？ いや、チャンスがあればそりゃあ、なあ。でも世の中なかなかそううまくいくものじゃないよ、りっちゃんみたいに」

頭の中でふつと、「経験」の意味とかつて指先に走った感覚が蘇った。そうだ、あの時、確かに秋世の指は女子を触れたことがある。そのさわり心地が身体に伝わってきて、同時にすうつと染み込んでいった。潮の香りに似た水菜さんのおい、あれは女子独特のものだったのだろうか。秋世にはわからなかった。

東堂も、同じにおいをかんだのだろうか。

そして立村も。

彰子さんも、同じにおいするのかな。

ぽこ、ぽこと頭の中に浮かぶ、かつての記憶。

言い捨てる立村の言葉を、秋世は聞いた。

「俺は至りつくせりのチャンスがあってもできない奴なんだよ、悪かったか！」

去年の秋くらいだったか、ふたりで話をしている時に、かなり思いつめた表情で、

なぐちゃん、もしさ、もしもだよ。なんかの拍子で、ほら、変なものを見たりしてさ。その場所だとそんなことしちゃいけないってわかってる時にさ。そうだったら、どうすればいいと思う？

とつくの昔に本条先輩からそういうテクニクはマスターしているはずじゃないのか、と秋世としては答えたかった。後から聞いたところによると、本条先輩もさりげなく下ネタを突っ込んだりしていたらしいけれども、立村の性格上どうしても素直に受け入れられなかったらしい。

りっちゃん、そういう時は開き直ればいいんだよ。だって、男の体はそう反応するように出来ているんだからしょうがないって。

これ、小学五年の頃、何かの拍子で父に説教された時、言われた言葉だった。そのまま受け売りで流しておく。

けど女子の前でそんなことになったらどうすればいいんだろう。どうすれば大人しくなるかい方法、知らないかな。

このあたりでもう立村は言葉もどるわ、目も今以上にきよときよとするわで、またそれも面白かった。ただ本当に切羽詰った悩みだということだけは秋世も感じ取ったので、即まじめに答えたのを覚えてる。

うーん。ひつじを数えるとか、うまくブレザーを羽織りなおすとか、けど一番いいのは普段から溜めないようにしておくことじゃないかなあ。ごめん、りっちゃん。俺、そんなこと真剣に考えたことなかったから、役立つこと言えないなあ。

そうか、ごめん、変なこと聞いてさ。

いいよ、そのくらいのことだったらおまかせあれですよ。実際、そのくらいしかアドバイスなんてできっこない。本当にベストなのは、本条先輩のようにごくごく自然な男女交際を行うことなんだろうが、そんなこと立村に言ったらどん底まで落ち込まれるに決まっている。

あの時の自分は明らかに、立村よりも経験が豊富な立場だった。今、そばでじつとにらみ返してきている立村は、秋に真つ青な顔して「立ったらどうするか」の相談をしてきた時とはまったく違っている。

本当にいわゆる「初体験」とは別の何かを立村は、秋世より先に「経験」している。それがじわりと瞳の奥から伝わってきている。なんでこうも身体がどくどくとざわめくのだろうか。

親友の東堂にも……東堂がかつての彼女とBまでいったという話を聞いても……こんなにじりじりしたあせりを感じたことはなかった。

好きな女子ではないにしても、ひとりの女子に直接触れて、身体の反応が自然とつながっていくことを感じたことがあった。唇

を重ねて自然とあわ立っていく身体の欲求に押し流されなかったのは、ただ偶然、そこまで盛り上がらなかったというだけのこと。

経験、してるよとくに。そう答えられたら。

もしあの時の経験が水菜さんでなくて彰子だとしたら、自分はそう答えていただろうか。

りっちゃん、いたせりつくせりのチャンスって、なんだよ。

二人きりの時を過ごしたというそれだけかもしれない。原因不明のむかつきは船酔いのせいだけじゃない。どくどくした気持ちのゆれに、秋世は戸惑うしかなかった。

余計なことは考えたくない。いやな気持ちになんてなりたくない。潮のにおいをもう一度吸い込んだ。頭をすっきりさせたくて髪の毛をかきあげた。

「りっちゃん、あのさ、あの、ひとつ誤解しないでほしいんだけどなあ。俺、ちょっとだけりっちゃんをからかいたかっただけ、って前もって説明しなかったのが、間違いだったかなあ」

きつと、自分の穏やかな表情に、さっき感じた泥ついた気持ちは隠されているはず。

こんな素直で純情な奴に、やつかむなんて自分には似合わない。

デッキの白い壁にもたれたまま、立村はずっと青潟方向の海を見据えたままだった。

第一部 10

だつてさ、俺、昭代のこと「あっちゃん」とか「あきちゃん」とか、そんな風に呼んだことないのに、そんなもの、買えるかよ。

このあたりでご機嫌取らないとまずいかな。

ずっと黙りこくったままの立村の様子見しながら秋世は思案した。海をじつと見つめたまま、唇をかみ締め今にも泣くかなんかしそうだった。もちろんこんなところで醜態をさらすような性格ではないだろうし、秋世も女子っぽく「もう泣いちゃだめだよ、ほらほら元氣だして！」などと声をかける気はない。

けどな、これはひとつのチャンスかもしれないぞ。

からかい虫はおとなしくなった。腹いっぱい満足したらしい。

その代わりもう一匹、計算虫が目覚め出した。男子だったら当然だ。ここいらで一発逆転を狙うというのはどうなのだろう。もちろんそんなこと露骨にできるわけもなく、秋世はしばらくポケットの中に手を突っ込み、ハンカチをこねくり回した。中には昨日の自由時間を買った細い包みが入ればなしのままだった。しまったと改めて気づく。

彰子さんだつたら、しわくちゃでも怒らないよな。

今まで付き合ってきた女子たちのことをふと思い出した。海の波にちらちら浮かび、即消えた。

女子って、中身よりもシュチュエーションにこだわるから面倒だったんだよな。水菜さんの時も、クリスマス結局、ふたりで高校生っぽい格好してどっかの喫茶店で食事したしな。今年はさすがにそこまでなかったけどなあ、相手の誕生日、忘れてると怒られる

って聞くけどなあ。

彰子にはそういうことが一度もなかった。

特別に薔薇の花をプレゼントしないと激怒するとか、ステディな証拠の指輪を要求するとか、そういったことは一度もない。むしろ、秋世の方が忘れないように慌ててチェックをしまくるのが常だった。すっかり忘れていたら、夏木&名倉ラインに寄り切られること間違いないだ。彰子は秋世のプレゼント用に用意した花なりマスケットなり、どれもにつこりと受け取ってくれた。それも、たっぷりの笑顔を添えて。

けどな、化粧品つてのは、夏木、君は買わないだろうなあ。

ほんの少しだが、差をつけたい。

秋世はポケットのしわくちゃになっているような包みをもう一度指先ではじいた。

潮時だ、仲直りの握手をしなくては。

「りっちゃん、もういいかげん、ご機嫌よかですか？　もう頼むから、ほら、許して、ほら」

ごっくんと空気を飲み込んだ後、秋世は立村の仏頂面をもう一度覗き込んだ。泣いてないかな、すねてないかな。とりあえず大丈夫そうだった。さすが評議委員長。プライドは高いと見た。

「怒ってないからもういい。どうせ本条先輩に報告するんだろう」

秋世は立村の隣に並んで背を壁に持たせかけた。やはり話し掛ける時は、海と、青潟の山々を見つめながらの方がスムーズに行く。思いつくまま話をつないでいった。そうだ、立村が昨日の夜、ホテルの売店で買っていたプレゼント、誰にやるんだろう、ちょっとばかりつついてみよう。やっぱり計算虫よりも、今のところはからかい虫の方が優勢だった。

「そうだ、りっちゃん、昨日さあ、売店で買物してただろ？　結構

大きい鏡、あれ、誰かのプレゼント？」

「そう」

「誰の？」

「後輩の」

「ふうん」

即答してくる。やましくはないのだろう。なるほど、後輩ね。

後輩だとすると、やはりあの二年B組の問題児と謳われる杉本梨南だろうか。

手鏡を、後輩とはいえ男子に買っていくような趣味があるとも思えない。

またひりひりと、立村の本音めいたものが気持ちの上をかすっていく。

もう少しつつこんでみようかな。

「俺もさ、買っちゃったんだよねえ」

秋世はもうひとつ、勝負してみることにした。

「おい、これって」

ポケットの中から取り出した包みは、彰子へのみやげ物だった。

立村はさりげなく動揺を示したけれども、すぐにポーカーフェイスに戻した。

「そ、リップクリーム。やっぱり一番身近に置いてほしいものをあげたいもんじゃあないですか」

「あのおばあさんじゃあないよな、じゃあもうひとりの」

ここまで聞いたとたん、瞬時に買い忘れた相手のことを思い出した。

しまった、昭代に買つてくの忘れてた！

自分とは似ても似つかない顔立ちの妹に、リップクリームのようなしやれっけのあるものは似合わない。その辺で適当にお菓子かもしくは女子の好きそうな名前入りキーホルダーを買っていいこうかと思っていたところだった。彰子と立村の騒ぎですっかり忘れていた。船から下りたら少し時間あるだろうか。フェリーの中の売店に駆け込まねば。

「大当たり。やっぱりさ、いつでも使ってもらえるものが一番かな

あと思ったわけだけど、りっちゃんの見えて負けたと思った。鏡だったら、割ったりしない限り、ずっと使ってもらえるもんなあ。俺もそっちにすればよかったって思ったけど、まあいつかってとこでさ、これからまだまだ先かもしれないけど、いつか使用させていたくために、ですね」

立村に一方的なしゃべりかけをしながら様子をうかがった。いきなりそっぽを向いたけど、聞いていないわけではないらしい。口をぎゅっと結んだまま、舐先の方を向いたままで、

「買おうと思った相手ひとりしかいなかったから
投げ出すように答えた。」

やっぱり、立村という奴、本当にわかりやすい男だと秋世は改めて思う。

これってやっぱり、そういうことなんではないだろうか。

気づいていないのはたぶん、本人だけだ。でも現実には、立村の彼女が清坂美里であることもまた事実なのだ。昨夜もしかしたら、もしかした関係かもしれないのだ。男同士、ある程度「好き」と「本能」の両立は可能な部分もあるし、欲求に飲まれてしまった可能性もあるけれども、立村の気づかない本心はすでに表にぺろんと見えているというわけだ。

もし相手が東堂だったら、こんなおせっかいな気持ちにはならなかっただろう。

何にも気づいていない立村だから、いいかげん気づかせてやってもいいだろうという本音と、清坂との関係を思いつきりかき回してやりたいという黒い感情、いろんなものが合わさっていく。考える間もなく秋世は本能に任せてたずねまくった。

「清坂さんには？ 買ってやろうとか思わなかったわけか？」

「だって一緒に旅行している相手になんてだ？」

「だって俺、帰る前からこれ買ったよ」

もう一度、手元の赤い包みを見せてやる。若干早口になっているのは、やはり思い当たる節があるせいだろうか。

「旅行してもしなくても同じだろ、買うのは」

「身もふたもない言い方しますなあ、りっちゃん。あのさ、どうしようもなく、プレゼントしたいとか、そう思ったことって今までないんか？　ねだられたとか、頼まれたとか、そういうんでなくてさ。こちらからこれをプレゼントしたい！　どうかもらってくれ！とかいうような感じでさ」

「渡したことはあるよ」

そりゃあ、まあ、一年近く付き合ってきたく何もないということはないだろう。実際家に呼んでデートしたこともあると聞いたから。でも、それとこれとは違うような気がした。頭で考えて「ねばならない」と意識して行動したこと、今の鏡の件とはまったく違うだろう。もしかしたら清坂からバレンタインデーのチョコをもらい、ホワイトデーにお返ししたかもしれない。でもそれは秋世からしたら、自分と同じく「義務」を果たしただけのことに思える。自分もバレンタインデーの時期は、知らない女子からチョコやらケーキやらもらって、その場では和やかに受け取るけれども即、家でリストを作ってお返しの準備をしなくてはならず面倒だったことを覚えている。さすがに彰子と付き合ってから数は減ったけども。それでもまったくないというわけではない。どうでもいいが彰子からもらったのは手作りクッキーだが、たぶん夏木と同じものだろう。素直に万歳と喜ぶわけにはいかない。

「いや、りっちゃん、バレンタインデーは違うよ。俺も毎年もらって返したりするけど、あれは一種の『おつきあい』だろ。俺が言うのは、そういう義理のおつきあいではなくて、腹の奥からぐぐっと渡したい、やりたい、抱き締めたい、っていうもの、そういう気、ねえの？」

「ないよ」

あらら、またここいらで本音がべろつとめくれているではないか。この調子だと清坂との交際解消も時間の問題でないだろうか、という気が秋世にはした。たぶんだけど、立村はあの杉本という女子の

ことを気にかけていて、無意識のうちに自分の宝物にしている。杉本梨南の噂については芳しくないものばかりだし、東堂が保健委員として毎日「やべえよなあ、ああいう女子が来たら修羅場だぞ」とため息ついていたこととか、規律委員に彼女がまぎれてこなかったこととか、いろいろ思い出してみると辛いものがある。

でもそういう女子を、立村は彼女の入学当時から目をかけてきた。大切に、それこそ自分の地位……評議委員長……を失うかもしれないという時ですら、身体を張って守ってきた。去年の冬場に起こった出来事や、今年に入ってから周囲のごたごたを耳にした時も、あらためて立村は行動の人間だと思うことしきりだった。言葉ではいくらでも「俺は清坂氏と付き合ってるし、それこそ大切な人だと思ってる」と答えるだろう。でも、その言葉の裏には「大切な友だちだから」というものが隠れている。秋世と同じく、「友だち」としてだったらいくらでもたくさんの女子とお付き合いが可能だろう。でも、「友だち」では満足できず、もっと肌に密着した形でそばに置きたい相手、手元において見守っていたい相手、思いつきそばでくねくねしたくなる相手、それは今のところ、たった一人しかない。

ちよつとばかりえらそうだけど、説教させてもらいたい。

まったく気づかずに、はだかの王様状態の立村に、「王様ははだかだ！」と叫びたい気持ちだった。それがなぜなのかは、秋世にもわからなかった。

「そうか、けどさ、りっちゃん、とりたててあげる必要のない人にあげたくなったら、それはやっぱし、そういう気持ちだと思っただけだな。りっちゃん、たぶん自分で気がついていないと思うけど。りっちゃんが無意識のところで、他の奴のこと一生懸命かばったり守ったりしているところ、俺しよっちゅう見てるんだよな。ほら、さっきの鏡の相手みたいにさ。俺、あまりうまく言えないけどさ、他の奴はみんな認めてるんだよ」

「まさかだろ」

「りっちゃんが他の評議の人のために一生懸命動いてることかさ、ほら、今みたいなさ、昨日の夜のこと誰にも言うなって言ったりさ、そついうの見てるんだもん、りっちゃんが一生懸命にやってくれてるってことがさあ、俺には丸見え。しゃべってることよか、ずっとわかりやすいもん。去年の夏にさ、りっちゃん言ったよな。恋愛感情感じないことって異常なのかとかなんとかさ。あれ、りっちゃんは大したことないと思って言ったのかもしれないけど、俺もちょっと気になってさ。けど一年たって見て気づいたんだけど、好きとか嫌いとかそついう前に、身体で示してるなって思うようになったんだ。恋愛感情持つてるかどうか別にして」

「身体で示してるって？」

何慌てているのだろうか。目を見開いて、慌てて襟元を直したりジャケットを羽織りなおしたりするのはなんでだろう。思わぬところで激しい反応が帰ってきた。よくわからないのはこちらの方である。身体で示しているというのはひとえに、立村本人なのだけけれども、どうやら別の方で勘違いしたらしい。しかたがない、別のネタでもって説明するしかない。

「ほら、水口いるだろ。あいつ、三年になってからさかりついた猫状態にやあらしいことばかりわめいてるだろ？　けど、面白いことにさ、彰子さんには別なんだよな。目の前で一生懸命スケベな三字叫んだり、いろいろ卑猥なこと言ったりしてくせに彰子さんのためには、動いちゃうんだよなあ」

「動くって何をさ」

「ほら、動くというか、なんというか。あのすい君がだよ。一生懸命に自分のうちに電話してさ、すぐに入院させて、手術してくれとか頼んでるんだよ。もうとつくに救急車で運ばれてるって聞いているのに、もう別の病院に移動されてるってのに」

「ちよつと待て、今の話、もしかして奈良岡さんの家族のことか？」

今度は自分の方が無意識のうちに何かしゃべってしまったている。水口のことをきっかけにしようとは思っていたけれども、なぜ、そこまでべらべらしゃべってしまったのか、自分でもわからなかった。秋世は言葉を切った。

「そう、だけど。まだわからない」

彰子さん、まじで大丈夫なのかよ。

本当に、うちの学校、出て行くとかいうんでねえだろうな。

表面上は楽しげに語ることによって、秋世はごまかした。人間みない人ばかりというのは彰子の口癖で、ばあちゃんの言葉でもあった。秋世もそれを間違いだとは思わない。ただ自分の中にだんだん、どろどろした黒い闇が浮かんているのもまた確かだった。そんな闇を海の底に沈めてしまい、すっかりさわやかな気持ちで終わらせたい。

「そういうこと。つまり、あのお子様すい君でも、彰子さんのためなら何とかしようって行動するってこと。それ見てたら、こういうことか誰だってわかるよな」

「……確かに」

立村の目がゆっくりと秋世の方に向いた。見透かされそうだった。影を見られたくない。

「そういうことなんだよ。りっちゃん。今俺がすい君の話为例に出したのと同じ現象が、りっちゃんにも起こってるってわけ。みんな、りっちゃんがどう思ってるかとかどれだけ努力してるかとか、評議委員長としてどれだけ仕事してるかとか、みんなお見通しなんだよ。だから、もうこれ以上、無理しなくてもいいと思うんだ、これ俺の考えだけだね。それともいっこ。念のため言っとくけど、別に今回のことで弾劾裁判やる気ないから、安心してちょうだいな」

今の自分は青大附中の規律委員長であり、立村の友だちであり、同時に愛想のいい女子受けのいい男子でもある。うちに帰れば即、祖母に会うため病院に向かうだろう。おばあちゃん子の「いい子」だ。多少女子関連の問題がないとはいえないけれども、お天道様の

前で歩けないようなことは一切していない。でも、その奥には海の色に似た深い黒っぽいブルーが含まれている。彰子と水口の関係についてかっと思が昇った瞬間も、ある種の間係を結んだであろうと思われる立村と清坂の関係についても……もちろん「あれ」ではないとは思うが……また、昭代のみやげ物を買った奥の理由についても。

ずっと目をそらしたくてならないものが、波のゆれと同時に押し寄せてきて、本気で酔いそうだった。早く、一刻も早く、黒い気持ちを捨てて修学旅行を終わらせたい、そんな衝動に駆られていた。

だから洩れた言葉だった。

「あのさ、りっちゃん。せつかくだし、ご相談んだけど、いいかなあ。今日さ、これから青大附中に戻るだろ？その時にさ、俺、一足先に抜きたいんだよな。諸般の事情があつてさ」

「事情つてなんだよ」

「たぶん、全員整列して、先生の挨拶やって、それから解散になるだろ？俺、できればそれも無視してさっさと脱出したいんだ。みんなくたびれて、俺がいまいがどうしてもよくなるとは思わんだけど、羽飛あたりがぎゃあぎゃあ言わねえかな、とかそのあたりが少々心配だったんだ」

立村の言葉は、意外だった。

「どうしてそんな早く帰りたい……？奈良岡さんと共に、行くのか？」

そうか、そういう手があったか。

立村は本当に、無意識でいろんなことを指示していることを知らないのだろうか。今の言葉は決して彰子からみの問題ではないのに、すぐに脱出したいのはただ、祖母のところへ即駆けつけたいからとか、そういう理由だったというのに。でも、教えてくれた以上はそっちを優先したい。そうだ、彰子の家に駆けつけて、様子をうかがう。どうしてそういうところに気づかなかったのだろうか。これは

使える。夏木たちも、水口にも、秋世はこれだったら勝てるだろう。心でサンクスをつぶやき、秋世はいかにも当然といった顔で話を続けた。

「うん、すぐにさ」

「行つて、いいのか？」

「けげんそうに立村が秋世を伺う。瞬時の切り替えが早すぎて、よこしまな計算を見抜かれそう。立村の性格上、女子に近い直感の鋭さというのがあって、たまにどきんとすることがある。もし立村が女子で、秋世と付き合っていたとしたら、きつと尻に敷かれていただろう。」

「わかんないけど、とにかく動かないとだめだと思うんだ。俺、頭悪いからなあ、どうしてかってわかんねえけど、とにかく、早く、行きたいだけ」

「秋世はゆっくり、立村が納得しているかどうかを見極めた。まだまだ甘そう。どんどん思いついた言葉を、思考を通さずに勘で続けた。」

「だからさ、今回のこと、俺は一切言うつもりないし、りっちゃんたちをつるす気もない。ただし、俺に貸しがあるのがやだったらさ、俺が規則違反なことちよこつとやっても、大目に見てくれって羽飛たちに言っておいてくれないかなあ」

「規則違反って、しょせんエスケープするだけだろ？ 学校でだら？」

「まあ、規律委員だし、しかも規律委員長だし。鋭いところを突かれたけれどもすぐ切り返した。髪の毛を振り払った。また波が押し寄せてきて、自分をあおる。」

「ほら、俺だけじゃなくてさ、すい君も同じこと考えてる可能性、大だからさあ」

「あいつもさ、今回の一件で、『愛』に目覚めたらしいからさ」
さりげなく「愛」に力をこめてつぶやいた。いろいろなところで「愛」という漢字は印刷されていたり口にされていたりするけれど、

秋世を含めて周りの友だち誰一人、会話の中で使うことはない。かつこ付きの単語だった。

「『愛』？」

「そ、彰子さんは偉大だよ。あのがきんちよすい君をだよ、『男』にしたんだからなあ」

「『男』にした？」

「とにかく、一刻も早く、俺はとんずらさせていただきたいと、そういうことなんだけど、どう、りっちゃん、受けてくれる？」

本気で立村につっこまれたら、たった今思いついたばかりのはったりだということがばれてしまう。彰子目当て、彰子に会いたい、その気持ちは嘘ではないにしてもだ。ただこの場から離れたい、突き詰めていけば点に突き刺さるから、なおさらに。

立村がどう感じていたのかはわからない。

「俺はしくじってばかりいるから、もし、うまくいかなかったらごめん」

一言あいっらしく答えただけだった。

「俺もその辺はご迷惑かけないように、うまくやるつもりだから安心してちょうだいな、りっちゃん。ま、これでご破算ってことで」

指先でじゃらつと、そろばんをはじく真似をした。

すべてこれで、ご破算だ。

しばらく取りとめもない話をしていたけれども、反対側から羽飛・清坂・古川の「不純異性交遊未満トリオ」が登場したこともあって、秋世は早々に引き上げることにした。なにはともあれ立村は秋世の頼みを「最愛の彰子に一刻も早く会いたい」という位置付けで受け入れてくれたはずだ。評議委員長で話もわかるクラスメートで親友で。互いの秘密を打ち明けあったということで、まずは幕が降りるだろう。そのあたりはあまり心配していなかった。

彰子に会いたくない、ということは絶対ない。

夏木父子と共に一足先に青潟へ戻った彰子に、詳しい事情と父上

の……心臓病だったらきつとんでもないことなんだろうが菱本先生の言い分だとどうもそうではなさそうだ……病状をうかがい、秋世なりに精一杯の「愛」を込めてリップクリームをプレゼントするだろう。それともあまった小遣いでもって、女子受けするような花束を買っていてもいい。日の丸印の黒い車でいちゃいちゃデートしやがった夏木少年にジェラシー燃やすひまあつたら、秋世なりのきざなやり方で取り返すのみだ。

「あれ、どうした、なぐつちゃん」

東堂が他のクラス連中とつるんでトランプに興じていた。神経衰弱だろう。ばばつとじゅうたんの上に裏向きでカードを広げ、一枚ずつめくっては同じ数字をあわせていく。記憶力がかなり必要だった。ただ船室の空気はだんだんあぶらっぽい匂いでむせそうだった。中には少し気分が悪くなつたのか、とど状態で横たわっている生徒もいた。同じ寝るのでも、集団の中でだったら不純異性交遊が生まれることもないのだろう。

「入るか？」

「いい、悪い」

東堂は「あつそ」とさりと流した後、さつそくスペードとダイヤの七カードをめくつた。さつさと秋世は船室から出ると、売店で見かけた女子向けの「名前つきバッチ」を一個買うことにした。もちろん昭代の分だ。お菓子の方がいいんだろうが荷物これ以上増やしたくない。

「名前つきバッチ」とは、「あつちゃん」とか「まりちゃん」とかいう風に、愛称がプリントされている丸いバッチだった。名前の印象によって、男子もの、女子ものに分かれているようだ。だいたい「みいちゃん」とか「ゆみちゃん」だと明らかに女子ということ。でピンク色だし、「ゆうくん」とか「たつちゃん」とかわりと男子向きのものはブルーだ。男子でこれをつけて歩くとなると、かなりいい根性しているか女子の尻に敷かれているかのどちらかではない

かと秋世は思う。一応「しゅうくん」は見つけたけれどもそんなの誰が買うものか。

さて、「あきちゃん」がいいか、それとも「あっちゃん」がいいか。

名前で呼んだこと、ないもんな。

第一、こういうがきっぱいのって喜ぶのかなあ。

彰子にはとてもだがこんなものプレゼントする気にはなれない。噂によると小学校時代、何を血迷ったか特撮番組の女性戦士「ピンクマン」だったかそのあたりのキャラクターカードを誕生日プレゼントにしたそうだ。お菓子のおまけについてくるカードで、夏木の奴、かなり小遣いを費やして手に入れた貴重なものだったらしい。とてもだが秋世には真似できない。というか、そんなものもらって彰子は喜ぶだろうか？ もっとも彰子はうれしかったらしく、秋世に思い出話としてにつこりと語ってくれたけれどもだ。

いや、彰子は何度も顔を合わせて話をしているし、いつしよに行動することもあるし、笑いあったりしているし、互いの好みはわからなくもない。でも、昭代は？ 数回、ごくたまにお客さんの顔して遊びにくるあの妹は、どういう好みしているんだろうか？ 「

「あっちゃん」バッチをもらってうれしいだろうか。

やっぱし、お菓子の方が無難かもなあ。

結局、昭代には、フェリー限定名物の「海峡クッキー」を五百円分買って終わりにした。味はどんなもんだか、わからない。

だつてさ、俺、昭代のこと「あっちゃん」とか「あきちゃん」とか、そんな風に呼んだことないのに、そんなもの、買えるかよ。

自分に言い聞かせた。船内アナウンスで、「あと十五分で到着です」と流れた。秋世はビニール袋に入ったお菓子をぶらさげ、片方の手をポケットにつっこみ、もう一度甲板に出た。手の中を感じる、彰子へのプレゼントを選んだ時は空の色のようなすっきりした気持ち

ちでいられたのに、なぜ妹にだと、海の泥ついた色で染まるのだろ
う。

第一部 11

この旅行が終わるまでは、絶対に聞かない。彰子さんの両親のことも、高校のことも、夏木とのことも。

船の栈橋を渡っていると、ぐらついた足元が頼りなくなる。青潟につく寸前まで少し風が強まったけれども、酔うほどではなかった。「なんかなあ、これから台風が来るらしいぞ。はええよなあ」

時期外れもいいところだ。菱本先生の独り言に秋世はうなづいた。「なんか空、くもってりやしませんか」

「南雲、どうした」

「人生いろいろで」

茶化しながら秋世は空を眺めた。ちろつと眺めてその後知らん振りしたまま、菱本先生はD組連中にむかいがつと怒鳴った。

「それでは、これからバスにクラスごと分かれて乗るからな。はぐれるなよ、まだ気を抜くんじゃないぞ！」

最後までこの先生は元気な人だ。いろんな修羅場が生徒たちには起こっているのに実は何にも知らないままにいるんだからたいしたものだと秋世は思う。大人が仕切っているように見えて、実は子どもたちがうまくコントロールしているのが青大附中の現状ではないだろうか。うっかり口に出すと、それを逆手に取られて反対にコントロールされてしまうので内緒にした。

クラスの整列準備が整い、背丈どおりに後ろから三番目に並んだ。

天敵羽飛もこちらをじろじろ見ていたけれども、大人気ないんでそのあたりはうまくすかしておいた。東堂がそばにいたので肩をつつきながら、

「結局、勝ったのか？」

尋ねた。先生たちにはもちろん内緒だ。ああいうトランプ遊びの場合、たいてい賭けをしていることがほとんどだった。お金を賭けることはめったにせず、主に食べ物のおごりあいに尽きるけれども修学旅行中にかぎっては、小遣いの範囲内でスリルを味わっていたらしい。秋世は残念ながらそこに割り込むことができなかったけれども、東堂はかなり稼いでいたらしい。あとでたかってやらねば。

「すっからかん、たかろうつつたって無駄だぜ」

「それは残念」

右の肩を軽く触られたようなけがした。男女一列ずつ並んでいる間を、立村がひとりひとり肩にさわりながら点呼を取っていた。それが立村流のやり方だとクラスの誰もが知っているはずだ。

「男子全員揃ってます」

一番後ろの奴までたどり着いた後、立村はすばやく先頭に戻り菱本先生に報告した。

「そうか、じゃあ先にだ。A組から乗り込んでいくから、俺たちはまだ動くなよ」

最後尾D組の定めだ。しばらく東堂相手にくっちゃべりながら秋世は待つことにした。かなり鋭い視線でにらまれているような気がするが、そんなの関係なかった。あともう少しで修学旅行も終わる解散だ。秋世はさっさと病院か彰子の家か、それとも両方か、向かうつもりでいた。立村に口走ったでまかせが本当になってしまったといえそうだけど、やりたくないというわけではないのだからそれもいいだろう。もともと秋世は流される形で動くのも嫌いではなかった。こだわりがない。絶対何かをせねばならないとか、何かをどうしてもしたいとか、そういう気持ちがありません感じられない性格だった。唯一例外は彰子にまつわるあれやこれやのことくらいだが、

それだつて無理に夏木から彰子を奪い取りたいという気持ちではないのだから、達観しているところもある。

少なくとも東堂のようにかつての彼女に未練たっぷり、そういうことはない。

それはそれ、これはこれ、すべての思い出に感謝するだけの秋世とは違う。

「おせえな」

A組から順々に、待ち構えているバスに乗り込んでいく連中を眺めながら東堂がつぶやいた。

「足踏み状態っていうんですか」

「そうさな」

C組のやたらうるさい集団が金切り声上げながら移動していった後、だいぶ経つのに菱本先生も、先頭の立村もまったく移動しようとしやしない。一番奥の方のA組バスらしき一台が移動し始めたのになぜか、D組は移動することすらしやしない。

「ほんと、なんでだろうなあ」

他の連中はまだ修学旅行を終わらせたくないらしくて、ちっとも気にしたしぐさもなく、前後ろの連中とだべっていた。女子たちも昨夜盛り上がった話題なのかテレビドラマの話の口をしていた。きつとこの人たちも、昨夜秘密のひと時を味わった連中が同級生の中に混じっているなんてことを想像していないのだろう。しかもクラスでは「昼行灯」扱いされている立村が自分から女子の部屋へ二人っきりの時を求めにいった……もし本人に伝えたら激怒されるだろうが、秋世としてはそう解釈した……なんて、信じる奴いないだろう。表面上に浮かんでいる現実と、その裏でうごめいている出来事とは百八十度違う。秋世も気づかなかったわけではないけれども、この昼間の明るさとは違うどろどろした世界が広がっているのを眼にするのは、やはり息苦しかった。

当の本人、立村はやはりお相手の清坂と先頭に並んでいた。背が一番低いからではない。評議委員が何事においても先導するという

青大附中の義務からなるものだ。秋世や羽飛よりはかなり背が低いと思うが、先頭の水口よりは高いはずだ。

どんな話してるのか。

もちろん悪いことが起こったわけではないにしても、立村と清坂との間には当然秘密が生まれたのだろう。ここで菱本先生およびクラスメートの前で秋世の知っていることをすべて暴露したらどんなことになるだろう。ふと考え打ち消した。しやれにならない話になっってしまうだろう。退学、停学、そのあたりは逃れられない。規律委員たる秋世は、青大附中の校則を一通り暗記しているから間違いない。

まあ人それぞれいろいろあるだろうけどさ。本条先輩だったらなんと言つかねえ。

後日、必ず報告することになるであろう、本条先輩との会話を想像しつつ、秋世は思わず頬を緩めた。教師や秋世が立村を責め立てなくても、ちゃんと担当者は待機しているというわけだ。

東堂が前の方でくつとのを鳴らしている。ちよいと気になった。

「おいおい、どうしたよ」

「なんでも」

どうも気持ち悪い。こいつは自分と同じく腹の中にはなんにもなく、たまっていたら下痢を起こすというタイプの男だった。ためつづけて宿便状態になった段階で、昨日の夜のように白状してしまうというパターンだ。不必要な隠し事なんて似合わない奴なのに。違和感がある。でもあまり気にしてもしょうがない。秋世は曇り空に向かってあくびをした後、ガムを一枚引っ張り出して口に放り込んだ。他クラスの女子が見当たらないから、意味不明のきやあきやあ声が聞こえることもない。「あら、あきよくん、ガム好きだねえ」と言いながらにつこりと顔を覗き込む子がいるわけでもない。

先頭の方で清坂に話し掛けている菱本先生が、ふいに秋世に眼を止めた。露骨に視線があつた。まずい、まだガム食っているとかな

って怒鳴られそう。慌てて口から吐き出した。銀紙でまだ味の残っているガムを丸め、ポケットに押し込んだ。何か言いたそうな顔をしているが、果たしてどんなものか想像つかぬ。でも次の言葉はありふれていた。

「南雲、水口、ちょっと来い」

先生のお言葉なら行きたくなくともいかなばならない。秋世は静々と前へ出た。秋世が女子の脇を通る格好ですり抜けると、髪の毛が少したわんだように感じた。前に出るほどでもなかった水口が秋世を覗き込むようにして何かを言おうとしたが、聞こえなかった。

第二の指示を菱本先生は、先頭できょつととしていた立村と清坂に出した。

「悪いがお前ら、先頭行け、立村、清坂、お前ら二番手で少し、いぢやいぢやしてろ」

口がぽかんと開いていくかわいそうな立村。こいつがもともと菱本先生を嫌悪しているのは誰もが知っている事実でもある。一瞬間気が凍りつく……ほどでもない。たとえ氷点下に体温が下がったとしても、誰もぶちぎれることを許しはしないだろうから。清坂が心配そうに立村を見つめたが、言葉を飲み込んで秋世に視線を送った。雰囲気を変える役目を求めている目だった。しかたない。秋世はさっそく、立村に両手を合わせて前に立ちはだかった。清坂の前に水口がとつと陣取った。

「りっちゃん、すまぬ、この借りはいつか！」

幸い、立村は菱本先生に殴りかからずにすんだ。これが規律委員の影なる仕事でもある。

とはいえ、なぜまん前に引っ張り出されたのかその理由がわからない。

いや、わからないわけでもないが。

よりによって、水口とふたりで先頭とは。菱本先生も秋世と水口との関係修復をさりげなくはかつてくれたのではないかと推測した。

それほど先生の前で修羅場を演じた記憶もないし、表向きはどちら
も紳士的対応に徹したはずだ。秋世も本心はともかくも、水口を影
で締めようとは思わない。

秋世は黙って、前の方で水口が清坂に向かい話し掛けるのを聞いて
いた。自慢下に、にきび面をぼりぼり搔きながら、自信たっぷり
に。こいつがなぜ、ここまでふんぞり返り始めたのかを秋世はだ
いたい読んでいた。おそらく、彰子の事件がきっかけだろう。昨夜菱
本先生が話してくれたところによると、水口病院への輸送はしな
かったみたいだし、病院の次期後継者もそれほど力を発揮しなかつ
たらしい。彰子の父のためにもそうだけど、自分のためにもこの点
はよかったと思う。

相槌を打っている清坂と立村。なんだか会話がぎこちない。こ
うやってそばで聞いてみて気づいたのだが、評議委員コンビのこの二
人、話していることが微妙にずれている時がある。完全にばらば
らの時はともかく、今は水口をはさんで互いの会話をつなぎあ
っているような気がする。意識しあっているのか違うのか、秋世にはわ
からない。それほどつつこまなくてもいいこともある。聞かない振
りをして脳みその中で洋楽ポップスを口ずさんだ。はるか二メー
トル先の先頭で菱本先生が、ジャパニーズイングリッシュの歌を歌
っているのにつられた振りをした。余計なことなんて、自分で遮断
してしまえば耳せんなしでも大丈夫。それが秋世のやり方だった、は
ずだった。

水口がいかにも物知り顔でしゃべっているあてにならないあれや
これやを聞かずにすんだはずだった。

「おい、なんだよそれ、同じ高校って青大附高じゃないのか？」
前の立村がいきなり水口に話し掛けるまでは、知らん振りしつづ
けられるはずだった。

なんでお前そんな不確定なこと、第三者にしゃべるっていう
んだ！

もし間違ってたらお前どうするつもりなんだ！ 黙れよ！

言葉が出ない。ここでは怒鳴れない。なぜならば、まだここは人前だから。

人前でがなりたてることは、南雲秋世にとって一番醜く、許されざることだから。

どこぞの誰かのように感情むきだしでわめくことが、嫌悪そのものだから。

「すい君、青大附高に行かないの？」

明らかに秋世を意識しているのか、水口は自信たっぷりの口調で答えた。鼻をすすっている。

「行かない、かもしれない」

何が「行かないかも」だ。お前落ちたらどうするんだ。

立村たちが驚いているのは、おそらく彰子も青大附中を卒業後別の学校へ進学することに違いない。あたりまえである。秋世だって初耳だったのだ。もしかしたら菱本先生にも知らせていないのかもしれない。なによりも一番可能性高いのは、水口が勘違いしまくっていることだ。水口ひとりが大好きなねーさんと学校進学したくて妄想をかましている可能性だってあるわけだ。

質問を切り返す立村の声は黙っていても耳に入ってくる。じんじんと口元がゆがんでくるのがわかる。前をしっかりと見て後、背を伸ばし歩いた。

「しないって、じゃあ行くとしたらどこに進学するんだ？」

清坂も即、立村の次に質問を投げかける。やはりどこかこの二人、噛みあっていない。なんだろう。

「水口くん、将来お医者さんになるんだよね？」

「もちろん！」

自信もって答えるなよ。医者って倫理が大切な仕事だろうが。そう簡単にぺらぺらと嘘八百並べられるのかお前！ プライバシーつてものを考えろよ！

「じゃあ青大附属じゃいけないの？じゃあどうして彰子ちゃんが同

じ学校に行くの？」

清坂の質問に関しては少し間抜けさを感じた。青潟大学には医学部がないのを失念しているらしい。

それにしても、そんなに水口の奴、彰子のことを考えていたのだろうか？ 秋世には正直信じられなかった。女子みたいに毎日寝てもさめても好きな子のことを考えていられるもんだろうか、仮にも男子とあるうものが。秋世もかなり彰子にはまいつている方だと自覚しているが、それでもどたばたが片付いた後はすっきりと別チャネルに頭を切り替えていた。もちろんちょこつと浮かぶことはある。リップクリームを購入したのもその流れだ。でも、修学旅行の貴重な時をずっと費やすほど、恋愛沙汰とは大切なものののだろうか。彰子のことなら、青潟についてからダッシュで向かえばいいことだ。何も水口みたいにならず、しつこく彰子彰子ねーさんねーさんと、自分の持ち札を見せびらかすこともないだろうに。

男だったらな、こつそりかっこつけるかなんかしるよな。

わけのわからぬ苛立ちは、決してやきもちなんかじゃない。

決して、誰がなんといつても、彰子のことを忘れていたなんていう、罪悪感なんかじゃない。そう思いたい。恋愛だけじゃなくて家族だって大切だろうに、そのどこがいけないんだろうか。胃が今になってきりきりと痛む。

だから、なんでこんなところで好き放題言っただよ！

「水口、いいかげんにしろ！」

先頭の立村が最初にはつと振りかえった。悪いがこいつには用がない。とぼけた顔して秋世を面白そうに見上げる水口の顔にどばどばとせりふを吐きかけた。

「まだなんも決まってるええことをだ、嘘八百ずらと並べやがって！ そういうのは決まってるにしろって言っただろうが！」

そう、まだ何も決まっていけないのだ。

彰子がどの学校へ行くかなんて、今ここで水口一人が知ったかぶりしてしゃべっているだけであって、本当のことはまだ、誰も知

らないのだ。それを止める規律委員長でどこが悪い。立て板に水状態でましく立ててしまいそうだった。なんでだか自分でもわからない。どこかでこのままだと、青大附中のアイドルの仮面がはがれてしまうことに気づいているけれども、そんなのどうでもいい。荒立つ波をそのままたたきつけて、すべて押し流してしまいたかった。彰子への恋心？ そんな甘ったるい感情ではない。自分の大嫌いなうじうじした泥水の気持ちだが、のど元まであふれかえっていた。

背中を軽く押される気配に、一瞬、息が止まる。横目で見ると立村がいつのまにか秋世の隣に立っていた。背中を押すようにしている手が、妙に生暖かかった。

「とにかく早くバスに乗ろう。ほらなぐちゃん、とにかく歩こうよ」
今朝は顔面蒼白で泣きそうな顔をしていたくせに。

立村の性格が仲裁専門だということくらい知らないわけではない。それでもこの時だけは、水口に怒涛のごとくわめかせてほしかった。振り払いたい。後ろの方で男子連中がいきなり「ひゅーひゅー」と冷やかし声をかけていた。何を言い合っているのか、あいつらだつて気づいていない。隣の列の女子たちが秋世を見つめてなにやらひそひそ話をしている。

俺だつて怒鳴りたい時はあるって！

どうして一瞬のうちに自分は、周りの空気を読んであわせてしまいたくなるのだろう。

立村が背中のリュックの紐をつかむようにして、無理やり前に押し出そうとしているのがわかる。たぶん水口から引き離そうとしているのだろう。秋世なりにもその友情表現には答えなくてはいけない。言葉を返すにも、立村を傷つけないような言い方が思いつかず、秋世はめいっぱい虚勢を張ったまま歩きだした。

幸い、立村は秋世の親友だった。

それ以上余計なことを言わず、ただ黙って背中の紐をつかむだけだった。二人で菱本先生の近くによっていこうとすると、ぐいと引っ張られる。立村がブレーキをかけているのだ。さっきあれだけ腹

が立っていたのに、なぜかおかしくて口の中だけで笑った。

バスの停車位置までたどり着いた。菱本先生が途中立ち止まると、秋世の方だけ見てにやりと笑った。ちょうどぶちぎれていた真つ最中の顔を引き締め終わった後だった。

「先生早いつすねえ」

隣の立村が無愛想なのはさておく。このあたりは菱本先生も同じらしい。まったく立村を無視したまま続けた。

「すいはどこだ？」

「さあ」

「じゃあ、来るまでのお楽しみだな」

何が来るまでのお楽しみなんだろう。秋世と水口をふたりだけ先頭に置いた理由がわかるようではなかった。この先生は以前から、秋世の性格をなんとなく見抜いて適材適所とばかりに配置するところがあった。あまりにも「らしくない」と言われた規律委員のきっかけも菱本先生だった。クラスでいろいろな事件が起こるたび、菱本先生は立村よりもまず秋世に声をかけていた。もっとも立村は別ルートから聞き出してさっさと動いていたので先生が隠す意味もないわけだがその辺は内緒だ。昨夜東堂の告白も、菱本先生がうまくセッティングしたのではないかとひそかに秋世はにらんでいる。

今も、何かたくらんでいるのだろうか。水口もセツトということはたぶん彰子がらみだろうと読んでいるが、いかに。

「やだなあ先生、さっさと言ってくださいっすよ。俺と、先生の仲でしょ」

露骨に顔をしかめる立村は無視する。

「やはり、愛は平等でないとな」

意味不明のお言葉を賜る。何が平等だ。やはり彰子のことと重ねていると観た。

立村が物言いたそうに秋世を見やった。このあたり、すねに傷があるゆえに、露骨に尋ねられない様子だ。ようやく水口を先頭とする男子連中が追いつき、二歩ほど遅れて女子が到着した。すでに整

列という状態ではなかった。

「ヒントは、駐車場だ。見てみるよ」

水口が隣に並ぶ寸前に、菱本先生は秋世にだけささやいた。男同士のちよつと気味悪いウインクだった。また立村が唇を噛んだまま、そっぽを向いていた。

言われた通りに視線を向けた。すでに隣に並んでいたバスは三台とも出発していて、あとはD組が乗り込むのを待つだけだった。向かいの白いレーンを越えて、黒のライトバンっぽい車が留まっていた。目だつといえばそれだけだった。

黒のライトバン？

頭がくるくると回らない。何かあるようでないようで。

黒？　なんだこれ。

網のかかった窓ガラス。潮風になびいている日の丸の旗。

夏木だ！

彰子さんがいる！

水口の視線はバス最後尾の窓ガラスに向けられていた。それでも一テンポ早く前に出ることができたのは、日の丸の意味を即、理解したからだろう。隣の女子らしい誰かを突き飛ばしてしまった。いつものアイドル面した秋世だったら頭を下げてから行くだろう。そういう常識が、意識に上ってこなかった。その隣をすり抜けようとねずみみたいな奴が頭突きしてきた。

「な、南雲、ずるいぞ！」

ずるいも何も、気づくのが遅れたのは水口、お前がとろいのだ。先着必勝。秋世が先頭のヘッドライトを腹くつつけてすり抜けようとするのを邪魔しようとする水口。聞こえた方がいい、ののしつた。「邪魔だつての、いいかげん邪魔するんじゃないやねえっていつてるだろうが！」

「やだよ、先に通せよ！」

「誰が通すかって！」

シャツが見事に泥で汚れてしまった。いつもの自分ではないからそんなものでもよかった。とにかく、一歩でも早く、誰よりも早く、たどり着きたかった。たった一人、その言葉を信じるこのことができる人がそこにいる。

俺は伝聞系は嫌いなんだよ。

息が詰まってその捨て台詞は使えなかった。タラップを大またに二段踏み越え、初日と同じバスガイドさんの笑顔を無視して後、秋世はバスを揺らしながら最奥の席に突進した。自分が赤い布を見せられた闘牛に化けたのだと、今感じた。

「彰子さん！」

後ろから誰かが追ってくる。脇でまたクラスの連中が騒いでいる。そんなの知ったことか。今の秋世は、規律委員長でも青大附中のアイドルでもなんでもない。ただ、生身の奈良岡彰子と会いたがっている、それだけの人間だ。彰子にだけかぶってみせる完璧な王子様の仮面を探り出しながら、今の自分はもしかしたら般若の顔をしているかもしれない、そんな気がした。

もみじ手で微笑んでいた、ふつくらあんまんのお姫さまは、修学旅行はじまりと同じ、やわらかいまま秋世と……水口をも……迎えるように両手を伸ばした。抱きとめるようなしぐさだった。もちろん飛び込みはしなかった。秋世の方が一気に抱きしめたかった。それにしても腰ぎんちゃくの水口が邪魔だった。自分の中学生という年頃がかせだった。

「秋世くん、すいくん、心配させてごめんね」

飛びつく代わり、秋世はポケットからすっかりしわくちやになった袋を取り出した。

「これ、おみやげ。使ってくれよな」

少しだけ悪っぽく言ってみた。

「うん、ありがとう。ほんと、ごめんね」

「あのさ、俺も、俺も」

「まったく、何を考えているのか後ろから、水口が不器用にばんぱんの袋を引つ張り出そうとする。もうつめこみ終わっているのだから、いいかげんやめろよといいたい。あとでかばんのチャックが閉まらなくなったらどうするんだ。ばたばた水口がやっている間に秋世はささつと彰子の隣をキープした。彰子も嫌がらなかった。袋の上を何度も指ずらしして、何が入っているのかを確かめようとした。耳元に、秋世の持つきざな性格すべてを注ぎ込んでささやいた。

「これ、今開けないでさ、俺と二人の時だけにしてくれないかな」
「え？　今はだめなの？」

分けられるものだったらきつと彰子は、みんなにおすそ分けしてしまう。そんな彰子の性格をしつかり読んで、秋世はプライベートなものを選んだわけだ。誰にも、そうだ、誰にも見られたくない、秋世のためにしか使ってほしくない。

「だってさ、俺、規律委員長さまだから、校則破れないわけ」

「規律委員長さま？　なんかあきよくん、面白い言い方するね」

きつと彰子の唇には、少し濃い目の赤が似合うはずだ。いつもふつくらピンク色の唇はそのままでもいいけれど、秋世とふたりの時だけは、どうか大人の色を選んでほしかった。

ささやかな願望と、欲望が入り混じった、紅の色。

「じゃあ、病院で開けるね」

「おばさんたちには絶対内緒だよ、彰子さん」

通路に突っ立ったまま、水口がようやく何かを取り出した。単行本くらいの大きさで、紙のブックカバーがかかっていた。

「これ、ねーさんにやる」

まだ第二弾の連中が乗り込んでくる気配がない。秋世を無理やりどかさうとした。動く気なんてさらさらなかったのに、彰子の方が立ち上がってしまった。やはり同じような彰子の笑顔は、水口にも向けられている。ふんわりふくらんだ唇が水口に向かって開いている。

「え？ そんないいのに、大丈夫だよ、すいくん」

秋世が彰子にもたれかかられたかつこうになった。いきなりぴんと背筋を伸ばして水口が本を差し出した。なんの本だか、わからない。

「五年間の過去試験問題集なんだ」

勝ち誇ったように、鼻の穴を膨らませて、水口は告げた。

「絶対、絶対、参考になるよ」

彰子は小首をかしげて受け取り、ぱらぱらとめくった。笑うと目が顔に溶け込み温かくなる、そんな表情でお礼を言った。

「ありがとう、すいくん。私、本当にみんなに大切にされているんだね」

立村と清坂の評議委員コンビだけが手をつないでバスに乗り込んできた。先頭の席に半ば無理やり、清坂を座らせている様子だった。確か清坂の席はもつと後ろ側だったのではないだろうか。立村自身が座る寸前、秋世の方に両手で、空気を平行にたくしぐさをした。お座りください、そのまま、という意味と読んだ。ピースサインで答えておいた。

「あ、あいつら手つないでる、やらしー」

ふたりをからかうのではなく、彰子に話し掛けるネタとして水口が口走った。

彰子も少し驚いたようすだった。

「ほんとだね。どうしたんだろう？ 美里ちゃん」

このあたりの事情を口に出すのははばかれる。

「やっぱりあれがきっかけなのかなあ」

「すいくん、約束したよね。女子に変なこと、言わないこと」

「ごめんなさい」

けっ、声変わりしてるくせに変なことしてるんじゃないよ。

秋世と水口との間で彰子の隣席争奪戦が起こってからすぐに、外

でいきなり組みじゃんけんが始まった。立村たちだけが除外されらしい。隣バスの席順はみな決まっている。本来だったら男子は前列にかたまり、女子が後列に並ぶのが決まりだった。規律委員長が率先して破るのも本来だったら許されないことだろうが、先ほど担任じきじきに特例をひいてくれたのだから、このあたりは自分らに都合よく解釈しておこう。

「いっせーのっせっ！」

「グツツパーで、合った人！ 合った人！」

結局窓際に秋世が、その間に彰子、その隣に水口という順番で収まった。それしか妥協案はない。もともと車に弱い秋世のことを気遣って彰子じきじきに、

「いいよ、秋世くん、窓際にくれば？」

と言ってくれたからこそ。ありがたかった。

「でも、いいのかな、ここで」

「俺、動く気ない」

「俺も！」

女子たちにまたいろいろ言われるだろうが、そんなのかまいやしなかった。秋世と水口は矢継ぎ早にもしろいと思えるネタを並べ、彰子に話し掛けるだけだった。決して彰子の両親の事情や病院ネタなんて持ち出さなかった。時折水口が、「俺、ちゃんと清坂にあやまったよ、それでいいだろ？」と意味不明の言葉を発し、意味ありげに彰子が水口を見つめ返すのが少しいらだつくくらいで、秋世も自分なりに四日目以降のことを話し掛けたりした。

俺は約束したんだよね、親衛隊長さまにさ。

夏木の、白線学生服姿が眼に浮かぶ。

真正面の黒い車と日の丸が。

俺は、彰子さんに決して、修学旅行中いやなこと思い出させないってさ。

だから、どんなに知りたくても、聞き出したくても。

この旅行が終わるまでは、絶対に聞かない。
彰子さんの両親のことも、高校のことも、夏木とのことも。

第二部 12

誰も、ここにいる奴の中で誰も、ばあちゃんいなくなって悲しいって思ってる奴、いねえよ！

校舎へバスが到着すると同時に、事務員の人が菱本先生のもとへ駆け寄ってきて何か説明しているのを目にした時は、自分のことだと気づかなかつた。ずっと彰子をはさんで水口と取り合いやりあいをしていたわけだから。その後いきなり菱本先生が最奥の席まで走ってきて、

「南雲、これからすぐに降りて、タクシーに乗れ。とにかく先に下りろ」

と命令された時も、また菱本先生の冗談が始まるのだろうと脳天気な想像しかしていなかった。青湯の重たい空と、少し汗ばむ空気が秋世が最後に彰子へ投げキッスを送った時までは、祖母がもう声なき存在としてたゆたっているとは思っても見なかった。通路脇の入り口で立村だけが、黙って秋世を見つめていた時も、それが何なのか気づかずにはいた。

そつだ、すべては自分だけが、何も知らずにいたわけだった。
まさかだろ。

今の秋世にはそれしか言えなかった。

「お前のおばあさんが、先ほど、御亡くなりになられたそつだ」
菱本先生は秋世を生徒たちの集団から引き離し、一度立ち止まり

告げた。

さすがに歩きながら人の死を語るのはまずいと考えたのだろう。

「うちのばあちゃんが」

繰り返したのは、無意識だった。

「今から、ここに来るようにと、ご両親から連絡が入っている。これを運転手に見せて、そのまま行け。タクシー代はあるか？」

渡されたメモには「青潟中央セレモニーセンター」とつづられていた。

「セレモニーセンターって、何？」

間抜けな言葉を繰り返している自分がいる。どこか自分が自分でないようだった。

「つまり葬儀場だ」

先生の言葉も、事務的でかつ、静かだった。

「わかりました」

「気をしっかり持てよ」

「はい」

余計な慰めをしてこない菱本先生の態度に、ひそかに感謝した。

ここで他の連中から「可愛そうに、辛かったでしょう」「耐えるのよ、がんばって」と白々しいお悔やみを言われても、たぶん秋世は受け入れられそうになかったから。

うそだろう？

だってばあちゃん、出発前はぴんぴんしてたじゃん。

ちゃんと土産持つてくって。

いろいろ迷ったあげく、テレホンカードと石鹸を購入したのにだ。入院先で顔を洗ったりなんなりする時に、石鹸がかなり必要だと聞いていたから、絶対役立つものを選んだつもりなのにだ。秋世にはわからなかった。まだその事実が現場でひっくり返されることを、どこかで望んでいる自分もいた。

菱本先生がタクシーを捕まえると、「ここまでお願いします」とセレモニーセンターの場所を説明した。秋世はただ突っ立ったまま、

先生のすることを見ていた。後ろ扉が開いて秋世が乗り込むと、菱本先生はゆっくりとひとつ頷いた。

車から降りて後、やたらと白さが目だつ華やかな建物の中に入っていた。ここが葬儀場なのだということだけは、「故〱葬儀会場」などと書かれたどでかい看板と、パチンコ屋で見かける花輪などで認めざるを得なかった。

まったく、これ嘘だろ。

「なくなられた」と聞かされた瞬間は息が止まりそうになった。それは嘘ではない。

でも、一呼吸した後冷静に振舞っている秋世自身がいる。

今菱本先生が口走った言葉は、たぶん何かの間違いだと、絶対ありえない仮定をしている自分がいた。

でも、もし本当に……まだ秋世は認めていなかった……祖母が息を引き取ったとして、まず連れて行くべき場所は、病院か自宅かのどちらかではないだろうか。なんでいきなり葬儀場、もしくはセレモニーホールなのだろうか。このセレモニーホールという建物自体が陰気っぽくなく、下手したら結婚式もやれそうなムードの場所だからなおさらだ。さすがに飾られている花のほとんどが白い菊ばかりだし、その辺はなんとも言えないが。

大理石にはさまれた受付らしきところに向かい、黒いスーツの女性に尋ねる。

「すみません、南雲といえますけど」

年配の女性がすぐに頷いて、やさしい表情のまま秋世を案内してくれた。

作り笑いでもなく、ただ楚々と自然に。

やっぱり、嘘だよな。

エレベーターに乗り、三階で降りた。連れていかれた場所は、和室だった。修学旅行の旅館に少し雰囲気似ていた。それぞれの部屋に立て看板のようなものが置かれていた。「南雲家ご家族様」と、

黒に白い文字でつづられていた。修学旅行中食事を取る時に使われていたものと同じだった。

頭を下げて、女性が去っていった。他の遺族たちとバツティングしないように組まれているらしい。引き戸の前でもう一度唇をかみ締め、秋世は手をかけた。

六畳の部屋が襖でもって仕切られている部屋の中に、両親と祖母がいた。

祖母は布団の中であお向けになり、横たわっていた。ただ寝ている時と同じに見えた。

認めざるを、得なかった。

両親の顔を交互に見つめ、秋世は靴を脱いで部屋に上がった。

「ばあちゃん」

それしか言葉が出なかった。父が黙って自分の隣の座布団を叩いた。母の隣と父の隣に一枚ずつ敷かれていた。促されるまま、そこに正座した。

「秋世、おばあちゃんに、挨拶しなさい」

母がかすかに涙目で秋世に頷いた。

目の前で横たわっている祖母の姿は、どうみてもただ寝ているだけにしか見えなかった。なのに、近づけば近づくほど、雰囲気が硬くなっていく。呼吸が止まり、口の中と鼻の穴から白い詰め物が見えた。かすかに化粧されているのか、口紅が施されていた。真上を見上げる格好で、目を閉じていた。

「ばあちゃん、俺、帰ったよ」

声をかけた。

「土産、買ってきた」

かばんを背負ったままなのに気づいた。着替えや土産を全部詰め込んだかばんの中に入れておいたはずだった。ちゃんとそこには、祖母のために買ったテレホンカードとレモンの形をした手作り石鹸が入っているはずだった。引つ張り出す前に、昭代に用意した海峡

クッキーが邪魔だったので取り出した。枕もとにちゃんと一枚と一個、並べておいた。

「見えるよな、ばあちゃん。旅行、ばあちゃんのとるてるぼうずのおかげでさ、晴れてたよ。四日目の夜だけすげえ雨だったけどさ、あとみんな、いい天気だったよ。船も揺れないで、俺、酔わないですんだしさ」

聞こえているならきつと目を覚ますはずだ。小さい頃から、秋世が風邪を引いて熱を出し、のどが乾いて眠れない時も祖母はすぐ、ストローでジュースを用意してくれた。両親が気づかないことでも祖母だけはすぐに「秋世どうしたの、元気ないねえ」と声をかけてくれた。最近は眠りが深くなったせいかな、あまり言われなくなったけれども。でも、こうやって枕もとで話し掛けたら、秋世の声で目覚めないわけ、ないはずだ。

「ばあちゃん、起きてよ。起きて話、しようよ」

「しゅうくん、もういいでしょ」

母が手首を軽くつかむようにして、後ろへ戻そうとした。なぜかかっとなった。

「よかねえよ！」

母の引きつった表情に、また血が滾りそうになる。なぜ、なぜなのだ。修学旅行前日まであんな元気だったのにだ。いったいなぜ、いきなり、動かなくなるのだ。声も出さず、寝てるのに化粧なんかして、ただ硬くなったままにいるなんて、そんなのはばあちゃんじゃない。それに、こんなところ……セレモニーホールなんてところに、なんでいきなり運ばれているんだろうか。秋世は絶対、ばあちゃんが死ぬわけじゃないと思っていた。絶対に、秋世が死ぬまでばあちゃんは生きていると思っていた。年齢の差と理屈は頭にあるしそんなこと言ったら馬鹿にされるから言わなかったけど、絶対に死ぬわけなんてないと信じていた。

「なんでだよ、ばあちゃん、なんで死んでるんだよ、俺、なんか悪いこと、したかよ」

「秋世、落ち着きなさい。おばあちゃんが悲しむよ」

「だって、ばあちゃん死ぬわけねえって」

ここまで口にしたとたん、のどの奥に熱いものが突然こみ上げた。吐きそうだった。口を手で覆い落ち着かせようとする。でもわつと吐き出してしまわないとどうしようもない。それが涙のほとばしりからなる前兆だということを、秋世は今まで忘れていた。最近泣いたことなんてなかったし、泣かされることもなかったし。どうして今になって、忘れていた涙が溢れ出すのだろう。まるで、めそめそする女子みたいだった。自分をいくら叱っても、「俺は青大附中の規律委員長だろうが！」と言い聞かせても、無駄だった。かかっている布団の端を握り締め秋世は祖母の胸に顔をうずめようと、はつと気が付いた。かすかに漂う匂いには、祖母の持つ甘い香りが消えていた。近づいて見つめた顔の上には化粧で隠されたとはいえ、紫の斑がぼつん、ぼつんと残っていた。

ばあちゃん死ぬわけないのに、なんでだよ。

こらえきれなかった。秋世は顔をうずめられず、仕方なく一歩ひざで後ろに下がった。母がまた手を差し伸べてくれたが思いつきり払った。

「秋世、トイレは部屋の脇にある」

父の言葉が救いだった。秋世はトイレに飛び込み鳴咽し続けた。

なんで、死んじゃったんだよ。

思いつきり泣くと、涙腺が限界を向かえてからからになってしまった。

のども噎れた。

こんなところで一人うじうじやっているなんて、自分の流儀じゃないはずだ。なのに祖母のことになると、どうしても自分がおかしなってしまう。

彰子のこと絡んでいても、どんなことが起こっても、まず最初に秋世にはばあちゃんありき。ばあちゃんの顔をまず最初に見るこ

と、朝起きたらばあちゃんに「おはよう」と声をかけ、寝る時も「おやすみ」と挨拶を交わす。おいしいものをもらったらまず、ばあちゃんに半分渡すのが習慣だった。両親では決してなかった。何かうれしいことがあったら……もちろん小学校の頃限定だが……まずはばあちゃんに報告していた。青大附中に合格した時も、受験会場から電話をして、すぐに出た母を追っ払い、ばあちゃんに代わってもらった。彰子のことだってそうだ。彰子はばあちゃんにものすごく気に入られていた。秋世がそれまで付き合っていた女子のことをどのくらい知っていたかは知らないけども、ばあちゃんは彰子が将来秋世のお嫁さんになってくれることを、真剣に祈っていた。ばあちゃんが望んでいて、自分も大好きな子でないと絶対結婚したくないと子どもの頃から思っていた。

いきなりすぎるって。なんでだよ。

なんでだよ、を繰り返しているうちに、聞き忘れていたことに気が付いた。

なんで、ばあちゃん今日死んだんだよ。よりによって、なんでだよ。

顔を水で何度も洗った。髪の毛がだいぶぼさぼさになったがかまうことない。秋世は部屋に戻った。いつのまにか、部屋には人が増えていた。いつもならば髪の毛を至急ムースで整えたりするのだが、それすら面倒くさかった。

「しゅくん、瑞希おばさんよ」

秋世は一礼した。母の声がとがっていたのは、やはり昭代がおばさんの隣にべたりとくっついて正座していたからだろうか。秋世たちの隣に、ざぶと二枚ぶん離れた格好で座っていた。紺色の半そでワンピースを着た昭代は、髪の毛を一本にまとめ低く結んでいた。いつも見かける時のように、秋世をおどおどしながらにらんでいた。

「秋世くん、おひさしぶりね。このたびは」

「そついう他人行儀なことやめてよ」

母がまた、刺のある調子で割り込んだ。

「今、秋世も修学旅行から帰ったばかりで、まだ何も話していないのよ」

「まだ話してないの？ 姉さん」

瑞希おばさんもやり返した。母の妹に当たる人なのだが、秋世の観る限り決して仲の良い姉妹には見えなかった。秋世の前では「あら、秋世くん大きくなったわねえ」とおざなりのお世辞を口にするし、笑顔も見せる。でも母にとっては「娘の気持ちを奪った女」なのかもしれない。たまたま秋世が入院している時に預けたら、実の母よりも育ての母となった瑞希おばさんの方に懐いてしまった。決して帰りがらなくなってしまった。それゆえの、恨み。

このあたりを追求していくと、秋世が幼年時代、入院生活を送っていたことがすべての理由になりそうだった。あえて口にせず、秋世は父の隣に座った。

「でも姉さんも大変だったわよねえ。いきなりですものね、病院で」倒置法を使い、秋世がひそかに聞いたかったことを尋ねてくる瑞希おば。

「今晚は身内だけの仮通夜だから、あんたたちもここで泊まってく？」

話を無理やりそうとしている母。ぴんときた。秋世は割り込んだ。

「母さん、なんであちゃん今日倒れたの」

当然、聞かねばならない事情のはずだった。おばさんも昭代もおそらく、聞いているのかもしれない。なのにまた、秋世だけ聞かないなんてことになったらいやだ。彰子のことともそうだった。立村のことともそうだった。なぜかこのごろ、みな秋世に本当のことを語ろうとしない。その理由すらも見当つかないまま、ひとり取り残されていく。ばあちゃんのことだけは、誰よりも先に、秋世が知らないくなくてはならないはずなのに。

ばあちゃんは、俺が一番だったんだ。それなのに、なんで俺にはなんも話してくれないんだよ！

「病院でつて、どういふことだよ、母さん」

「秋世、止めなさい。母さんは疲れているんだ」

父が声を荒げた。そんなの知ったことか。父だつて、陰ではあちやんのことを「困つた人だなあ」とため息ついていたじゃないか。

「わがままだなあ」と。母さんだつて、本当はもつと病院に付き添つてあげてたつていいはずだろう。なのに、なんでなのかわからない。秋世にはまったく理解できない。

「病院でね、話している時にね、いきなり」

母は言葉をとぎらせた。父がまた「母さん、今は黙つてなさい」とやさしげに語る。でもそんなの許したくない。秋世は母の真正面にまわり、ひざとひざをつけるような格好で正座した。じつと母の目を覗き込んだ。そらそうとする母を、逃しはしなかった。

「おばあちゃん、気分が悪くなつて、病院でそれで」

またごまかそうとするのか、言葉を飲み込む母。最後まで言わせなかった。

「いいじゃないの、姉さん、悪いことしたわけじゃないんだし」

あつけらかんと、本当は全然悲しんでいないんだろうという口調でもつて、瑞希おばさんは秋世の知りたいことを、すべて語つてくれた。それこそ、秋世のほしい言葉だった。隣でまだ、びくびくしながら秋世がにらみつけている。片ひざを母の座布団に、もう片ひざは瑞希おばさんに向け、

「教えてください」

そう告げた。

そばで目を伏せ顔を覆っている母からはこれ以上言葉が出てこなかったけれども、瑞希おばさんはさらさらと、その辺のワイドショー話をするようなので語りつづけた。

「おばあちゃんの体調がおかしくなつたのは今日の十一時近くだったわよね。姉さんがいつものように着替えとか準備をしに病院に行った時に、何かがあつたらしいわね。姉さんは忘れているかもしれない

ないけど、隣で寝ていた人に聞けばわかることだから無理には聞かないけど」

「やめてくれませんか」

父も相当いらだったのだろう。中腰になりおばさんを制そうとした。秋世はおばさんから目をそらさなかった。続けてください、のメッセージのつもりだった。

「いいじゃないですか、樹さん。私は秋世くんに話しているんだから。それにどうせばれることなんだから」

「やめて！」

母も叫んだ。いきなり激しく嗚咽しだした。どこかうそ臭い。秋世は知らん振りをしたままおばさんを見つめた。

「別に姉さんが悪いことをしたわけでないって、私だって言ってるじゃない。泣いてあげるならおばあさんのために泣いてあげなさいよ。これでも一緒に暮らしてきたんでしょ。とにかくそこらへんでおばあちゃんが興奮してしまっただけ、脳血栓だった？ それがね、切れちゃったのよ。病院だったからすぐに処置したのだけど、やはり、歳だったからねえ。あつかなかったわ」

畳を叩くようにして泣き伏す母が醜い、そう思った。

秋世は尋ねた。

「そんなに、早かったんですか」

おばさんは芝居がかった風に、大きく頷き、ため息をついた。

「かなり大きな声で話していたという話よ。興奮したのよねきっと。私もさつき、病院の先生に挨拶に行ってきた」

「なんでそんなことするんですか！」

激昂しているのは父だった。ついに立ち上がった。もともと声を荒げることの少ない父なのに、なぜ、そんなに憤るのか秋世にはわからず、その理由を知りたいと思った。

「これはうちの家族の問題であって」

「いいえ、私たちの問題でもあるのよ」

きっぱり、恐れる風でもなくおばさんは言い切った。

「しつこいようだけど、姉さんが悪いわけではないのよ。ただ、これからいろいろ面倒なことが起こった時に、おばあちゃんの話私たちも知っておく必要があるんでないかしら、と思っただけなのよ。今は無理に聞かなくてもいいけど、時間がくれば知られることなんだしね」

「そんな、ここで言わないでください」

かすれた声で母が哀願した。秋世は一步、母から離れた。立ち上がり、見下ろした。

「なんで隠す必要あるんだよ」

自分でも、こんな怖い声が隠れていることを、今の今まで気づかなかった。

「ばあちゃんがどうして死んだのか、聞いちゃ、なんでいけないんだよ」

言い終えることができなかった。いきなり後ろから肩を掴まれ、身体をひねった状態のまま頬に張り手を食らわされたからだった。相手ははもちろん、父だった。

「いいかげんにしろ！目の前におばあちゃんがいるのになんでそんなこと、言えるんだ！ばあちゃんだって悲しんでいるぞ。お前がこんなに、こんなに汚い奴だと」

いつもならここで引く。父に逆らったら半端な仕置きではすまないと体験済みだ。でも今の秋世は何も怖くなかった。ただ、真実が知りたかっただけだった。

ばあちゃんのことを心配だったら、ちゃんと話すべきだろう！母さんだって、ばあちゃんが死んだから泣いてるんじゃないやねえだろ！

誰も、ここにいる奴の中で誰も、ばあちゃんいなくなつて悲しいって思ってる奴、いねえよ！

ついさっき、修学旅行青湊行きのバスの窓べに、彰子の顔を見つけた時。

秋世も、水口も無我夢中で飛び出した。

おととい、彰子が夏木親子の車で青潟へひとり帰ろうとした時、秋世も、水口も、夏木息子もそれぞれが彰子を想ったはずだ。

家族でない彰子にすら、こんなに一途に思えるのに。

なんで、父さんも母さんもおばさんも昭代も、ばあちゃんのために泣こうとしないのか。

それどころか、死んだ理由を隠しあつてばれないように自己保身に走っている。

泣いているのは、秋世ひとりだった。

殴られた時の痛みで頬がちくちくした。あごが少しずれたような気がした。相変わらずおばさんの隣で昭代がくつついたままだいる。自分とはちつとも似ていない、目のきつい顔。母さんよりも、おばさんの方に似ている。おばさんも昭代の髪の毛を片手で整えながら、小さい声で何か話している。

「すみません、少し家族だけにしてくださいませんか。隣の部屋、空いてますから、お茶を用意してもらいましょうか」

使い物にならない母の代わりに父は、隣の六畳間を襖で区切り、座布団とテーブルを用意しはじめた。いつもなら手伝わないわけにもいかず荷物運びをするのが秋世なのだが、そんな気にはなれなかった。父が一人で襖を一枚ずつあわせ、お茶のポットを用意するため電話で注文しているのを、立ったまま眺めていた。母の泣き顔に付き合わされるのもいやだった。

おばさんは立ち上がり、まだひつついている昭代の顔を見下ろし、頬を撫でた。

「昭代もこちらに連れてきて、いいですか」

「それの方がいいですね」

事務的な口調で、父がおばさんと昭代の落ち着ける場所をこしら

えていた。やはり母とおばさんが犬猿の仲だったのは本当だったのだ。誰もが仲良しの兄弟姉妹であるわけではないのだ。いろいろな事情を聞き知っていても、どこかでまだ、暖かいものが流れることを期待している自分がいた。きつとどこかで「姉さん、ごめんね、言い過ぎて」と謝ってくれるんじゃないかと祈っている秋世がいた。でもおばさんはまったく振り返ることなく、言われた通りに自分の席をこしらえ、静々と襖を閉めた。

「あとでうちの人も来ますから。ね、昭代、みんなもう少しで来るからね」

小さな一声。

「お父さんとお姉ちゃんは？」

「お仕事終わってから来るわよ。さびしくないからちよつとだけ我慢してね」

顔が見えなくなつて安心したのだろうか。昭代とおばさんとの会話が少しだけ聞こえた。

少し家族だけ、かよ。

もう父にとつても母にとつても、昭代は家族の一員ではない。

昭代にとって、秋世は決して、「お兄ちゃん」ではない。

秋世はかばんから「海峡クッキー」を取り出した。母のしゃくりあげる声だけが六畳に仕切られた部屋の中で響いていた。父はタバコを吸いながら、あぐらをかいた。秋世の方を見なかった。息苦しくて、ついいつものくせがでた。

「土産、持ってきた」

短く告げ、自分の方から菓子包みの包装紙を破いた。

第二部 13

俺がなんで昭代にそんな、最低最悪なこと、しなくりやなんないんだよ！

もし、そんなこと他の野郎がしようとしたら、たぶん俺、半殺しにしてやるさ。

父が話していたところによると、祖母の葬儀は互助会の積み立てを使つて行つたそう。やたらと手早く、病院から葬儀会場に遺体が運ばれてきたのも、思ったよりも両親やおばたちがのんびりしている風に見えたのも、そのあたりが理由らしい。つまり、葬儀関係のこまごまとしたことは、ほとんどが会館の担当者が片付けてくれて、両親は主にその打ち合わせにあわせて話をしていけばいいだけだという。もちろん、死亡届、通夜および葬儀際の細かい決まりごと、その他通夜ぶるまいなどの準備は必要だが、直接立つて話を進める必要はないらしい。

仕事を途中で放置することはできない、という父の言い分もあつて、部屋には二台、黒電話が設置された。途中、担当者の男性と静かに話を進めている間、母は秋世を別の部屋へ連れていき、バックを手渡した。

「これ、着替えなさい」

「制服で、いいんじゃないのか」

「こんな派手な制服で喪に服する人が、どこにあるの。しゅうくん、まずあんた風呂に入つてきちんとしなさい。それから黒のスーツ、これ着なさい」

あけてみると、生地もしっかりした黒の上下スーツがビニール袋に入つたまま収まっていた。何時買ったんだろ。こういうタイプ

の服を買ったことは一度もなかった。

「それと、靴、スニーカーじゃ動けないから、これを履きなさい」
また同じく、黒光りした男性用の革靴が出てきた。これも新品だった。

「こんなの、何時そろえたの」

自分でもこわばっていると感じる。そんな口調で秋世は質問した。
「こういうのは常識じゃないの。つべこべ言わないで、早く言う通りにしなさい」

もやもやするものの、隣では祖母がぐっすり寝ているし、母に口答えしたくはない。秋世は言われた通り風呂場へ向かった。なんだから、準備、手際、よ過ぎる。

絶対、なんか変だ。

遺族控え室にはそれぞれ風呂が備え付けられていた。和風旅館をおとなしめにしたような感じだろう。のんびり浸かるような気分でもなくて、秋世はすばやく汗だけ流し言われたように着替えた。一気に体温が上がったせいかな、突然眠くなる。昨夜寝ているようで実は睡眠時間がほとんどなかったようなものだし、当然といえば当然だ。

けど寝るなんて、できるかよ。

ばあちゃんと最後に語った言葉を思い出し、秋世はもう一度目をぬぐった。

なにがおかしいのか、それが具体的に言葉に出せない。

のどまで出かかっているのに、何かひっかかってしまう。

それがどうしてなのか、自分でもわからない。

部屋に戻ると、昭代と一緒に、いとこの妙子さんがテーブルの端にちょこんと座り込んでいた。母が今度は祖母の枕もとで、つながれた黒電話を握り締め電話を掛けていた。父の姿はなかった。立ち

止まり秋世は、妙子に一礼した。無言で会釈を返した妙子は、隣の昭代に小さな声で何かを話し掛けた。こっくり、こっくりと頷く昭代は、また秋世に冷たい視線を投げた後、うつむいた。

俺が何かしたかよ。

髪の毛を乾かさないうまま来たので、肩のところがやたらとびしょびしょぬれてしまっている。母に呼び止められ、黙ってタオルを渡された。これで髪の毛なんとかしなさい、ということなんだろう。面倒くさくて、軽く髪の毛をこすっただけにしておいた。

「じゃあ何か、私たちすることないの」

「今のところはよさそうよ。こちらの会館の方々がすべて取り仕切ってくれているみたいだから」

さつき、母をなじった時とは別のような言葉遣いに、秋世は少し退いた。

「そう、それならいいんだけど、この子たちは今夜、お付き合いさせなくてもいいわよね」

「昭代は残ってもらわないと」

露骨に昭代が顔を引きつらせた。ベースボール型の顔がまったいらに見えた。そんなにいやならなんでおばさんとこの子どもに生まれなかったんだ、と腹で毒づく。

「昭代一人だったら不安でしょう、私やはり残るわ。妙子、あんたはどうする？」

「母さんいるなら、私帰るわ」

長い髪の毛をかきあげるようなしぐさで、妙子は答えた。

女子大生、いかにもといった髪形に化粧だった。慌てて口紅をティッシュでぬぐっているけれども、まだすっぴんではない。たぶん大学帰り、まっすぐここまで来たのだろう。今年大学生ということもあって、忙しいらしい。

「昭代、あんたひとりで大丈夫？」

首を振り、すがりたさそうな視線を向ける昭代。何をおびえているんだか、とさらに毒づきたくなるが我慢した。ここは祖母が眠っ

ている場所だ。余計なこと、言いたくない。

「お姉ちゃん帰るなら、私も」

「だめだよ。あんたはここにいたくちや」

びしりと厳しい言葉でもって、妙子は叱り付けた。

「あんたは、孫なんだから。しょうがないんだから」

なにが「しょうがない」なんだろう。秋世は髪の毛を思わず手の甲で何度もこすっていた。言いたいことがあるのに、なぜ言葉として飛び出してこないのか、不思議だった。

「あんたはね、南雲家の子なんだから」

「だって私」

「わかってる、わかってるよ。けどね」

なにが、「わかってる」だよ。

どうもこの、妙子さんは以前から一線引いた立場で南雲家の人間に接するくせがあるらしい。子どもの頃からそれなりの「いとこ」づきあいがないわけではなかったけれども、昭代のこともあって今ひとつ、じっくり来ないものを感じていた。いつも糊付けのシャツを着て会わないとまずい、そういう雰囲気を小学校の頃から持っていた。

秋世の目からみたら特段、ものすごく美人というわけでも、色っぽいというわけでもない。はっきり言ってしまうえば、ほんとその辺の大学生と同じ、見分けがつかないタイプ。無個性というのも変だが、いまだき流行の髪形にあくのない顔立ちは、いわゆる「女子大生」そのものだった。たぶん知らないですれ違ったことも、多々あるだろう。

「昭代、もう少しだけがまんしなさいね」

「いや」

「なに言ってるの、もうちょっとだけがまんすればね」

いきなり瑞希おばさんが割り込んだ。

「妙子！」

何よ、とばかりにまた妙子さんが上目遣いでみやる。

「変なこと、言うんじゃないの！」

「ごめん、悪かった」

男子っぽい口調でわびた後、妙子さんは小さな声で、

「お姉ちゃんとお風呂入ろうよ、ここじゃなくて、向こうの銭湯でさ」

びたつとしたスーツに腰のくびれがくつきりしている。いわゆるこれが、色っぽいお姉さんのイメージか。

「やっぱり私も、泊まっていこうかなあ」

「そうしてくれると助かるわ」

母ではなく、瑞希おばさんがたつぷり感情込めて答えているのが聞こえた。母の反応はわからなかった。ずっと窓辺の黒電話に向かつて、

「実は本日、母が息を引き取りまして……」

と繰り返して、電話の向こうに説明しているからだった。

昭代と妙子さんたちが銭湯から帰ってくる頃には、弔問客がなだれうってやってくるわ、供花の注文を頼まれるわで、かなり忙しい状況と相成った。母が、空いているうちに風呂に入るよう指示したのは正しかった。たぶんこの調子だとこれからはひまないだろう。

青潟の風習で、仮通夜後、明日の昼過ぎに火葬を行うのが慣わしだという。

「おばあちゃんの顔見られるのは、今夜だけなんだから、秋世も泊まっていくださいよう」

もちろんだ。頷いた。

「でもねえ、やっぱり昭代たちは無理よね」

「なんでだよ」

電話と弔電を受け取り、整理を行いながら秋世は尋ねた。やるべきことがだんだん増えてくると、そばに祖母の遺体が並んでいるという現実を忘れていられた。

「落ち着かないわよね、一部屋一緒だと。それに、お父さんの兄弟

も泊まりに来るって話だし、部屋を空けておいた方がいいかもしれないし」

母はさらに事務的に物事を片付けようとしている様子だった。なんとなく違和感があるけれども、秋世に割り振られた手伝いことがそれなりにあり、お茶を汲んでは出したりなんなりしているうちに、聞くのを忘れてしまう。

「けどさ、妙子さんたちは別だけどさ、昭代は別だろ？」

「そりゃそうだけど」

母の歯切れは悪かった。

「とにかく、今夜は私たち家族で、おばあちゃんを見送りましょう。仮通夜はここでやるからね」

葬式一式の準備はいろいろすることがある。父も母も、たんたんと物事をこなしていた。時折黒電話を握り締めて、「不幸がございました、申し訳ございません。書類は明日お届けしますから」みたいなことを話している父。忙しくなればなるほど感じないでいられる。線香の煙が枕もとでたゆたう中眠っている祖母をあえて見ないようにしながら、秋世はお茶菓子の準備に没頭した。

水仕事をやらされるはめになり、洗い場で茶碗を洗っている時だった。妙子さんが黙って狭い洗い場の中に入ってきた。

「私も手伝って言われたんだけど、どう、手伝った方がいい？」

「いいです、このくらいできますよ」

さらっと答えることにした。妙子さんの、さすがにマニキュアを取ったとはいえ長い爪を折らずに茶碗を洗えるとは思えなかった。喪服なのになんでこうも、なまめかしいのだろう。

思った通り妙子さんは蛇口近くにも手を出さずに、

「悪いんだけど、やはり今日私たちは帰らせてもらっわ。明日のお通夜にはちゃんと手伝いに来るから」

別に秋世に言う必要もなかるうに。言うべきは両親であり、瑞希おばさんに対してだろう。

「あ、わかりました」

軽く答えた。このあたりは他の女子たちに対するのと同じ、脳天気なのりが一番だった。

「それと、昭代もね」

「いや、昭代は家族だから残らないとまずいと思いますよ」

泡だてたスポンジでごしごしと茶渋を落とす。力が入っているのが自分でもわかった。

「だって俺の妹だし、妹だってことは、やっぱりばあちゃんの孫だし、それは違うと思うなあ」

妙子さんは洗い終わった茶碗をふきんで拭き始めた。

「秋世くん、君は何にも知らないのね」

お盆の上に伏せて置いた。

「いくら家族と言ったって、昭代にとっておばさんたちは他人みたいなものよ。そんなところで、しかもおばあさんの死体と一緒に」「遺体と言ってくださいよ」

露骨な言い方をする人ではないはずだった。秋世の記憶では、きちんと常識をわきまえて話をしてくれる人のはずだった。少し自分でもいらだっているのだろうか、つい刺のある答えを返してしまった。

妙子さんと目が合った。かすかに微笑んでいた。こちらも微笑み返した。意地だった。

「どうしても残らなくちゃならないんだったら、私も泊まるけれど、でもそつちのお父さんとこのご兄弟も集まるんでしょう？ 部屋に泊まりきれないんじゃないの？」

「そんなのわからないですよ。まだ連絡入ってないし」

洗い終わった茶碗をそのままどん、妙子さんに渡していく。ありがとうとも、ごめんとも言う気になれなかった。

「とにかく、昭代は私たちと行動一緒にさせるから、その辺だけよろしくね」

「うちの親がなんと言っかわからないですけどね」

秋世なりに皮肉をこめて言ったつもりだった。返事がない。妙子さんが隣で手早くふきんをたたみ、ぬれた周囲を拭き取っていた。「知っているからこそ、返したいんじゃないのかなあと思うけどね」「どういことですか、よくわからないんだけど、なんか、言いたいことあるんですか」

本能のほとばしるままぶついたら、なんだかとてもないことをぶちまけそうな気がして、慌てて秋世は規律委員長モードに切り替えた。女たらしでもなくて、彰子めろめろモードでもない、また親友たちの前でさらけだす脳天気雰囲気でもない。気持ちを実四角シヤットアウトする形で接する、これが自分なりの保護膜だ。

「少しだけ、廊下出る？ 秋世くんもお茶以外のもの、飲みたいでしょう」

言われた通り、秋世は妙子さんの後に続いた。廊下のロビーには三台ほど自動販売機が備え付けられていた。黒スーツ姿でまた一礼する人がいたが、誰だかわからなかった。秋世が頭を下げている間に、妙子さんは自動販売機の前で、

「コーラでいい？」

声をかけてきた。秋世は頷いた。背中のロングヘアのことをいわゆる「ワンレングス」と言うんだと、ぼんやり思い出した。妙子さんの無個性さが一般的にはもてるタイプの女性像であることも、ついでに記憶から引つ張り出した。

「秋世くんは、五歳くらいまでの時のこと、覚えている？」

いきなり尋ねられて言葉に詰まった。

「まあ、一応、病院に閉じ込められて注射やらなんやらされてたなあってことくらいかなあ」

「確か小児結核だったわよね」

「そんな名前の病気だったっけ」

わざと軽く口に出してみた。今の時代ならば生後何ヶ月か経ってからにワクチンで予防できるはずだった病気だった。生まれて数年

経ってから感染確率の低い病気になぜかかったのか、その辺は当事者である秋世にはわからなかった。伝染する可能性があるということとで小児科の隔離病棟に半年ほど入っていた。確かその間に、

「だから昭代が生まれた時のこと、覚えていないのよね」

「俺は記憶力悪いんです、すみません」

またおちやらかして答えた。

「じゃあ聞くけど、なんで昭代がなんで家に預けられたか、その辺も聞いてる？」

「いや、なんとなく」

単純に、昭代が秋世の病気を移されないようにという当然すぎる配慮からじゃないのか？

あっさり答えると妙子はまた、唇をゆがませて笑った。

「そうね、そう聞かされてるのね」

「だって、やっぱり俺が保菌者だし、昭代生まれたばかりだし、やばいでしょうやっぱし」

「もちろんそうだけど、じゃあもう一つ質問なんだけどね」

言葉が淡々としている。もっと明るく、たとえば彰子のように笑顔でもって聞いてくれたら、秋世ももっと愛想よく答えられただろうに。仮面が必要な相手と話をするのは、今の精神状態かなりきつい。コーラを半分飲みこんだ後、炭酸でのが詰まりそうになった。しばらくむせた後、秋世はもう一度静かにあいづちを打った。

「どうぞどうぞ」

「昭代が二歳くらいのこと、覚えてる？」

もちろん覚えている。秋世は頷いた。

「その時、可愛がってあげたと思ってる？」

「あたりまえでしょう。俺、ガキの頃からレディーファースト、ばあちゃんに仕込まれてたし」

当然である。秋世のレディーファーストは年季が入っている。女性が重たい荷物を持っていたら自分の方から持ってあげること、自転車きたら止まって自分の方から通してあげること、女性がきれ

いな服を着ていたら、たとえ似合う格好でなくても「きれいですね、似合ってますよ」と誉めること。小さい頃から秋世は祖母に仕込まれてきた。

「ふうん、おばあちゃんそんなこと言ってたのねえ」

片手に缶コーヒーを持ったまま、妙子さんはひざを覗き込むようにしてつぶやいた。スカート少し短すぎるんじゃないかと余計な心配をついしてしまう。丸見えだった。

ばあちゃん、と口に出すたびくじけそうになる気持ちを押さえるため、あえてスケベな気持ちをよみがえらせて押し殺した。

「そうか、聞いてたわよ。おばさんから。秋世くん青大附中でモテモテなんだってね。よく秋世くんのファンがしょっちゅう追いかけてきてラブレター渡してるとか、バレンタインデーはチョコレートが一杯でおいさんとおばさんとおばあちゃんの三人で山分けしてるとか」

「そんな過去もありましたねえ」

彰子一筋の今は、そんなこともないのに。

「まあ秋世くんくらいのルックスだったら、女子にきゃあきゃあ言われてもしかたないだろうけど、それなら当然彼女たちにもレディーファーストしているわけね」

「そりゃあ当然っすよ」

何か周囲から固めていこうとする妙子さんのしゃべり方に、ほとんどうんざりしてきた。早く部屋に戻った方がよさそうだ。秋世は飲み干した後缶を握りつぶした。空き缶専用ごみ箱に放り込んだ。

「じゃあ俺、戻ります。手伝うことあると思うし」

「逃げるの？」

的をはずした問いかけに思わずよろけた。秋世が「何にですか？」と言いかけたのと、妙子さんが質問をしないのと同時だった。

「じゃあなんで、昭代をいじめつくすようなこと、したわけ？」

俺が、昭代をいじめつくすって？

妙子さんをどういう視線で刺すべきかわからず、息を呑んだまま

硬直させた。

「おばあちゃんが生きている間は封印されてたことだと思うけど、もういいかげん、秋世くんも気づいた方がいいんじゃないかって思うのよね。知りたい？」

油じみた口調。ねばっこい。首を振りたかった。でもできなかった。

「だって俺、昭代をいついじめましたか？」

「五歳の時」

間髪入れずに妙子さんの言葉が返る。

「俺、あいつをいじめた記憶、全然ないんだけど」

「都合の悪いことは忘れるのが得意なのよ、南雲家の人たちはね」

「昭代がそんな風に思ってるんですか？」

妙子さんは答えなかった。時計を覗き見た後、ワンレンの長い髪を掻き揚げた。

「もしそうだったらどうするの？」

「誤解を解きたいっすよ、そりゃあ」

だって、全く記憶にない。もちろん昭代をあちらこちらにひっぱりだして、男子たちの好む遊びに無理やり混ぜたことはあったかもしれないし、もしかしたらその関係で少し無理したところがあったのかもしれない。でも、秋世は決していじめるつもりなんて一切なかった。むしろ、自分の可愛い妹……ちつとも自分に似てないベース型の顔……を見せびらかしたい気持ちが強かったのだ。秋世なりに、愛情表現をしたつもりだったのに。

そうか、それで俺の顔見ておびえてるんだな。

「俺、昭代にその辺きちゃんと話した方がいいですね。やっぱり今夜、昭代、ここに泊まっていった方がいいなあ。こういう形できちんと話したほうが、いいと思うし」

ため息を大きくついたまま、妙子さんは自分のジュースを飲み干した。じっと自分の手を見つめていたが、一気にふにやりと握りつぶした。

「秋世くん、本当に、自分が何したかを覚えてないってわけ？」

「覚えてますけど、俺、悪意なかったし。今からでもそのあたり誤解解けたらなって」

「秋世くん」

妙子さんは秋世の名を呼びなおした。ゆっくりと、せりあがるように秋世の顔を見上げた。瞳には厳しい光が宿っていた。責められているような気がして、腰から逃げたくなった。

「誤解が解けても、悪意がなくてやったことでも、一生傷になるようなことってあるはずよ。死んでももう二度と、見たくない相手とひとつ屋根の下で寝られると思う？」

「俺のこと、そう言ってるっすか？」

やましいことなんて、何もない。秋世は自信を持って言い返した。「もしかしたら俺も、ガキの頃は酷いことしたのかもしれない。

だけど、今の俺はそんなとんでもない奴じゃないし、そんな人間になんてなりたくないですよ。ま、俺のことを学校では女たらしだとか、いろいろ言う奴もいますけど、でも基本はレディーファーストを守ってるし。うちの両親に聞いてもらえばわかりますよ。俺、ただいま、家族公認でお気に入りの彼女いるし」

語弊はあるが、半分は正しい。

「だから、もし俺がガキの頃に昭代を傷つけてしまったとしたら、これは本気で謝りたいって思います。うちに戻ってこない原因が俺だったら、やっぱりそれ、無意識でもまずいし。だけど俺は、やっぱり血のつながった妹のこと、大切にしたいなって思うんですよ。二人っきりの兄妹だし、やっぱり同じ両親から生まれたんだし。もし、昭代が俺のこととこたわってるんだったら、これからゆっくりと別の形で家族、兄妹として、つながり作っていききたいんです。うちの両親がこれからという風にするかわからないし、おじさんおばさん、妙子さんにもほんと申し訳ないって思うけど、俺は自分に、昭代のことを大切な妹として守りたいって思うんですよ。なんかすげえ、きざな言い方だけど」

懸命に仮面をかぶりなおして、さわやかな笑顔で答えようとする自分がいる。

規律委員長として、少しふざけながらもびしっと決めようとする自分がいる。

妙子さんの前で、昭代の兄として、きちんとけじめをつけたい、そう願う自分がいる。

「だから、今夜は、俺としては」

言葉を切って、また続けた。

「一緒の部屋で、ばあちゃんの前で、全部きちつと話をしたいんです」

決まったな、心でつぶやいたその瞬間、妙子さんの言葉で断ち切られた。

「悪意がなくても、五歳でも、無理やりいたずらされたり半殺しの目に遭わせたり、そういうことをされて我慢する義務が、昭代にあると思う？ 秋世くん」

立ち上がり、妙子さんは秋世を見下ろした。今度は根っから軽蔑したまなざしだった。

「そんな、証拠があるっていんですか！ それ言っていていいことと、悪いことがありますよ」

立ち上がって言い返した。全く記憶のないことを、どうして受け入れろというのだろう。五歳の記憶を瞬時に巻戻してみても、妙子さんの言葉に含まれた悪意一杯の行動など全く残っていなかった。多少腕白坊主の嫌いはあったかもしれないが、そんな、いたずらしたり、半殺しの目に遭わせたりなんて、したことない。百パーセントの否定でもってぶつかっていく。

「思い出してないんだったらしょうがないわ。せいぜい、レディーファーストやってちょうだい。あともう一つ言っとくけど、そのことうちの母さんたちも、南雲家のおばあちゃんも、おじさんおばさんも、みんな知っていることなのよ。知らなかったのは、秋世くん、

君一人なのよ。おばあちゃんの命令でみな口を封じられてきたけどね」

妙子さんは握りつぶした空き缶を、たらすようにごみ箱へ落とした。

「まあいいわ、お葬式が終わったなら、それなりにうちの母さんから話も出るでしょうしね」

丸い月のような顔から、放射される怒りのエネルギーに、秋世は無言でにらみつける以外何もできなかった。きびすを返して妙子が部屋に戻ると同時に、秋世もゆっくりと遺族室へと向かった。とにかく今は、仮通夜準備と事務作業の手伝いに没頭するつもりだった。ありもしないこと、記憶にもないことを責められたって、こちらはどうしようもない。

俺がなんで昭代にそんな、最低最悪なこと、しなくりやなんないんだよ！

もし、そんなこと他の野郎がしようとしたら、たぶん俺、半殺しにしてやるさ。

たぶん、妙子さんの勘違いだろう。そうとしか考えられない。もしくは昭代の思い込みか。

でも家族だ、兄妹だ。必ず誤解は解けるはずだ。

秋世は深呼吸した後、襟を正し、襖に手をかけた。

第二部 14

覚悟、つてなんだよ。

要するに、俺とばあちゃんが、昭代をいじめぬいたって、本当かってことかよ！

白い布がかけられたテーブルの上で、秋世は係の人たちと一緒に、香典返しの用意を手伝っていた。青潟の風習では葬儀の帰り際、弔い客に直接、ハンカチの包みのようなものを手渡すのが決まりだった。そんなの知らなかったけれども、両親が参列者の挨拶で忙しうだったこともあって、言われるままに手提げ袋にものを詰めた。

仮通夜、通夜、そして告別式。

あつさりしてるよな。

あれだけ当日は泣きじゃくったくせにだ。自分は冷たい男なのかもしれない。

仮通夜も父の親戚筋がずらっと並び、妙に和やかな夜明かしとなった。

通夜も、少し大掛かりだったとはいえ、学校の行事の延長上と思えなくもなかった。途中なんだか動きたくなくなり、係員の人に、

「すいません、俺もなんかやらせてもらえませんか？」

と頼み、ちょこちょここと手伝わせてもらった。お弁当関連の手配とか、その他場所の組替えとか、肉体労働が中心だった。少しでも身体を動かすことができればそれでよかった。

そして今日は、告別式だった。

目の前を、グレーに茶が少し入った制服が通り過ぎた。

黒い背広姿の男と一緒に。

「ほら、立村、挨拶しろ」

思いつきりむくれた顔している三年D組評議委員の立村に、思わず秋世は笑いかけた。

「りっちゃん、いいよ、その辺で」

袱紗を手馴れた風に四方へ開き、立村は黒いお盆の上に「御仏前」と書かれた封筒を置いた。一礼した。無言で秋世をじつと見つめた。そんなに真剣に見つめなくてもいいのに。隣で唇をぎゅつと絞ったままの菱本先生には、きちんと挨拶を返しておいた。

「どうもありがとうございます」

「今は何も考えるなよ。みんな、待ってるからな」

待ってるのかよ。

悪態つきたくなるけれども、なぜかここでは平気な顔してしまう自分がいた。

「しばらく学校のこと頼むな、りっちゃん」

葬式受付にふさわしくない笑顔を向けたかった。立村に対してはなぜか、気持ちがやさしくなるのだが、その理由が自分でもよくわからなかった。

また、じつと秋世を見つめ返すと、立村は菱本先生に促されて会場を出て行った。

東堂が彰子と連れ立って葬儀会場から出てきた。彰子の目が真っ赤だったのは、やはりばあちゃんを知っているからだろうか。そうだろう、初デートでいきなりばあちゃんに、「秋世くんの恋人品定め」をされてしまい、花丸をもらってしまったのだから。あれ以来ばあちゃんは彰子がお気に入りだった。ほんと先の話だけでも、真剣に話していたのを聞いたことがある。「秋世、いざとなったら会計士の資格を取って、彰子ちゃんをお嫁にもらいなさい」だと。その時は笑ってごまかしたのを思い出した。

「また、あとで電話すつから」

「OK」

東堂の性格上しめつぽくならないのは重々承知。隣で眉をひそめ

ている母には悪いが、いくら葬儀会場であっても、秋世のペースは変わらない。

「彰子さん、今日は、ほんと、ありがとう」

「秋世くん、私、何してあげられるかな」

言葉に思わず、はっと息を止めた。彰子は涙を白いハンカチでぬぐいながら、少し額に汗をかいたままでつぶやいた。

「何か、して上げられることあったら、言ってね」

「うん、ありがと」

それしか答えられなかった。もちろんしてもらいたいことはたくさんあるけれども、今の彰子に求められるものではなかった。今、一緒にここを出て行って、二人つきりではじめてのキスを試してみたいとか、修学旅行の時に聞かなかった彰子の父親の事情についてはつきりさせたいとか、それとももっと、別のこともしれなかった。でも、そんなこと、できるわけがない。

秋世は彰子の手到手提げのとつてをきちんと握らせた。

「すぐに連絡するからさ、またよろしく。おじさんおばさんにも、どうもって伝えてちょうだいな」

今度は左隣にいる妙子さんと昭代がげんげんな顔をして秋世を見た。あまり長話ができるわけもなく、空気を讀んだ東堂が「さ、ねーさん、先に行こうぜ、立村たちと待ち合わせてるしな」と背中を押していく。自分もそこに混じりたくて、でもそうできなくて、秋世はあえて、次の参列客に向かって頭を下げた。

結局、昭代は瑞希おばさんの付き添いのもと、三日間通う形での遺族参列となった。

事情がどうであれ、昭代が祖母の孫であることは事実なのだから、本来ならばきちんと秋世の隣に立って頭を下げるべきだと思うのだが、気持ちの上でそれができないのだからしかたなかった。

妙子さんもあの後は、秋世につっかかってこなかった。

秋世がそんなこと知らない、という風に振舞ったからかもしれない

かった。

何かの誤解に決まっているし、きっと妙子さんもいろいろと疲れていたのだろう。教育実習のストレスかもしれない。そう無理やり考えて、秋世なりに「なかったこと」として対処した。妙子さんもその態度に戸惑いつつも、それ以上のことを口にしたりはしなかった。もちろんうがった見方をすれば、「とりあえず葬儀が終わってから片付ける」予定なのかもしれないし、それなりの言い訳は供えているのかもしれない。でも知ったことではなかった。

俺には記憶全然ねえもん。そんなことしてたら、俺絶対、忘れるわけないし。

妙子さんが壁になる形で昭代も並んでいた。やはり、秋世の傍にすることが耐えられないらしい。わざとやっているのではなさそうだが、秋世からしたらどう考えても嘘を言われているとしか思えない。ふたりっきりの時が見つかれば、一度きちんと話をして、誤解を解こうと思うのだが、そのチャンスをことごとくつぶされている。そんなありもしないことを言われても、秋世だって困るのだ。

俺が、なんで昭代にやらしいことする必要あるんだ？ それになんで俺、昭代をいじめる必要あったんだ？ 第一、そんな証拠なんてないのになんでだよ。

いくらでも言い張る自信が自分にはある。

絶対に、人を傷つけない。そう今も現在も過去も、そう思い込む自分がある。

それが、南雲秋世という男なのだ。

自分の妹を傷つけるような奴がいたら、とことんぶん殴ってやるだろう。

悪意がなくても、五歳でも、無理やりいたずらされたり半殺しの目に遭わせたり、そういうことをされて我慢する義務が、昭代にあると思う？ 秋世くん。

絶対、ない。

昭代をずたずたにする権利なんて、五歳の自分にも、今の自分に

も、この世の誰にもないはずだ。どう考えても妙子さんは何か、間違ったことを吹き込まれているはずだ。この誤解をきちんと解かないと、前には進めない。

とにかく、終わってからだな。

横目で昭代を覗き込み、秋世はそつと笑って見せた。露骨に顔を背けられてもめげる気はしなかった。

通夜前に火葬した祖母の骨箱を持ち、父が車から降りてきた。葬儀関連が一段落した後、家族三人で帰ってきた。いつもだったら自家用車なのだが、さすがに三日間ほとんど寝ていない状態で運転するのは危険だと母が言い張り、タクシーで戻ることになった。

祖母の写真を抱えているのは秋世だった。

葬式にまつわるさまざまなことを片付けているうちは、それほどしんどくもなかったし、むしろ面白い部分が多々あった。純粋な興味でもって観察することもできた。でも、今家の中に戻っていくと、今度は素の形で祖母の「死」が固まっていく。今までがとろししたスープを飲んでいような穏やかさに包まれていたのに、家に戻るなり、一気に凍り固まる。父も母も、事務的な話と明日以降の仕事についての話し合いしかしていなかった。祖母の思い出は通夜と仮通夜の時に十分語り尽くしたから、というのが本当のところらしかった。

「おばあちゃん、いい写真あったわね」

「ほんとだ。こんなに若く撮られてたら文句言わないだろうなあ」

「ほら、秋世の入学式の時よ。あの時のおばあちゃん、すっかりおめかしして、わざわざ美容院にまで行って」

ひざの上に載せたままの祖母写真を上からのぞき見た。確かにそれだった。秋世が青大附中に入学した時、周りが「無理に来なくていいのに」と止めたにもかかわらず、祖母はめいっぱいのおしやれをしてやってきたのだった。今思えば、入学式に家族全員で参列したのは、たぶん秋世の家だけだったと思う。天敵・羽飛貴史に

ついでには堂々と「俺のうちは誰も親なんてついてこねえよ！ けつ、中学にもなつて親べつたりなんて恥ずかしいよなあ」と勘違いしたことをわめていたが、秋世からしたら「ついてこようと思わない親」の方がずっと淋しいと思う。少々教室までくつついてこられたのは恥ずかしいところもあつたけれども、それはそれ、これはこれだ。

「いい写真だな」

「でも、カラーというのがね、ちよつとね。本当はもっと古い写真でいいかなとも思ったのだけど、おばあちゃん、写真みんな、自分の部屋に隠してしまうものだから。選ぶのに困つたわ」

玄関のドアに「忌中」と墨で書かれた半紙を張り、三日分の新聞と郵便物を母は抱えた。どさりとソファアの上に投げ落とし、荷物を運んだ。

「でもまずは、お茶を飲みましょう。おばあちゃんといっしょに、ね、秋世」

写真をどこに置こうか迷つた。今はまだ、ひぎの上に置いておこうと決めた。本当は母の手伝いをしなくてはならないのだろうが、そんな気にもなれずソファアのど真ん中に座り込んだ。なんだかわからないけれども、急に眠気が差してきた。

「お前も、よくがんばつたな」

父の声が聞こえたのは覚えている。ほんの少しだけまぶたを閉じただけなのに、どうして目がさめたらいつのまにか自分の部屋で寝ていたりするのだろう。しかも、パジャマに着替えた状態で。

真夜中、午前三時。まだ夜明けの気配はない。

ゆっくり青潟方面に進んできた台風は、祖母の葬儀中ずっと吹き荒れていた。

ずっとセレモニーホールに泊り込んでいた秋世にはどうでもいいことだったけれども、家に戻るなりその風がぱたと泊まり、家が揺れることもないのが不気味だった。

ばあちゃんは？

隣の部屋をいつもそつと覗き、かすかないびきを耳にして、また自分の部屋に戻るのが日課だった。真夜中トイレに起きた時とかもいつもそつするのがくせだった。

全く聞こえないのは、祖母が入院してからずっとだったし、今、だからといって怖くなるのが解せなかった。部屋の明かりをつけると、秋世は窓の外を眺めた。

修学旅行出発の朝以来、久々の我が家。

一週間丸々経ったのに、部屋の中は何も変わっていない。

何にも変わってねえよな。

窓辺には、祖母が作ってくれたピンク色のてるてるぼうずの残骸が一人分、ひっかかっていた。出発前にやっぱり、ぶら下げておいたのだった。手に取った。

本当に、そのまんまなのにな。

秋世は手にとってみた。なぜか、涙が出なかった。

下の階ではまだ父と母が何かかきこそやっているようだった。いくら喪に服するとはいえ、仕事をすべて休むわけにはいかないということで、セレモニーホール内でも黒電話の受話器を放さなかった両親。それが当然なのだとわかっていても、どうしても近づけない何かがあった。

ばあちゃんがいなくても、うちの親たちは平気なんだな。

しんと、胸に刺さるような、下の階のざわめき。

秋世は部屋から出た。祖母の部屋に入っていた。

すぐに退院できるのだと疑うことなく、部屋をそのままにしていた祖母の気持ち伝わってきた。自殺する人のように身辺整理をする必要が全くない、という空気だろうか。修学旅行前、借りていた酔い止めの薬を返そうと思った。

ベッドもきちんと敷き詰められていた。枕もとには祖母の使っていた三段重ねの小物入れがちょこなんと乗っかっていた。

「ばあちゃん、帰ってきたよ」

枕もとのライトをつけて、つぶやいた。

「借りたの、返すから」

箱を開いた。女子たちの使うシャンプーっぽい匂いがつんとした。そつと、引き出しの中に、薄荷の薬を入れた。しまおうとして一度手を止めた。

どうしてそんなことしたのか、自分でもわからなかった。

中に一緒に入っていた、白い和紙に包まれたものに手が触れた。確か入学式の時、一緒に映った写真のはずだった。秋世のことを思っている祖母が、決して手放すことのなかった写真だし、入っているとおかしくはない。でも、この箱が触られた形式が、全くないのはおかしかった。だって、

だってあの写真、俺の入学式の時の写真って、言っただろう？
その写真が、これだろ？

さっき、母は確かに口に使っていたはずだ。

ほら、秋世の入学式の時よ。

祖母用に焼き増ししていたのか、それとも別の写真を手元に残していたのか、その辺はわからない。はっきりしているのは、今、仏壇の前に飾られている黒枠の写真と、この写真が同じだということだけだ。

なんで、このまま、何もなく、置かれている？

秋世は白い紙をゆっくり開いた。折り目も、繰り返しいじった後もないままだった。

中から出てきた一枚の写真をじっと見つめた。

ごくごくありふれた、南雲一家の家族写真だった。秋世が思っていたような入学式の写真ではなかった。祖母と父、母、秋世、そしておそらく昭代が二歳くらい歳の時の写真のはず、だった。断言できないのは、その写真のうち、真中だけが黒い油性ペンで塗りつぶさ

れていたからだった。その位置にいたのは、おそらく母の腕に抱かれて赤いワンピースを着たまま足を広げている、二歳くらいの昭代だ。昭代のベース型の顔は、塗りつぶされて本当にどろどろの野球場で見かけるような、一塁ベースの色に染まっていた。

最初、単なる冗談かと思った。よく本条先輩が持ってくるきわどいエロ本の中に、こういう塗りつぶし方で局部を隠しているものがあった。いわゆる「裏もの」と呼ばれる本だった。先輩が言うには「後でこっそり爪ではがして楽しむのが通」なのだという。そこまでするのはないけれども、そういう風に素人っぽく隠す本が堂々と書店に並ぶわけもない。

爪で黒く塗られた部分をこすってみた。うまくはげなかった。

これ、なんっすか？

息が止まりそうで、手が震え出す。でも気持ちは落ち着いていた。「これって、いったいなんだよ」

包みなおし、箱に仕舞い、もう一段下の引き出しを開いた。キャビネ版の写真が形それぞれ違う風にカットされていた。裏向きだった一枚を開いて、秋世は取り落とした。一枚、また一枚とめくり、床に落としているのに、自分でも気がつかなかった。気が付いたら床とベッドの上には、すべての写真が散乱していた。台形あり、平行四辺形あり、ひし形あり。どの写真にも共通しているのは、被写体がすべて、父と秋世と祖母のショットというところだけだった。母も、昭代もすべて、切り抜かれていた。中には露骨な形でもって、人型にくりぬいている写真も混じっていた。どれもこれもすべてが、父と秋世、そして祖母のものだけだった。

橙色のベッドライトが、かすかに点滅した。

写真の艶が、不気味に白く光る。

手元に落ちた一枚を、そっと拾い上げた。

なんだよこれ、ばあちゃん、これ。

こっそり見たことへの罪悪感なんてなかった。

ただ残っているのは、どうしようもない嫌悪感、それだけだった。自分にか、それとも祖母になのか、それとも別のものなのか、わからなかった。

枕に手を触れ、祖母のぬくもりを感じようとしたのに、伝わってくるの布が持つぬくもりだけだった。じめじめしているのは、その切り抜かれた写真たちだけ。たくさん秋世が、幼顔大人顔それぞれ見せながら、じっと覗き込んでいた。いかにも、すべてを知っているかのように、ずかずか入ってくるかのように。

なんで、俺がこんなことになってるんだよ！

自分の気持ちがつかめない。二番目の引き出しにしまった和紙の写真を持ち出し、秋世は部屋をそのままにしたまま階段を下りた。一步、二歩、三歩。ゆっくり降りていくうちに、足を踏み外しそうになりよろけ、派手に滑った。尻餅ついて痛い、とは思った。でもそれだけだった。何も考えてなかった。居間に向かい、一生懸命電卓と格闘している両親の座るテーブルへ向かった。

「しゅうくん、目が覚めた？」

ふたりが顔を合わせ、秋世に尋ねた。

「どうした、秋世。腹すいたのか」

「これ、なんだよ」

テーブルに、油性ペンでの塗りつぶし跡付写真を叩きつけた。

「これ、どういうことだよ」

「お前どこからそれ持ち出してきた」

「ばあちゃん部屋の部屋に決まってるだろ！」

両親の前では、なんの仮面もかぶらなくてよかったし、かぶる気もなかった。

母が慌てて写真をひったくり、即、ひっくり返した。

「おばあちゃんに失礼でしょ！ 謝りなさい」

「じゃあ何でだよ、なんで、ばあちゃん、昭代の顔に色塗ってるん

だよ！」

「そんなのわからないわよ、もうおばあちゃんいないんだから」
ピントの外れた母の言葉に、さらに秋世はいらだった。

「ばあちゃん、なんで昭代をあんなに嫌ってるんだよ。この前も言
ったよ、あんな子のこと忘れろって言ったよ。ばあちゃん、なんで
そんなこと言うようになったんだよ。昭代、俺の妹だろ？ ばあち
やんの孫だろ？ なのになんで、あいつにだけそんなこと言うんだ
よ」

わかつている。責める相手を間違えていることくらい、わかつて
いる。

でも、どんなことがあっても祖母を責めることだけはしてはなら
なかった。

もうこの世にいない。ぬくもりさえ持たない祖母を責めるのは許
されないことだった。

なぜかわからないけれども、祖母を怒鳴るよりも、母をのしる
方がずっと楽だった。

「秋世、いいかげんにしなさい。お父さんたちは忙しいんだ」

「ごまかすなよ！」

声を出したとたん、忘れていたはずの涙がいきなり噴き出した。
溢れ出す感情が、マグマのように流れていた。休火山だった自分が
一気に噴火してしまった。頬をぬぐいながら秋世は思いつくままわ
めいた、叫んだ。

「ばあちゃん、言ってたよ、昭代のこと嫌いだって。昭代になんて
みやげ買っつてさ。なんでだよ、ばあちゃん、昭代をいじめるよ
うなこと、してるわけないのに、なんでそんなこと言われなくちゃ
いけないんだよ。なんで昭代、俺の顔みるとすごい勢いで逃げ出す
んだよ。俺、何にも悪いことしてないのにさ、なんでだよ！」

「秋世、今、何言った」

父の言葉が、しんと響いた。いきなりうろたえている自分。必死
に歯を食いしばった。のどがつまり、言葉が途切れる。首を振って、

勢いをつけた。

「俺とばあちゃんが、昭代いじめて追っ払ったなんて、周りでは思ってるんだってさ。ふざけるなよ、そんなこと、するわけねえだろ！俺がそんなことするわけないのに、なんでそう決め付けるんだよ！俺のどこがそんな風に見えるんだよ」

「もうやめなさい、秋世」

母が急ぎ足でコップに水を汲み秋世に手渡そうとする。はじいた水がテーブルの上に広げられたノートへびしゃりとかかった。かまやしなかった。

「ばあちゃんがこんなことするってことは、母さんが何か酷いことしたんだろ。そうだろ、そうだよな、でないとわからないってさ、俺、いったい何か悪いことしたのかよ！」

だんたん舌がもつれ、誰を責めたいのかすらわからなくなってきた。目の前の奥。神棚の前には白い布がかかっていた。黒枠には、祖母がにこやかに微笑んでいる写真がでかでかと飾られていた。その向こうに叫べばいいのに、今秋世がぶつきたい相手は、母以外にいなかった。

「いいかげんにしろ！」

反応する間もなかった。父に二度目の張り手を食らわされた。小学校高学年に入ってから、一度も殴られたことなんてなかったのに、なぜ、この三日間で二回も殴られねばならないのだろうか。力が抜けた。ただ自分がどうしていいか、どこに握りこぶしを下ろせばいいのかわからなくて、ひたすら机の上の帳簿類を投げつけるだけだった。母に片手を押さえられて、思わず振り払おうとしてやめた時、自分にはまだ理性が残っていると感じた。父でもなく、母でもない。誰かを責めたいのに責められない。その理由がどこにあるのか、秋世にはわからなかった。ただ父の怒鳴り声に逆らいたただけだった。

「そのことは、いつ聞いたんだ」

暴れたくても暴れられず、呆然とソファに腰をおろした秋世に、

父は静かに尋ねた。

秋世の顔と瓜二つ、父親似百パーセント。母が黙って突っ立ったまま、ふたりを見つめていた。

「仮通夜の前」

誰、とは言わなかった。

「そうか」

父は母を見上げると、一度意思を確認するかのように、ゆっくりと頷いた。

そのままじつと、秋世を見下ろして、静かに続けた。

「覚悟は、あるか」

覚悟、ってなんだよ。

要するに、俺とばあちゃんが、昭代をいじめぬいたって、本当かってことかよ！

感情の飛び交う自分の内側がつかめなかった。とりあえず秋世は、父に頷くしかない。父と母の語る、「本当」らしきことだけを、まづはすべて聞きたかった。

第二部 15

明日、妙子さんを捕まえよう。ああいうこと言うくらいなら、親たちよりもほんとのこと、絶対知っているはずだしな。

父は母に、

「あの写真を持ってきたさい」

と、一言告げた。母もまた、すぐ理解したようで立ち上がり、隣の部屋へ消えた。

「秋世、まず先に」

二人きり、座り込んだ秋世に向かい、父は静かに尋ねた。

「何があつたか、覚えていないんだな」

覚えていたら誰が文句言うかって。そっぴい返したいものの、口籠もるだけだ。首を振った。父に目を向けたまま。これがやましくない証拠だった。

「そつか。ならしい」

母が戻ってきた。持っているのは真っ赤なアルバム一冊だった。分厚く、秋世が生まれてから即、産院で撮られた写真やら、七五三のお参りやら、入学式やら、すべてが挟み込まれているものだ。もつとも秋世は自分の写真を眺める趣味がない。観るのならば自分を鏡に映せばいいことだ。

父はそのアルバムを両手で受け取った。すばやく白い台紙を繰って、広げた。秋世に手渡した。重たくずしりと来る。

「この時のことを、覚えていないか」

目線を落とし、じっくり見つめた。そこには南雲家の家族勢ぞろい……もちろん昭代も一緒に……で、秋世が祖母の手をしっかりと握

り締めている姿が残っていた。両親は後ろに、昭代は母の腕で抱かれている。その中で、昭代の髪の毛が少年っぽくざくざくした感じにカットされているのが目についた。洋服がピンクのワンピースでなければ、きっと男の子と間違えられただろう。

「いつの？」

「お前が五歳で、昭代が二歳の時だ」

一番問題の時かよ。

舌打ちしながら秋世はもう一度写真を見下ろした。こういう風な写真を撮ったこと自体、秋世は全く覚えていないし、なんでこんな家族写真を用意したのかすら理解できない。この写真から読み取れることと言えば、当時から秋世はおばあちゃん子だったことと、昭代はもともと男っぽい感じの子だったのだという、それだけだ。

しばらく父は秋世と母を交互に眺め、吐息をもらした。

「秋世、いいか」

呼吸の音がはっきりと聞こえた。さつき水浸しにしてしまったテーブルの上には、領収書やら書類やらが放置されていた。まだ、すべて片付けきっていなかったようだった。明日中に処理をしなくてはならない内容なのかもしれない。

知ったことかよ。

唇を噛み、秋世は父を見返した。

「やましくないから、早く言ってくれよ」

「わかった」

父はアルバムの上へかがみこむように、中腰になった。同時に人差し指で、写真の上を突いた。その先は、ざくざく髪の毛の昭代に向けてだった。

「この髪の毛は、秋世、お前がやったんだよ」

こんな趣味悪いこと、いくら俺がガキでもするかって！

言われている意味がわからない。理解できても意味不明だ。

「どうということさ」

母が顔をそむけた。父のみ、指を動かさずに小さく首を振り、
「つまり、お前が五歳の時に、昭代をいじめたというのは、このことなんだ」

「髪の毛、ちょんぎったってか」

無感情のまま、秋世は返すしかなかった。父の眼はさらに沈んだまま、秋世からそらされず、

「本当のことは、おそらくおばちゃんと昭代しか覚えていないだろう。それは仕方ない。ただ、はっきりしているのは、お前のことを昭代は本当に怖がってしまっている。そのきっかけが、この写真に残っている。それだけを言いたかったんだよ」

「きっかけて、俺が」

言葉にならなかった。父の指に触れるように、秋世も昭代の髪の毛部分に手を重ねた。

「けど、まさか」

「しゅうくんは覚えていないのね」

母が小さな声で割り込み、父を見た。

「本当に、覚えていないならそれはそれでしかたない。秋世、お前もあの時以来、昭代に対して精一杯いいお兄さんになるよう努力してきたし、お父さんたちはそれを十分理解しているつもりだよ。でもな、秋世」

ゆっくりと、指をそのまま、父は秋世にくつつけた。ぬくもりが伝わってくる。

「昭代には、その時の恐怖がずっと続いているんだ。それだけは、忘れるなよ」

「忘れるなんて、そんなこと、俺どうすればいいんだよ！」

声が荒立つ。自分でも頭の中が二分割されたようで、どちらの路線を通っていけばいいのかわからなかった。片方の頭では、自分がやんちゃを尽くして昭代の髪の毛をとこやさんごっこして切りまくったことを納得している。たぶんあの頃は、病院からやっと解放されて、とにかく外で走り回りたくてならない時期だった。たまたま

傍には昭代もいたし、ちょうどいいおもちゃだったことは否めない。母の真似をして、髪の毛をくしでとかしてやつたり、ご飯の前には手を合わせる習慣を教えたり、いろいろしたものだった。でも、秋世に残っている記憶はそのくらいだ。もしかしたら、近所の男子友達と一緒に木登りとか何かしたかもしれないし、その時に昭代の面倒を見なくてはならないってことでとばっちりを受けたかもしれない。でも、そんなにおびえることなのだろうか？ 秋世には理解できない。

そしてもう片方の頭には、否、否と唱える何かがいる。それが何者なのかも、秋世にはわからない。

そんな奇麗事だけじゃねえよ。

そうつぶやく、見知らぬ誰かがいる。

だまされるなよ、目の前の大人どもに。

秋世は父の手を振り払った。そのままじつと父、そして母を見据えた。

「父さん、それだけじゃないよな」
母にも告げた。

「母さん、なんか、あるんだろ。ばあちゃんと昭代と」

一呼吸置き、凍りついたままの両親に言い放った。

「俺が髪の毛切り刻んだだけで、あんなにおびえるなんて、絶対ありえねえよ。もっと、俺なにか、したんだろ？ それ以上になんかひでえことしたんだろ？ もう俺覚悟できてるし、みんな話してくれたっていいよ。ほんとに」

自分の知らない誰かがしでかしたこと、かつて五歳だった自分がしでかした罪。

すべてを知らないまま、昭代や妙子にはもう顔を合わせたくなくなつた。

「どうせ、そういうこと、ばればれなんだろ。瑞希おばさんも、妙子さんも、おじさんも、他の親戚もみんな。その中で罪人の俺だけが知らないなんて、そんなの絶対変だろうが！」

「秋世、罪人だなんて言わないで！」

「だってそうだろ！ 俺が昭代を髪の毛切っていじめたりしなければ、あいつはうちにいたんだろ？ うちにいてずっと俺の妹でいたんだろ？ なのに、俺がやったんだろ！」

「落ち着きなさい、話をよく聞くんだ」

「じゃあしゃべろよ！」

思わずかっとなる自分がいる。

思わず父親を殴ってやりたくなる自分がいる。

ずっと、どこか知らないところですわり込んでいたのであろう自分がいきなり、背中越しにやってきて、自分の立っている一線を飛び越えてしまいそうだ。

「聞きたいならまず、黙りなさい」

父は全く動揺せず、アルバムを閉じた。

「結論からいうと、昭代に手を出したお前はもう、この世にいない。それだけはよく覚えておけ」

全く意味不明のことをつぶやく父を、秋世はじっとにらみつけた。

「お前が五歳まで、しょっちゅう病院と家の往復をしていたのは覚えてるな」

そりゃあもう、すごかったもんな。見舞い客に「秋世くんのおうちは？」と聞かれて「ここ！」と病院のベッドを指差したくらいだから。生後即かかった病気……小児結核……はもう少し早い段階でめどがついたらしいが、その後の合併症とかが続いてしまい、ちよつと熱を出すとすぐに救急車で病院へ運ばれる日々を過ごしていた。

「五歳の夏、やっと退院してから一度、おばあちゃんと昭代と、それからお前と、三人で二日間過ごした時のことを覚えているか？」

「あ、それはある」

仏壇上に乗っかっている黒枠写真の祖母を見やる。

「父さんと母さんはふたりで、用事があって出かけていた。その間、

おばあちゃんと秋世はふたりで、昭代を面倒見ていたはずなんだ」
そうだった。そのことは覚えていた。確か母に、「秋世はお兄ちゃんなんだから、昭代のことを可愛がってあげてね」と言い聞かせられた記憶がある。病み上がりということもあり、外には出られなかったけれども、祖母と二人で蜜豆を食べたり、テレビのヒーロー番組を見たり、時には近所の男の子友だちを呼んではしゃいだり、いろいろした。でも、それだけだ。昭代がいて、どうのこうのということはなかったはずだ。

「三日目の朝に、父さんたちが帰ってきた時、昭代の髪の毛がさっきの写真と同じように散切り状態だった。それがどうしてなのかおばあちゃんに尋ねたら、秋世がとこやさんごっこをして昭代の髪の毛を切ったのだ、と説明してくれたんだ」

「やっぱり、俺かよ」

吐き捨てた。逃げたくても逃げ場所が見つからない。そんな怒りがふつつつと湧く。

記憶にもないことを土下座して謝らねばならない。そんな理不尽さ。

「いや、それだったらお前のことを、きつく叱ってそれで終わるだろう。それに昭代も二歳だ。いくら兄貴に髪の毛をいたずらされても、普段から可愛がっていればすぐに忘れるだろう。だが、しかしなんだ」

「だがしかしって、結局俺が悪いのかよ」

大きく父は息をついた。

「その時以来、昭代はとにかく、お前のことを怖がっていたんだ。どうしようもなく、怖くてならない兄貴だと思って、顔を見るなりおびえて泣き出した。もちろんお前の罪ないいたずらにすぎなかっただろうし、髪の毛も伸びるものだ。最初のうちはそれほど心配していなかったんだよ」

父が「最初」のところに、奇妙なアクセントをつけたところが気になった。ぐいと顔を上げて唇をかんだ。

「どういうことだよ、それ」

隣で父の顔をじつと伺っていた母が、おそろおそろといった風に言葉をはさんだ。

「その後、おじさんおばさんと相談して、昭代をしばらく預けることにしたのよ。それだけよ」

「それだけってなんだよ！」

思わずすごむ。話のつじつまが合っていないじゃないか。

「なんだよ、いったい話がわけわかんねえよ！」

アルバムを思いっきりぶん殴る。一瞬、手型がついたがすぐ消えた。

「だってさ、父さんが言うことが本当だったら、俺が昭代の髪の毛を切って遊んだことがきつかけで、あいつは俺のこと嫌いになったんだろう？ それならわかるよ。俺が悪かったって、今からでも謝るよ。だけど、それだけじゃねえよな。ふつう、そんなことだけで兄貴が嫌いだってだけで養女に出すっていうんだったら、世の中の兄弟仲最悪な連中みんな、養子縁組のオンパレードだぞ。俺だって、そんなときは確かにとんでもないことしちゃったかもしれないけど、今の俺がそんなことすると思うかよ？ 俺、あいつがもし、今、首根っこ掴まれてバリカン刈りされそうになったら、たぶん半殺しにしてやるよ。青大附中なんて退学になったっていいって。それほんとだよ」

「そうだよな、秋世、お前はそういう奴だ」

断言する口調の父に、戸惑い自分の勢いが殺される。

「私が言ったのは、あくまでも五歳の夏の、たった二日間のことなんだ。秋世がその後、昭代を大切に守ろうとしていたのは親としてもよくわかる」

「そうよ、しゅうくんは本当にいい子だったのよ」

「じゃあなんで」

再び蒸し返す秋世に、今度は母が両手を組み合わせたまま言葉をはさんだ。

「もうおばあちゃんが居ないから話すけど、あの時ね、しゅうくんのことを親戚中からさんざん責められたの。妹の髪の毛をざんばらにしてしまうような悪い子だとか、尾ひれ背びれがついてね。昭代はまだ二歳だけど、しゅうくんの傍に近づけない子になってしまい、それがかえって周りを誤解させたのね。しゅうくんはもうとつくに反省していい子にもどったのに、本当に周りの人たちは聞くに堪えないことを言ったのよ」

「どんなことだよ」

「言えないわ。酷すぎて」

ほんとだよ。

秋世の記憶している限り、そんな酷い言葉を今まで親戚筋から投げつけられたことはなかった。それどころか、いつも「秋世くんは本当に思いやりのあるいい子だねえ」と誉められてばかりだった。葬儀期間中の三日間は、あの妙子さんと昭代を除いて、非常に受けのいい子どもだと受け止められていたはずだ。もちろん自分がそういう仮面をかぶっていたこともあるだろうが、それほどずれがあるとは思えない。

「とにかく、あまりにもしゅうくんばかり責められるものだから、とうとうおばあちゃんが怒ってしまったのよ。しゅうくんのことをいじめる人間は、大人であろうが子どもであろうが容赦しません、と親戚中に宣言してしまったの」

宣言だよ。

「けどそんなことでふつういじめつてなくなるもんかよ。俺、親戚の人たちから嫌味も嫌がらせもされたことねえよ。みんないい人だって、ばあちゃん言ってたし」

「違うのよ。それはね、なんというか」

言葉をにこらせるように母がうつむく。そういうところに真実が隠れているはずだ。

「なんというかって、なんだよ」

「おばあちゃんは、誤解したのよ。兄が妹にちよつとやんちゃをし

かけたただけなのに、大げさに受け取りすぎる昭代のほうが悪いってね」

「けどまだ二歳だよな！」

「そうよ、まだ二歳だったわね。でも、おばあちゃんにとっては二歳でも二十歳でも関係なかったのよ。しゅうくんを傷つける人は、絶対に許さない。しゅうくんは世界中でただ一人、おばあちゃんを守るんだ、そう決めていたの」

「けどどさ、昭代だって、ばあちゃんの孫だよな。俺も昭代も孫なのに、それだけでなんで差別されるんだよ」

言葉に詰まったのか、父の方を伺う母。やはりこのあたりに、核が隠れている。

「秋世、もう一度言うとな」

父は舌先で唇をなめるようなしぐさをした後、

「おばあちゃんもそうだったが、昭代も生まれた頃から、瑞希おばさんたちになついていたんだ。お父さんお母さんが抱いても泣き止まなかったのに、瑞希おばさんがだっこするとすぐに落ち着いたんだ。あの事件以来、瑞希おばさんの傍から昭代は離れなくなってしまう、父さんたちが連れて帰ろうとすると激しく泣いて嫌がったんだ。もちろん秋世のこともあっただろう。でもな、それ以前に昭代は向こうの家にいたがつてならなかったんだ」

「親なのに子ども置いてって、それで平気かよ！」

腰がふわつと浮いた。父と母が座っているのを、見下ろした。それぞれまだ葬儀後の髪の毛を整えたままだった。白いシャツにグレイのスカートとズボン。

「父さん、どうしてだよ。昭代が嫌がるようだったら、無理やり抱きかかえてうちに連れてくればよかったんだよ。生まれた時はどうだったか知らないけどさ、昭代はうちの子だろ、父さんと母さんの子だろ、ばあちゃんの孫だろ？ ばあちゃんが誤解しているのはしよぅがないけど、それは俺が後からいくらでも謝ってみんなにそんな奴じゃないって証明すればいいことじゃないかよ。昭代をこれか

ら守ってやればいいことじゃねえかよ。なのになんでだよ。たかが俺が悪さしたくらいで、なんで昭代を追い出さなくちゃならなかったんだよ！」

黒梓の写真から祖母が秋世を笑顔で見守っている。

ばあちゃん、昭代を追い出すなんてわけ、ないよな。

理屈では理解しているつもりなのだ。

ばあちゃんは、俺がやらかしたいたずらで昭代が傷つけられたことを知っていたんだ。

その時に俺が親戚中から総すかんくったこと知ってて、それで俺を守ろうとしたんだ。

けど、だからって別のうちに昭代を預けるってのは、なんか違いすぎるよな。

少しほとぼりが冷めてからさ、うちに戻すってことだってできただろ。

祖母が秋世のことを溺愛していたのは自覚していた。

でも、妹を追い出すほどに、とは思えない。

祖母にとっても、昭代は秋世と同じ孫のはずだ。可愛くないわけがない。なのになんで、祖母はあんな写真を残していたんだろうか？ 秋世と昭代の顔があまりにも似てなかったからだろうか？ それとも秋世をいじめた奴は、たとえ孫娘でも許さないってことなのだろうか？ そんな感情、秋世には想像がつかないし、ありえないと思う。

ばあちゃんのことだから、あとで気がつくはずだよ。ばあちゃん、そんなに話のわからない人じゃねえし、そんなことくらいでばあちゃんが昭代を追い出すわけないよ。

な、ばあちゃん、そんなこと、絶対ねえだろ？

自然とまた、涙がこぼれてくる。

「ばあちゃんのこと、今になってなんでそんな酷いこと言うんだよ」
これだけがやっと、搾り出せた言葉だった。

「ばあちゃんだって、そんなつもり、絶対ないよ。だけどなんで、あんなに嫌うんだよ。俺だけじゃないよな、俺の悪さだけじゃないよな」

何度も繰り返す。母が意を決したように立ち上がり、秋世の肩に触れようとした。

「しゅうくん、もう終わったことなのよ。おばあちゃんはしゅうくんのためによかれと思ってしたことなのだから、おばあちゃんを責めないでね」

「誰が責めるかよ！」

手を振り払った。生暖かくて梅雨っぽくて、じめじめしているその感触が許せない。

「ばあちゃんのどこが悪いんだよ！ 周りが悪いじゃねえかよ。俺を責めればいいんだ。俺が悪かったんだから、俺はとことん昭代に嫌われたっていいのに、なんで今になってばあちゃんばかり責めるんだよ！ ばあちゃんのせいになんてするなよ！」

左手がテーブルの書類にとんだ。話をしている間にテーブルの上に広がった水は乾いていた。紙を叩き落とした。すぐに父が背中を羽交い絞めにした。腕力がかなわない。無理やり引き倒されるような格好でソファーに横たわった。三発目の張り手を食らわされた。

「朝になるまで部屋に戻っている。しばらくは学校休みになるだろう。もう少し、頭を冷やしてから考えなさい」

「よく自分の親が死んでも平気でいられるよな！」

罵倒したかった。とことん罵って、殴るなら殴ればいいというそんな気持ちだった。

父はそれ以上手を挙げることなく、黙って散らばった書類を拾い始めた。母が秋世の隣でそっとしゃがみこむようにして、

「しゅうくんは何も心配しないでもいいの。しゅうくんはその分、きちんと努力しているの。あとは昭代の問題なの。だから、もう思い

悩まないでもいいのよ」

明日からあと四日間、秋世は忌引で学校を休む予定だった。それはわかってる。まずは寝ていても大丈夫だ。朝の心配はない。

おそらく、瑞希おばさんの家もそうだろうし、昭代も付き合うだろう。

でも、まずは最初に、やらねばならないことがある。

完全に腫れた頬をさすりながら、秋世は部屋に戻った。階段を昇ってゆき、祖母の部屋の襖が開けっ放しだったことに気づいてすぐに閉めた。自分の部屋の戸を力いっぱい閉め、ベッドの上に座り込んだ。まだ残っている気持ち悪い感覚が、抜けなかった。

それだけで自分の子を、親戚に預けっぱなしに、できるかよ。どうしても、納得いかなかった。窓の外を眺めると、かすかに淡い桃色の朝焼けが浮かんでいた。なんだか祖母が作ってくれたてるてる坊主を思い出し、また涙が出そうになる。こんなうるうるしてしまう性格でもないというのに。しばらく流れるままにした後、手の甲でこすった。つんとくさい匂いがした。

ばあちゃんがいくら言ってたって、俺がいくら昭代の髪の毛切ったからって、それだけの理由で瑞希おばさん家に昭代を置いてくるわけねえよ。仮にも親だろ？　いくら昭代が瑞希おばさんや妙子さんになついていたってさ、うちがいに決まってるさ。俺だって。

自分の記憶では、それ以降いじめた記憶なんてさらさらない。

今もし、この家にいたら昭代になにをしてやっただろう？

もちろん、勉強も教えてやってさ、おいしいもの買ってやってさ、青大附中の学校祭にはちゃんと呼んでさ、彰子さんにも紹介してさ、規律の連中にも紹介してやってさ、いろいろやってやるに決まってるのにさ。

いじめるなんて選択肢だけは、断じて、ない。

なのに、妙子さんははっきりと「いたずら」とか「いじめつくす」とか言う言葉を使って秋世を責めた。「誰もがみな知っている」と

まで言った。両親も当然知っているとって今尋ねた。その結果が、これだ。

とこやさんごっこして、髪の毛切って、それでおびえられて、ばあちゃんが怒って。

そんな単純な話ではないはずだ。

両親が秋世のことを思って隠していたのか、それともまた別の意味があつたのか、それはわからない。はっきりしているのは、両親の言葉は空洞がありすぎてすかすか、事実のかなづちでこつんと叩くと、即、こなごなになる、それだけだ。

明日も、あさっても、しばらくは家にこもる予定だ。

なら、妙子さんも同じ状況のはずだ。同じく喪に服さざるを得ないはずだ。

つまり、それなりにみな、ひまなはずだ。だつたら。

明日、妙子さんを捕まえよう。ああいうこと言うくらいなら、親たちよりもほんとのこと、絶対知っているはずだしな。

秋世はすばやく布団にもぐりこみ、眼を閉じた。

第二部 16

昭代はね、秋世くんが死んだ時、身代わりにする子だったのよ！

秋世くんの身代わりだから、『昭代』なのよ！

妙子さんとの待ち合わせ場所は、彼女の通っている大学の校門前だった。

「ごめんね、待たせた？」

「俺も今来たところですよ」

和やかにいと同士の挨拶を交わした。まだ忌中明けではない。もちろん外へ喪服のまま出かけるわけにはいかない。妙さんは明るいグレーの、ぴったりラインスーツ姿で現れた。秋世も親に学校の用事がある旨言い訳して出てきたわけなので、青大附中の制服を着ていくしかなかった。気温急上昇、かなり暑い。

相変わらずぺたつと張り付いたような髪の毛をかき上げるしぐさをし、妙さんは秋世に微笑みかけた。

「この前はごめんね。私も言い過ぎたわ。秋世くん、名誉回復のチャンスをくれてありがとう」

「いやいや、あの時は俺もきてたし」

笑ってごまかした。電話連絡を入れたのが忌引休暇中の午後で、両親および瑞希おばさん夫婦が家を離れたと思われる日だった。いくらなんでも、忌引中に外で遊びたいというのは非常識だろうし、妙さんのきつい態度からしてもそう簡単に話を聞いてくれるとは思えなかった。

なのに、意外だった。

どういう風の吹き回し、って言うんだろうな。

軽やかに、さわやかに、相変わらず周囲の女子大生と同じ化粧、服装で。

なんで「秋世くんごめんね、私も、謝りたいと思っていたの」って切り出すんだろうな？

電話口に出た妙子さんは冷静でいつも通りのいとこの仮面を被っていた。

傍に昭代がいたかどうかは定かではない。仮通夜前の食って掛かり方とは違っていた。もともと妙子さんはさっぱりした口調で話す人だけでも、今の態度は親切過ぎる。丁寧過ぎる。

女子大生は俺にまだ理解不可能なタイプの存在だなあ。本条先輩に今度レクチャーしてもらおっかな。

いつものお坊ちゃま仮面を被り直した。
家ではとっくの昔に剥ぎ取ったものだった。

学校は一応男女共学だが、七割が女子だという。国文科専攻の妙子さんは将来、高校の先生を目指すのだそうだ。葬儀中は教育実習が重なっていたこともあって気が立っていたのかもしれないと聞いている。秋世なりに肯定的な判断を下してみた。

「教育実習って、大変っすか？」

「まあね、でも英語とか数学とかにくらべたらまだましよ」

「いや俺、学校の先生になりたいってこと自体、すげえことだと思いますよ」

本音で秋世は答えた。

妙子さんは両脇からたれる髪の毛を両手で肩に流した。

「秋世くんは将来何になりたいの？」

「まだ先のことだしわかりませんよ。小学校で俺の能力全部使い切ってるから成績ばくそ悪いし」

認めたくないが、本音である。

「昭代はね、もう決めているみたいよ」
さらりと言葉をつなげた。

「へえなんにですか」

「保健の先生になるんだって。養護教師」

そんなの知るわけもなかった。育ての姉のみぞ知るところか。

空を見上げ、秋世は妙子さんの方を覗き見た。背は大体同じくらいだった。葬儀の時に着たような黒いスーツで並べば、秋世ももう少し老けて見えるだろう。普段の格好だったら、街でしょっちゅう高校生に間違えられることも多い。青大附中の制服を脱ぎたかった。ネクタイをはずそうとして手をかけた。妙子さんに叱られた。

「悪いけどここ、大学なの。部屋に入るまで、きちんとした格好でいてちょうだい」

「どこに行くつすか？」

妙子さんは答えず時計を覗き込んだ。秋世も真似して左手を持ち上げた。ちょうど十五時少し前だった。すれ違う大学生たちが、妙子さんに時たま声をかけていく。大学の講義はそれぞれ好きのように選ぶことができるので、妙子さんもそれなりに時間割を調節しているのだそうだ。

「今日ね、うちの親にはね」

少し硬い顔をして、妙子さんは呟いた。

「学校でどうしても提出しなくてはならないレポートがあるからということで出てきたのよ。秋世くんは？」

「俺も、規律委員会の打ち合わせがあるからどうしてもって」

嘘だ。「学校に用あるから」とだけ言い捨てて、追う母の声を無視して飛び出してきたのだ。

「規律委員なんて似合わないよね、君にはね」
「でしようでしょう」

目一杯明るく笑うことに秋世は徹した。

家の中で、笑顔を作ることではできなかった。

そのまま学校の校舎に靴のまま進んだ。なんだか土足で踏み込ん

でいるような気分になる。三階まで上がっていくのがなかなか大変だったが、男の意地で息つかず昇りきった。緑色の掲示板が突き当たり一杯に張り巡らされていて、「今日の補講」「本日の休講」などのメモ書きが画鋏で留められていた。

一枚に目を留め、

「大丈夫ね、たぶん来ないわね」

独り言をもらした。

「誰か来るんですか」

「いいえ、独り言」

もう一度妙子は腕時計を覗き込んだ。右腕に絡んでいる細いチェーンはブレスレットにそっくりだが、ちゃんと丸い時計がぶら下がっている。金色がやたらと目立っていた。時計だけは喪に服していない。

「今から私の担当教授の部屋に行きます。そこで話しましょう」

「担当教授ってなんですか」

「喫茶店や図書館では、人の目が気になるし、秋世くんも落ち着かないでしょう」

「俺は別になんでもOKですけど」

少し背中がむずむずしてきた。担当教授の部屋とか言つと、やはり第三者が入るということだろう。そちらの方がいろいろまずくないんだろうか。

「教授には話をしてあるから大丈夫よ」

「話って、何をですか」

「人目を避けて話をしたいでしょう」

それはまあ、そうだ。

しかし担当教授の立場はどうなるんだろう。

即、口に出した。

「けど、そこ人の部屋だし」

「大丈夫。教授もみんな私のこと知っているから。口は堅い人だしね」

そういう問題ではないような気がするのだが。

大学の世界はよくわからない。おそらく国文科の教授なのだろうと推測した。まだ自分が中学生である以上、七歳年上のお姉さんにしつかりくつついていくしかなかった。

緑色の掲示板が途切れたところに、薄汚れたエレベーターが設置されていた。

妙子さんがボタンを押すと、まどろっこしく階を示す番号がひとつずつ上に上がっていった。開いたドアも、乗ったとたんきしむ床も、かなりこれって世紀末じゃねえか、と思わせるような代物だった。中は空だった。

「上の階は教授専用の個人研究室棟。学生がうるさいと研究できないから」

「そういうもんっすか」

クラスメートで、語学だけ大学の講義を受講している立村のことを思い出した。

「けど、そこに行つてどうするんですか」

「だから話をするんじゃないの」

それはそうだけど、と言いかけて秋世は黙った。五階に到着したらしい。黙って戸が開いた。下の階で感じた喧騒とは裏腹に、ほとんど人の息遣いが感じられない空気と、なぜかじゅうたんが敷き詰められている床に、しばし息を呑んだ。

「別世界ですね」

「違う雰囲気よね」

細い廊下を妙子さんは大またでつつきつて行き、一番奥の部屋の前で立ち止まり、ノックを二回した。男性の声がした。

「どうぞ」

「私です」

苗字を名乗らなかった。妙子さんは音を立てぬようにドアノブをひねると、戸口でまず一礼をした。後、秋世にも同じことをするよ

う促した。よくわからないが、とにかく頭を下げた。ドアの隙間から見えるのは、大量の本で埋め尽くされた本棚と、幅広い机と、タバコの吸殻が山盛りに。

黒いめがねをかけた男性が、煙をくゆらせながらその机に尻を押し付け立っている姿。

冷房のかたまった冷氣で、のどから身体が凍りついたような気がした。

秋世を部屋に入れた後で、妙子さんはもう一度礼をした。

「先日はいろいろとありがとうございました」

「とにかくおかけなさい」

規律委員長として壇上に上がった気持ちで秋世もまた礼をした。大人にはよけいなことを言わないほうが、今のところ身のためだ。そう判断したところもある。

白髪交じりの男性は、手で数回、もくもくした煙を払うようなしぐさをした。左手に隠し持っていたコンパクトのような入れ物をぱかっと開き、その中にタバコを押し入れた。

「コーヒーは好きなだけ飲んでいい。私は隣の部屋にいるからな」「ありがとうございます」

コーヒーがどこにあるのか、妙子さんは承知済みだった。机の脇に置かれていたポットと、紙コップ、インスタントコーヒーを取り出し、手早く二人分のコーヒーをこしらえた。

「秋世くんは、コーヒー大丈夫？」

「はい、ブラックでもOKです」

「お砂糖入れようか」

「いいです」

そばで、息と笑う声が聞こえた。腰掛けて待っている秋世を見下ろす男性……おそらく妙子の言う「担当教授」とはこの人だろう……と目が合った。

「君は、青大附中なのかい」

「はい」

「何年生だい」

「三年です」

明るく、はきはき答えたつもりだった。教授は続けた。

「君、童貞かい？」

「へ？」

おどけるしか返事しようがないではない。

妙子さんが発言を耳にしていたかどうかは読み取れなかった。コーヒーを持ってきて表情を一切変えずに、秋世の前に置いただけだった。ふたりの大人にはさまれて、秋世は身動き取れなかった。見上げたまま、さわやかスマイルで、

「それって、答えないと、まずいことですか」

天然無垢な中学生の顔して答えてみた。女性の前でだ。妙子さんの担任教授に恥をかかせるわけにはいかないだろう。そんなエロネタ、仲間うちだったらいくらでも「あつそうっすか、まあそういう感じっすね」とやり返せる。でも、この人はなんなのだ？ 薄紫のシャツ姿で、上のボタンをふたつはずし、ちよび髭を生やしているこの人に。第一、この人は本当に教授なのか？ まあ年齢からしたら髪の毛の色からしてたぶん、そうとうのお年と思われなくもないのだが。

たぶん、五十歳は越えてるだろうな。

「妙子くんがこれから話すことを考えると、それは確認しておいたほうがいいね」

つんと済ましたまま、紙カップのコーヒーをすすっている妙子さん。

「くん」って、いったいなんだよ。

コーヒーの匂いとタバコの煙が混じりあい、こめかみのあたりがきいんと痛んだ。

童貞でないほうがいいのかもな。

大人である条件の一つを満たしたほうが、二人の大人と立ち向か

うにはプラスに働くだらう。すばやく判断した。

「そうっすか」

言葉を飲み込みながら、秋世はめいっぱいのやんちゃな笑顔を持つて答えた。

「残念ながら本命とはまだだけど、とりあえずは、済ませてますよ」

隣の部屋にいる、と最初は言いながら、結局教授は秋世の隣に座りこんだ。

テール角の直角を囲む格好となった。秋世の隣に妙子さんがいる。外ではれないように、と注意深く振舞うくせになぜ、教授という第三者を挟み込むのか、そのあたりが解けなかった。

しかも、妙子さんを「くん」付けで呼ぶしな。

秋世は白い紙コップをつかもうとして挫折した。カップから伝わってくる熱に指が耐えられなかった。ようやく一口飲んだ方がいいが、過剰に甘ったるくて閉口した。ブラック、と注文しておいたというのに、妙子さんは余計な気を回してくれたらしい。

教授は白いマグカップにもう一杯注いで、のどぼとけを膨らませて飲んだ。

「妙子くん、いいかい」

確認の意。

「お願いします」

「南雲くん、だったね」

秋世の顔を覗き込む教授から、タバコの匂いがぴんぴんと流れてきた。

「はい」

「今から、妙子くん側の事情を僕が代わりに話すけれども、それは決して君を責めるためではないんだ。そのことだけは、よく理解していてほしいんだ。それと、僕がなぜ、君の家庭事情について口をはさまなくてはならないかというただね」

コーヒードリで唇を湿らしながら、教授は続けた。

「僕と彼女は、許婚なんだよ」

「許婚、つてすなわち、あの、婚約者、フィアンセってことですか」
そんなの聞いていないぞ。

秋世は隣の妙子さんの視線を追った。どうも知られなくなかったらしく、すっかり頂垂れている。歳が離れすぎてるのではないかと、本来ならば今感じた疑問をそのまま、単なる冗談なんじゃないかと、いろいろとつっこみたい。状況がこんな重たいものでなければからかってやってもよかったのだろうが、そんな余裕あるわけがない。

「へえ、それはおめでとうございます」

「まだ先よ。今年は忌中だから来年以降よ」

ちらと火がのどもとにちらちら燃えたような気がしたけれど、ごくんとつばを飲み込み消した。妙子さんはまた両手でコーヒーを飲んだ後、髪の毛を後ろによけた。

「それでだ。南雲くん、いや、秋世くんと言った方がいいかな」

「はあ」

「僕が今から話す内容は、君にとっては信じがたいことだろう。誰が悪かったわけでもないんだ。誰もが大切なものを守ろうとしたという、ただそれだけのことなんだよ。わかるか」

初対面の男に……いくら五十歳過ぎの、いとこのフィアンセなんぞに説教されたくもない。妙子さんの態度を見る限り、秋世を前にして語るこのイベントは、計画済みのものであったとも思えるし、その中にはまた秋世の知らない秘密らしきものが隠されているのも確かだろう。

「おじさんおばさんも知ってるんですか」

「知っているよ。だから頼まれたんだ」

頼まれた？

秋世の知らないところで、すべて計画されていたいろいろなよしな。

両親も、おじもおばも、決して口にしない秘密を、この白髪教授

を通してばらしてもらえ。これを利用しない手はない。判断は早い。秋世のくせだった。

ま、俺も、Bまでは行ったしな。

さつき口走った嘘の味をつばで感じ、秋世は大きく頷いた。

「俺、覚悟があります。全部教えてください」

妙子さんが秋世のカップをちらりと見やり、

「コーヒーが冷めてるわね」

一言だけ残し、また入れ直してくれた。

この暑いさなかになぜ、こんな熱いコーヒー入れたがるんだろうな。

関係ないことをふと思った。

教授の苗字はまだ教えてもらえなかった。フィアンセなんだから、そのあたりもつとオーブンでもいいのにと思っただが、あえてその辺は口にしなかった。話を聴くことに専念したので、コーヒーは一切飲まずにいた。

「君の妹くん、昭代ちゃんと言ったね」

「はい」

どうせフィアンセなんだからすべて家庭事情はすべて聞いているのだろう。

「先日、僕の間接をたどって精神科医に診察してもらったのだけだね」

「せいしんか？」

耳慣れない言葉が飛び込み、鼓膜が破けそうだった。妙子さんの方をまた覗き込むが、彼女はうつむいたまま紙コップを握り締めたままだった。

「あいつなんかおかしいんですか」

「おかしいんじゃないわよ」

妙子さんの言葉をさえぎるように机を軽く叩いた教授。無表情だった。

「昭代ちゃんは幼い頃からいろいろと精神的に不安定になることが多いので、妙子くんのご両親も非常に心配していた。ただその理由が、あまりにも幼いゆえにわからなかった。ただある程度年齢が行った段階で、少しでも気持ちが楽になるようにと、それで今回特別な病院を紹介させていただいたわけなんだ。つまり、過去の記憶を少しずつ巻きもどして思い出させるというそれだけのことなんだけどね」

過去、かよ。やっぱり俺が髪切り切りに燃えたのがばれるわけかよ。

あえて罵った。もちろん口には出さない。別のことを尋ねた。

「昭代の不安定になるところってどんなところですか。俺を見て逃げたくなるとことかですか」

否定されると思ったのに、思ったよりもあっさり認められてしまった。

「そうだね、それもあるね。君のことをどうしてそんなに怖がるのか、その理由も探らなくてはならないという話でね」

「で、俺が昭代に何かしたってわけですか」

隣の妙子さんはうつむいた。思いつきり顔を引きつらせるようにした。妙子さんだけを見ていたら、いくらでも答えが出てくるだろうに。そんなもの見たくないとかわかってるから、秋世は教授に話をせがむ。

「これについては、あくまでも昭代ちゃんの記憶に残っていたことだから、それが正しいかどうかはわからないよ。君はどこまで聞いているの」

「俺が五歳の時に、はさみもって昭代を追いかけてまわしたことです。両親から言い含められた、おそらく上っ面だけの理由を口にした。特に表情を変えず、教授は頷いた。

「五歳くらいの男の子はやんちゃだ。ごくごく普通のことなんだ。ただ、昭代ちゃんにとってはそれがたまらなく恐ろしいことだったらしく、君の子どももつばいやんちゃぶりが記憶に刷り込まれてしま

った。そうだな、たとえば子どもの頃、犬にかまれた人がそれ以来、猫くらいの犬でも怖くて逃げ出してしまうようになったり、おなかを壊した記憶が無意識のうちに残っていて、ケーキが今でも食べられない人とか、いろいろいるんだよ。その一つだったんだ」

「けど、それだけであんなに俺を避けるってことはないと思います」
妙子さんがさらにスカートを引つ張るようなしぐさをした。

「俺が何か、救いようのないことをやらかしたからですか。たとえば、いわゆるお医者さんごっこしたとか」

きりつと妙子さんの目尻が釣りあがった。でも声は出さずうつむいたままだ。

「もし、昭代の記憶にそんなのが残ってるんだったら、はつきり言うってください」

言葉でははつきりと言い切ってしまう。自分では全く記憶に残っていないことだから。でも、妙子さんも、教授も、両親も、昭代本人も、「お前がやったことはこれなんだ」と言う顔で秋世を見つめる。それが正しいことなのだと言わんばかりにだ。秋世には全く記憶に残っていないことだから、謝ることすらできない。もし同じことを他人が昭代にしようとしたら、思いっきり殴りつけるだろうに。殴るに値することを、自分がしたとはどんなことがあっても認めたくない。そのくせ、教授にはその反対を要求している。ふたりの自分が秋世の中にはいる。「イエス」と答えてほしいのか、それとも「ノー」を出してほしいのか。そのどちらかなのかわからない。わかつているのは猛烈に走りたくないような衝動だけだ。

「秋世くん、君は、さっき、女を知っていると聞いたね」

突然話が飛び、答えられなかった。

「だったら約束してほしい」

「何を」

「君が昭代ちゃんに何をしておびえさせたのか、それを思い出す必要はない。ただ、これから先、大切な女性と出会った時には決して無理強いはするんじゃないということをだ」

「俺が、昭代に、そんなことしたっていいんですか！」

紙コップのコーヒーが少しはねてこぼれた。

「君の記憶に残っていない。ただ昭代ちゃんはその記憶がもとで、五年以上苦しんでいる。それだけの差だよ。本当のところは誰にもわからない」

「ちよつと待つてください、教授、昭代が嘘言っただけなんですか！」

今まで黙っていた妙子さんがいきなり抗議した。身構える秋世をよそに、教授は指先でテーブルを叩き、首を振った。

「妙子くん、真実というのはね、多面性なんだ」

「けど、それっていくらなんでもあんまりです！」

ぐいと秋世の肩をつかみ、妙子さんは立ち上がった。両肩をがっとなぐりつけるようにして、無理やり座らせたままのような格好でもって、

「秋世くん、もう一度聞くけど、本当に、全く、昭代に何をしたか、覚えてないの？」

「覚えてません。すいません。それ、うちの親にも言われました」

「じゃあ、覚えているのは昭代だけってことよね！」

「たぶん、そうじゃないかと」

「じゃ、昭代は一生、実のお兄ちゃんに悪戯された記憶を持って、悲鳴あげたり男子見るたび逃げ出したり二時間ドラマの濡れ場観るたびものを投げつけなくちゃいけないの？」

「だから俺、やってないとした」

言いかけた秋世を、炎をたたえて妙子さんは見据えた。

葬儀場での態度とほとんど同じだった。

「そうよね、まだ赤ちゃんだったんだもんね、昭代も秋世くんも。小さい頃の傷をあげたらうほど私も馬鹿じゃないわ。でもね、聞いてよ。秋世くん。どうして全く覚えてないの？ 昭代と同じくらい、どうしてあの時のおぞましい記憶を覚えてないの？ 苦しむのは昭代だけなの？」

「妙子くん、やめなさい」

とがった声で制止する教授を無視して、妙子さんはわめき散らした。もう誰も押さえることができそうにない。秋世はただ、妙子さんの言葉で火のついた頭を、そのまま燃やすだけだった。

「昭代の名前の由来、知ってる？ あきよ、という名前、秋世くんわかる？」

首を振った。

「秋世くんの名前を訓読みするとそうなるよね。『あきよ』って」

「俺の彼女もそう呼んでくれますよ」

おちゃらかせてごまかそうとするが果たせない。隣で立ち上がった教授がもう一度、

「妙子」

厳しく叱った。全く効果がない。教授がつかつか近づいていき妙子さんの頬を打ったのと、彼女の叫びが秋世の耳に届いたのと一緒だった。

「昭代はね、秋世くんが死んだ時、身代わりにする子だったのよ！女だったから嫌われたのよ！秋世くん的身代わりだから、『昭代』なのよ！」

一瞬息を呑んだ後、妙子さんは崩れ落ちるように椅子に座りこみ、テーブルの上に顔を押し付け泣きじゃくった。打った手をぼんやりと下ろし、秋世と妙子さんを交互に眺め、教授はポケットからタバコのケースを取り出した。ついでにライターも用意し、一本くわえて火を点けた。だんだん自分の身体に伝わってきた、重たいもの。秋世は嗚咽する妙子さんを見つめたまま、意を決して教授の前に立ちはだかった。

ここで聞かねば、男じゃない。

「俺の身代わりで、昭代が生まれたって、どういうことが、わかるようだったら教えてください」

教授は首を振った。

「今の言葉は間違いだ。妙子くんは昭代ちゃんのことになるとはっ
ちやきになるからな」

一本、吸い終えた後、教授は妙子さんの肩に手をかけた。

「もついい、君は先に帰りなさい」

不意にむしゃぶりつくように、妙子さんは教授の胸に抱きついた。
傍で秋世が観察しているのに気付かぬように。

ただ小さな声で、

「だって、昭代が、昭代一人、かわいそうじゃない」

それだけ繰り返していた。特に抱き返すこともせず、ただ胸を貸
すだけの教授に、秋世は一礼した。部屋から出ていった。

壊れかけたエレベーターから降り、なんとなく直感でもって出口
までたどり着いた。

おそらくだが、と秋世は思う。

今日話すこと、おじさんおばさん、妙子さん、昭代、みな打
ち合わせ済みだったんだな。あと、うちの親も。

そうでなかったら、こんな茶番劇、誰が打つか。

忌中休暇最後の日に、秋世なりに考えた妙子さんとの打ち合わせ
も、すべては親たち、もしくは大人たちの手によってうまくまとめ
られてしまったというわけだった。

一つだけ、手違いがあつたとするならば。

昭代はね、秋世くんが死んだ時、身代わりにする子だったの
よ！

秋世くんの身代わりだから、『昭代』なのよ！

第一、身代わりってなんだ？

秋世は外の暑苦しい空気をもう一度吸い込んだ。コーヒーよりも、
今はサイダーを一本丸ごと飲みたかった。まだ誰も戻ってきていな
部屋の中で、ばあちゃんの写真と向かい合いながら身体の中をすべ

て泡にしていまいたかった。

第二部 17

本条先輩か。泊めて、もらえるかもな。だったら、すげえ嬉しいよな。

親とは口を利かずにやり過ごし、とうとう久々の登校日を迎えた。親の死ならともかく、祖母には距離があるものとだれもが思っているようで、誰も同情めいた視線を投げかけてこなかった。

「南雲、悪い、すぐ来てくれ。おとこの交流会の話なんだがな」
規律委員長としてのお仕事がたまっている。

半そでシャツでネクタイを少し緩ませ、秋世はにっこり笑顔で振り返った。

「何があつたのさ」

「いやあ、すごかったぞ。まさか、規律まで引っぱり出されるとは思わなかったし、出るとしてもお前がいればそれで終り、と思つてたのになあ」

「いやすまんすまん、俺も突然の不幸だったもんで」

おちやらけて返した。相手もわかつている、暗く返しはしない。

「ほんと、お前の不幸は規律の不幸ってやつさ」

前から評議委員長の立村にも頼まれていたのだが、水鳥中学交流会の際に、軽く顔だけでも出しておいてほしいというお達しがきていた。生徒会、評議委員会、および希望者が一室に集まって、互いの中学事情について語り合うというシンプルな催しだった。一般希望者の数が予想を反して集まらず、立村なりに考えた結果の南雲秋世出馬願いと聞いてはいた。

「要するにさ、南雲を使ってなんとか女子たちに関心を持たせようとする評議委員会の苦肉の策ってことよ」

「南雲がいるだけでだいぶ、女子の申し込みが増えるもんな」

秋世も交流会には興味しんしんだったこともあって、ひそかに楽しみにしてはいた。祖母の葬式および忌中休暇ときは、余裕もあるわけなく、思い出したのは学校で、というのがすべてを物語っている。

「ひでえ話だ、せつかく南雲が顔を出すからってことで全校の女子がこぞって参加申し込みしまくって、評議委員会としては計算通り、ってとこだったらしいけどな。あとで暴動。途中退場されそうだったぞ。『私たちの南雲くんは？』って視線ばしばし投げつけられてさ」

知ったことがよ。

穏やかな顔をこしらえ、秋世は無理やり話を終わらせた。

「それよか、『青大附中ファッションブック』の準備は大丈夫か。イラスト、俺のいない間に描いておいてもらえたかなあ」

終業式前にはきちつと、製本して全校生徒に配るべきもの。あと一ヶ月もない。

規律委員連中は全員うつむいた。どうやら、秋世はこれから徹夜して、イラストと製本手配に命をかけなくてはいけないと見た。

全く、頭が痛いぞ、どうするよ。

三年D組の教室に入った。台風一過、思ったよりも早く夏っぽい空気で満ちていた。秋世が教室に入り、席につくと隣の席の立村がぼそつと、

「この前は」

言いかけた。唯一、重たい空気を引きずりたさそうな奴だった。

「なんでもないよ、どうもどうも、それよかさ、規律の連中から聞いたけど、交流会のこと、本当にごめんな、りっちゃんも大変だったのになあ」

脳天気に戻した。かばんを机の上に置き、カセットテープを一本取り出した。

「この一週間やったらめったらひまでさ、俺やることなくてさ、う

ちでラジオのアンテナいじって、海外のラジオエアチェックしまくってたんだ。りっちゃんに少し解読してもらおうと思ってさ」

嘘だ。親に話し掛けられるのも顔を見るのもいやだったから、ずっとこもって短波ラジオをいじり、録音している振りをしたただけだ。日本語を聞きたくなかったからだ。中国語、朝鮮語、それから英語にロシア語、コーランなどなど。

「いいけど俺もまだ、中近東の言葉はわからないんだ、あとインドとか、アジア系も」

「りっちゃんは辞書があれば無敵だろ」
「そうくるか」

立村は押し頂くようにして受け取ると、入れ違いに封筒を取り出した。かなり分厚い。コピーと見た。

「内容は、わかるよな」

「ああ、たぶん」

英語のノートだろう。こいつの語学能力が抜群だというのは、誰もが知っていることだ。中学英語なんてひまでしかたなかるう。だから大学の授業にもぐりこんでいるというわけだ。

「じゃあよろしく、りっちゃん頼りになるなあ」

「なんないよ、ちつとも」

吐き出すように、言い返された。

ははあ何か、あったな。

このあたりの直感は自分でも鋭いと思う。軽くひじで立村を小突いた。

「交流会、無事に終わった？」

無言。言い返そうとしなかった。かすかな声で、
「一応な」

無理やり搾り出してきた。いろいろあったと見た。もちろん後で他クラスの評議連中や、規律関連の奴から聞いてもいいのだが、立村から聞くから面白いというもある。

「評議委員会としては、無事終了だったんだね」

「それがなんだよ」

あらら、またひっかかってくる。そうとう後遺症が重たいと見た。「きつと、裏事情が大変だったんだろうなあ。たとえばあの子とかさ」

「あの子ってなんだよ」

あらあら、とうとう立村、口元あたりから耳、頬まで真っ赤になっ
っているじゃないか。

やはる図星、と見た。秋世もこの辺はしっかりと聞き出したいゆ
え、注意深くそつと、そおつと。

「やっぱり、彼女のことでは何かがあつたんだな。手鏡、渡したの」
「そんなんじゃないよ」

完全に立村の奴、パニックに陥っている。見た目は落ち着いた状
態でも、言葉のつじつまが合わなくなつて、だんだん本音を口にし
始めると危険信号だ。秋世には立村の扱い方がもうだいたい見当つ
いている。他人にはれないように気を遣いつつ、さらに突っ込んで
やるのが一番だ。

「ま、いいよ。どうせ後で難波あたりから聞くからさ、無理しない
でいいよ」

「そんな変なこと、聞くなよ」

もう完全に、立村は秋世の手の中だ。前、後ろちらちら見ながら、
ついでに清坂美里のいる方も確認して、

「たいしたことじゃないんだけどさ、ただ、いろいろとさ」

もごもと言いつつ訳をしては、またごまかそうとする。

「りっちゃん、ストレスたまってるだろうなあ。旅行中に発散した
からまあいいか」

「してないってさ！」

規律委員長と評議委員長の会話は、実にのどかだった。

「あきよくん、おはよう！」

元気な声が二重に重なって聞こえた。顔を挙げてみると、我が姫・

奈良岡彰子がにこやかに手を振っていた。皇族の方のようなお手振りだった。思わず立ち上がるうとしたが、彰子の後ろに約一名、ちびっこい奴がいるのに気付いて止めた。

「あれ、俺、迎えに行くの忘れてたかも、ごめん」

「いいいいいよ」

そう言えば、まだ秋世は聞いていなかった。彰子の後ろから勝ち誇ったように登場した、水口病院の御曹司にちらと目を走らせた。こいつはどうやら、秋世が忌中休暇取っているにもかかわらず、お悔やみの一つも言おうとしないときた。かちんとくる。

「おい、すい、すい、ちよつと来い」

「なんだよ」

「あのさ、俺、実はばあちゃん亡くしてただいま喪に服してるの。そういう時、一言さ、ご愁傷さまとか言つてやるのが、筋じゃあねえのか？」

もちろんおふざけの一環である。隣で立村ひとりが不安げに秋世を見上げるが、そんなの無視だ。単に、水口が調子こいて彰子にべたつくのをけん制するためだ。

「ご愁傷さまって、自分で要求するもんじゃないよ」

「せめて、心、つてものが、あるだろさ。将来、ご臨終ですと悲嘆に暮れる患者家族に向かって、そんな態度でいいと思うか？　おい」

「心？」

こいつ本当に医者になれるのだろうか？　人ごとながら心配になつてきた。彰子と一緒にどこぞの医学部ご用達高校に進学したいと寝ぼけたことしゃべっていたが、それ以前に常識というものが必要だろう。なにか気に障ってしかたがない。

「すいくん、そうだよ、今は、あきよくんの言うのが正しいよ」

たぶん彰子も、秋世が本気で水口を責めようとは思っていないだろう。相変わらずのあんまんだつぷりのふつくり笑顔を浮かべたまま割つて入った。近くに来てくれるのが彰子だったら、何も言うまい。水口だけがわけのわからない顔をしつつ、

「さ、じゃあまた明日もしような！」

悪ぶった口調で自分の席へ戻っていった。

「あきよくん、もしよかったら今度、うちに遊びに来てねって母さんから伝言」

「え、俺、行っているの？ もちろん、ふたりつきり？」

冗談めかして尋ねてみると、当然、彰子は首を振った。

「うっん、今度の七夕、ナツキーや時也たちが集まって、花火大会するんだ。だから、せっかくだしあきよくんも一緒にどうかな、と思つて。父さんが退院できていれば、打ち上げ花火も楽しいんだけどね。あ、でもナツキーたちがねずみ花火とか、簡単な打ち上げ花火とか用意してくれるみたいだし、まあいっか」

あいつらと一緒だよ。

たまに秋世は、彰子の考えていることがわからなくなる。

一応は「恋敵」たるこの関係。しかも三股ときた。

恋敵三人を組ませて、何をしたいのか？

「けど向こうさんが、いやがりませんかねえ」

「うっん、大丈夫。ナツキーもね、あきよくん呼んでもいいよって言つてたし。他に女子もたくさんいるからいいんじゃないのって」

ますます、よくわからない。夏木宗・花散里の君ファンクラブ会長の考えることは。

作り笑いを浮かべて秋世は頭をかいた。照れ隠しっぽく見えるようにした。

「およばれにあがつたら行かねばなりませんなあ」

「そうそう、すいくんもね、来たがつてただけどもどうかなあ」

おい、正気だよ！

水口ではなく、彰子に、だ。

正気そのもの、健康ではきれいなブラウスの胸元を軽く押さえながら、彰子はこっくり頷いた。

「すいくんもね、お家でいろいろと大変みたいなんだよね。話聞いていると、本当にストレスで疲れているみたいなんだ。勉強しなさ

いって言われ続けているらしいのよね。だから、こういう時みんなであつと盛り上がったら、元気出るんじゃないかって思ってたかな」

「あれでストレスたまってるのかよ」

やたらと下ネタを発するの、いきなり彰子べったりに戻るのも、あれはすべてストレスが原因か。たまったものじゃない。そんなにいらいらするんだったら、素直に青大附高に進学決めて、のほほんと残りの中学生生活送れっていうんだ。

「まあ、先のことだし、準備は私たちがするから、また詳しい時間とか決まったらあきよくんに言うね。今のうちに、出来たら予定、空けててほしいな」

あの、こういうことって、本当だったら男側から、行動起こしませんか？

のどまで出かかった言葉を飲み込み、無理やり「彰子限定笑顔」を貼り付けた。

「もっちゃん、OKに決まってるでしょうが！ できたら俺もその計画員に混ぜてもらえたらもっといいなあ」

風が窓から突如吹いてきた。頬をはたくようなさらつとした感覚が残る。彰子は前髪を押さえるようにして、軽く首をかしげた。

彰子が席についた後で、やっと秋世は気がついた。

俺、まだ彰子さんの家庭の事情、全然聞いてねえよ！

新聞沙汰になったことって、いったいなんだよなんだよ！

菱本先生がいつも通り脳天気、これまたいつも通りに立村をからかい……当然、奴は思いつきりすねたまま唇を尖らせている……秋世に向かって、

「南雲、もう大丈夫か」

さくつと声をかけた。こういう時にはもちろん、いつもの自分のふりをする。

「どうもです、今日から全開でいきますよ、もちろん」

「その調子だ」

それ以上特に突っ込まれることもなく、授業が始まった。思ったよりも教科書が進んでいなくてほっとした。まだ、ぼおっとしても、怒られないですむ。

学校にいる時は、いい奴の南雲規律委員長でいられた。

祖母がいなくなってから、まだ一週間ちょっとしか経っていない。もう骨になって、仏壇の上で鎮座ましているばあちゃん。

部屋の中で、ラジオのチューニングをしながらスピーカーに耳をくっつけ、すべての生声を遮断しようとしていた。父も、母も、弔問に訪れる客も、すべての日本語は消えてしまえばいい、そんなことを思った。ずっと朝鮮語、韓国語、ロシア語、中国語、ありとあらゆる世界の言葉を部屋に流しながら、その意味がわからないことに感謝したくなった。音の連なりはただの雑音に過ぎず、意味のない羅列だと思えたからだった。

悪意がなくても、五歳でも、無理やりいたずらされたり半殺しの目に遭わせたり、そういうことをされて我慢する義務が、昭代にあると思う？ 秋世くん

昭代はね、秋世くんが死んだ時、身代わりにする子だったのよ！

秋世くんの身代わりだから、『昭代』なのよ！

妙子さんの叫んだ言葉を、いまだ撥ね付けたままの自分がいる。

だってさ、俺そんなことしてねえもん。五歳だったらいくらなんでも、覚えてるだろ？ そんな悪さ……お医者さんごっこなんてしたら、忘れるわけねえよ。

何度考えても記憶にない行為。父も母も、妙子さんも「教授」という名の婚約者さんも、消えた秋世の過去がでっ上げた物語を「真実」だと必死に訴えようとする。

そりゃ、思いっきりかりかりに刈り上げた昭代の髪の毛は、写真に残っている以上、本物だろう。

そりゃ、昭代が精神科医にかかっているという話も、事実だろう。でも、どうしても飲み込めない。このまま、どうしても自分ではつち上げの事実突き飛ばされなくてはならないのだろう？ 謝らねばならないことならば、もちろん頭を下げる。もし、ほんの少しでも秋世にその意識が残っていたとしたら……五歳とは言わなくとも、たとえ一歳くらいの時に無意識にしたことであっても。

いったい俺、昭代に何したって言うんだよ！ すっぱだかにしてサスペンス劇場の濡れ場みたいな真似でもしたのか？ ふざけんなよ。俺がそういうこと覚えたのは、悪いがずうつと後のことだ。女たらしと呼ばれた俺でも、いくらなんでも、五歳の時にそんなことするわけねえよ。それに、いやがったら絶対俺、やめるに決まってる。そうさ、俺はそういう奴だよ。なのになんでだよ。

認めるわけにはいかなかった。存命中の祖母がいつも口にしていた言葉。

秋世はほんとうに、いい人だからねえ。

「いい人」ならば、決してやるわけがない。たとえ子どもの頃の間違いだったとしても、もし昭代にそんな酷いことをしでかしていたとしたら、祖母は決して秋世を「いい人」などと言わないだろう。ずっと、本当に幼い頃から最後に顔を会わせた日まで、ずっと祖母は秋世のことを「いい人」だと言い続けていたではないか。あまり確証がない言い訳だけど、祖母の意思の強さと善悪のはっきりした性格を知っている秋世は、その辺、断言したい。

ばあちゃんかもし、俺のとてもないことを知ったら、きっと半殺しにするくらい殴ったに決まってるさ。そうだよ、ばあちゃんいつもそうだよ。俺が間違つてるとか、せこいことしたりしたら、即、怒ったもん。俺はばあちゃん喜ばせたいから絶対そういう悪い奴になんかなんないって決めたんだもん。覚えてるさ。世の中の年寄りみんな俺のばあちゃんみたいなんなんだ、って思ってたか

ら、親切にすることだつてごく普通のことだつたしさ。多少むかつく奴がいても、うちのばあちゃんにばれたらやだからって、あえてきつちりしてたしさ。俺、今までお天道様に顔向けできないことなんて、してねえよ。あ、一応、してたかもな。彰子さんに会うまでは。

ずっと、水菜さんの顔が浮かんだ。まずい、歴史の教科書、マルクスとレーニンの顔に水菜さんが重なっているみたいだ。

水菜さんだつてさ、そりゃ俺、あの時本能通りにやるところまでやったつてよかったさ。けどさ、ばあちゃんにいつも言われてたんだ。「女の子は、大切にしないとだめだよ」つてさ。あたりまえだろ？つて。もしここで最後まで、ぐぐつとやったら、きっと水菜さんは痛い思いするつてわかつてたしさ。それ、いやだろうなつて思ったしさ。

正直なところを言わせてもらつと、水菜さんとの一線を越える寸前こらえるのは、かなりしんどかった。中学一年の秋世にとつて、この後ののはけ口には本当に困つた。誰にも相談するわけにもいかなかったし、したくもなかったし。

ばあちゃんの前だから俺、いい奴になりたかつたんだよな。なのに、みんないきなりなんだよ、俺がとんでもない悪人だつて顔して、なんで攻め立てるんだよ。証拠、あるのかよ。昭代の記憶か？ 昭代の記憶がからんでいるのかよ。昭代が俺のいやんばかんそこはだめよみたいなこと、全部覚えてるつていうのかよ！

無意識か、レーニンの鼻筋をシャープでこりこり描きこんでいた。

「教授」という名のおじさんが言うには、昭代の記憶はかなりはつきりしていたという。

詳しい内容については、妙子さんの話をすべて参考にするしかないけれども、「二時間ドラマの濡れ場を見てパニックになる」ところみると、相当なものなのだろう。家に泊まりに来た時に、やたらとおとなしかったのはテレビを観ないせいだったのかもしれない。

ただ、具体的に何がどう、とは誰も言わなかった。妙子さんがもつとしゃべりたさそうだったけれども、「教授」にひっぱたかれて言葉を飲み込んでしまった。もしかしたら「教授」は、もう少し深い事情を聞いているのだろうか。いやなによりも、「教授」は本当に妙子さんの婚約者なのだろうか？ この辺も謎だった。第一、家の両親が全く話に触れないというところが妙だ。仮にも母の妹の娘、姪っ子なのだ。結婚話があれば、それなりに話題としてあがってくるだろう。近くに住んでいるならなおさらのことだ。

絶対変だぞ、それって。

とにかく信じるわけにはいかない。

完璧すぎるくらい、いやみなくらい「いい奴」を演じている自分が、どうして実の妹に対して、野獣じみたことなんてできるだろう。いくら善悪の判断ができない頃とはいえ、絶対にそんなこと、あるわけがない。

けど、どうやって証明すればいいんだろう？

昭代に直接聞くか？ それとも？

これも一つの案として考えた。即、却下した。

すでに「秋世くんが昭代のことを苛め抜いた」という定義がなされている瑞希おばさんのうちで、昭代が素直に言をひっくり返すとは思えない。それ以上に両親が聞いたら激怒するだろう。

となると、残りはひとつか。

「教授」を頼るしかないだろう。秋世の結論は、結局そこにたどり着いていた。

レーニンをゴリゴリ弄繰り回した後、次のいたずら書き犠牲者は、孫文に移った。授業の中身なんてどうせ、あとで立村からノートを書させてもらえばいいだけのことだ。教授の黒いめがねを、孫文の丸い顔になぞってみると、どこことなく「教授」そっくりに見えた。

とにかく、本当のこと、聞かせてちょうだいってとこかな。

秋世は、腕時計を覗き込んだ。どちらにしても、妙子さんの学校

に「教授」が研究室を持つていいるということと、婚約している関係だつてことは本当だ。チャンスを探いつつ、真実を探り当てることにしようと決めた。秋世の記憶にない以上、昭代の勘違い、もしくは別の同年代からやられた悪戯の可能性もある。もし、新しい事実が発見されたとしたら、その時は別の手を考えよう。

そこまで考えて、だいぶ気が晴れた。

自分のことを知つてゐるのは、自分しかない。

俺が知らないつて、言つてゐるんだからさ。

授業はのほほんと進み、期末試験用の裏情報なども仕入れつつ、秋世は相変わらずの笑顔でもつてクラスメートに接していた。みな、秋世の「喪中」状態なんて全く知ったことが、とばかりに間抜けな話題を持ちかけてきている。東堂ときたら、告別式の時はうつてかわつて、いきなり、

「南雲、今度の金曜、夜、駅前に繰り出そうぜ」

とてもだが、喪中の人間に話し掛けるような内容ではない。

「はて、それはなぜに」

「ちよつとさ、期末前にぱーっと、やりたくてな」

東堂にしては珍しい。こいつもそれこそ「ストレス」がたまつてゐるのだろうか。

「修学旅行でばあつとやれなかつたからっすか、東堂先生」

「それもある、うん」

ちらつと立村の方を見た。あいつは戸口で、他のクラスの男子となにやら話をしていた。気になつてもう一人、羽飛と清坂を探してみると予想通りふたりでくつついて語り合つてゐる。よくわからんが、二人っきりの夜を過ごしても、帰つてみれば元のままといいところか。

「みんな、結局ストレスがたまりまくつてゐるつてわけっすねえ」

「そついうこと」

東堂も立村たちをさあつと眺めると、

「本当に、何もなかったんだって思うさ、あいつら見てるとほん
と」

しみじみ呟いた。

「結局俺がいない間、あの二人、あんな感じだったわけかよ」

誰ともなく呟く秋世に、

「まあなあ、裏事情はよくわからんけど、交流会でさ、立村の奴も
いろいろ大変だったって聞いているしな。評議委員長は大変だねえ。
多少、やらかしても大目に見てやるかって気になるよな」

妙に悟りを開いたようなことを言う。やっぱり変だ。東堂、頭に
何かできものできたか？ 水口病院のお世話になった方がいいのか
？ かなり心配だ。

「おいおい、東堂」

秋世は肩を組むようにして、東堂にしか聞こえないように尋ねる
ことにした。

「なんかほんと、あつたの、ねえ」

「ま、人生いろいろあらあな」

とうとう最後までとぼけられてしまった。

「で、どうする、金曜」

「しかたないっすね、お付き合い、しますが、ひさびさにはあつと」
たぶん、このあたりのお誘いに、謎を解く鍵があるのだろう。秋
世の直感でいくと、東堂も何かたくらんでいるとみた。みな、修学
旅行が終わるやいなや、新しい展開が広がりすぎている。そのくせ、
肝心要の奈良岡彰子事情についてはうやむやなままだ。担任が緘口
令を引いた途中帰宅の謎、どうして「恋人」の秋世にも教えてもら
えないのだろう。

そうこうしているうちに、あつという間に放課後となり、規律委
員会の集まりで「青大附中ファッシュンブック」の仕切り直し、そ
の他毎度恒例の女子たちからの慰めの言葉などを頂戴し、気が付け
ば夕方四時半を回っていた。正式な集会は明日以降に回すとして、

秋世はまず教室へ戻ることにした。大抵、委員会のからみで時間をつぶしたがっている誰かがいるはずだし、もしかしたら「E組」という特別クラスで数学の補習をしてもらっている立村と顔を合わせることができるかもしれないかった。

まだ夕焼けには間があった。秋世の読み通り、立村が教科書を読み込み、ぼんやりと空を眺めているのが見えた。横顔に当たる陽の光がどうも、逆光だった。うつむいてくつろいでいる姿は、いかにも「ハートブレイク真っ最中」もしくは「失恋直後」といった雰囲気だった。

「りっちゃん」

一声かけた。立村が顔をあげ、かすかに笑った。声はなかった。

「今日は、これで終り？」

「まあ、一応な」

いつも落ち込み気味の顔をしている立村だが、この日はいつもにもまして暗い表情だった。菱本先生とバトルでもやらかしたのか、それとも清坂と何かあったのか、いやいや評議委員会や交流会でのばたばたで疲労困憊なのか。

秋世は立村の傍に近づき、ガムを一枚差し出した。

「ありがとう」

黙って受け取り、胸ポケットにしまった。

「それにしても、暑くなればなるほど、具合悪くなるんだよな」

独り言を言う立村に、秋世は思いつき笑顔で答えてやった。

「夏、弱いのが、りっちゃん」

「毎度のことながら」

もう一度、空を見上げ、

「なぐちゃん、本条先輩には何時会う？」

全く想像してない言葉を投げかけた。

「本条先輩かあ、そうだなあ、俺もそろそろ会いたいなって思ってたところなんださあ、土産、買い忘れててさ」

「昨日、呼び出されたんだ、先輩に」

立村はそれだけ、ぽつつと言った。

「へえ、ちゃんとご報告」

「え、じゃあまだ、会ってないんか？」

「会えるわけないじゃん。俺だつて一応社会の規範は守らねば。喪中の間にうるちよろなんてできないっすよ。まあ、四十九日終わるまでは俺もほんとはおとなしくしてなくちゃあいけないんだけどさ、そんなことしたら『ファッションブック』夏号発行できないじゃん」

秋世の軽くふざけた調子に、立村も頷いた。

「そっか、なぐちゃんから流れたわけじゃないんだな」

「俺がもしかして、あのこと流したと思ってた？」

「いやそんなこと、思っていないけどさ」

「はあ、どうやら立村は、本条先輩からいろいろと、恋愛関連のネタについて突っ込まれからかわれたに違いない。秋世はもちろん一言も修学旅行中の秘密についてはもらしていないが、おそらく立村が問い詰められて慌ててしまったかなにかして、ばれてしまったのではないだろうか。付き合っている相手、清坂と一夜を過ごしてしまったなんて、もちろんなんもなかったとわかってはいても、口に出す勇氣はなかるう。」

「本条先輩に、じゃあそろそろ会うんだろ」

「またすねた口調でもって、立村は尋ね返した。そりゃあそうだな。会わねばならない。」

「会っけど、変なこと言わないから安心しろって」

「いやそういうんじゃないさ」

しばらくもごもごと口籠もり、空を見上げてごまかす。その繰り返しだった。かなり、ばれて困ることをしてしまった後悔の真っ最中なんだろう。

「じゃあさ、俺、本条先輩に聞いてみてやつか？」

「この辺は、一肌脱いでやろう。」

「そんな、まずいよ、それは」

「いや、俺がそんなへまなことしないって。俺もどっちにしても、規律の話の関係で、本条先輩に会うつもりなんだ。なんとなく雰囲気、ああこのあたりかってことがわかるからさ。もし本条先輩に変なところ突っ込まれたら、俺なりにうまく言っとくよ」

「けどそれ、難しいんじゃない」

大丈夫、本条先輩はりっちゃんのことを嫌いになったりするわけじゃないよ。

何があつたとしても、本条先輩は弟分の立村を見捨てることはしない。このあたり、確信めいたものがあつた。はにかみやで本当は後ろに引っ込んで隠れていたい性格なのに、状況に押し流される形で評議委員長に選ばれてしまった立村。黙って英語の辞書を引き、誰も気付かないところで本当だつたら、一年後輩の杉本あたと心を暖め合えばいい。それが許されず、いつのまにか自分の思わぬところに話が進んでいつてしまっている立村という奴。

きっと、修学旅行以来、自分の堤防みたいなものが壊れる寸前なんだろう。

止めてやれそうな気が、秋世にはした。

「あの、四日目の夜のこと、だろ？」

「たぶん、そうだと思う」

「りっちゃんと俺くらいしか知らないだろうなあ」

「なんでばれたのか、見当つかない」

もしばれても、そんなに困ることでもないだろうに。

「じゃ、善は急げってことで、今日あたり声かけてみますか」

「え？」

「それともりっちゃん、一緒に先輩のとこへ行くか？ 本条先輩の電話番号、りっちゃん知ってるだろ？」

現在、一つ上の兄と一緒にアパートで下宿生活をしている本条先輩。遊びに行つてなければ、必ずつかまるはずだ。立村は不器用に頷くと、胸ポケットの生徒手帳を取り出した、手が震えていたのか取り落としたはずみで、白い和紙が覗いた。慌てて拾った。秋世し

か見てないっていうのに。あせらなくなっただけいいのに。

「じゃあ、今から俺と一緒にいこうよ」

「でも、なぐちゃんまだ」

「いいのいいの、うちのばあちゃん、明るく暮らしてほしいってのが本音だと思うしさ」

ざくりと、ナイフの突き刺さったような音が、耳の奥に響いた。

「さあさ、職員室前でかけようよ、な、行こう」

戸惑う顔の立村を、秋世は無理やり背中を押して、外にやった。

本条先輩か。

公立高校に進学した、かつての評議委員長で秋世にとっては年上の友だち。

しかも親元から離れて、好き勝手な生活を送っている人。

まだ一度もアパートに行ったことはないけれども、ひとりかふたりくらいは泊めてもらえる程度のスペースはあるんじゃないだろうか。本条先輩もよく、秋世の部屋にもぐりこみにきたものだった。

泊めて、もらえるかもな。だったら、すげえ嬉しいよな。

「いい人」のままでいられない家には、戻りたくない。

「いい人」でいることを許してくれない両親とも、口を利きたくない。

秋世は立村が緑の電話機に向かい、どもりながら話をしているのを聞きつつ、お泊まり時の言い訳を考えた。本条先輩の家か、立村の部屋か。さて、どちらがいいだろう？

第二部 18

家に戻りたくない。

秋世と本条先輩とは、同じライン上で話ができる。

だが立村をはさむと、どうしても弟分との会話に合わせるしかない。

これはなんだかな、と思うのだが雰囲気がそうなるのだ。しかない。

ファーストフードで三人、チキンバーガーとアイスコーヒーを飲みながら、しゃべりつづけている。当然ネタは、立村の修学旅行四日目夜から五日目早朝にかけてのことだった。

「そっかそっか、相当いろいろあったみたいだなあ。で、清坂とやったのか？ おい」

「だから、そんなんじゃないです。いったい先輩、何を誤解してるんですか」

誤解されるようなことだと思うよ、りっちゃん。

秋世は心の中で呟き、しっかりコーヒーをこくと飲んだ。

「白状しちゃえば、別に悪いことじゃないんだしさ」

一通り様子を窺ってみると、どうやら本条先輩、決定的な言を取ってはいないらしかった。それだったらあっさりごまかしてやるのも一つの手だが、立村の性格上これから先、嘘をつきとおすことができるとは思えなかった。ある程度のところで本当のことを白状しておけば、あとあと楽になるのではないだろうか。

どうせ、清坂さんとはやってないんだしさ。

隣で何度も文句を言いながらも、すっかりすねてしまっている立

村に、さりげなく秋世は声をかけた。

「もし言い出しにくかったら、俺が話、もってってやるけど」

「いいよ、そんなのは」

「よくないよ、だってりっちゃん、これから先どうするのさ」

「どうするって」

「だってさ、りっちゃんここで嘘ついてても、いつかばれる可能性大だよ」

秋世なりにゆっくりと、かみ締めるように言い聞かせた。

「うちのクラスでは俺だけかもしれないけどさ、気付いてたのは。けど、りっちゃんの他にも羽飛とか、古川さんとか、ほら清坂さん本人だってどこで口滑らすかわからないじゃん。だったら今のうちに、ちゃんと白状しておいて、いざって時に備えるのが一番じゃないかなと俺、思うんだけどな」

もちろん隠し通せるのだったらそうした方がいいに決まっている。でも、さっきから本条先輩の口調を鑑みるに、かなりの情報を得ているような気がしていた。秋世の忌引休暇中に、いったいこの二人がどういう会話を交わしたのかは定かではないにしてもだ。つい立村が口を滑らしてしまったのか、それとも他方面から情報を得たのか。とにかく本条先輩をなめてはいけない。鋭い視線と切り口は、青潟東高校進学後も全く変わっていない。

本条先輩は秋世と立村を交互に眺めやり、食べ終わったフライドポテトの入れ物を二つに折った。ほんと立村の食べているハンバーガーの方に追いやった。

「なあに二人でそこそ相談しあってるんだこら。何も人を刺したとか薬やったとか、そういうわけでないんだったら、隠すこともねえだろうが」

「だから、そういうんじゃない」

立村が慌てて口をもごもごさせつつ言い訳をしようとする。口の周りの油っぱいのを手の甲で拭きながら、首を振る。

「俺が小耳にはさんだところによるとだ。お前しっかり、清坂とし

つぱり濡れ濡れの夜を過ごしたらしいとかな。麗しき友情の現れつてとこで」

「そんなの、なんでそんなことに」

と、立村の奴、秋世を横目でにらんだ。明らかに秋世からばれたか、という疑いのまなざしだ。このあたりは誤解を解いておきたい。秋世は割って入った。

「先輩、その小耳情報、どこで仕入れたんですか？」

「俺の地獄耳がどんなものだから、忘れてねえだろうなあ。まあいろいろとだ」

「規律委員会情報で言わせていただくと、そういうネタは今のところ上がってきてないかなって思うんですが、どうなんでしょう」

「いくらばれてねえと思ってもだな、裏でいろいろ情報持つてくる奴がいるもんだよ、な、南雲」

今度は秋世に本条先輩、流し目を送った。裏恥ずかしいことをしているのではないかという、非常に難しい質問が込められている。

秋世はもう一口ストローでコーヒーをすすった後、

「俺も実はいろいろと、狙ってたんですがねえ。人生うまくいかないですよ、そのあたりの情報ももう入手済みでしょうか、本条先輩」
「すまぬ、お前の話はまだまだだ」

これは意外だ。秋世と彰子のからみについては、もっとおおっぱらに知れ渡っていると思うていたのだが。本条先輩の興味はやっぱり、弟分の立村に集中していると見ていいだろう。やっぱりいろいろと心配なんだろう。肩で風切る立場の青大附中評議委員長が、実は内気で引っ込み思案の弟分ときたら。秋世も逆の立場だとしたら、きつと心配していただろう。このあたりは本条先輩に気持ちをシンクロさせたかった。

「それは意外。まあいつか。どっちにしても、本条先輩はとつくの昔にりっちゃん情報を手に入れていたってことですね。りっちゃん本人の言葉も踏まえた上で、言ってるってわけっすか」

いくらなんでも、立村がそこまで本条先輩に尋ねることは難しい

だろう。秋世なりに気を遣ってやったつもりなのだが、隣の立村はすっかりうつむいたまま、食えることすら放棄している様子だった。いろいろあったことは事実だし、立村だってそれなりに言いたいことがあるに違いない。このあたりは少し迷うところもあるけれども、秋世の判断としてすることはあるはずだ。

「いいじゃん、りっちゃん、言っちゃいなよ。本条先輩だって怒ったりしないしさ」

「怒るかよ、こんながきんちよのやらかすことになあ、南雲だったら話、別だな」

また本条先輩は、秋世に向かってにやついた流し目を送った。

評議委員会の先輩として、立村に目をかけてきた本条先輩だが、秋世からすると一つ年上の友だちという気持ちが強い。たまたま家のすぐ近くでたむろうことが多く顔見知りだったのが一つと、どちらもやたらと人前で目だつタイプというのもあって、早い段階で言葉を交し合うようになった。入学して間もない頃だったろうか。

その頃はまだ秋世も小学生の尾っぽを残していたし、本条先輩もペーパーの評議委員でしかなかった。ちよっとしたワル候補、という程度か。一歳という年齢差は中学において消して小さいものではないし、敬語という「壁」をも必要とするものだけど、秋世と本条先輩に関していえばそれも最小限のものにとどめておけた。もちろん他の同級生たち、特に立村の前ではできるだけ先輩として敬った態度を取るよう演技していたけれども、ふたりつきりになった日にはもう好き放題言い放題。ま、気持ちの上で敬語だけはそれなりに使うけれども、付き合いそのものはほとんど同級生感覚だった。それも、青大附中の同級生ではなく、小学時代の悪ガキ連中と同じ乗りの。

「……この辺まで言えばもういいですか、本条先輩」

あくまでも「先輩」のラインを崩せない立村は、仏頂面したまま、

唇を尖らせつつストローをかんだ。もう中には残っていないらしいコーヒー。やたらとじゅるじゅる音がする。

「りっちゃん、いいかげん飲むのあきらめなよ」

「別に好きでやってるんだからいい」

秋世と一緒に時々によにやしつづけていた本条先輩は、物言わずまずは立村の頭を素手でがしつとつかんだ。髪の毛をひっぱるようなしぐさをした。

「やめてください、なんですかいいたい。もういいでしょうが」

「お前も大人になったなあつて、なでなでしてやってるんだよ、ま、最後の詰めが甘かったけどな」

立村が約五分間に渡り説明した「修学旅行四日目・五日目早朝の出来事」に関しては、秋世の知っていることとほとんど変わりのない内容だった。取り立てて付け足すこともない。唯一言い忘れたとすれば、四日目夕方に立村が、下級生杉本梨南のために手鏡を購入したことくらいだが、その辺は別に抜かしても問題ないだろう。要は立村がこっそり清坂美里と一夜を明かしたが、そういうことはなかった、それだけを聞き出せばいいことなのだから。

「先輩とは違うんです、もういいでしょう、やめてください」

今度は額を軽くつつくしぐさ。思わず両手で「第三の目」の場所を覆い隠す立村。

「そっか、立村、お前も人並みの男になったってわけだ」

「そういうんじゃない！」

いくら言ったところで本条先輩のにやけ顔は消えなかった。この人を本気で驚かすには、たぶん警察沙汰をやらかさないと無理だろう。特に立村のようなタイプの男子に関しては。なぜだかわからないけれども、立村に対して本条先輩は、余裕をかまして見守っている感じがなきにしもあらずだった。表向きは鬼瓦でも、草葉の陰から見守ってるよ、というような行動をしょっちゅうしている人だ。

たぶん、立村は本条先輩にとって、永遠の弟分なのだ。

秋世と同じ年齢だからといって、本条が同じ目線で語り合おうと

することはないだろう。

すっかり飲みきったアイスコーヒーの氷をストローでがさが言わせながら、

「本条先輩、もう一杯飲み物頼んできていいですか」

「自腹切れよ」

もうつつつのがおもしろくてならない、そう言わんばかりの本条先輩に断りを入れ、秋世は立ち上がった。注文する前にトイレに行つてこようと思つていた。ふたりの語り合いに口をはさまなくてもよさそうだ。

「あ、南雲、お前今日どうする」

背を向けると同時に声がかかった。

「先輩つちで遊んでてもいいですか、りっちゃんも一緒に」

「俺はいいよ、今日は帰らないと」

ちらつと立村の表情を覗き込むと、なぜか真赤になつてしまつてゐる。さつき語つた「修学旅行」の夜に関する話題から派生した頬の赤さではなさそうだった。ははん、どうやら立村、すでに本条先輩のアパートに出かけたかなんかしたんだろう。そうとう、すさまじい野郎部屋状態とみた。人間の住める状態じゃ、きつとないだろう。年子の兄さんと二人暮しときたら。家事一式お得意の立村はきつと、こき使われるかなにかしたんだろう。

「南雲は来るか？」

「もちろん、行きまっせ！」

親指を挙げてOKサインを送つた後、秋世は今度こそトイレに立つた。

今日、本条先輩を呼び出した目的はそこにある。

家に戻りたくない。

立村はしばらく本条先輩に甘つたれていた様子だったが、時計を覗き込み、

「すみません、また後で連絡します」

すばやくかばんを抱えて立ち上がった。ちょうど秋世が戻つてきた時だった。

「え、りっちゃんもう帰っちゃうの？」

「交流会の後始末があつてさ、いろいろと書類がたまつてるんだ」

「あれ、他の連中に頼んだりしてないのか？」

仮にも評議委員長、どんどん手を回せばいいのに。

「そうだぞ立村。なんでもお前一人で抱え込んでたら後でぶっ倒れるぞ」

「わかつてます」

思いつきりすねた口調で本条先輩に言い返す立村。まるで一年坊主そのものだ。天下の評議委員長の態度とも思えない。それを笑つて受け止める本条先輩はやっぱ余裕ありげだった。

「詳しくはまた、今度の土曜にでもこつちに来い。清坂とのデートは入れてねえよな」

「そんなの関係ないでしょう」

これ以上話をするのとつばにはまるのが見え見えだ。秋世は肩を叩いてささやいた。

「りっちゃん、あとはうまくやつとくから、安心しろよ」

「変なこと、言ってくれるなよ」

少し古風な言い方をして、立村はそそくさと出て行つた。振り返らなかつたのはきつと、秋世と一緒に本条先輩が訳ありの表情を浮かべていたから、そんなの見たくなかつたのだろう。

「じゃあ、ガキがいなくなつたところで、大人の話と参りますか、南雲ちゃん」

「アイアイさーってとこですか」

グレイプスカッシュの入ったSサイズの紙コップを置くと、秋世は本条先輩のまん前に座つた。さつき立村が自分の食事後をすべてきれいに片付けていったので、もろに一对一。本条先輩とデートの真っ最中に切り替わつた。

どこまで知ってるのかなあ。

たぶん立村ならば、秋世の祖母が亡くなっていて昨日まで忌引休暇を取っていたことを話していたかもしれない。また別の三年生ルートを通じていろいろ聞いていたかもしれない。こちらから無理に湿っぽい話を持ち出す気もなかった。

「なんか、ぱあっと派手に気分転換したいんですけどねえ、本条先輩」

ストローをくわえたまま秋世は笑顔を向けた。こちらは学校向けの明るい元気な男の子仮面だった。

「やっぱ、暗いのは俺の性に合わないっすよ」

「お気持ちお察しいたしやすってな」

ある程度は聞いているのだろう。秋世なりに判断した。

「せっかく喪が明けたんだから、少しですね、気分転換をしたいんですが、そういうところで楽しいことしたいなあと、ふと思うわけざんす」

「そうだな、それも一理ある」

「けど、学校だとねえ、やっぱりいろいろと気遣いしてくださるみなさまもいらっしたりして、こっちの方が申し訳なくなっちまうってか」

「わかるわかる」

「できたらなんですが本条先輩のお勧めスポットなんぞに、俺を連れてってもらえると、少しは気分も一新できるかなと思った次第なんです、いかがでしょ」

本条先輩はまだ飲みきっていないアイスコーヒーをストローでから混ぜた。

氷はすっかり溶けているようだった。

「時間的には、夜はこれからってところか。おい、お前も規律関連のことではいろいろ大変なことねえのか？」

「ありません。学校で全部片付けてきましたからね。やるべきことは全部、他の連中に振り分けてきたし、そろそろ『青大附中ファッ

シヨンブック』の準備をせねばとかその程度。あ、りっちゃんをですんでければ、秋号のモデルにでもしようかなとひそかに計画してるんですがそれは内緒にしておいてもらえると助かります。絶対あいつ、逃げるに決まってるですしねえ」

軽くばかばかしい言葉をじゃらじゃらと並べた。

「なるほど、それも悪くないな」

「面白いと思いますよ、トラッド系でまとめたファッションショー、それでりっちゃんは泣く子も黙る評議委員長ですからね、話題性たつぷりかもしれません」

「あいつが泣く子も黙る評議委員長かよ。一年でもこけにする評議委員長じゃねえのか？」

「その辺はノーコメント」

本条先輩は少し黙ったが、ふと面白そうなことを思いついた風に、「南雲、お前、俺と服のサイズ同じくらいか？」

尋ねた。いきなり聞かれても困るが、たぶん同じくらいだろう。それほど違いはないはずだ。本条先輩の方がどちらかというとちりしているので一サイズくらいはゆるいかもしれない。たとえばジーンズのサイズなどは特に。

「たぶん問題ないかと」

「この格好じゃあなあ、ちょっとまずかるうよ」

確かに。学校を出てまっすぐ着てきた格好。制服ではあつとやる場所にはいけないだろう。

「じゃあお前、下着だけコンビニで買ってこい。さすがに俺のブリーフ履くのはやだろ？」

「鋭いなあ」

もう本条先輩、秋世が泊まると言う前提で物を言っている。予定通り、OKだ。

「これから俺の家に行くけどな、そこでお前の着れそうなもの適当に来て、髪の毛適当に染めて、それから出陣だ。最近お前も遊んでねえんだろ？」

遊ぶ、の意味をゆっくり確認した。

「それって、ゲーセンでつてことっすか？　それとも、先輩お得意方面のですか？」

「俺のお得意ったらなんだよ」

「そりゃあもう」

今度は秋世の方がどつかれた。

「お前の方こそ、最近はずいぶんとお盛んなんじゃないのか？」

「お盛ん？」

口に出してみても、ふっと笑いたくなかった。

彰子さん相手に、お盛んもなにもあるかよ。

「そっちのチャンスがあれば、そりゃあやりたいですけどねえ。りっちゃんみたいなパターンだったら、俺ならもう絶対逃さず！」

「そう来ると思っただぜ」

青潟東高校は私服通学が許されている。少し黒みがかったジーンズに緑色のミトコンドリアみたいな模様の入った……いわゆるペーズリーとも言……半そでシャツを合わせ襟をしつかと立てている。薄い銀ぶちめがねは健在だが髪の毛が少々とんがり気味なのに思わず苦笑を隠し切れない。ちよつとこれでは、「お盛ん」な場所には行けないだろう。

「じゃあ話は決まったな。うちに来い。まずはファッションショーと行くか！」

残りのグレープスカッシュを余したまま、秋世は本条先輩に連れられて店から出た。

本条先輩のアパートは、秋世の家からそれほど離れていなかった。言い方変えると本条先輩が以前兄弟で住んでいた家ともそれほど、というところだろうか。

「里理が卒業するまではたぶんこのまんまだろうなあ」

里理とは、本条先輩の年子の兄貴だ。もつとも本条先輩自身は彼のことを「兄」とはちつとも思っていない。秋世が思うに、たぶん

立村と同じ位置付けとして観ているんじゃないだろうか。工業高校に通っている里理さんは、口に出せないいろいろな理由があつて、どうしても一人暮らしをしたいのだという。それにお付き合ひしようということもあつて、本条先輩と一緒に暮らすことにしたという。もともと仲は野郎兄弟にしては悪くない。

けどさ、青大附属を出ることはねえよなあ。

込み入った事情についてはあえて聞かなかった。ただ、本条先輩に早い段階でそのことを打ち明けられた立村がどん底状態で落ち込んでいたのだけはしよっちゅう見ていた。もしかしたら立村は清坂美里と付き合うよりも本条先輩とくっついていたほうが幸せなのではないかと本気で思ったものだった。もちろん将来のことは、学校の先輩後輩関係より大切だというのはよくよくわかつているにしてもだった。何はともあれ、巢立つた後もちろんと本条先輩は立村の面倒を見てやっている。繋がりは学校を代わったくらいで切れるものではなつたという証明だろう。

「りっちゃんは連れてきてないんですか」

「何度か連れてきている、だから、今日は来なかつたんだろなあ」

「それはなぜに」

「さあ」

家政夫代わりにこき使われるからか。

赤錆でざらついた手すりを握り締め、急な階段を昇りながら、秋世は本条先輩の部屋の状態についていろいろ想像を繰り返した。さて、どうなっていることが。

ああ、そういうことね。

立村が即、逃げ帰った理由がすぐに理解できた。

玄関のドアを開けた瞬間見えたものとは。

「ああ、里理の奴、また男連れこんでるしな。ま、気にすんな。いつものことだ」

見ると、やたらとでかい靴が四足ほど並んでいる。もちろんきれいに並べられてなんぞいない。靴の底見たまんまのスニーカーばかりだった。秋世もそれにならって脱ぎっぱなしにすることにした。想像通り、台所から繋がる部屋までの路はジャンクフードの袋が放置されてるわ、靴下が片方だけ放り投げられているわ、まさに修羅場、そのものだった。

「りっちゃん、掃除したとか？」

「自分から言い出したな。『部屋の片付け、手伝いましょうか』ってな」

玄関から奥の部屋が本条先輩の割り当てで、トイレのまん前のドアが里理さんの部屋に繋がるところらしい。小さくテレビの音が聞こえる。

「ま、何やってるかはお互い内緒ってとこでだ。お互い様」

「先輩いつたい何やってるんですか、そんなお互い様って」

「お前もまんざら知らねえわけねえだろが、来いよ」

特段挨拶することもなく、本条先輩の部屋に入った。思ったよりも殺風景。廊下の散乱状態に比較して、物がどこにあるかがはっきりとわかる状態に置かれていた。

「これもりっちゃんがやったんですか」

「の、時もある。別の場合もある。俺の時もある」

まあ、本条先輩はそれなりに書類の整理整頓は得意ではあった。別の場合となると、当然女子が入ってきて、うんぬんかんぬんというのもあるんだろう。やたらとでかい黄色いたんすが圧迫感ありありだった。六畳の部屋の中で、それだけが場所を取っていた。いかにも二段ベッドを分割した、と言いたげなベッドが一台、隅っこに置かれていた。脚のところがやたらとささくれ立っていたところみると、たぶん上に先輩、寝ていたんだろう。

「使い込んでますねえ」

「まあな」

短く答えると、本条先輩はたんすを開けた。これまたびっくりな

ことに、ほとんど乱れのない状態でスラックスからジーンズ、トレーナー、シャツ、その他一式がどこぞのブティック並にそろえられていた。引き出しから覗いているのはどうやらネクタイと指輪。ネツクレスまである。光り物が好きなのだろうか。意外な発見だった。「好きなもの着ろよ。お前、今日はどんなもん着たい気分？」

「そうっすねえ、ひさびさに『パール・シティー』でいきますか」
黒い細身のジーンズに、衿の大きなシャツ、そこから透けることを意識してやつぱり黒いランニング、あとは金のじゃらじゃらを首とベルトに回し、極めつけがゴールドの指輪。おあつらえのように、ぴたっと合った。

「おいおい、『パール・シティー』ときたらもう少し派手でないとまずいんでないか？ 髪の毛をもう少しだなあ」

「もちろんわかってますって。先輩、サングラスも貸してもらえると嬉しいなあ」

「アイアイさー」

銀の粉を髪の毛にまぜこぜにして、ムースで少し立たせた。最後は黒のサングラスを額にかかるような格好でかけてみた。が、視界がやたらと狭まってあぶなっかしい。やつぱり胸に挿してアクセントにした。

これぞ、美形ぞろいの人気ロックバンド「パール・シティー」のボーカル、E K U ファッション。しょっちゅう周りから「パール・シティーのメインボーカルに似てるよね」と言われるようになってから、意識的にファッションをあわせて見たりずらして見たりしたものだった。いつもは自分らしさを追及するのが常なのだけど、今だけはとことん、真似してみたかった。

「どうする、サインねだられたら。お前、するか？」

「万が一の場合はそれもいいかも」

銀粉をせっかくだしということ、まぶたにもちよこつと乗せてみた。なかなか派手で目だつ。本当だったら金色で決めるのがベストだと思うのだが、そんな贅沢言ってられない。それ以前になんで

本条先輩そこまでそろえていたのだろうか？

「よっし、南雲、戦だぞ」

「エイエイオー」

気合が変なところに入って、腹が痛い。

秋世はもう一度鏡を見直し、本条先輩の後について玄関に向かった。途中、本条先輩が里理さんの部屋の前で、

「わりいけど、俺今日遅くなるから、飯一人で食べよな。やりたいんだったら今のうちだぞ」

声をかけるのをぼおつと見ていた。返事は返ってこなかった。

本条先輩はサングラスと銀粉、あとやたらとごつい銀色の時計とベルト、それだけで決めていた。この人の場合金色よりも銀色の方が合うタイプかもしれない。目だたないように見せて、実は結構やり手。格好を地味にしても目立ってしまったのが本条先輩の定めといったところだろうか。秋世がやたらと金ばかり使っているのは違う。

「規律委員長がこういうことやってたら、即、退学だろうなあ」

一人ごちた。

「安心しろ。あまり目立つとこ連れていくわけねえだろうが」

「目だつとこっすか」

外に出ると、まだ夕暮れがゆるゆると広がっているのが見えた。もう少し夜遅く動きたいところだが、本条先輩の連れていってくれる場所はいろいろと訳ありらしい。

「りっちゃんは連れていったことないんですか」

思いつき顔をしかめた本条先輩、肩を怒らせた。靴だけは革靴にしろといわれて、つま先のとんがった黒い靴を借りたがどうやらおそろいらしい。里理さんのものらしい。

「あたりまえだろ、ガキを連れてってどうするんだ」

俺も、おない歳なんだけどなあ。

ちらと後ろを振り返った。知っている顔は誰もいなかった。秋世

はやたらと腰のベルトがうるさく鳴るのに閉口しつつ、夕暮れ空を斜めに眺めた。

これが噂の「ディスコ」って奴ね。

たぶんそんなところではないだろうかと思っていた。全く行ったことがないわけではない。何度か小学校時代の友だちと「社会見学」に出かけたことはあった。ただ、お互いまだまだ「ガキ」だったこともあり、ゆつくりくつろぐところまではいかなかった。黒服の兄ちゃんたちが一生懸命、ダンスフロアで規則正しく踊り続け、何もしないでいると何度も席に来ては指を鳴らし誘う、そんなことをしていた。サワー一杯で千五百円くらいか。一ヶ月に一度くらいならまだいいか、と思うものの補導員の危険性を感じるとそれもできないだろうという気がした。

「大丈夫だろ、お前のかつこ、どう見たって高校生以下には見えねえだろ。もし変な奴に絡まれたらその時は、中卒だと言っとけ。誰かかしらそういうのがいるからごまかしきくぞ」

さすが夜遊びは手馴れたものだ。本条先輩がぐいと指を挙げて誘う場所は、居酒屋の地下一階だった。「ダンスパブ・ペテルブルグ」なる一室へともぐっていった。すぐに黒服の兄ちゃんが迎えてくれたが、見た感じ高校生くらい。顔を見たら一発で補導されて文句言われないのではないだろうか。

「本条さんどうするっすか」

この場で「先輩」は学校くささをかもし出す恐れありなので、あえて「さん」を使う。

「まずはなんか頼め。飲めるだろ、奴と違って」

奴とは当然、弟分のことである。頷いた。

「ジンフィーズあたりかなあ」

「よっしゃ、俺はビールだ」

もうここであればたら、規律委員長の座から引き摺り下ろされること覚悟の上だ。

本条先輩は黒服の兄ちゃんひとりを呼びつけると、

「黒ビールとジンフィーズ」

注文した。すぐに頷いて、秋世たちを店内へと導いた。目の前すでに闇。目が慣れるのに時間がかかった。足元を照らす蛍ライトがちかちかしている以外は全く未知の空間だった。座ってみるとやたらとふかふかした椅子と背もたれのやわらかさに腰が抜けた。本条先輩だけが慣れたそぶりで足を組んでいるのが、かすかに光って見えた。時間はまだ夕方暮れというのに、だいぶ人が集まっているらしく女性の笑い声が突き刺さる。

「ずいぶん早いですねえ」

「夜は有効に使わないとな。まずは食うか」

本条先輩が財布から何か紙切れのようなものを取り出し、また黒服君に手渡した。

「パスタでいいだろ、ナポリタンで」

「口が汚くなるなあ」

「別にキスするわけでもないだろ」

その辺はお任せだった。たぶん本条先輩は来慣れているから、「ダンスパブ・ペテルブルグ」の利用方法をよくご存知なのだろう。下手に気取るよりは、慣れた人に頼った方がいると楽だった。

「まあここで少し食おう。もう少ししたらダンスタイムが始まるし」
秋世はすぐ届いた、やたらと冷たいナポリタンをフォークでかき回した。ジンフィーズも一緒に到着した。まずは飲もう。食って、飲んで、それから考えよう。

ディスコと言うからもつと金属音たつぷりのシャワーを浴びることになるのかと覚悟していたが、どうやらこの「ダンスパブ・ペテルブルグ」はジャズピアノ中心の場所らしい。延々とジャズのリズムが続き、時折トランペットが流れた。ボーカルがないので会話をしているともさほど邪魔にはならなかった。隣のソファーには甲高い女性の集団がたまっていた。

「おいくつくらいかなあ」

香水の匂いが鼻についた。ナポリタンを味に不満足ながら平らげ、秋世は本条先輩にささやいた。

「お隣さんか」

「そう。高校じゃあねえよなあと」

「あたりだ。たぶん女子大生かOLか」

集まってくる他の女性客をチェックしながら、しばらく他愛もない話を続けた。

本条先輩もともと、深い話をしたがないところがある。だからこそ秋世も脳天気でいられる。こんなところで湿っぽく、ジャズのリズムに乗って「実はうちのばあちゃんの事情で、俺、幼女悪戯容疑受けてるんですよ」なんて言えやしない。

俺は昭代みたいな子に手を出すような趣味ねえよ。

心でぼそつと呟いた。

「お前さ、今の彼女とはどんくらい続いてる？」

「ちょうど一年過ぎかなあ」

「ずいぶん長いじゃねえか。ま、あの学校だったならそれが普通かな」

「本条さんが異常過ぎたんですよ」

本条先輩が今付き合っている相手が誰なのかは知らない。秋世が知っているのは、当時付き合っていた二人の彼女……小学時代の腐れ縁と、四歳年上の人……とはきっぱり卒業と共に手を切ったらしいということだけだ。ただ初体験が小学六年というとてもない年齢ということもあって、秋世にとってはかなり興味を惹かれる話でもあった。

「俺の弟分のように部屋にもぐりにはいかなかったってわけか」

「それは一種の犯罪になっちゃいますよ」

「ストレスたまってるんでないか？ 鬱屈したエネルギーって奴が」

「そりゃあもう」

秋世はもう一杯、ジンフィズをすすった。

「けどうろがないっすよ。こればかりは一人じゃできねえし」

「一人でできることをするかってことか」

「そついうことっすね」

彰子の顔を、薄闇の中に思い浮かべようとしたができなかった。

たまたま目の前を通り過ぎた隣ブースの女性が、秋世になつこり笑いかけてきたからだつた。条件反射で思わずこちらも片手を挙げると、あざとくスカートをめくるしぐさをして去っていった。

「ああいうのを見ると、そそられるだろ？」

「そりゃあ、男としては自然な衝動かと」

「こついうとこに、立村連れてこれると思うか？」

「そりゃまあごもつとも」

本条先輩はもしかして、ナンパを考えているのだろうか。率直に聞いてみた。

「今夜、久しぶりに調達を考えてるとか」

「俺一人じゃあ馬鹿みてえだろ、こついう時にはお前みたいなのがいると、いい子が釣れるんだよなあ」

齒の間からしゅうしゅう音を出して笑つた本条先輩。

きつと立村と一緒にいたら、怒つたかもしれない。

りつちゃんなら怒るな。そんな非常識なこと考えてるんですかとか言つてさ。

いくら清坂美里と一夜を共にしたとはいえ、この場でのあざとい誘惑を笑つて受け止められるだけの余裕は、まだないだろう。

「ま、南雲ちゃん、お前もせつかなんだから、ここでどばつとストレス発散しとけよ」

「ありがとうございます。それはいいんですけどねえ、ここトイレどこなんでしょうかねえ」

目が慣れてきたとはいえ、まだ位置関係を把握していない。

出口のすぐ側あたりだろうか。

「一度出てすぐ右あたりだろ」

本条先輩も、いかにもあてずっぱな答えを返してきた。

「それとな、気をつけるよ」

付け加えるように耳元で、

「いわゆる『チェリー食い』の女どもがうごめいているからな」

「なんすかそれ」

秋世が聞き返すと、

「戻ってきてから教えてやるよ」

にんまりと鼻の下をこすりつつ、本条先輩はビールをまたぐいと飲んだ。

第二部 19

犯罪者？

俺が、いるだけで？

時折投げかけられる年上の女性たちの視線を無視しつつ、秋世は本条先輩相手にしばらくだべっていた。時間帯はすでにダンシングタイムということで、かなりだるいムードのジャズピアノとトランペットが流れていたし、なんとなく秋世たちの席の前で数秒立ち止まる人影も見かけたが、とつてもだがそんな気にはなれなかった。むしろ今は、男同士の会話だけでカクテルをなめていたかった。

「本条さん、最近はこの感じがほとんどなんすか？」

二股野郎の本条先輩が、いきなり一筋の道を歩こうとは思えず、かといってまったく何も無いとは考えられず、秋世は話を振ってみた。

「まあな、俺も歳かねえ」

十六歳にして「歳」もないものだ。

「東とんでは無いんですか」

高校、とか学校とか言ってしまうと足がつく。言葉には気を付けておく。

「いねえとは言わねえよ。俺、もてないわけがないだろ」

「けどもう、四ヶ月も女つけなしたのは、ちよつとまずいんじゃないっすか」

「ま、ストレスは、たまるわな」

本条先輩はうつむくようにして、少し笑みをこぼした。この人のくせで、表情を読まれない時などはこういう風に笑ってごまかすところがある。

「それよかお前の方こそいろいろご苦労も多いようだが？」

「噂、聞いてるんじゃないですか」

さつきは本条先輩、「お前の話は聞いていない」とか言っていたくせに。やっぱり立村の前ではそれなりにかっこつけてくれたんだろう。秋世は二杯目のカクテルを揺らして一口飲んだ。酒に弱いほうではないと思いたいのだが、なんとなく眠くなってきたようだ。

「南雲だったらまだまだ選びようがあるだろうになあ」

「聞き飽きました、そういうのは」

「いや、あのあんまん姫が気に入らないつつうんじゃねえよ。ただ、お前もなんつつか」

言葉をまた濁した。暗闇にだんだんミラーボールの細かな反射光が、吹雪色に舞い始める。奥の席で男女それぞれが、ゆったり身体を揺らしつつ立ち上がり始めた。秋世が行ったことのあるディスコでは、もっとテンポの早いユーロビートのリズムに空気がみじん切りとなり、自然と腰を振りたくなってしまっ何かがあったのだが。ここだととてもだがそんな気持ちになれない。ただ、だるい気持ちで大また開いてソファーに寝転がっていたい。本条先輩が何かをつぶやいた。聞き取れず、背中を椅子の背にくっつけたまま秋世は尋ねた。

「なんか言ったすか」

「ああ、お前ってなあ、南雲」

本条先輩は闇の中でめがねをつまみ、額に重ねた。天井を見上げたまま。

「マザコンとかシスコンとかっていうか、グラコンって奴じゃねえの」

「なんですかそのグラコンって」

「『グランドマザーコンプレックス』つまり、ババコンってことババコン？」

背中がしゃきつと伸びた。

本条先輩は秋世が慌てて座り直したのを気付いてないかのように、天井見上げたまま続けた。まだまだ酒に飲まれていないようすだった。

「何度かお前のとこのばあちゃんに世話になったけどな、なんかほんつと、あんまん姫そつくりじゃねえの」

「いや、それはちよつと向こうさんに申し訳ないのでは」

言いかけた秋世をそのまま無理やりつつきりながら本条先輩の言葉は続いた。

「見た感じのにこにこつてともさ、お前の尽くす姿をそのまんま受け止めてくれるとかさ、ほんつとそつくりじゃねえの」

「まあ、悪い気はしないですねえ」

じり、と半紙一枚が破けるような音が、心のどこかでした。

「男としたらやつぱり最高じゃあないかなと」

「そりゃあそうだな。お前みたいに何から何まで面倒見てもらえるなんてなあ。けどお前、ばあちゃんふたりいて、うれしいか？」

ばあちゃんふたり？

秋世は黙った。本条先輩が何を伝えようとしているかがまだつかめず、不用意に言葉を発したら最後、後で後悔するはめになりそうだと注意していたからだった。

「いや、ばあちゃんふたりなんて、ああた」

「とぼけんなよ」

急に本条先輩の声がきつく締まった。これっていつもの本条先輩と違う。秋世に話し掛ける調子のものではない。むしろ、立村をしかりつける時と同じ。なんだかがきんちよ扱いされているようで、胸が焼けた。

「ばあちゃんばあちゃんつてやってるのもいいけどな、南雲。そろそろお前もこの機会にババコンから抜け出せ」

「あの、そのババコンっていう言い、やめてほしいなと」
「黙れ」

あらら、今度は本気で本条先輩、秋世を責めようとしているではないか。この人との関係が先輩よりも同輩感覚だったのがひそかにうれしかったのに。いきなりなんだというのだろう。秋世もだんだん座っている椅子の尻が痛くなってきた。飲んでもちつとも酔いが進まない。

「南雲、お前は俺の弟分よりまだ大人だからな、ある程度わかるだろうってここで留めとくがな」

本条先輩はめがねをかけなおした。秋世の目をじつとにらんだ。

「あんまん姫とばあちゃんとを一緒にしているうちは、お前のほしもんなんて、手に入れられねえぞ」

「俺のほしいのですか」

それ以上本条先輩は答えず、グラスを置いた。立ち上がるとひゅうと口笛を吹いた。視線をミラーボールの光降り注ぐホールへ投げかけて、

「ちよつくら一踊りしてくるか」

言い捨てて、背を向けた。

ババコンってなんだよ。

秋世はぼんやりと闇の中の光を追っていた。

修学旅行四日目の夜ならばそれは、「ほたる」として追いかけたかもしれない。時折留まって秋世の顔を覗きこもうとするけれども、片手で追い払いたくなってしまいう小さな光。尾っぽに明りをつけて飛んでいるほたるたち。

本条先輩、きつすぎ。

やけっぱちのつもりなんてない。ほっぺたに蛙が溜めるくらいのカクテルを一気に飲んだ。ぜんぜん酔いが回らない。

これって、忌引明けのか弱い中学三年生に言うことかよ。

ちくちく突き刺さってくるのは、胃の上の方だった。喉が少し焼けた。

彰子さんに言ったら怒られるぞ。いや、彰子さんは怒らない

かしらねえけどな、ばあちゃんは怒るよ。

本当は祖母のことも、家のことも、いや彰子のこともすべて忘れていたかった。

たとえ明日になったら学校や家に戻らなくてはならないとわかっていても、今だけはすべてを切り捨てていたかった。

なのに本条先輩ときたら、いきなり話を元に戻そうとするではないか。ひどい話だ。もしかしたら本条先輩は、秋世の家庭の事情なんぞ知っているのだろうか？ いや、そんなわけがない。自分が妹に悪さしたらしいとんでもない兄貴だということなんて、誰が好きで話すもんか。つい一週間ちよつと前までは、南雲家が祖母を中心に回っている輝ける星だと思っていたくせに、そんな意味不明なことを話すわけがない。だったらなぜだろう？　なんでそんなこと言い出したりしたのだろう？

思い当たる節がないわけではない。青大附中規律委員長でかつ学内アイドルと言われた自分と、彰子を巡るやつかみの嵐。本条先輩も秋世が「あんまん姫」彰子と付き合っている事実を知った時はかなり驚いていた。その延長線上と考えれば、頷ける。時折冗談めかして、夏木や名倉を代表とする「花散里ファンクラブ」からの攻撃に頭を抱えていることを伝えたりもしたけれども、だ。

なんで、彰子さんとばあちゃんとが同じなんだよ。

もちろん彰子に一目ぼれしてしまったのが、自分の好みであるのは確かだし、ばあちゃんのこと大好きだったってことは「好き」の範疇にあるってことだろう。

けど、祖母と彰子に持った感情は、決して同じものではないと思いたい。

絶対に渡したくない。絶対に傷つけたくない。絶対に汚したくない。

言葉にすれば同じだけでも、絶対に違う。

考えてどうする。そうだ。今夜はすべて忘れるためにここにきた

んだ。

秋世は立ち上がった。本条先輩には、さっき言われたことなんてすっかり忘れたふりして接すればいいことだ。酔っ払っていて、もうへろへろつてところ見せてやればいい。本条先輩だってたまたまいろいろ腹の虫が悪かったただけだと思って無視してくれるだろう。そういう人だ、あの人は。

ピアノの脇でふらつきながら立っていた時、手を曳かれた。本条先輩がどこにいるかをまず見極めてから、「パール・シテイ」のIKUの乗りで身体を揺らそうと思っていた矢先だった。小さい子どもを連れているわけでもないのに。振り返ると、知らない女性が立っていた。すばやく顔と瞳と口元を見て判断した。笑っている。年齢は大体、大学生くらい。髪の毛は長めのワンレングス。つやがワックスかけたみたいに白く輝いているところが、妙子さんに似ていた。逆光だったせいかそれ以上は読み取れず、秋世はあいまいな笑みを返すにとどめた。

「もしかして、IKUに似てるって言われない？」

やっぱりだよ。

青大附中ではそれほどでもないにせよ、しょっちゅうIKUに似ていると言われるのはそうそう珍しいことではない。年齢的には三歳くらい違うと聞いているが闇にまぎれているとほとんど見分けがつかないらしい。夜道でしょっちゅう追いかけられたものだった。今夜はファッションも意識的に「パール・シテイ」だしいたし方ないことだろう。

「まあ、それなりに」

あいまいな言葉を返した。これも「パール・シテイ」のIKUを意識してだった。あまり意味のある言葉を吐くキャラクターではないらしいという。

「もしかして、IKU本人だったりする？」

「まさか」

これ以上かまう気もなく、秋世は愛想だけ振り撒いて背を向けようとした。とたん片手を握り締められ、少し引きずられるような格好になった。背中と彼女とがぺたつとくっつくと同時に、胸の頂点が背骨にくっついたのを感じた。思わず身体が反応していた。

「私、IKUのファンなんだ。今だけ一緒にいて」

「けど俺、本人じゃないし」

ワンレングスの女子大生らしき人の瞳をのぞきこんだ時、秋世にはよく理解できない揺らめきを見つけた。

途切れない微笑みと、どこかふわふわとした口調。

「みんな、嘘。嘘でいいの。いいじゃん、嘘で」

握り締められた手と、完全に反応した身体の問題。

みんな、嘘かよ。

計算する余裕も、判断する気力もなかった。突然腰が抜けたようにがくがく震え、秋世は側の椅子に滑り落ちた。背中だけではなく、今度は真正面同士で抱き合う格好となり、そのバランスは胸のふくらみでもって支えられ、ゆっくり重心が唇へと挙がって行った。身体のでこぼこがびたりと合ったのを全身で感じた瞬間、秋世の唇はもう一枚のぬめつとしたなめくじで覆われた。それをなめくじと取るか、何度目かのキスと受け取るか、それすら今の秋世には判断できなかった。腰から落ちて抱き合い、足を広げる形でワンレングスの彼女を受け止めた段階で、秋世の全身はすでに攻撃態勢に入っていた。いつもだったならそれは「未成年だし」「好きでもないのにやっぱりそれは怖い」「彰子さんだったらいいけどさ」いろんな言葉で打ち消される場面だった。一歩退いて逃げることもできたはずだった。なぜ、背中に回ったワンレングスの彼女は何度も唇を重ねるのだろう。その味はなぜ、いつだったか水菜さんと一緒に経験した時よりも甘いのだろうか。どうして腰が動いてしまうのか、どうして相手がベルトに手をかけて自分がチャックを開こうとするのを止めたいと思わないのか、何もかもがわからなかった。それから後続いた出来事を、秋世はただ機械的に続けるだけだった。水菜さん

と途中まで続けたあのことを、あっけないくらいすばやく誰にも見られないように済ませるだけだった。決して、難しいことではなかった。

これって、カウントされるのかな。

外から見たら単純に抱き合っているだけに見えただろう。少し、押し倒すという格好に見えたかもしれない。また厳密に言えば、そういう「初体験」なのかも知からない。

「また、あとでね」

抱き合った身体をむこうの方から離すようにして、しばらく彼女は秋世の目をじっと見詰めた。「見据えた」に近かった。今までこんな生ぬるい目で見つめる女子と出会ったことなどなかった。秋世は首を動かさず、手馴れた調子で身体を整えようとする彼女に任せていた。それがしなれているのかそれとも初心なのか、どう判断したかはわからない。ただ、

また、あとでなんてねえよな。

尻から腰がずるずると沈んでいくような感覚だった。

ここが引き上げ時だろう。本条先輩に挨拶してから後、ゆっくりと消えよう。

「電話番号とか、ないの」

「別に」

口数少なに答えると、

「また、会いたいね」

彼女の目はいわゆる「パール・シティ」のIKUを追っかけているのだろうか。

南雲秋世という十五歳の人間を追いかけているわけではないのだろつ。

秋世は黙ったまま首を振って、席を立った。

さつさと帰った方がいい。時計の針を見ると数字一つ分しか動いていない。

五分間かよ。

自嘲した。

あれが「初体験」にカウントされるとしたら実にむなしい。たった五分で終わってしまったなんて、そんなのあるか。いきなり疲れがどかりと肩にかぶさってくる。通り過ぎる女性たちの顔をさばのひらきと同じつぼく眺めながら、秋世は本条先輩といた席についた。さつさと踊ってきたのかそれとも疲れたのかわからないが、本条先輩は三杯目の透明な液体をすすっていた。色は照明にかき消されていた。秋世の姿を見るなり、隣の席をぽんぽんと叩いた。

「気いつけるよ」

肩を組み、耳に息を吹きかけた。

「何を？」

「食いたい気持ちもわかるけどな」

まじまじと本条先輩の顔を眺め、読み取ろうとした。

「今夜のところは俺と出来てる振りしろよ」

「だから何をつすか」

たった五分間の出来事を本条先輩は見ていたということだろうか？心臓がぱくぱく言い出し、目の前の明かりが揺れ出した。

「お前、規律のくせに知らんのか」

いきなり忘れていた「規律」なんて言葉を口にした本条先輩。髪の毛を掻き揚げると大きなため息をついた後、

「『児童福祉法』によるとだ。『満18歳に満たない者』がいわゆる『児童』なんだとさ。ついでに言うと、お前まだ十五歳だろ。『小学校就学の始期から、満18歳に達するまでの者』は『少年』なんだとさ。俺もお前も、まだ『少年』な」

「法律詳しいですねえ。弁護士目指してるとか？」

おちゃらけてごまかそうとするが果たせなかった。さらに腕をがっちりと組まれ、ささやかれる。

「児童福祉法第34条1項6号によるとだ。『児童に淫行をさせる行為』をさせちゃあいけないって決まりになってるわけなんだ」

人のこと言えるかと言いたいのがまんする。

「つまり、なぐちゃんに色目使った『チェリー食い』のお嬢さんたちは、即、犯罪を犯したことになっちまうってわけだよ。どっちが誘ったかとか、愛があるかとかないとか、そんなの関係ないにしてもだな」

「あの、じゃあ先輩は」

思わず「先輩」と口走ってしまった。不覚なり。さらにぐいと肩を抱かれた。

「同じ青少年だったら罰則は適用されないんだよ。ま、条例違反になっちまうから、補導はされるかもしれねえけどな。その辺は計算してるぞ」

意味不明な言葉を吐いた後、本条先輩は立ち上がった。

「とにかく、いったん出るぞ。なぐちゃん、お前いるだけで犯罪者が増えちまう。足ついちまうぞ」

犯罪者？

俺が、いるだけで？

朦朧とした意識の中、本条先輩とべったりくっつきながら闇を歩いた。どうもこのダンスパブでは、男と女もさることながら同性同士の繋がりも認められているらしい。

「とにかく詳しい話は、部屋で聞くぞ」

男子同士の恋人同士の顔して、ふたりは闇から抜け出した。地下からうねっていた生臭い匂いが夜風で吹き飛んだ。本条先輩の髪の毛に振りかけ銀粉はだいぶはげていた。

「しっかしなあ、すっかりしょぼくしてしまいやがって」

まだその辺には鏡になるようなものがなかったので、「しょぼくれた」自分がどんなものだか、さっぱりわからなかった。少し緩ん

だベルトを指先で持ち上げながら、秋世はこれから本条先輩にどう説明すべきかに頭悩ませた。

なんで、俺、好きになつてたんだろ。この人。

本当はもつと話すことがあったのかもしれない。本条先輩の部屋に帰り、服を脱ぎ捨てたままベッドにもぐりこんだ方がいいが、やたら室温が高すぎて臭うわ汗かくわで寝られたものではなかった。

「脱いだもんは里理に洗わせるか」

「俺ものつかつていいですか」

「勝手にしろ」

まだ夜の闇は黒い穴。そばにいる本条先輩があくびをした気配がする。空気をかみしめるような口調で、寝言めいた言葉を吐いた。

「そうかあ」

「なにがですか？」

「お前、元気なうちに、いい医者探しとけよ」

またまた意味不明な言葉を吐いた本条先輩だった。秋世もベッドの中で薄っぺらい掛け布団をひざ上まで高く蹴飛ばしながら寝返りを打った。

「病気つてのはなあ、あとで、くるぜ」

「経験者なんですか？」

本条先輩は頭がベッドの頭にまで届くくらい伸びをした。ずいぶん窮屈になっている様子だった。成長期、背が伸びるのはお互い様でもつま先を伸ばすのがぎりぎりってことは、はたしてこのベッドで繰り広げられたあれやこれやなどは、さぞややりづらかったことだろう。秋世はつま先を少し引っ込めてみた。

「あのな、行きずりってのはな、まじで危ないんだぞ」

「へへ、悪い虫がつくとか」

「ああ、かなり、やつかいな、な」

性教育に関しては力を入れている青大附中ゆえ、秋世も本条先輩の示唆していることがいわゆる「性感染症」のたぐいであることは見当がついた。これでも一通り、保健体育の試験では満点取ったのだ。

「だから、あれはやめとけって言っただろ」

「はあ」

「チェリーなめられるだけじゃなくて、噛み切られるぞ、まじで」

「ご忠告ありがとうございます」

一番、忠告するに値しない本条先輩に言われても、説得力がない。秋世は上半身を起こして壁にもたれた。つい一時間ちよつと前に経験した「五分間」。一般的には「初体験」と呼ばれるたぐいのものを勢いでもって、五分間で終了させてしまったというわけだった。相手の女性……「パールシティー」のIKUファンだと言っていた……の顔は、闇とミラーライトの時折貫く光りでほぼあいまいだった。店を覆うジャズピアノの音色と、蒼く漂う壁際のライト。ほこりっぽい匂い。汗の匂い。身体の上ですべてが動いていた。

女子大生かあ。妙子さんと一緒の学校だったりするかな。

ワンレングスの個性ない顔だちの妙子さんを思い出した。明るい日の当たる場所で眺めると妙子さんは薄っぺらい画用紙のようにしか見えないのに、なぜか同じ雰囲気彼女はダンスフロアの片隅でなまめかしく輝いていた。もしかしたらフィアンセの教授も、学校ではなくああいった夜の世界の中で妙子さんにのめり込んでいったのかもしれない。いろいろと想像してしまうと、なんだか自分がいやらしい奴だと思えてしまう。

秋世はつけたままにしていた腕時計を覗き込んだ。

「ああ、本条さん。ひとつこの機会に聞きたいんだけど、いいですか」

「なんだ」

「本条さんの初体験って、いつでしたっけ？」

知らないわけではない。青大附中を卒業するまで本条先輩には、二人の彼女が存在した。うちひとりとは本条先輩の小学時代同級生で、もうひとは当時女子高生。今は多分〇しか女子大生のはずだ。はたして互いの存在を彼女たちが気付いていたかどうかは知らないが、本条先輩は器用に二人の彼女を、一夫多妻制の国王さまのごとく楽しんでいたという。もちろん、いくところまでしっかりと行って。

卒業まで続いたのが秋世には信じ難い。しかもこの二人以外、本条先輩は青大附中の女子に一切手をつけなかったという。本人の自己申告だからどこまで信じていいかは難しいところだが、先輩だし、まあいいとしておこう。

「確か、六年の夏って言っていましたよね。ませた小学生なこと」

「ほらあるだろ、夏休みのキャンプ遠足。きもだめしの勢いでって言っただろ」

「でも、よくできましたねえ」

本条先輩は少しあごをあげたかつこうであお向けになり、天井を見据えた。暗いからどんな顔をしているかどうかはわからないけれども、少し気合が入った気配はした。

少し棒読みで、

「向こうが、経験豊富と来たら、どうする？」

「同級生でしょうが、そんなことは」

「そりゃあすごかったぞ。SもMもなんでもありだ。ま、自分でやりたがったわけじゃねえよ。おもちゃになるしかねかったんだ。干草はな」

本条先輩が相手の女子を、「干草」と呼んだのは今が始めてだった。一拍置いてから懐かしそうに、暖かく声が響いた。

「あいつはさ、青潟発『ロリコンビデオ』のアイドルだったわけ」

「なんすかそれ。そういう趣味って需要あるんですかそれ」

ぎくりとする。あえてこらえた。

「いわゆる『裏ビデオ』あるだろ。青潟っな、田舎のくせに変態多

くてさ、アパートの一室にな、ビデオデッキを三十台くらいずらつと並べておいてな、そこでビデオテープ突っ込んで全部リモコンで録画ボタンおして、それから現物をダビングだ。そうするとまあ、すごいらしいぞ、売れる、売れる。通信販売万歳って感じらしいぞ、そういうものだろうか。

「しかもだ。親が監督兼男優だとしたら、どうすんだ？」

親。

「近親相姦」という言葉を知らないわけではなかった。けど、生身で本当の親と子がいわゆるそんなことをするなんて、絶対ありえないものではないか？

先輩の声が少し途切れるのを待つて、秋世は割り込んだ。

「それって、やばいですよ。警察にまじで捕まりますよ。まさか本条先輩もビデオ出演」

「なわけねえだろが！」

ひざをひざで蹴られたがうまく避けた。

「けどな、親にやれって言われて、普通逆らえるか？」

「いくつくらいからやらされてたんですか？ やっぱし、ロリコンっていうと五歳くらいからでしょうねえ」

あてずっぽで言ってみた。まさかそれ以下ってことはないだろう。ま、あいつが覚えていねえとこみると、さらに前だろうな」

すでに本条先輩の中で、その「千草」という人は、大切な思い出の人として心に残っているのだろう。どういう別れ方をしたのか、聞きたいと思った。

「じゃあ、お父さんの命令だ、逆らえないか」

「いわゆる生理現象が始まる年頃まではすっぽんぽんムービー中心だったらしいがな、赤飯炊いてからはすごかったらしい、なんでもありだったらしいぞ。あいつの方が俺より何倍もやり方知ってたかなあ」

「あの、しつこいようですが、彼女の父親、ほんとの、親？」

「そうなんだよ」

本条先輩はもう一度繰り返した。

「だから逃げたんだよ。逃げ場所、あいつにはねえんだよ。仕事場と家庭が一緒だったら、やることはひとつしかねえだろ、だから、俺がもうひとつの逃げ場所になるうかって話になったただけだって」

「その人、今どうしてるんですか」

確か、卒業と共に別れて音沙汰なしと聞いた記憶がある。

「逃げた」

「え？」

「逃がした、とも言っな」

本条先輩はもう一度ねこの伸びをした。

「すげえ遠いところに、千草を可愛がってくれる親戚のおばさんがいるんだってさ。そこに行けばまず大丈夫だろうってことで、逃げた。最悪の場合は児童相談所ってこともある。ま、中卒だしな、最悪でも義務教育は受けているし、バイトでもして稼ぐこともできるしな。少なくとも、大またおっぴろげる以外の仕事はあるだろ」

「はあ」

本条先輩はそれ以上何も言わなかった。気が付くと密室の中から、四足の靴下からなる据えた匂いが漂いはじめていた。

親に、かよ。

信じられない、そう言っってしまった方がいいのだろうか。

それじゃあ、逃げられねえよなあ。

秋世は腕時計を手首の一番細いところに持つてきて、くるくる回した。

だって、どうすんの。うちに帰ったら裏ビデオの仕事が待ってるんだぜ。本条先輩よりも経験豊富ってきたら、いったいどうするんだよ。

どういう繋がりだったのかはわからない。もちろん秋世の知りたかった「本条先輩がいかにして初体験したのか」という具体的な例は教えてもらえなかった。ただはつきりしているのは、本条先輩が千草さんをどんな形でこそ守り、手放したという事実だった。たとえ二股かけていようが、この人は決して、自分にかかわってきた女子を手厳しく捨てたりはしない人だろう。大切に、本当に守ってきただろう。

「それ、りっちゃん、知ってるんですか」

「まさかだろ」

「でしょうね」

秋世の記憶が間違っていないければ、両天秤してきた本条先輩は、男子たちから羨望とやっかみのまなざしを日々受けてきたはずだった。中学生にあるまじき関係を持っている、実はとんでもなくうらやましい存在として遠目で眺められてきたわけだ。「いくところまで行っている」中学生なんて、きっと片手数える程度だろう。今自分が済ませてきたことを、他の誰かが簡単にこなすことなんて、きつとできやしないだろう。

やはり、本条先輩、この人はすごい。

秋世はゆつくりと両手を伸ばすと、もう一度ベッドに滑り込んだ。「せっかくのお惚気話聞かせていただいたところで、感謝にお付き合いたいでしょうか」

「よせ、俺は里理とは違う」

またわけのわからないことを言うもんだ。無視して秋世はそのまま目を閉じた。どうでもいいが明日も学校だ。

目が覚めたのは午前五時半過ぎだった。新聞配達の自転車の音がちりちり響き、大型自動車の動き出す気配もする。もともとこのあたりは工場が建ち並んでいることもあって、朝がやたらと早いらしい。すずめも元気に鳴いている。横たわっている本条先輩をまたいでベッドから降り、秋世はまず目一杯伸びをした。睡眠時間はそれ

ほどとれているわけではないのに、なぜかすっきりしていた。水を飲み、部屋から出て、隣の里理さんが戻ってきているかどうか耳を澄ました。が、人気は全然なかった。やはり寝ているんだろう。シンクに積み上げられていた皿とコップのうちいくつかを水で洗い、分厚いマグカップでまずは一杯飲み干した。

身体がしゃんとした気がする。

まじで朝だよな。

ひとりごちた。結局、家には無断外泊となってしまった。今更謝る気もないけれども、てっきり家族から搜索願いが出されていたらしやれにならない。朝一で家に戻る方がいいだろう。顔だけ出して、ばあちゃんのお骨に手だけ合わせて、それからさっさと出て行こう。親が文句言うだろうが、そんなの知ったことではない。

どうせ俺はババコンだよ、悪かったな。

やたらと足の裏がぺたぺたする。どうやらジャムの瓶が転がっていて、ふたから洩れていたらしかった。拾い上げ、指先でなめた。腹、空いた。

まだ寝ているかと思ったら、本条先輩はしっかり目を開けていた。

「おや、お早いつすねえ」

「お前も立村と同じだな」

「何がっすか」

「やたらと早起き」

そうなのか。立村は早起きなのか。それは初耳だった。頼んでもいないのに注釈を加える本条先輩。やっぱりこの人にとって立村は特別な存在なのだと再認識する。

「あいつな、初めての評議委員会顔合わせの時に、へべれけに酔っ払ってな、俺があいつの家に運んでやったんだ。そしたらもういたせりつくせりの大サービスで、朝五時半しつかり目、覚ましやつて。豪華なモーニングセット用意してくれたぜ」

「じゃあ今度俺もリクエストをば」

「あいつご機嫌悪くなると、すねるからなあ」

ぼそぼそ話をしているうちに、またかくつと首が下がってくる。身体を動かさないとまずい。

「里理さんいないんですかね」

「あいつか、たぶんじじいのところに行ってるんだろう」

たいして気にもしない様子で本条先輩は寝汗を手の甲で拭いた。

「ま、お前もいろいろ大変だろうが、がんばれよ。なんかあったら連絡よこせ。まずはだ、しばらく黄色い膿が出ないかどうか、だな」

「その時はぜひ」

本条先輩、非常に実用的な話ばかりしてくれる人だ。

「それと、お前さ、女見る目、変わるかもしれねえぞ」

「は？」

何を言われているかわからなかったのは、たぶん寝ぼけていたからかもしれないかった。

さすがにラジオ体操こそしなかったものの、朝一番の運動として軽く散歩した後、制服に着替えて秋世は家に戻った。立村ほど潔癖症ではないと自覚しているものの、やはりシャツくらいはびしっと着替えない。シャワーを浴びて髪の毛をきっちり洗いたい。本条先輩に脅されている通り、膿が出てくるかもしれない部分もしっかり消毒したい。

裏口からこそこそしないで、正面から入る。鍵は開いていた。覚悟の腹積もりをした。

「秋世か」

父と母が玄関で並んで待っていた。

その後、二人からそれぞれ一発ずつ頬を張られたのは、覚悟の上だった。反抗するつもりもなく、ひとにらみした後秋世は部屋へもぐりこみ、シャワーを浴びる準備をした。下着類とタオルを片手に自室から出て後、隣の祖母の部屋を覗き込んだ。まだ、祖母の部屋は整理されていないようだった。戻ってきてても何の支障もなさそう

だった。

「ばあちゃん、いるか」

階段を下りる前に秋世は声をかけた。

両親からは散々「どこ行つてたの」「心配したんだぞ」「外泊なんてもつてのほか」「今は忌中なんだぞ」いろいろと説教された。でもそんなと知ったことかとそっぽを向き、秋世は用意されていた食パンをまるのまま囓んだ。やたらと硬くなっている。まずい。

「いいかげん返事しろ」

「友だちのうちに泊まつてた」

先輩とは言わないでおく。

「じゃあなんで連絡しないんだ」

「したくないから」

「こんな時に遊びほうけててどうするんだ」

「仏壇、手を合わせるために帰ってきた」

言い捨てた。所詮自分は「ババコン」だ。なんとも言え。秋世は母のうっとおしくお給仕する様をひっぱたきたくなった。さつさと祖母のお骨が置かれている仏壇前に座り、手を合わせ、鈴を神妙に鳴らした。

後を引く音に、耳を済ませ、両手を合わせた。

ばあちゃん、元氣？ 俺も元氣だよ。

それからすったもんだがあつたものの、何はともあれ片付くものは片付いた。秋世が身支度を終え、家を出たのはいつも通り七時半過ぎだった。いつもだったら彰子を迎えに自転車で向かうはずだった。でも腰に力が入らないせいか、もしくは寝不足のせいか知らないが、身体が動かなかった。どうしてかわからず、何度か腰を叩いてみた。

やばいなあ。どうしたんだろ。この歳でぎっくり腰だなんて

やだぞ。

冗談めかして呟いてみたけれども、やはり変だった。

彰子さんのところへは、明日から迎えに行くことにしようか。いつもとは違う自分。忌中明けだし、そのあたりは大目に見てくれるだろう。

自転車を走らせ、早めに校舎へ着いた。規律委員会において一番大切な仕事が「週番」と呼ばれる遅刻チェックだ。いわゆる「早朝デート」と秋世は言い習わしているのだが、毎朝玄関前に陣取り、チャイムが鳴ると同時に生徒玄関の鍵を閉める。またもう二人は職員玄関へと向かい、遅刻者のみなさまに「違反カード」を恭しく贈呈する。違反カードは教室内に用意されたそれぞれの氏名下へ貼り付けられ、五枚溜まった段階で保護者へ報告、となる。遅刻は結構多いのだけでもみなうまく切り抜けているようで、三年D組においてはぎりぎり四枚で粘っている奴が圧倒的に多い。立村はかなり遠いところから通っているのに一枚もないのに、秋世は規律委員長のくせにそれこそぎりぎり四枚。報告されたらしゃれにならないので委員長となつてからは早めに動くようにしている。彰子を迎えに行くこともあつて、この二年ほどは遅刻などなくなっているのだが。

「南雲くん、おはよ！」

「ああ、おひさしぶり」

昔付き合っていた他のクラスの女子と顔を合わせた。自転車ですれ違う程度のことだったけれども、最初のうち彰子からみでこたごたした時と比べると、だいぶ人間らしい交流が増えてきているような気がする。もともと秋世は別れた相手を憎むこともしないし、嫌うこともしない。ただ、無関心になるだけだった。声をかけてくれば、笑顔で受ける。それだけのことだった。彰子にべったりしている時はさすがによつてこないけれども、今は隙だらけだったのだろう。なんだかすつと入ってくる声だった。

ああ、彼女にも悪いことしたな。

わずかの期間しか付き合わなかったけれども、決していやな子ではなかった。

少し色っぽく迫りたがるところがあつて、何度か密着されたりしたけれども、秋世がその時期から彰子のことしか見ていなかったから、そのチャンスもものにしなかった。言つてはなんだが、かなり肉感的な女子だった。性格を知るまえに秋世は彰子へ走つてしまったのでそれ以上のことを知ることなかったのだが。

香水？

ふと、何かが香つた。背に誰かが近づいてきた。

「南雲くん、おひさしぶり」

水菜さんか。

青大附高の制服は、中学と違いブレザーの衿が柄違いに織り込まれている。無地のカラーが茶を中心にあしらわれているので、どちらかというとトラッドの香りが強く出ている。秋世はこちらの方が好きだった。スカートはひざを少し隠す程度。あごラインのبوبヘアに整えた水菜さんが、自転車で隣に近づいてきていた。

「おひさしぶりっす！」

別れた彼女、ではなく、なつかしの先輩、といった風に敬礼した。

「元気そうね」

「まあそうかな」

ここではあまりおふざけしすぎないように、さわやかな好青年を目指して笑顔を見せた。

「みんな、クラスの女子がね、南雲くんのこと心配していたのよね。おばあさんのこと、ご愁傷様」

「いえいえ、どうもありがとうございます」

なんだか、ちよつとほつとした。よくよく水菜さんのほおを見ると、目の真下にほんのり赤いチークが入っているような……いやいやそれ以前に、青大附高、化粧まzungないのか？

「俺、規律委員長としてちょっとつつこんでいいですか」

「どうぞ」

「まずくない？」

ゆっくり自転車を滑らせ、秋世は頬を軽くつく真似をした。

「大丈夫よ。ナチュラルメイクだから。どうせ授業中には落とすもの」

「ほう、じゃあ、朝誰かに見せる必要があるのだとか」

「ご名答。さすが鋭いわね」

と、いうことは、相手がいるわけだな。

どうせ勝手に消えてくれる人なんだから、と邪険にあしらった相手なのに、いまだにさらっとおしゃべりができるのはやはり、楽だった。今までは彰子のことしか観てこなかったのに、なぜ今日になつていきなり水菜さんと再会なんてしてしまうんだろうか。友達、いや、先輩なのだから、だろうか。

「相手、どんな奴？」

今度は子どもっぽく尋ねてみた。水菜さんはボブヘアを軽く揺らし、ふらつかない程度に自転車を漕いだ。

「柔道部の黒帯くん」

「へえ、じゃあ痴漢退治OKですね」

少し意外だった。水菜さんといえば、こういったらなんだがわりと知性の輝く美人タイプだった。さっぱりした性格で、言いたいことは結構言う。やりたいことはあっけらかんと誘う……だからああいう関係にもなるうとしたのだが……細身だけでもがっちり骨はしまっている、そういう感じの女子だった。秋世からしたらまあ、楽かな、と思えるタイプではあったのだが。でも、水菜さんがまさか柔道部青年とお付き合っているとは。好みが変わったのだろうかと推測した。

「まあね、南雲くんも今の彼女の噂伝わってるわよ。保健委員の子でしょ。ぽちゃっとした」

「ご存知の通り。お互いハッピーでいいですね」

そこまで口にした時、ふと感じた、のどの詰まる感覚。

どうしてだか、その時はわからなかった。青大附高の校舎は丸ごと別の建物となるので、まずはもう一度敬礼をして別れることにした。

「お互い、幸せになりましたよね！」

「お幸せに！」

なんだか結婚式のふたりにかけるような言葉を交わし、秋世は青大附中の自転車置き場へ向かった。

すうつとなじんでくるのは、なぜだろう。

一緒にいた時に感じた、不思議なやわらかい匂い。

体臭なのか、それとも香水なのか。

水菜さんに誘われても、どうして自分が動かなかったのだろうかという問いを、改めて当時の自分にしたくなった。もし、自転車で並んだまま、誘いをかけていたらどうしていただろう？ もしあの時、今の自分だったとしたら？

水菜さんって、ああいう人だったんだ。

味も素っ気もない言葉で、今の感覚を表現することで、我慢するしかなかった。

まずは教室へ。階段を昇ろうとした時、ちょうど降りてくる女子とすれ違った。

ぷんと、汗臭い。

「あきよくん、おはよー！」

我が姫の声だ！

いつもの秋世ならば、そこでびんびん笑顔になる、はずだった。

彰子、さん？

これが、か？

別に彰子がスキンヘッドにしたとか、化粧をばりばりにしたとか、そういうわけではない。

いや、全く変わっていない。いつもの彰子のはずだった。

秋世が大好きでならない、たったひとりのあんまん姫のはず。

両手で守りたい、笑顔の持ち主のはずだった。

今も、全く変わらぬ笑顔のはずだった。

なんだろ、俺。変だ。

「おはよう！ 彰子さん。これから保健委員のなんかあるのかなあ」演技を即開始したので、その瞬間よぎった感情をごまかすことはできた。彰子も気付かなかった様子だった。お下げ髪をしっかり結んで、ぱんぱんにふくらみ今にもはじけそうなブラウスのボタンを押さえるようにして。

「そう、保健室当番だから早めに来たんだ。秋世くんも早いね」

「そりゃ、俺、週番ですから。規律委員長、ここでがんばらねば！」空気でポーズを取る自分。なのに、どこか違うところで自分が、笑顔一杯の自分を眺めているような感じがした。離れたところにいる自分は、彰子を今までにない違う瞳で見据えている。そういう気がした。かつてのいとおしくばっちゃんぽちゃしたお姫様。誰よりも守りたい。決して誰にも手放さない。秋世しか愛せないたったひとりの姫。

なんで、俺、好きになってたんだろ。この人。

彰子が降りていった瞬間、よぎった言葉に秋世は自分で答えられなかった。

出会ってから一度も、そんなこと、思ったことなかったのに。しつこいことに、同じ思惟はもう一度、秋世をよぎった。

どうして、俺、彼女のことあんなに好きだったんだろう。

まぶたには色あせた太めの女子同級生の姿しか、残っていなかった。

第二部 21

どうせ、俺は犯罪者なんだからさ。

いつもと変わらない顔をして、それでもやっぱり眠いことは眠い。隣の立村にあとは任せて、秋世はさっさと机にうつ伏した。さすがに歴史の授業中は菱本先生にはたき起こされたけれども、後の時間帯……主に聴きっ放しでよい授業……は足りない睡眠をなんとか補うことができた。必死に立村がノートを取ってくれているとわかっているからできた四時間居眠りのしっぱなし状況。感謝、感謝だった。

「大丈夫か、なぐちゃん」

給食の牛乳瓶を一本蓋開けながら、立村は秋世に問いただしてきた。

いつもらしくない自分だと、やっぱり気付かれていたのかもしれない。もともと立村は神経の細い男だし、他の連中だとさほど気にしないことでもすぐ、ぴんときてしまうのかもしれない。ただ、秋世もそういう立村の性分は重々承知。あっさりごまかす、これ常識。「いやあ、久々にさ、学校で過ごすとき、もう眠気のスイッチ入っちゃまってさ。ほら、忌中休暇中はひたすら寝てたからさ。葬式のごたごたでぐったりしててさ。もう俺、寝るしかないって状態」

「そうか、それならさ、思い切って五時間目、具合が悪いことにして、保健室で寝てるってのはどうかな」

いきなりおさぼりを提案する評議委員長。

「保健室って、俺、熱ないし」

「だから、眩暈がするとか何とか言って」

「りっちゃんと違って、俺、仮病一発ではれちまうし」

昨日までの自分だったらきつと、「彰子さんに頼んでそうしても

らうかなあ」と脳天気に答えていただろう。そうしなかったとしても。「保健室」という言葉に繋がるのは、自然と彰子の居場所となり、秋世にはなぜか×印を高く掲げたい気分にある。

「そうか、でも五時間目、英語だけでももしかしたら抜き打ちのテストあるかもしれないし」

「え、まじかよ」

誰もそんなの教えてくれやしなかった。立村もちちらと横目で周囲を見渡した後、

「俺もさっき聞いたんだ。職員室で、英語科の先生たちがプリント刷ってたつて。もしかしてかなと思ってさ」

「期末試験のものじゃねえのかな」

「かもしれない、けどさ」

たまったものではない。もともと秋世はそれほど勉強好きな方ではない。一週間律儀に、予習復習きっちり行うわけがない。たぶん、一発で全滅だ。

「テスト中に寝ちまつたらしゃれにならないよねえ、りっちゃん」

語学エキスパート、おそらく抜き打ちテストされてもそれほどダメージがないはずの立村は、あいまいに頷いてゆっくりと牛乳を飲み干した。

それにしても。

あの五分間が、彰子を包む笑顔オーラを一瞬のうちにくすんだものにしてしまうとは。

なんでだろ、ほんと、どうしてって感じだよな。

結局立村の予言通り、五時間目の英語はいきなりの抜き打ちテストだった。しかも五十分たつぷりと使ったときた。当然、秋世には長文読解がなんなのか、現在完了と過去完了の概念が何がなんだかわからなかった。いや、修学旅行前まではおぼろげに理解していたはずなのだが、あれ以来一切記憶が途切れてしまった風だった。白いコピー紙の上にじんだアルファベットが、見えているうちに踊り

出すんでないかとさえ思った。たぶん、悲惨な成績に終わるだろう。まあいいか。たぶん大目に見てくれるか、喪中明けなんだし。

秋世は人ひとり分の通路を空けた隣にいる、奈良岡彰子をちらと見た。

「な」の字なので、自然と隣同士になる。

さつき、試験中席替えする時も、

「あきよくん、元気出してね！」

とさりげなく笑顔を見せてくれた。いつもの彰子スマイルにもちろん秋世も全開の笑顔で答えたけれども、頬の筋肉を思いっきり使っていたとすぐに感じた。一言で言って、「無理している」。

あれってなんだったんだろう。

すでに試験放棄気分でテスト用紙を裏返し、秋世はシャープペンシルの芯をちくちく言わせた。

なんてつか、暑苦しいつか。

白いブラウスがぴちつとはまっついていて、彰子の背からは薄いブラジャーの線らしきものが浮かんで見えた。女子の場合大抵そうなのだけでも、礼儀としてみな口には出さないようにしていた。背を丸めて彰子が真剣にテスト用紙を埋めている。もともと理系は得意だが文系は苦手だと話していたけれども、それなりにそつのない点数を取っている。

結局は頭がいいんじゃないの。

ふと、いやな気持ちになる。半分以上が意味不明の羅列だっただけに、解けている奴を見るのも今はうんざりだ。

前の方に並んでいる別の女子たちにも目を向け、あごを片手で支えた。

かわいらしくポニーテールで髪の毛を結い上げている女子や、やたらとヘアピンを刺している子やら、いろいろだ。中にはほんのりとせっけんのコロンをつけているような子もいる。

それに比べて。

この三年間の幻が、一気に薄らいでいく。その理由がどこにある

のかもわからず、誰を責めることもできないことはよくわかって
いる。どうして彰子があんなに油っぽく、うっとおしく、見ているだ
けで暑苦しくなる風に映ってしまうのだろうか。

たぶん呼び出し食らうであろう英語の小テストは無事終了した。

「あきよくん、いきなりだったから大変だったよね」

別に。二日経ってりゃいきなりでもねえよ。

秋世は答えずににこりと笑うだけにした。重たい体をゆさゆさと、
近づけてくる彰子。

「もしよかったら、私、数学と理科のノートは全部取ってるから貸
してあげようか？」

貸して「あげようか」だと？

軽くむつときた。

「いいよ、俺もそのくらい自分でできるし」

彰子の善意があふれている。いつもならばノートを貸してもらえ
ることが嬉しいのに、観るのもうざりたい。さらに言うなら「押し
付けよう」とするその態度が気に食わない。

「でも、一週間だったら大変でしょう」

やたらと押しの強い彰子。さらに続ける。

「あきよくんが大変なのはみんなよくわかってるから、ほら、すい
くんもあとで英語と古典のノート貸してくれるって言ってたよ」

なにを好んで水口とかよ！

結局は水口と一週間いちゃいちゃしていたというわけか。あれ、
ここにはひっかかる場所がない。別にそうしたけりゃそうすれば
いいのだが、秋世がもと水口にいらいらしているのを彰子だっ
て気付かないわけがないだろう。どうしてこいつも鈍感でいられるん
だろうか。秋世には理解できない。

「いい、俺、りっちゃんに頼むから」

「けど立村くんは英語だったらいいけど」

「いいかげんにしろよ、もういいだよ」

声荒く秋世は机を叩きつけた。かなりびくりとした彰子が、脂ぎった鼻の回りを手の甲でこするしぐさをし、

「ごめんね、私も言いすぎたかな」

「あいつを馬鹿にするのはやめてくれよ」

すぐに自分を取り戻し、言葉を和らげようとしたけれどもうまくいかなかった。

彰子の言うことは決して間違っていない。立村は決して頭が悪いわけではないけれども、英語以外のノートは先生の言うことだけをそのまま書き取るやり方しかしていない。水口はお子様に見えるけれどもノートやら細かいチェックやらそういうのはお得意である。おそらく彰子はそのあたりも鋭くチェックしているのだろう。でもそんなのは勝手にしろだ。どうせ誰のノートを借りたとしても、どうしようもないのはわかりきっている自分の成績順位。そんなことだったら気持ちよくしゃべることのできる相手を選ぶ。

「ごめん、俺も言いすぎた。じゃ、これから委員会あるから、お先に」

あっけにと取られて言葉を返せずにいる彰子から目をそらし、秋世は筆記用具を握り締め自分の席に戻った。嘘ではない。これから規律委員会が待っている。

面倒なことはすべて、同期の葉桜どもに任せて進め、肝心要のことだけを秋世が押さえる。規律委員会の方針は基本として、「委員長が手抜きできる」態勢を整えることにあった。二年の頃からいろいろと、一年上の先輩から指導を受けてはいたけれども、目の上のたんこぶが全部消え去った後は好き勝手にやらせてもらっている。何も、全部自分ひとりで抱え込む必要はないのだ。歴代の規律委員長たちはみな、自分がトップだという意識が強すぎて、ほとんどの準備を自分で片付けていた。いや、イラスト描きがもとも好きだとか、ヤンキーファッションをどうにかして制服スタイルに取り入れたいとか、それぞれのこだわりを持っていたのだろうし、秋世も

理解できないことはない。しかし、自分ひとりが引つ張りつづけて
いつて、いざぶつ倒れた時に誰がやるんだ？と問われたらどうする
のだろう。

……ということを、秋世は元評議委員長・本条里希から教わった。
「ふうん、だいぶ進んでるよな。オツケーオツケー」

「委員長いなくてもいいかも」

軽口叩く二年の女子。笑って投げキッスしてやった。きやあとは
しゃぐ声。珍しいことをするもんだとばかりに、他の三年連中が秋
世をじつと見つめる。彰子と付き合ってから、決して他の女子たち
におふざけをかますことなんてなかったからだろう。自分でも、変
だとは思う。ただそうしたかったただけだ。

「ま、それならそれで、俺が楽になるだけだし、まあいっかってと
こだなあ」

「委員長、それはそうと、さつきから廊下でお友だちが、お待ちで
すよ」

一年の女子後輩が、着せ替え人形用の小さい服を縫い縫いしなが
ら、秋世に声をかけた。

女子の後輩たちはなんとなくだが、秋世に声をかけるタイミング
を必死に見ているようだった。あまり気にしたことはなかったけれ
ども、やたらと今は目についてならない。

「誰だろな、評議かそれとも」

「保健委員会の人みたいですよ」

彰子さん？

いや、彰子だったらみな秋世の恋人だと知っているし、もつと「
あれー、委員長の恋人がお待ちですよん」くらい言いかねない。開
けっ放しにしていた扉を足で広げ、覗き込む。間違っではないない。
確かに保健委員の東堂が、両腕をしっかと組んで待ち受けていた。
「おや、東堂先生どないしたんですか」

「いつまで待たせる気なのかなあ、規律委員長ともあろうものが」
「え？」

東堂の口がかなりとんがっている。ご機嫌損ねたらしい。こいつの性格上、ちよつとくらい怒らせても縁を切られることはないとかっている。でもできれば、なあなあで済ませたい。秋世は片手を、東堂の顔の前で振り、「いないいないばあ」をしてみせた。

「なんか俺、忘れてた？」

「昨日なあ、俺言つただろ。ちよつと付き合えつて」

「あれ、でもまだ先のことじゃあ」

「予定が変わつた。すぐ来い」

彰子さんのことか？

いや、それはないだろう。打ち消した。もともと東堂も秋世が彰子に熱をあげている様を「なんで？」という顔で眺めていた奴だった。同期として嫌つてはいないだろうがしかした。

ちよつと冷たくやりすぎたかなあ。

英語試験後の態度を自ら思い出し、反省する。

「けどさ、俺もただいま規律委員長としての時間中なもので」

「じゃあ待つ。『規律委員長』の権限で、頼む、すぐ終わらせてくれよ」

なんでだろ、珍しい。

秋世は東堂の眼を見るため、ひょいと指先であごを持ち上げてやった。軽く上向いた東堂の顔がなぜか引き締まっている。男子がくそまじめな顔をする時は大抵、「くそまじめ」なことをしたい時に限られる。秋世なりに、これは緊急事態と判断せざるを得なかった。「わかつたわかつた。じゃあ、ちよいと待ちいな」

手をひらひらさせて秋世は教室へと戻った。待ち受けていた他の委員たちが、秋世に説明を求める顔でもって迎えた。

「じゃあとりあえずだ、今日はここまでにしとつか。明日また続きやろう。どうせみな衆も早めに帰りたかろうしな」

厳かに伝えた。実際、本来すべき仕事は終わっていたし、無駄なように楽しい馬鹿話の時間に回すだけのことだった。少し不満そうな後輩女子たちを除き、男子連中は手を打って喜んだ。オツケ

「オツケー、そういうものだ。」

「ということで、駅前か？」

「お前、土地勘あるだろ」

「いやあそれほどでも」

街に繰り出したがつている東堂には悪いが、制服で行くわけにはいかない。昨日日本条先輩と話をしていたのと同じく、一度は家に戻らねばならない。今の時間帯だったらぶん、両親は事務所にいるだろう。まずは互い一時間後に待ち合わせる約束をして着替えを済ませた。昨日のように「パール・シティー」のぎらぎらした格好とは違い、細身のジーンズと水色のストライプが入った開襟シャツで決めていくことにした。若干、歳相応に見える。

「お待たせ」

「待たせたぞ」

それに引き換え東堂は、六月にもかかわらずだぼつとした黒のＴシャツにやっぱりだぼとしたジーンズ。せめて色合いだけでも変えてほしい。見るからに暑苦しい。

「あんな東堂ちゃん、今度遊ぶ時には、俺がコーディネートしてあげよう」

「やめろよ」

あらら、のりが変。

やはり今日の東堂はどこか、いつもと違っていた。修学旅行後、秋世が忌引休暇を取っていた間、何かが起こったのは確かだろう。詳しく話を聞き出すつもりはなかったし、向こうから切り出すまでは知らん振りを決め込むのが礼儀だった。でもこうやって秋世を引っ張り出すということは、それなりに、何かが、動いたのだろう。素早く判断した。

「あのだ、どこに行きたいかによって、ＴＰＯが変わる」

「ここだ」

しわくちゃんなメモ紙は、手の平の汗でふやけていた。開いてみる

と、中には数学の方程式がプリントされていた。その下に汚い字で、「ミッドナイト・ベッド」とカタカナで書かれている。

「なにそれ、『夜のベッド』って、まさか東堂、そんなところに俺を誘って行きたいとか」

当然想像するものは決まっている。顔をしかめた東堂は、唇を突き出すようにして、

「とにかく、俺をそこに連れてけ。知ってるだろ、そこ」

「いやあ、俺にはとんと。ちよいと待つとれ」

東堂は完全に秋世を誤解しているとは思えない。ラブホテルか、もしくはモーテルか、その類だろうか。公衆電話ボックスを探し、まずは五十音別電話帳と職業別電話帳を開き、探した。

「ほんとにこの辺でいいんだな」

「言つとくけど、ラブホテルじゃあねえよ」

あつそうですか。調べるところが一ジャンル減った。東堂の口ぶりによると、どこかの飲み屋らしい。十五分くらい電話ボックスにこもり調べた結果、そこは単なる喫茶店ということが判明した。「で、そこに行けつていうわけ」

「悪い、頼むわ、南雲」

めつたに見られない東堂のまじめ面を眺めるのも、悪くはない。秋世は住所と土地勘を頼りに、さっそく駅の繁華街へと向かった。確かに喫茶店とはいえ、流れる方向によつてはラブホテルあり、モーテルあり、もっと危ない場所ありいろいろだろう。

理由を問わず、秋世なりにしようもない話をしてつないだ。どうしても東堂は脳天気に乗つてこない。抜き打ち試験の愚痴も、本条先輩と語った当たり障りのない部分の話も、立村のお坊ちゃまぶりも、東堂にはどうでもいいことらしかつた。しかたないので秋世も行き先案内人に徹した。本当は交番で確認すればいいのだろうが、もしその喫茶店が「歓楽街用の情報喫茶店」だとしたらしゃれにならない。自分らが補導される。しかたなく、犬の鼻を持っている気分で

かぎまくるしかない。

優秀な警察犬なみの鼻を持っていたらしく、なんとか目的地にはたどり着いた。あたりを見渡すと、装飾過度な建物が点在している。細い道の脇だから、なおさら重たく鬱陶しい。いつだったかデートした彰子の格好を思い出した。確か、有名なふりふり系のドレスを着て現れたことがあった。頭を振って打ち消した。

「あのさ、東堂ちゃん」

「なんだ、なぐちゃん」

韻をそろえた。

「ここ、どういうところか、想像つくよな」

「もちろん、そういうところだろうなあ」

くぐもった声で東堂が答えた。だぼついたズボンに無理やり手を突っ込み、天と地を見下ろし、見下げ、足をくねらせていた。

「で、喫茶店つたらどこだ」

「あすこ。超どふりふりファッションのあのお家の隣」

指を指した。「ミッドナイト・ベッド」と白い看板が出ていた。

デートコースにはあまりお勧めしたくない場所だった。

「そうか、わかった」

「何がわかったわけ」

「悪い、ちよつと待っててくれないかね、南雲くん」

いきなり「くん」付けをした後、東堂は「ミッドナイト・ベッド」の扉に手をかけようとした。が、すぐに戻り秋世に頼みごとをした。「南雲、その辺でもし、タクシー通ったら、止めておいてくれねえか」

「そりやどうして」

「とにかく」

言い残し、今度こそ東堂は「ミッドナイト・ベッド」にもぐりこみ……いや、入店していった。

頼まれた以上は、タクシーがくるかどうかチェックしておかねば

ならないだろう。かといって、誰かと乗るつもりなのだろうか。秋世はあえて頼まれごとをしないことにして、空を見上げた。まだ夕焼けの匂いはしなかった。

東堂の奴、どうするんだろ。

大体本条先輩から、この近辺の雰囲気がどういふものかは教えてもらっていた。

確かさ、この辺ホテル街だろ。

ホテル街の近く、喫茶店ときたら、やっぱりそういう目的のところではないだろうか。細い路地とはいえ、車はそれなりに通るし、よくよく見るとタクシーも通る。さっきピンクデコレーションケーキっぱい建物から出てきた、高校生らしいアベックがタクシーを停めて乗り込んでいったのを見た。やはり、需要はあるのだろう。

まさかなあ、東堂の奴も。

全く見当がつかなかった。自分が昨日経験したような時を、東堂が味わっているとは思えない。なにしろ言ったではないか。「もむ方法って」とかなんとかと。あれは単純に、経験なしというのを暴露しているに等しい。経験済みの秋世からしたら、ああいうのは「もんでももまないでも」勢いで終わるものだというのに。

また、タクシーが一台通り過ぎていった。ガラス越しに「空車」の赤いランプが光っていた。秋世の前を往復した。客を待っているのかもしれない。

東堂が出てきた。連れと一緒に。

あれ、これ、この子。

化粧がすこぶるうまいわけではない。むしろ派手すぎて、青い空の下では脂ぎって見える。青大附中の制服を着たまま化粧をするというのは、明らかに規律違反だ。もっというなら「盛り場でたむろわないようにする」これも規律違反。違反カードものだ。

、扉が閉まった。秋世はふたりに近づこうとした。一歩踏み出し

たとたん、鋭利な音が耳に響いた。

片手を振り下ろした東堂と、うつむいて頬を押さえたその子と。向かい合ったふたりに、入り込むことはできなかった。

東堂、お前。

今まで東堂の元彼女がどういう子なのか、詳しく見たことはなかった。

東堂本人も、修学旅行四日目夜に語るまでは、最低限の話しかしなかった。

事実関係だけは知っていたけれども、どのくらい想いが深かったを想像することはなかった。

たぶん、秋世も、他の連中もみな同じだろう。

結婚申し込むくらいだもんな。そうか。

ショートカットの髪の毛がまだ直毛だった。パーマがかかっていないだけかもしれませんが。規律委員長なんてくそくらえだ。黙って秋世は背を向けた。約束通り、タクシーを停めた。

「おい、来たぞ。早く来いよ」

振り返ると、うつむいた「元彼女」は目に人差し指を突っ込むようなしぐさをしている。黙って東堂がひじでつつき、前に、前にと進むよう押している。肩を抱いたり、抱きしめたりすることが、人前ではまだ出来ない奴なのだろう。秋世の顔を見て、「元彼女」は明らかにおびえた表情を見せた。規律委員長が目の前に立っているのだ。違反カードものの化粧だったら驚くのも無理はない。

首を振り、すぐいつもの笑顔を貼り付け、秋世はタクシーを指差した。東堂に尋ねた。

「お前も乗ってく？」

「ああ。あのさ、南雲ちよいといいか」

「元彼女」を車の中に、肘先でもって押し入れた後、東堂は耳元

にささやいた。

「悪い、タクシー代、明日絶対返すから、貸してくれねえかな」

そりゃあ、「元彼女」には、聞かれたくない会話だろう。

秋世は財布を取り出した。小遣い五千円が残っていた。修学旅行用に大目に持っていた小遣いが手付かずだったのは幸いだった。

「助かる、悪い」

「けどそんな遠くないだろ」

「うん、まあ」

口籠もった。どうやら東堂は、「元彼女」を連れてどこかへしけこみたいのだろう。聞いてみた。

「どこへ行くつもりなんだあ？」

「家。あいつの、親いるから」

一言、きつぱり、眼を見たまま東堂は答えた。

一瞬でも、東堂を色眼鏡で見た自分を、秋世は恥じた。

誰もが、俺と同じじゃあないんだよな。

東堂が両手を合わせて秋世を拝んだのが、ガラス越しに見えた。

秋世は見送り、ホテル街から抜け出した。どうして東堂の「元彼女」がこんなところにいたのか、想像つかないわけではないけれども、言っではいけないような気もした。

彼女はかなり、不良化の兆しを見せていたという。東堂の彼女時代からそうだったらしい。

懸命に更生させようと……秋世からしたら「お前がそれできる立場か？おい」と突っ込みたいが……していたのだろうし、菱本先生の前であっさりと振られた恥をあえて忘れて、こういうところに来たというわけだ。おそらく東堂のことだ。いまだに未練が残っていたのだろう。あの謎のメモをどこで手に入れたかは知らないが、「元彼女」がそこにたむろっているという情報を得て、何もしないでいられるほど東堂は無責任な奴ではない。

本気だな、あいつも。

決して、学校では見せないあいつの表情。

言葉はなくても、伝わるなにか。

果たして「元彼女」がどう感じ、東堂の行為をどう受け取ったかはわからない。

他の連中と違い、東堂が家に連れて行き……もちろん「元彼女両親」のいる家へだが………どういうことをするつもりなのかは想像がつかない。二度目のプロポーズでもするのかもしれないし、単純に送り届けるだけなのかもしれない。

あんなに本気になれるって、すごいよなあ。

今の自分には、もう残っていない「本気」。

たった一度、五分間の経験でもって消えうせた「女子への本気」。今、どこらへんに秋世の「本気」は浮いているのだろう。

秋世はゆつくりと、昨日通ったダンスパブの立ち並ぶ道を歩いた。家に戻る気など、さらさらない。ただゆつくりと、時間をつぶしてできれば親と顔を合わせないうちに帰って部屋にこもりたかった。どこかで適当に食い物でも食って……と心積もりしたものの、よく考えると財布の中は空っぽだった。せめて千円だけでも残しておけば、と悔いたけれども後の祭り。秋世はようやく赤くなり始めた空を見上げると、大きくくしゃみをした。

昨夜遊んだダンスパブの前に立った。

昨日のお姉さんいたら、やばいよな。

服装からして、昨日とは違うし、ばれないとは思うのだが。

少なくとも今の格好は「パール・シテイ」のIKUではない。

そつともたれて、通り過ぎる人並みを眺め、街路樹に背もたれた。そのポーズが、繁華街では何を示し、誰をひきつけるかを秋世はまだ知らなかった。

「君、高校生？」

補導員か、と身構えた。二十歳半ばじゃ。昨日のお姉さんよりもさらに化粧が濃かった。髪の毛が立て巻カールなのは、ワンレンと

は対抗か。

「まあそんなとこ」

短く答えるのが、身を守るコツ。

「干支は？」

「わからない」

「これから、誰かと待ち合わせ？」

「別に」

軽く、あくまでもいいかげんに。笑顔だけ貼り付ける。

「ここで遊ぶつもりなの？」

「今日は無理。金ないし」

全身白いスーツのお嬢様めいた格好。首からじゃらじゃらと金のネックレスがぶら下がっている。青滷で昼間歩くには不釣り合いな格好だった。

「そうなんだ。ねえ、もしひまだったら、なんか食べない？ 私一人なんだけど、女ひとりで定食屋に入る勇氣なくて。私がおごるから、よかったら、どう？」

逆ナンパかよ。

経験が全くないわけではない。あつさりと「いや、彼女いるから、じゃあね」と振ることもいつもだった。できたはずだった。こういう年上の女性は、わりと秋世が子どもっぽい格好をしている時によく声をかけてくる。どうしてなのかその辺は、本人に聞いてみないとわからない。誘い方も、「一緒に踊らない？」ではなくて「ひとりだと入れない店があつて、よかったら付き合つて入ってくれない？」とか、いかにもお手伝い人員が必要な口ぶりだ。

見え透いた手だとはわかつてる。顔の分別がつかない女性ばかりが今までは目の前を通り過ぎ、消えていった。昨日の「五分間」の相手も、いつもだった。忘れるはずだった。なのに、今秋世の目の前を通り過ぎる女性は誰もが、みな違う顔をし、違う輝きを放っていた。なまめかしいオーラといかにもありえない花の香り。すべてが見分けられた。彰子の汗臭い匂いよりも、それは心

地よいものだった。

「定食屋ですかあ」

「それとも、もうここに、入っちゃう？　もう店、開いてるでしょ」
秋世は思いつきり顔をおっぴろげて頷いた。

「そっちの方がいいなあ」

彼女も異存はなかったらしい。女性は立て巻ロールをふりふりしながら、財布を取り出した。とにかく有名な外国ブランドの真赤な財布だった。金に不自由はしていないと見た。

女性のリードにすべて任せ、その夜、秋世は同じ展開をそのまま踏んでいった。

唯一違ったのは、最後の場所が店内ではなく、さつき東堂たちが出入りしていた喫茶店の隣の建物だということだけだった。

つまり、なぐちゃんに色目使った『チェリー食い』のお嬢さんたちは、即、犯罪を犯した事になっちまうってわけだよ。どっちが誘ったかとか、愛があるかとかないとか、そんなの関係ないにしてもだな。

本条先輩の言葉をちらと蘇らせた。

どうせ、俺は犯罪者なんだからさ。

女性に『児童に淫行をさせる行為』を犯させる自分。実の妹をいじくりまわした奴と、誰もが言う。五歳にして、すでに自分は犯罪者。何を恐れるものがあるか。

もう、秋世をせき止めるものは何もなかった。

第二部 22

今、最優先で考えるべきは、昭代ちゃんや妙子くんではなく、秋世くんです。

ひとりもふたりも三人も、みんな似たようなもんだよな。

期末試験を明日に控え、秋世はぼんやりと教科書を眺めていた。周囲からは、

「きつとおばあちゃんが亡くなられて、ショックが抜けてないのよ、あれでも南雲くんって純粹だから」

「規律委員長だしいろいろとストレスもたまってるんだろうなあ」
などと好意的な見方をしてくれている。だから、取り立てて突っ張る必要もなかった。

彰子がたまに、

「あきよくん、もし私にできることがあったら、いつでも言ってね」と笑顔を向ける時も、その好意に噛み付く必要はなかった。

「ありがと、やっぱり彰子さんはいい人だなあ」

いつもの仮面でもって答えるだけだった。かつては彰子にだけとっておきの笑顔を用意していた自分なのに、いつのまにか他の女子たちに向けるものと同じもので間に合うようになっていた。秋世の中では明らかに違っているのに、彰子は全く勘付いていないらしい。それどころか、

「あきよくんは本当にいい人だね。私もがんばらなくちゃって思うよ」

百パーセント勘違いもいいとこだ。そういう彰子が好きだった二週間前の自分を呼び出し、透明なゴムを被るように秋世は「いい人の仮面を貼り付ける。

「俺も彰子さんには、かなわないよなあ」

ほんと、かなわない。秋世が時折耐え切れなくなつて席を立つ時も、ちゃんと自分なりの理由付けをして納得してくれる彰子には、いつまでたつても彰子の眼には、「やさしい王子さまの南雲秋世」が輝いているらしい。

しかし、ほんと、これはまずいよな。

秋世は時計をちらりと見た。今日は期末試験前日ということもあり、早めに下校することになっている。委員会活動、部活動も本日は禁止。

行くとしたら、今日しかないよな。

「おや、どうしたの南雲よ」

肩に手をかけてくるむさくるしい男・東堂がいた。挨拶代わりに手をぽんぽん叩いた。

「人生、いろいろあるのさ」

クールに決めてみる。どうせこいつはなんだかんた言つて、元の彼女とよりを戻したはずだ。詳しい事情は聞かず、向こうから話すまで待つていようと思ひ実は二週間経つていた。女子みたいに「友だちだつたら何でも話すのが筋でしょ！」という価値観を秋世は持つていない。しかし関心がないわけではない。そろそろ、だろつか。「東堂先生、君の方こそ、どうなんですか？」

「まあいろいろとあるなあ、俺も」

ひょいと肩越しに東堂は、

「立村、悪いな」

評議委員長に呼びかけた。立村はちらつと秋世たちの方を見やると、えらく困つた風にはにかんだ。東堂、再び声をかける。

「ということ、よろしくな」

「わかつた」

秋世にまた申し訳なさそうな顔を見せると、立村は教室から出ていった。恋人の清坂美里とは別行動らしい。

「ふうん、りつちゃん、清坂さんと一緒じゃないんだなあ」

「じゃねえみたいだな」

たいして関心もない風に東堂は口笛を吹いた。

「となると、ハッピーなのは、もしかして東堂先生、君だけか？」

「誰がハッピーだったの」

「それを俺の前で否定するってのは、ちょっと違うんでないかい？」
ネクタイを解き、シャツの胸ポケットに薔薇を挿した風に詰め込んだ。どうせ規律委員会がないのだからこのくらいはめはずしたつてよい。

東堂はしばらく秋世の肩を強くもんでいた。四、五回つぼを押す質のいいマッサージをしてくれた後、いきなり両手から重心をかけてみた。座れてことだろうか。近くの机に尻をのつけてもたれた。「ああいうもの見せてくれたら、そりゃあハッピーエンドだと思うでしょうがよ」

「ばーか、違うつつうの」

手をだらんと下げ、東堂は窓辺の空を眺めた。三年D組の教室から見える空は、屋根とカラスと、あとは白い太陽。すっからかの夏空が近づいてくるようだった。

「おや、違うんですかい？ てつきり彼女ともうやることやったかと」

このあたりはおちゃらかし。思いつきり頭をはたかれた。ごめんごめん。

「親公認でできるかそつたらこと」

「けど隠れてもんだり触ったりいろいろと」

できるはずだ。少なくとも自分はちゃんとしたのだから。東堂は唇を尖らせると、

「親公認つてのが、必ずしも付き合ったわけじゃねえってのは、わかるよな、南雲」

「わかるようでわからないようで」

「本人にその気がなけりゃあ、しょうがねえだろうが！」

言っている方から怒るんだから世話がない。秋世は東堂の絡みつ

く手をもう一度ばんぽんと叩いた。

「その気つてのはな、東堂先生よ」

一人も二人も三人も、することはみな同じなのだから。

「自分で盛り上げていけばなんとかなるってことよ」

クラスの男子たちがしゃべりあう猥談も、保健体育の授業も、クラスの女子たちの肌も。

すべてが秋世には幼すぎた。

いまさらグラビア写真なんぞ見て、何燃えるってな。

水着の下を想像するだけで喜んでるなよな。

修学旅行終了後も、エロ話をわざわざ大声で叫んで鬨鬨買っている水口を見てもそうだった。評議委員会の報告をしようとする時に時折「ほら、立村、恋女房の前でいいかつこするなよ」と菱本先生にからかわれる立村を眺めてもそうだった。

そして、今の東堂も。

やっちまえば、あんな簡単なことはないのに。

余計なことかもしれない。今の話および、ここ二週間くらいの東堂の言動を見ている限り、いわゆるハッピーエンドの甘いカップルにはまだなっていないのだろう、と思えてならなかった。あえてからかつのを避けたのはそのためだった。東堂のことだ、ちゃんと彼氏彼女の関係を認めたならば、堂々と学校で彼女をエスコートして歩くだろう。そういうそぶりが全くなかったところを見ると、彼女に二度振られた可能性が大だ。今の話からすると、おそらくそうだろう。元彼女親には受け入れられたのかもしれないが、当の彼女本人には肘鉄食らわされていたとか。秋世の予想はそのあたりだった。あいつも、いつかこんな風に、あっさりと忘れる日がくるのかな。

男としては、忘れた方が楽になる。秋世の実体験として、そう思った。

後輩女子たちに手を振り、ひとりで校門を出た。

「俺、最近めちゃくちゃ忙しくてさ、だからしばらく送り迎えできないけど、許して」と、彰子にはすでに伝えてあったし、鈍感な彰子は全く疑問を持つこともなく受け入れてくれていた。おそらく夏木と名倉あたりがああの迷彩柄自転車に乗って連れ歩くのだろう。それが本当は一番いいのだろう。一番心から思ってくれているコンビに、彰子を返すのが筋だろう。

けど、今さらそんなこと、できるかよ。

すでに青大附中において、自分と彰子とは最高のラブラブカップルだった。

どうであれ、秋世が彰子にベタばれだったことは、全校生徒および教職員も知っているはずだ。それをいきなり「俺、熱冷めた。悪いけど別れることにする」なんてこと、言えるわけがない。

要するに、俺が悪いんだ。

俺が勝手に熱上げて、勝手に飽きたってそれだけだ。

もし秋世が彰子に別れ話を持ちかけたら、きっと彰子自身は受け入れてくれるような気がする。「いいよ、最初から友だちだったからね」と笑顔で答えてくれるかもしれない。でも、問題は周囲の連中だ。ずっと彰子にやつかんできた女子たちがざまあみるとばかりに嫌がらせをするかもしれないし、また他の女子たちが積極策を取って告白の嵐になるかもしれない。また秋世を目の敵にしている羽飛あたりが「てめえは所詮女たらしかよ」とつつかってくるかもしれない。いやなによりも、彰子がこれから先、クラスにいずれなくなる。元の彼氏とあと半年、同じクラスで同じ空気を吸わねばならないわけだ。いくら図太い性格であっても、苦痛ではあるだろう。

少なくとも、俺の身勝手なんだから。

今まで付き合ってきた女子たちと同じ扱いを彰子にするわけにはいかない。

それだけは、秋世の矜持だった。

しばらく古書街をうろついた後、やはり頼るべきは先輩なり、ということでは本条先輩の家へ向かうことにした。とりあえずはまず、公衆電話を探しテレホンカードを差し込んだ。

「本条先輩、お久しぶりです」

少し幼い声を出してみた。立村の振りだった。さすが弟分と秋世を分別できない本条先輩ではなかった。

「おう、なぐつちゃんか」

「やっぱりだませませんねえ」

「今日はずいぶん早いお戻りとか」

「ばーか、期末試験前だから自主休校つてやつだ」

要はさぼりかよ。

納得した。わざとのほほんとした口調で秋世は続けた。

「ちよつとばかり、ご相談にのつていただきたいなあと思ひまして、今からそつち行つていいですか」

「学業関連のご相談ではないとみた」

「内密に願いたいんで」

声を潜めた後、秋世はあつさり受話器を置いた。

さすがにこれ以上、外でしゃべることなんてできやしない。

本条先輩のアパートに着いて、ブザーを鳴らし戸が開くのを待った。

茶のランニングに珍しく銀縁めがねの本条先輩が顔を出した。

「よお、入れよ。食い物は？」

当然差し入れは用意してきた。バナナを十本ほど、あとはペットボトルのコーラを。バナナというのが非常に受けたらしく、本条先輩は受け取るなりすぐに皮をむき口へ差し込んだ。ずいぶん間抜けな顔に見えて秋世も思わず笑った。相変わらず靴下と生ごみの匂いが漂う部屋の中へもぐって行った。本日、お兄さんはいないらしい。部屋のベッドはかなり乱れていた。たぶん勉強なんてしていな

つたに違いない。単なるサボリだこれは。秋世も安心してベッドに腰掛け、本条先輩の机の上を眺めた。教科書と参考書らしきものが並んでいる中に、青大附中オリジナルの保健体育教科書が混じっていた。やはり勉強はしているもんだと感心した。

「本条さん、いきなりなんですがいいですか」

できるだけなんでもない風に、さりげなく秋世は切り出した。

「いわゆる、下半身の病気ってどういう病院に行くのがベストでしょうかねえ」

本条先輩はしばらく秋世を見つめていた。なんだかその雰囲気は自分ではなく、弟分の立村に向けられるものに似ていた。戸惑った。

「やっぱりそれかよ」

「まあ、人生いろいろですしねえ」

「あの後、お前何人とやった」

笑っていない。このあたりも嘘をつく必要はない。秋世は片手を広げたまま掲げた。

「五人、かよ」

思いつきりあきればたてた風のため息をつかれた。これは意外だった。本条先輩のことだ、経験もあるだろう。それなりに「お前すげえじゃん、さすが俺のダチだ」くらい言って誉めてくれるんじゃないだろうかと期待していたのにだ。いや、期待というよりも軽くいいかげんにあしらってくれるはずと思っていたのに。なにか調子が狂う。

「筆おろしからまだ二週間も経ってねえだろうか」

「まあねえ、世の中なんというか、立っているだけで立たせてくれる世界なんだなと」

ふざけた言葉でごまかした。

そうだ、修学旅行から三週間、あの夜から二週間。服だけ着替え夜の街で時間をつぶす。昼は規律委員長のいい人、夜は年上専門の女たらし。ずいぶん自分も変わったものだと思う。人をだましてい

る罪悪感も最初ないわけではなかったけれども、それこそ「一人も二人も三人も、皆同じ」夕暮れの街だったら、どの女性もみな生き生きして見える。その生身に触れていれば、なんとなくすべてを忘れていられる。家のこともばあちゃんのこと、彰子のこと、みな頭から抜けていく。できるだけその時が欲しい。家で寝ることもずいぶん少なくなったものだった。

「あのなあ、なぐつちゃん。俺も人のこと言えねえけどなあ」

「説教はなしで」

しばらく本条先輩は机を見下ろしていた。開きっぱなしの英語教科書とチャートの参考書。ぱらりとめくっていたが、腰に両手を当てると、ぐいと背を伸ばした。

「全速力で病院行くしかねえだろ」

「いわゆる性病科ですかねえ」

「泌尿器科でいい」

責められなかっただけでも本条先輩を選んだのは正解だと思った。「とにかく一刻も早く病院に行け。習っただろ。青大附中の誇る性教育を一通りやっただろ。どういう感じなんだ？ 具体的に言え」

青大附中は性教育に対する意識が非常に高く、他の中学に通っている連中が絶句するようなことまで学ばされる。性行為の具体的方法から始まり、避妊のやり方……方法ではなく、実際の使い方まで覚えなくてはならなかった。男子連中に学校から「ゴム」いわゆる避妊具を一人一個ずつ渡された。ついでに「性感染症」と呼ばれるものの具体的な症状と対処の仕方までも。親たちの間では「そこまですなくても」と反対の声も聞くというが、どこかのえらい先生が言い放った方針「黙っていても子どもたちは間違った知識を覚えていってしまうんです。それなら最初から正しい知識を最初から教えた方がいいんです」に逆らうことができず、いまだに続いている。

単純に勉強して、好奇心一杯に保健体育の成績を5で締めた秋世も、「性感染症」に関する知識を改めて引っ張り出す必要があるな

んて思ってもみなかつたわけだ。

一応は、保健体育の教科書と副教材の資料を引っ張り出して読み返してはいた。

たぶん、一番悪い結果にはならないだろうとは見当をつけていた。しかし、医学にはとんと疎い秋世には判断できなかった。

軽く東堂あたりに「お前さ、よくトイレで激痛走ったりすることねえ？」と聞いてみるのも一案だったけれども、例の彼女の件もあってさすがに飲み込まざるを得なかった。

立村に尋ねるなんてまず論外。余計な心配をかけてしまうだろう。秋世の思ってもみないところまで想像してしまい、「なぐちゃん、それほんと、病院に行った方がいいよ。もしあれだったら俺が調べてやるうか」なんて言われるなんて、これは恥だ。

かくなる上は、本条先輩に頼るしかないのだが、それもやっぱりひっかかる。

すでに事が起こる前に、本条先輩は「お前、『チエリー食い』に注意しろよ」と声をかけていたではないか。その後も「いい病院探しとけよ」とまでも。ずいぶん鋭いことを言うもんだと思っていたが、おそらくあれは本条先輩自身、経験があるからに違いない。

最近、小便するときやたらひりひりするとか、明らかに本来つくべきものでないものがついているとか。秋世なりに保健体育の教科書や家庭医学の書籍などで得た情報からある程度の見当はついている。

しかし、そこから先、どうすればいいのだろう。

立ち読みおよび保健体育の教科書、および青年向け週刊誌の特集を一通り読んでみて判断した結果、「淋病」か「クラミジア」のどちらかであろうと推測した。詳しい自覚症状を思い出すのもぞつとするのであえて何も考えないでおく。「淋病」の場合だと潜伏期間が一週間程度と短いが、自分の状態を考えるとつい二、三日前から「おかしい」と感じるようになったわけだから、潜伏期間の長めがかつ、普段だったらずに全く気にしないであろう症状の「クラミジア」

ではないかと判断した。

男性はトイレでやりづらいつと感じるから気付くけど、女性は気付かない人が多い？

将来、子どもが出来づらくなるんだってさ。

ってことは、あの時の人が。

あれから「ひとりやっちゃんばふたりも三人も同じだ」と感じるようになり、時間をつぶすために年上の女性とひと時を過ごすのが常だった。ほとんどが通りすがりだった。名前とか電話番号なんてもちろん聞くわけがない。

思い当たる節は、確かに、ある。

本条先輩の判断もやはり同じだった。

「クラジミアか淋病かのどっちかな」

「たぶん前者の方ではないかなあ。いや、なんてかその、まだ自覚症状がそれほどでもないし。出てくるのに二週間くらいかかるってことは、そっちでないかなと」

口籠もりながらも明るさは消さずに答えた。

「よかねえよばか」

一喝された。やっぱ怖い。

「いいか南雲、俺もあまり説教じみたこと言いたくねえが、早く直しておかねえと将来種無しになる可能性だってあるんだぞ」

「いやそれならそれで無料の避妊対策に」

重大なことを言われたらすぐにごまかすのが秋世のくせだ。

「もう二度とやれねえかもしれねえぞ。どっちの病気にせよだ。相手に移っちまうんだぞ。しかもだ。へたすると女子の方が子ども産めなくなるんだぞ。どうなる？ 犯罪者もいいとこだぞ」

「本条さんはどうなんですか」

「行くしかねえだろ」

別の意味合いを込めて、本条先輩は返した。

「移しちまったら悲惨だろうが」

そのくせ二股かけてたくせに。

「とにかく、南雲、こんなところでバナナを共食いしてねえで、家に戻れ。まずお前の父ちゃんの保険証を探し出して、電話帳でよさげな病院選んで、そこに駆け込め。習っただろ。ちゃんと診察して、ちゃんと薬を飲めば治る病気だつてな」

「保険証？」

あたりまえじゃねえか、と言いたげに本条先輩は頷いた。

「保険証がなけりや大変だぞ。お前金、今あるか？ 俺の時は一万くらい取られたぞ。とにかくお前の持つてる貯金全部おろしてでもいいから行け」

そう言いながら、側に放り投げてあるジーンズのポケットを探り、財布を出した。

「俺もただいま金欠病だなあ。ま、五千円ある、これだけでもまず持つてけ」

「あの、ひとつ聞きたいんですけどいいですか、本条さん」

秋世は恐る恐る尋ねた。なんだか本条先輩ひとりで大事にしているような気がしてならない。もちろん病気にかかっているらしいのは自分だけど、しゃべっているうちに実はたいしたことないんじゃないか、そんな気がしていた。なのになんでだろう。本条先輩も本当のところ、弟分の立村と同じく繊細過ぎる感性の持ち主なのかもしれない。

「保険証って親のもんでないとまずいんですか。やっぱし、ばれるかなあ」

本条先輩は秋世の言葉を聞くなり中腰の姿勢をとった。思いつきり拳骨を股間に向けて放った。瞬時頭の中が真っ白くなった。

「ちよん切られるのと親にぶん殴られるのと、どっちがいいんだ、このぼけ！」

保険証かよ。

急所の痛みが退くのを待つて、秋世は本条先輩に頭を下げた。

父親に張り倒されるよりも本条先輩にどやされる方が一番堪えた。

「ありがたい一発をありがとうございます」

「とにかく、今日中に行けよ」

念押ししたまま、本条先輩は背を向けて片手を挙げた。

どちらにしても家に戻らねばならないだろう。制服を脱いで街をうろつけば高校生かうまくすれば童顔の大学生で通る。でもしよせん自分は親の保険証がないと、自分の後始末もできない中学生のガキだった。なんだか泣けてきそうだった。

保険証なんてどこにあるかなんて、わかるかよ。

修学旅行の時にそういえば、保険証のコピーを東堂たち保健委員が集めてたよなあ。

コピーでかまわなければ東堂に手を回して入手しようかとも考えた。でも、修学旅行からもう三週間も経ったのだ。まず無理だろう。家で通帳や保険証のような貴重品を管理しているのは母の役目だ。今までは全く関心なんてなかったから、どこにしまっているかなんて考えたことがなかった。ただ、金庫にしまい込むほどのレベルではなさそうな気がする。もう少し手に届きそうな場所に置いているんじゃないだろうか。

幸い、両親は会計事務所で仕事だ。夕方まで帰ってこないだろう。その間に部屋の中の引き出しをみなひっくり返して捜せば、きっと見つかるんじゃないだろうか。

大丈夫、なんとかなるさ。

無理やり楽天的発想を持って、秋世は玄関のドアを開けた。

手当たり次第引出しという引出し、棚という棚、すべてあさった。へたしたら空き巣の仕業かと思われる恐れありなので、調べ終わってしまふ時はきちんと形を整え、元と変わらぬようにしておいた。その点は抜かりのないはずだった。過去の帳簿、葬式費用関連の書

類、祖母の古いめがね。新聞社から配られた料理小冊子の束。もう記帳し終わった通帳。今まで見た事のないものばかりが目につくけれども、探しているものは見当たらなかった。

あとはばあちゃんの部屋かあ。

祖母の部屋の引き出しももちろん探したが、すでに遺品の処分が母の手で始まっていて、残っている物自体が少なかった。収穫なし。両親の部屋も、自分の部屋も、引き出しをひっくり返してみたけれども保険証らしきものはどこにもなかった。

けど、ねえわけねえんだよ。絶対あるんだよ。早くしないと病院しまっちゃうだろうが。

本条先輩が調べてくれた病院のリストと電話番号はすでに生徒手帳に収めてきた。どれも夜遅くまでやっているとは聞いていた。でもやっぱりすぐにけりをつけないという本音もある。思い出すとなんだか下腹部に軽いひりひり感が伝わってくる。身体も本条先輩の言葉と呼応している。早く見つけねば、一刻も早く。もう一度居間に戻り、飾りだな黒い引出しをそのまま机に置いた時だった。

「何してるんだ」

背中以太い声がした。

「しゅくん」

沈んだ声が重なった。

探すのに集中していて、両親が戻ってきているのに気がつかなかったのはうかつだった。なんでもない振りをするための仮面を被るのも間に合わない。秋世は手をゆっくりと下ろした。せめて余裕のある振りをするのが精一杯だった。

「何してたんだ」

「物、探してただけ」

「何を探してたんだ」

剥き出しとなった引出しの中には、さっきちらっと見かけた通帳が真上に入っていた。

タイミング、悪すぎ。

母が遠慮がちに呟いた。

「泥棒が入ったかと思ったじゃないの」

「金探していたのか？」

「違う！」

父の言葉にだけは反論したかった。これから貯金をおろしていくつもりだったのだ。断じて、親の金になんて手をつけようだなんて思っちゃいない。なのに、じゃあどうすると言い訳することができないでいる。捨て台詞を投げつけるだけ。

「なんでもねえよ、関係ねえだろ」

「引き出しに何の用があるんだ？」

「関係ないって、関係ねえよ」

ただっ子だ。みつともない。情けない。追っ払いたい。無理やり気合をつけて秋世が怒鳴ると同時に、

「いいかげんにしなさい」

母が怒鳴り返したのではなかった。

秋世は父と母の後ろに隠れていた、中肉中背の男性を射た。凍りついた。

「教授」じゃん。

「南雲さん、これから僕の仕事として、責任もってさせていただきます。いいですね」

両親がふたり、こつくりと頷き、ゆつくりと秋世へ視線を向けるのをそのまま受け止めた。

夏用のカーキ色背広を羽織った「教授」は両親に向かって付け加えた。秋世の方をまだ見はしなかった。

「今、最優先で考えるべきは、昭代ちゃんや妙子くんではなく、秋世くんです」

第二部 23

悪いことしちゃったなって感じですか、いろいろと

逃げ場所なんてない。両親が引き出しを元の場所に戻している間に部屋へ駆け上がったがすぐに追いつかれた。先に父が、次に「教授」が、最後に片付け終えたらしい母が。

戸を閉めようとするも、手の甲をしつかと間にはさまれて、開かざるを得ない。

「秋世、落ち着け」

「なんでもねえよ！」

「だったら、話を聞きなさい」

父の落ち着いた声がかえって神経を逆撫でする。他人まで来ているのだったら、ガキっぽく抵抗するのも気が退ける。しかたなく秋世は椅子に座った。

両親と「教授」は顔を見合わせ、頷きあつた。「お願いします」と一言、添えた。「教授」も了解といった風に目礼を交わしていた。両親とすでに話が終わっていたようだった。

本条先輩の部屋より片付いているだろう。「教授」は、

「男の子の部屋にしては、片付いているね」

お褒めの言葉を下さった。うれしくもなんともない。

「この子は、几帳面なんですよ」

別に注釈つけなくてもよろし、母よ。

ぐるりと見回した後、「教授」はゆっくりと床に座った。父がまた秋世に命令する。

「お前も正座しなさい」

もぐつてきたのはあんたらだろうが。そう言いたいのを我慢する。両親の企てか。親に対しては言いたい放題やりたい放題しでかすのを先読みして、よそ行き顔をさせて無理やり話を聞かせようとでもするのだろうか。秋世なりに大人たちの計算を読み取った。

誰が、そんな手にひつかかるかよ。

大人がそう出るのなら、子どもの秋世はいい子の仮面を被って戦うだけだ。

「秋世くん、今から私が話すことは、決して君を責めたいわけではないんだよ」

沈黙が続く中、口を切ったのは「教授」だった。

「私も適切なやり方で君と話すことができなかったことを、後悔しているんだ。もう少し君が落ち着いてからいろいろと語り合うつもりでいたんだが、あせりすぎてしまったようで申し訳ない。もう一度、話し合うチャンスをくれないか」

「別に、この前聞いた話で十分じゃないっすか？」

わざとらしく笑顔を貼り付けた。

「俺が、昭代を虐待したってことですよね。俺がもしもそんなことしなかったら、昭代はうちにいたけど、怖いお兄ちゃんの近くに帰りたくなくておばさんとこにいるって、それだけの話だから」

「違うんだ、だから秋世」

父が言葉をはさむ。無視する。

「お前が勝手に自分を悪人呼ばわりする必要はないんだ」

「だって俺がすべて悪いって言っただろ！」

父には遠慮しない。

「俺が昭代の髪の毛刈りにしたからだろ」

「とにかく、お前の思い込んでいることと事實はずれているんだ」

「そうよ、しゅうくん、もう一度ちゃんと話を聞いてちょうだい」

「どうせ犯罪者だし、それはそれでいいだろ」

秋世が言い返し、両親が訴える。その繰り返し。

しびれを切らしたのだろう。「教授」がちゃんと手を打った。

「単刀直入に言うのだ。秋世くん」

三人が「教授」に視線を一点集中させた。

「実は、私と妙子くんは、喪が明けたら籍を入れる予定だ。そして当然、式を挙げたいと思っている。その時にできたら、妙子くんの妹として、昭代ちゃんを参列させたい。そう思っている」

昭代が妙子さんの妹？

いもうと、と響く言葉。理解するのに時間がかかった。すでにその話題が出るのを予測していたのか、両親はこっくり頷いている。それでも親かと怒鳴りたい。

「昭代が妙子さんの妹、ってことは、おじさんお婆さんの娘にならないとまずいんじゃないっすかねえ」

「自分の家族の一員として、昭代ちゃんを迎え入れたい。それができないんだったら結婚はしたくない、そう妙子くんは言い張ってるんだ」

ははあ、結婚の条件が何かなんだろう。妙子さんにじらされてることも気づかないのか、この大学教授は。冷たく答えてやった。

「そんなの向こうの勝手でしょうが」

そんなの知ったことか。

教授は両親とまた目配せをして続けた。すでに準備済みだ。

「現在、昭代ちゃんは実質的に妙子くんの妹扱いをされているけれども、戸籍上は南雲家のものだ。それはわかるね」

「ああ、一応は」

「そうになると、昭代ちゃんの位置は、妹ではなくいところになるんだ。妙子くんにはそれはどうしても受け入れ難いことらしいんだ」

「だからそんなの中学生の俺に聞かれたってわからねえっすよ！」

まだ二回しか会ったことのない人に「そんなのわかるわけねえよ

！」なんて言えない。

「すでに君と妙子くんのご両親同士で話し合いはまとまっている。すでに昭代ちゃんも、自分にとって一番大切な家族がどちらかを選んでゐる。君に、その了解を得たい。そのために今日は来たんだ」

嘘つけ。

つばをぺつと吐き掛けたい気分だが、そうもいかない。お客様だ、この人は。

「どうせ俺は関係ないし」

「君と僕とはこれからいとお同士だ。わだかまりを一切なくして、いい付き合いをしていきたいと思っているんだ」

この人が俺のいとこねえ。

「教授」に恨みはない。タイミングが悪すぎるだけだ。父がまたくちばしをはさんだ。

「秋世、もう少し礼儀正しく返事をしなさい。年上の方に失礼だろう」

「これまた失礼いたしやした」

おふざけ半分に、無理やり笑顔の仮面をくくりつけた。

「俺はいいっすよ。どうせ、関係ないし。うちの親がそれでいいと思つてて、昭代がそれを望んでるんだつたら、俺も口出し出来ませんし。妙子さんの言うことが本当だつたら、俺なんかともう二度と暮らしたくないのももっともでしょうし、俺だって男だ、今度は昭代に何をしてくすかわかりませんし。どうせ俺は犯罪者ですからね」

「しゅうくん！」

「だつてそうだろ！」

今度は母に遠慮なく浴びせた。

「俺は実の妹を散々やらしい遊びして傷つけた、わいせつ犯罪者なんだろ？ 髪の毛切りつけて、あれだけいやらしいことして、親戚中に顰蹙かって。結局はあちゃんがいたからそういうのばれなかっただけであつて」

「しゅうくん、どうしてそんなこと」

「だって、教えてくれたの父さんと母さんと、それと教授じゃないっすか」

父が口をはさんだ。重要情報だった。

「秋世、失礼だ。『つづき』さんと呼びなさい」

教授の苗字は、「続」だった。

両親が重ね重ね、今まで話してきたこととは別の話を訴えようとする。

「お前がしたのは、昭代の髪の毛を切り刻んだことだけであって、それ以上のことはないんだよ」

「そうよ、五歳児の悪戯なんだから」

今更何言ったって遅い。ひざをつつき合わせたまま、続教授だけが黙って秋世を見つめているところみると「隠ぺい工作」そのものってとこだろう。そんなことも見抜けないと思っているのか、大人たちは。

どちらにしても、同じだろ。

ガラス戸の雨だれがつつと流れるのと同じように、秋世は言葉をすべり落とした。

「どっちにしたってもう、同じことなんだからいいじゃん。父さんも母さんもさ。とにかく、昭代が向こうのうちに養女に行くんだったらそれはそれで俺の出る幕じゃないしさ。もういいっしょ。俺ももうどうでもいいし」

「そうやけにならないでよ、しゅうくん」

続教授は秋世をわき目も振らず見据えていた。両親たちの言葉が途切れた合間に、

「本当に知りたいことを、まだ聞いていないんじゃないのかな、君は」

重々しく告げた。

「え？ なんですかそれ」

客人にはあくまでも敬語を。

「秋世くん、君は本当のことを知らないままでいて、それでいいのか？」

「だからこの前教えていただいたんじゃあないですか」
さわやかな笑顔が疲れる。

「俺の記憶がどうであれ、昭代がそう言い張ってて、その精神科医の先生が昭代の記憶を蘇らせたんだとしたら、どうしようもないっすよ。たぶん、俺、記憶を全部なくしたかなんかしてしまったんじやあないかと思うし」

「納得いかないことでも、受け入れるのかい？」

両親たちが息を呑む。だからこういう態度で秋世は自分が「犯罪者」だと感じるのだ。

「でなくちゃ、納得できないし。俺が今言えるのは、今の俺だったら絶対しないことでも、五歳の時の俺は平気でできちゃったとんでもねえ奴だったってだけであって」

「そうだね、今の君は、絶対にできないことだろうね」

挑戦かよ。

きらつと、目が光ったような気がした。

続教授はひざを両親たちの方に向けると、「秋世くんに、話してもかまいませんか」と尋ねた。

母には戸惑いが走り、父には重たい沈黙が宿る。

「はい」

答えたのは、母だった。

両親から了解を得た後、続教授は秋世に向き直った。

「今から私が話すことは、君にとってまだ受け入れ難いことかもしれない。それはお父さんもお母さんも、妙子くんのご両親も、みな理解していることなんだ。だから時期を待っていた。たぶん秋世くんが高校を卒業する頃にはすべてを説明するつもりでいたけれども、たまたま私と妙子くんとのことがあって、予定が早まってしまったというわけだ」

まさか二十歳で結婚なんて、考えてなかっただろうしな。

「ひとつだけ覚えておいてほしいのは、私たちもご両親も、決して君を責めるために言っているわけではないんだ。すぐには納得しづらいところもあるだろうが、まずは事実関係だけをしっかりと見つめてほしい。そばにはご両親もいる。私の思い違いもあるかもしれない。まずは聞くだけすべてを聞いてほしいんだ。いいかな」

タバコを吸う人独特のくすんだ匂いが漂っていた。

いいかなって、聞くしかねえだろ。

聞きたかったことが向こうから近づいてきてくれたのだ。なら黙っているしかない。

秋世はにつこり頷いた。両親たちには一切顔を見せないように、続教授にだけ。

「結論は一緒でも、どっちにしても聞きたいことだったし、お願いします、教授」

最後の一言に両親たちがまた顔をしかめていた。

続教授は、「もし間違っていたら、訂正をお願いします」と告げ、一呼吸置いた。

「秋世くんが小さい頃、身体を悪くして入退院を繰り返してきたのは覚えていると思う。ご両親も、おばあさんもみな、君のことを心配していた」

「ばあちゃん俺につきつきりでしたよ」

さりげなく母に向かって言ってみる。

「そうだったね。君はおばあさんが大好きだったんだね」

「たぶん、うちの親以上に、ですね」

母の顔が引きつるのを見るのが面白い。

「昭代ちゃんが生まれたのはその三年後だ。君の病気は一進一退でなかなか良くならない。つききりで本当は看病したいけれども、その一方で昭代ちゃんの面倒を見なくてはならないご両親が、どれだけ大変だったかは、想像つくね」

俺が病気になりたくなっただんじゃねえもん。しょうがねえだろ。

「特に、秋世くんが三歳くらいの頃は、大変だったんですね」

母に確認を取るような口調で、続教授は問うた。両親とも頷いた。母が口をはさんだ。

「そうなのよ。今のしゅうくんでは考えられないくらいにね」

「君のかかっていた病気はいわゆる感染症だ。昭代ちゃんを病院に連れていくことはできない。いつどうなるかわからない君を見守り、同時に昭代ちゃんに淋しい思いをさせないために、ご両親はひとつの決断をした。それが」

「おばさんとこに、昭代を預けたってことっすか」

三人の大人が頷いた。

頷くしかない。

自分の病気が人に移りやすいものであって、しかも新生児とあっては、まず同時に面倒をみるなんてできないだろう。もしも祖母が昭代の世話をするならまた話は別だっただろうが、あの頃から秋世はばあちゃんにべったりだったし、おそらくいなくなったらパニックを起こしただろう。仕方のないことだと、頭ではわかる。

「物心つく頃にはもう昭代ちゃんにとって、親とは妙子くんのお父さんお母さんだった。責めるわけにはいかないよ。いつも側にいてくれた人に愛情を抱くのは、どんな人だって同じだ。しかも妙子くんのご両親はあずけられっ子の昭代ちゃんに掛け値のない愛情を注いでくれた。受け止めた昭代ちゃんが、君のご両親よりも妙子くんのご両親になつくのは、仕方のないことだと思わないかい？」

「そうですね」

冷たく流した。

「幸い、君は病魔に勝利をおさめ、家に帰ってきた。本当に辛かっただろうし、がんばったなと人事ながら思うよ。それが五歳くらい

の時だっただ」

「ああ、そうですね。その時に俺は犯罪者に」

「だから違うんだ！」

父が叱責する。無視だ無視。目で続教授も制した。

「さっそく親子水入らずで生活できるとみなが喜んだ。君のご両親にとって、昭代ちゃんは大切な我が子。もちろん自分の手元に置きたいに決まっている。妙子くんのご両親も、淋しい気持ちはあっただろうが、甥っ子が元気になったことも嬉しいわけで当然、昭代ちゃんを返すことに決めた」

「嫌がっていたのは昭代だけですか」

さりげなく返したただけなのに、両親がうつむくのはなぜだろう。

「まだ三歳の女の子にとって、今までずっと『お父さんお母さん』と慕っていた人から引き離されるのは、もちろん理解できることではない。たとえ戻る家が自分の両親だったとしても、理解できる年齢ではない。それはわかるだろう？」

「そうですね」

「ご両親はそのことを考えた上で、少しずつ昭代ちゃんと君との距離を縮めていこうと考えられたんだ。それがあの夏の日なんだ」

言っている意味がつかめず秋世が首をひねると、母が遠慮がちに呟いた。

「あの写真の時よ」

「虎刈りの時ですか」

尋ね返したのは続教授の方にだった。

「そうだね、昭代ちゃんと君とが本当だったら兄妹として、仲良く過ごさずだった夏の日だよ」

それをぶっこわしたのが俺かよ。

わかっていてもやりきれない。タイムマシンが存在しない現実が悔しい。

「その時の状況が具体的にどうだったかは、君のおばあさんと昭代ちゃん、そして君しかわからないことだ。もちろん記憶をさかのぼって調べた結果いろいろなことは判明しているけれども、それは昭代ちゃんサイドから見た真実であって、本当のところはどうなのかきつとわからないままだろう。秋世くんはこの前、記憶には全く残っていないと言っていたね」

「はい、全然」

「そうになると、もうひとり真実を知っているのはおばあさんだけになるね」

祖母の顔が思い浮かんだ。やさしかったばあちゃん。

「しかし、もうおばあさんはこの世にいらっしやらない。確認を取ることもできないだろうし、お元気だったとしても決して話をしてくださらなかっただろう。だから真実は藪の中だ。昭代ちゃんの記憶と君の記憶が全く重ならなかったとしたら、どれを正しいと取ればいいのか、永遠に不可能なままだ」

そのくせ俺を罪人扱いしやがって。

結局のところ、続教授は、妙子さんの妹になりたがっている昭代の味方なのだろう。

秋世に無理やりそれを説得しようとしているんだろう。

誰が信じるか、そんなこと。

「今、ここではつきりしているのは、その夏の日以降昭代ちゃんが君を恐れるようになり、君は精一杯昭代ちゃんを可愛がろうとしたことだけだ。ご両親もふたりの間柄が不安定なことや、昭代ちゃんが育ててくれたおじさんおばさんを必死に求める様にいろいろ考えた結果が現在の状態なんだ」

「現在の状態って、俺と昭代が引き離されたってことですか」

「そうだね。昭代ちゃんと君とは相性が良くないし、なかなか実のご両親にもなついてくれない。情緒安定を最優先に考えた時、昭代ちゃんにとって一番幸せな道は、妙子くんのご両親と一緒に暮らす

ことではないか、そう決断を下されたというわけだ」

「やらしいことする兄貴なんかと一緒にじゃ」

「そうじゃないのよ！」

母が口を出すのがまた目で制された。

「秋世くん。この一件は誰が悪いわけでもないんだ。君が病気になったのも、ご両親が昭代ちゃんを手放さざるを得なかったのも、おじさんおばさんが昭代ちゃんを我が子同様に可愛がったのも、誰も責めるわけにはいかないんだよ。君は精一杯可愛い妹を可愛がろうとしたんだろう。でもそれが昭代ちゃんには不快感の記憶を残す結果となってしまった。またおばあさんにとっても、つききりで世話をした可愛い孫息子と、あまり接することのない孫娘とでは愛情のかけ方が違ったのもしかたのないことだろう。誰を責めるわけにもいかないんだよ」

続教授は両手をひざに置くと、細い目でじつと秋世を見つめた。

「妙子くんにとって昭代ちゃんは、大切な妹なんだ。十歳くらいの頃から小さな母親代わりになって面倒を見てきた子だ。もともと妙子くんは人の世話をするのが大好きな人だから、なおさらいとおしかったんだろう。昭代ちゃんを一度、君の家に返す時は一週間くらいハンガーストライキをしたくらいだと聞いている。お姉さんとして、大切な妹を手放したくない、その気持ちはわかってほしいんだ」

「実の妹でもないのにですか」

「一緒に暮らした年月もあるだろうが、妙子くんにとって昭代ちゃんは、一緒に暮らしてきたかけがえのない存在なんだ。君がおばあさんを大切に思っているのと同じように、妙子くんは昭代ちゃんを宝物のように守ってきた。実際は南雲家の娘かもしれないけれども、気持ちは自分の妹なんだと、繰り返し私に語ってくれたんだ」

「なんか、女きょうだいって俺よくわかんないけど、そういうもんなんですか」

「いろいろな心の繋がりがあつたのだろうね、そればかりは私もわ

からないが」

言葉を濁した。

たぶんここだ。秋世は直感した。

「じゃあ、俺は直接妙子さんと話をした方がいいんじゃないっすか？ 続教授」

三人がみな、無表情に秋世を見た。

「いや、そういうつもりで言ったのではないよ」

「俺、思うんですけど」

そつとひざの上の手を握り締めた。

「要は妙子さんが昭代を妹に欲しいってことでしよう。俺に納得してほしいってだけだったら、すぐにそのまま話を進めればいいことしよう。だけど、あえて俺にこんな話をするってことは、妙子さんが俺を許してないってことですよねえ」

続教授、急所を突かれたのか黙りこくっている。

「それだったら直接妙子さんと俺が話をして、それでOKを出せばいいことじゃないですか」

「しゅくん」

母のとがめる声など無視する。続教授と父が無表情だからこそ、言えることだった。

「だって、もう話は決まってることなんだから、あとは妙子さんの気持ちだけでしよう。兄貴が、昭代をいじめて傷つけた。昭代の言いつ分を信じれば事実でしょうし、俺がいくら記憶にないってしようがないことですよ。今の話が本当だとしたら、昭代があっこのうちにお世話になった方が幸せだろうし、うちの親たちも了解してるんだったらそれはそれでいいことなんだし。ただ妙子さんが俺のやらかしたことを今でも恨んでいるんだったら、それこそさしで聞きますよ。要は、俺ひとりがなんもしらないおめでたいままにいるのを妙子さんが許せないってだけでしよう」

ぴんと張り詰めた空気。誰も動かない。言葉の粒子だけがまっす

ぐだ。

「俺は、妙子さんが何言っても受け入れます。お医者さんごっこしたひでえ兄貴よりも、やさしい姉さんの側がいいんだっただらそれだっがいい。妙子さんが俺にどうしてほしいか、それをとことん聞かせてもらいたいです、俺としては」

「妙子くんにか」

「そうです。この前行った時、妙子さん言ってきましたよね。昭代は俺の身代わりだったって。『あきよ』の音は俺の名前を訓読みした時と同じだし」

「そんなわけないじゃない」

「母さんは黙ってる。どうせ俺は犯罪者なんだから何言われても平気なんだ」

続教授が両親および妙子さんたちと何を相談してきたのかは読み取れない。

恐らく秋世に、昭代の養女縁組を説得したくて来たのだろう。

秋世が昭代を傷つけたゆえに、こうなってしまったと説得したかったのだろう。

もうその点はどうでもよかった。

ただなんで、ひとさまの家庭に……フィアンセの従弟に……そこまで力を入れる理由がわからない。なにが「今救うべきは秋世くんです」なんだろう？ 勘違いもいいところだ。もう秋世は自分が罪深い小羊だという事実を受け入れている。もういまさら「いい人」になんて戻れやしない。だったら、流れに沿ってほっといてくれればいいのだ。昭代がずっと妙子さんの妹でいたいのだったらそれでいい。両親が納得しているのだったら秋世の出る幕はない。

それをあえて持ち出したということは、つまり。

妙子さんがまだ秋世を責めたりないということではないのか？

責めたりないのだったら、こちらで鞭打たれにいけば済むことだ。どうせ自分は、実の妹をいたずらした張本人なのだから。妙子さ

んはそれに気がついていない秋世を罵ったけれども、もし秋世がそれを丸ごと認めてしまったら妙子さんも満足なんじゃないだろうか。続教授がしつこいくらい秋世に話し掛けるのは、きっとフィアンセ妙子さんの気持ちを慮ってのことだろう。

「秋世くん、君は決して、犯罪者なんかじゃない」

厳しい声で続教授は制した。

「それなら今から妙子くんに連絡を取って、直接話をしようか」

「あ、いいんですか」

慌てている両親が笑える。続教授に向かって「もう少し時間を置いたほうが」なんて語りかけている。善は急げることが、どうしてわからないのだろう。

「そうだね、秋世くんが望むのなら、それがいい」

「そうっすね。俺も明日は期末試験なんで、面倒なことはさっさと片付けておきたいし」

「秋世、勉強は」

また父が話をそらそうとする。教授は首を振った。

「私に任せてください。決して、秋世くんの傷を深くするようなことはしません」

なにが任せてなんだか。秋世は大きく深呼吸をした後、ポケットに英語の単語帳を一冊放りこんだ。一応は勉強するかつこうをつけた。

「どうせ聞くことだったら早い方がいいし、もう俺も図太いから大丈夫ですよ」

「それなら、今から私に着いてきてほしい」

立ち上がった秋世に、母がすがるような眼で訴えた。

「しゅくん、どうしてわかってくれないの」

「わかってるから話聞いただけだよ」

言い捨てた。父が黙りこくったまま戸口に視線をずらした。

「じゃあ、行ってくる」

続教授の後ろに秋世は付き従い、階段を下りた。

「秋世くん、助手席に乗ってくれたまえ」

「ちゃんとシートベルトしますよ。ご安心を」

車庫から車を出した続教授は、秋世が乗り込むのを待った後、ひざに大きめの封筒をを乗せた。

「なんすかそれ」

「中を見たまえ」

アクセルをふかしたまま、続教授が促した。

少し重ための封筒をひっくり返し底を叩くと、色鮮やかな写真が五枚ほど出てきた。夜の闇を背景にして、女性とふたり白いデコリーション風の建物に入っていく少年の姿が映っていた。一枚、二枚、三枚と、相手は異なっていたけれどもすべてそれは、秋世の姿だった。ちつとも笑っていない自分とご機嫌そうな相手との対照にインパクトを感じた。

右下の日付も見た。心当たりはあった。

「悪いが、しかるべき相手に頼んで、調べてもらっただ。言いたいことはあるかい？」

車が発進するのを待って、秋世は教授に尋ねた。

「うちの親、これ見てますか？」

「いや、ご相談を受けた後、個人的に調べたものだから、まだ見せていないよ」

「そうですか」

なにか答えないといけない雰囲気だった。しかたなく呟いた。
「悪いことしちゃったなって感じですか、いろいろと」

第二部 24

そうよ、絶対、決して、ありえないことだから。ただね真実を知っているのは、樹おばさんだけなの。私にはそれ以上、何も言えない。

瑞希おばさんの家から少し離れた路地に車をつけた続教授は、
「少しここで待ってなさい」

そう告げて急ぎ早に車から降りた。そういえば妙子さんに電話連絡を入れてなかった様子だった。これから連れてくるのだろうか。

「妙子くんだけと話したいだろう？」

「まあ、そうですね」

車内の空気がよどんでいる。窓を開けて首を出した。生ぬるい風が美味しい。

ポケットの中から単語帳を引っ張り出しめくったが、もう闇の落ちた車の中で、文字を読み取るのも面倒だった。どうせ勉強なんてする気もなかったのだ。すぐにポケットへ戻した。

何、聞けっというんだろっな。

自分から妙子さんと話をしたいと申し入れたにもかかわらず、いざ、何を話せばよいのかと迷う自分もいた。両親、教授から教えられた「事実」がうさんくさいものだと感じ取っていたからかもしれないが、それ以上にあの場所へ居座っているのが苦痛だったというのも否定できない。続教授のおかげで、なぜ秋世が引き出しをあさっていたのかその理由を問い詰められずにすんだけれども、さてこれからどうしようか。

まあいいさ。そんな急を要することじゃあないしな。

クーラーの効いた車内で頭を冷やしたせいだろうか。落ち着いてきた自分がいた。

期末試験もさることながら、そろそろ規律委員会の一学期総括も行かねばならないし、いろいろと考えることはあるはずだった。たとえば、その後東堂がどういう経路を辿って彼女との交際に苦悩しているのかとか、立村があのと清坂との交際に問題をきたしていないのかとか。自分のことより人のこと、そちらに意識を向けて、ふやかしてしまいたかった。

それにしてもさ、妙子さん、続教授とどういう風なきっかけで付き合いだしたんだろうな。下手したらさ、教授、妙子さんとおじさんやうちの父さんよりも年上だぞ。おじさん、困るだろうなあ。自分より年上の相手を「嬪殿」って言うことになっちまうんだからさ。妙子さんつてもともと年上好きだったっけか。

瑞希おばさんのご主人にあたる叔父さんは、秋世によく感覚が似た人だった。いつも「まあいいじゃないか、なんとかなるさ」が口癖で何事においても安請け合いが多く、言いたいことを何でも口にする性格の瑞希おばさんに「ったく、そんなできもしないこと、いい顔して受けてこないでよ！」などいつも叱られているのをよく見かける。秋世とは「極端に前向き思考」なところがよく似ていると母がよく話していた。なかなか面白い人だと思っし、秋世としては自分の父よりも話がわかるタイプじゃないかと感じているのだが、ただどうなんだろう。どう見ても続教授とは全く異なる雰囲気をもし出している人のはずだ。

よく言うじゃん、女性は父親に似たタイプの男を好きになるって。

百パーセント、妙子さん、その気ねえよな。

昭代の顔と重ね合わせた。

おじさんのこと、昭代も好きなんだろうなあ。ああいうタイプ好きだったらさ、俺とうまくいかないなってこと、ふつうないじ

やん。

飲み込んだ。いくら自分と叔父とが似ている、そう思っても、もう言えない。

五分くらいで妙子さんが後部座席にもぐりこんできた。教授も運転席に乗り込むのかと思いきや、カーラジオの上に置いたタバコを一カートン、手付かずのまま持ち出して、

「話したいことがあるなら、ここですべてすっきりした方がいい。

妙子くん、秋世くん」

静かに告げた。

「あの、教授」

まさか一カートン全部吸うなんて、肺がんの路まっしぐらなことをするわけないだろうが。

「私はその辺で時間をつぶしてくる。終わったら、呼びに来なさい」

「呼びにつて？」

妙子さんも戸惑い気味だった。最初、助手席に座ろうとした妙子さんだが、秋世が軽く会釈したのを見て一瞬硬直した。秋世との話を済ませるためと説明されていなかったのだらう。特段、教授を攻め立てることもなく、自分から後ろ座席に乗り込んだところみると、秋世を邪険にすることなく語り合いを求めていることが窺い知れる。ただ、妙子さんと過去に交わした会話の内容からすると、彼女はエキサイトしたとたんでもないことを暴露しないとも限らない。それを恐れたりしないのだろうか。

「あの、教授、一つ聞いていいですか」

運転席側の戸を締めようとする教授に秋世は尋ねた。

「今から話すこととか、聞くこととか、全部うちの親、了解してるんですか」

「きちつとした言葉を使うね、秋世くん」

こんなところで誉められても嬉しくはないが。教授は呼吸、動作、一秒きちつと止めた後に告げた。

「君に話すべきかどうかは、すでに半年前から相談していたことなんだ。だから、言いたいこと聞きたいことがあるなら、すべて吐き出してしまいたまえ」

半年前、祖母が存命中の時からか。

ドアがきつちりと閉じられ、続教授が青いタバコカートンを片手に背を向けるのを見送った後、秋世はゆつくりと車窓を開いた。周囲には全く人気がなかった。いったいどこで時間をつぶすつもりなんだろう。全く想像つかない中、秋世は妙子さんのいる後部座席に振り返った。

「何はともあれ、ご婚約、おめでとうございます」

薄暗く表情は読み取れない。妙子さんはか細い声で、「ありがとう」そう答えた。

闇の中に浮かぶつややかな口紅と、相変わらずつるつるした風に見えるワンレングスの髪。

かつてひと時を共にした女性たちのことを思い出すと同時に、妙子さんの口元が動くのを見た。

「秋世くん、昭代を、私たちにください。お願いします」

私たち、と言われたってもう話は済んでいることだろう。

「ちようだいもなにも、もうとくにうちの親たちと話決まってることでしょう。俺になんでそんなこと聞かなくちゃあなんないんですか。昭代だって瑞希おばさんとこにいたいんだろーし、俺はガキなんだから勝手にしちやえばいいことでしょうが」

さつき教授や両親に言ったことを同じ内容を妙子さんに告げた。息を呑む気配と同時に、髪の毛がさやさや擦れる音と混じってため息が聞こえた。

「聞いていたの」

「さつき、反抗期のどんぱちっていうんですか、ちよつとやらかしましてね。その際に続教授にたっぷりお灸据えられましたよ。ま、しょうがないですよ。俺がしたことを昭代が許してねえんだったら

正直、どうやって償えばいいか見当つかないし。妙子さん、ほんとに俺、その点責められてもしようがないんだけど、本当に覚えてないんですよ。俺が昭代に何したか」

「そう」

意外にもあつさり流された。

「たぶん、妙子さんも昭代も、俺が何にも知らないでこのうと暮らしていくのが許せないんじゃないかって気、正直します。同時に、もし昭代に今別の奴が似たようなことをしたとしたら、本気で殴りに行くだろうし、その気持ちも本物ですよ。けど、それは俺の都合だし、昭代にとって一番いいのが瑞希おばさんに行くことなら、それはそれで、しかたないと思います。俺にできる罪滅ぼししたら、それしかないでしょう。どうせ俺は犯罪者なんだから」

「犯罪者」言葉に少し嫌味が混じったかもしれない。

妙子さんはもう一度、「ありがとう」と呟いた。

「私も、秋世くんを責め過ぎたわ。本当は誰も責めるべき人なんていないのにね」

髪の毛を片手で押さえるしぐさがバックミラーに映った。

「あの、妙子さん、俺も聞いておきたいこといくつかあるんだけどいいですか」

「何？」

「さすがに大人たちに聞くと、みんなごまかすだけだし、その点同じところのよしみってことでいかがでしょう？俺もこれからの人生、いろいろ背負っていく罪つてものがあるし、調べておきたいんですよ。ばあちゃんが俺のことをかばってたつてのは一応うちの親から聞いてます。相当な悪ガキだったつてことも、まあそれなりに」

言葉を切つて、妙子さんの様子をミラー越しに窺った。秋世の方に視線を向けている。

「俺が今まで、どうしようもなく脳天気な奴だったつてことがよくわかった以上、妙子さんが今まで俺に言いたくてもいえなかった

ことを全部聞いとかなくちやなつて思う今日この頃なんですよ。たぶん昭代とこれから先、語り合う機会つてのは、銀河系滅亡するまでないでしょうし、そんなことしたらたぶん俺、自分のことを知らないつていう言い訳でもつて守るしかなくなると思うんですよ。だからこそ、妙子さんの本音を全部聞いておきたいんです。全部俺の頭ん中にぶち込んで、一生忘れないようにして生きていこうつて。それが俺のできる、昭代への償いなのかなつて、そんな風に思うんですよ」

「秋世くん、なぜ」

「だってしょうがないでしょう、俺はいるだけで、大迷惑かけてただから。昭代にも、うちの親にも、妙子さんちにも、それから」

街で出会つて、たぶんやばい病気を移してしまった可能性のある、女の人たちにも。

口の中でごまかし、秋世はさらりと笑顔を見せて振り返つた。

「大丈夫ですよ、俺、中学生にしては、結構世の中、知ってるほうですし」

妙子さんは首をかすかに振つた。唇に小さな光が点つたように見えた。

「私の家のこと、お父さんお母さんから噂に聞いたことない？ 昭代がうちに来るまで、うちの両親、夫婦仲が悪くて離婚寸前だったつてこと」

妙子さんの言葉は途切れそうदैいて、しつかり繋がつていた。合間に相槌を打つ必要はなかった。秋世は黙つて真正面のバックミラーだけを眺めていた。

「うちの父さん、私が子どもの頃はほとんど家に居なかったの。後で聞いたことだけど、女ぐせが悪かつたみたいなのね。今では信じられないつてみんな言うけれども、本当のことよ。私はその頃七歳だったけど、いつも母さんに言われていたもの。もしかしたら転校するかもしれないよつて。お父さんは離婚する気さらさらなかつた

し、今思えばお父さんなりにお母さんのこと大好きだったんだってわかるんだけど。ただお母さんにとってはいやでならなかったのね。毎日風俗に行くような男なんて」

胃の痛い話だ。きつと叔父も秋世に似た心配をしたことがあるのではないだろうか。いざとなったらおじさんにそのあたり相談した方がいいかもしれない。ちらと思った。

「その頃、秋世くんはずっと病院に入院しっぱなしだったでしょう。まだ小さい頃だし覚えていないと思うけど、樹おばさん、いつもうちの母さんに愚痴っていたの。秋世くんが生き延びる確率は半々だって宣告されているって。いつ死んでも不思議じゃない、って」

今、こうやって生きている自分と、妙子さんの言葉に混じる自分とは別人に思える。腕をつねってみる。痛い、確かに生きている。「きつと辛かったと思うの。子ども心に私も感じてたわ。秋世くんが死んじやったらきつと、樹おばさん辛いだろうなって。だからうちの母さんよく話をしていたの。あの頃はまだうちの母さんと樹おばさん仲良しだったから、慰め合えたんだと思うけど、『もう一人作りなさいよ』って。もう一人、子どもを作りなさいって」

身代わりか。

妙子さんが教授の研究室で激昂して叫んだ言葉が蘇る。

「あの頃、秋世くんには南雲のおばあちゃんがずっとつききりで看病していて、樹おばさんは南雲のおじさんの仕事を手伝う関係上、どうしても離れられなかったらしいの。それはしかたないことよ。秋世くんの入院費用は相当かかったはず。でもその一方で樹おばさんは、昭代を身ごもったの。こういうことかわかる？」

単純に妊娠した、だけじゃないのか？ 首を振って伝えた。

「うちの母さんに勧められた通り、もうひとり、作ったの」「身代わりをですか」

妙子さんは一刻、黙った後、

「そう南雲のおばあさんは思ったはずよ。樹おばさんの本心はわからないけれど」

ばあちゃんか？

妙子さんの口調からは、「南雲のおばあさん」という言葉に若干のひりひりした傷が混じっているように伝わってきた。

妙子さんはあえて感情を抑え目に、自分のワンレンスタイルと同じようにありふれた言葉で伝えようとしていた。

「秋世くんの体調が一進一退で、それこそいつどうなるかわからない時に、なんでもう一人子どもを産もうと思ったのか。もちろんかぐられたらそれまでよ。私はまだ子どもだったし、そのあたりの複雑な事情は知らなかったけれども、南雲のおばあさんが怒ったという話だけは伝わってきたわ。本来なら秋世くんの看病にすべてを捧げ尽くすべきと思っておられたのね、きつと。おばあさんにとつて、秋世くんは命だったのよ。南雲家の跡取息子とか、かけがえない孫とか、そういう話とは別にして、宝物だったのよ。なのに樹おばさんはそんな緊急時にもかかわらずおなかに赤ちゃんを迎え、万が一秋世くんがいなくなった時の『身代わり』として昭代を産んだ、それが許せなかったのよ」

「それ、ばあちゃんが言っただんですか」

「言葉ではなく、態度でそれが伝わってきたらしいの。秋世くんはおばあさんの穏やかなところしか知らないでしょうけど、うちの両親や昭代、樹おばさんに対しての態度は本当にシビアなものがあつたのよ」

「いや、うちの母さんとは嫁姑の仲さほど悪いようには」

きつぱり妙子さんは切り捨てた。

「それは昭代がいなかったからよ」

「秋世くんの看病をおばあさんがずっとしつづけている間、樹おば

さんは昭代を産んだの。同時に秋世くんの体調もかなり厳しいものになってきたらしいわ。覚えてる？」

「まさか、俺、生まれてから一度も死ぬって思ったことないし」

病院で寝ていて薬飲まされたり手術したりしたことはあるけれども、一瞬だって自分がこれでおしまいと思ったことはなかった。本当だ。

「南雲のおばあさんの命で、昭代は生まれて数週間でうちに預けられたのはそれが理由なの。それはしかたないことだと思うわ。秋世くんの病気は感染症だったし、まだツベルクリン注射も終わっていない赤ちゃんを育てながら同時に看病というのは、どう考えたって不可能なもの。それに、不思議なことだけど、昭代が生まれてすぐ私たちすぐに樹おばさんを見舞ったんだけど、おじさんおばさんが抱っこしても泣き止まないのに、私や父さん母さんの方を見るとすぐに落ち着くの。理由はわからないけれども、なんとなく私たち家族のことが好きなのかもね、って笑ってたわ。崩壊寸前の家族だったのになんで、もうひとり赤ちゃんを育てようと思ったのか、今考えると不思議。離婚すること考えたら余計なお荷物なんて持ちたくないはずなのにね。うちの父さん母さんは、おばあさんに頼まれてすぐ、昭代を預かることになったの」

「犬や猫じゃああるまいし」

やはり原因は、秋世自身にあったのだろう。ポケットから単語カードを取り出し、ぱらぱらとめくった。

「風俗通いがやまなかったうちの父さんが、昭代が帰ってくるなりやたらと早く家へ帰るようになったこととかね、うちの母さんがあんなにヒステリーばかり起こしていたのに昭代のおむつを変えながら鼻歌歌っていたりね。赤ちゃんひとりいれば毎日戦争で殺伐とするものだと思っていたのに、何かが変わっていったの。子ども心にも、家に帰るのが楽しくなったのはその頃よ。私が昭代の面倒を見る手伝いをする、両親が喜んでくれた。今までこんなことなかつ

たの。頼りにされて、いつのまにか家族の中に昭代はアイドルとして鎮座ましていたというわけなの。もちろん南雲家からお預かりした大切なお嬢さま、という意識がなかったわけではないと思うのよ。ちゃんと樹おばさんも昭代の顔を見に帰ってきていたけど、どうしても泣いちゃうの。なつかないの。原因がわからないの」

「いまだにそれが続いていると」

「そうなの、秋世くんの病気が相変わらず危機を脱していなかったのもあるだろうけど、南雲のおばあさんが一切昭代への関与を拒絶したというのもあるでしょうね。名前もそうよ」

「昭代の名前ですか？」

自分の名と訓読みが同じのその名。尋ねた。ひっかかった。

「樹おばさんは本当だったら、秋世くと『よ』の文字を合わせたくて『世界』の『せ』の字を使いたかったらしいの。昭和の『昭』に、秋世の『世』で『昭世』」

「それは初めて聞いたなあ。なんかそっちの方が並べるとかっこいいってか」

妙子さんは首を振った。指で宙に文字を書いた。

「南雲のおばあさんに厳命されたそうなの。秋世くんの『身代わり』として作った子どもに『世』の文字を使うことは許さないって」

「はあ？ よくわからんなあそれ」

「『昭代』の『よ』の文字は、昭代を産む理由となった意味を込めて『見代わり』の『代』を使うように、って。樹おばさんは昭代を秋世くんがいなくなった時の保険として産んだのだから、そのことを一生忘れないように、って」

「ばあちゃんが、そんな」

どう答えればいいのだろう。

金縛りってこの状態なのか。

喉が凍り付いて、言葉が出ない。

俺の『身代わり』かよ。

「医学の進歩に伴い秋世くんの病気がよくなっていったから、私はいつも母さんに聞いていたの。『昭代がいなくなるの？ 秋世くんが帰ってきたら、昭代はうちの子じゃなくなるの？』ってね。樹おばさんの娘を期間限定で預かっただけのことだし、それはそれで仕方ないといえばそれまで。だから毎日、祈っていたわ。昭代がうちの子でいてくれるように、みんな仲良く暮らしていけますようにって。南雲のおばあさんも、うちの母さんにできれば昭代を養女にやりたいようなことを話していたようだし、もちろんその気持ちも両親ともども強かったはずなの。ただ、樹おばさんは絶対にそれを受け入れなかったわ。その頃から、うちの母さんとの間がぎくしゃくしていったのかな」

「そりゃあそうだよなあ。自分の娘取られたくねえよなあ」

「だから、昭代がうちに戻ってきた時は嬉しかったわ。やはり、家族の一員として、かけがえのない存在だったことが、昭代の居ない時によくわかったのだもの。たぶん、あの頃から、養女の話は何度か話し合われていたはずよ。でも、樹おばさんががんとして首を縦に振らず、戸籍上は南雲家の、実際はうちの娘、そういう状態が続いてきたはずなのよ」

「よくそれで問題なかったなあと思う次第なんですが、俺としては」

秋世が五歳の時にやらかした虎刈り事件も、妙子さんにとっては昭代を取り戻すきっかけとなったのだらう。今、その言葉は秋世に對しての感謝に聞こえた。決して喜ぶことのできない、真心からなる感謝。

「じゃあ、よかったんじゃないですか」

腰から下が金縛り状態のまま、秋世は妙子さんに声をかけた。

「昭代も、おじさんおばさんも、妙子さんも望んでいることが今叶ったわけだし、それはそれでいいんじゃないですか。うちの母さんも意地張らないでさっさと瑞希おばさんとこに昭代を養女に出して

おけば、そんな問題にならなかったのに、なんででしょうね」

もうひとつ聞いておきたいことをつけた。

「じゃあ、うちの母さんが今回あっさりOKしたのは、目の上のたんこぶなるうちのばあちゃんが死んだから？ それとも、妙子さんの結婚？」

「たぶん、両方だと思うわ」

妙子さんは言葉を選びながら秋世に答えた。

「秋世くん、おばあさんがなぜ病院で急変したか、聞いてないわよね」

「全然教えてくれねえし」

「養女の話をつちの母さんとおばあちゃんとの間で煮詰めていて、あとは樹おばさんの説得だけだったのは、今までの話の流れでわかってもらえると思うのだけど、あの日おばあさんはとんでもないことを話したらしいの。ありもしないことだけど、樹おばさんが激怒してしまって、言い合いになって、それでおばあさんの脳血栓が切れて」

修学旅行の最中に起こった祖母の死。

今、聞かねば、一生後悔する。

喉まで完全に金縛りだった。手元から足の指に単語帳が落ちた。

「決してありえないことを、おばあさんは樹おばさんに吹き込んだらしいの」

「ありえないこと」

「昭代の顔のことについて」

は？ 全く見当がつかない。あのベース型の顔に何か問題あったのか？

「秋世くん、うちの父さん方のおじいさんの顔見たことある？」

首を振った。全くわからない。妙子さんはもう一度「決してありえないことだから」と付け加え、

「昭代に輪郭と目鼻立ちがそっくりなの」

全く言われた意味が繋がらなかった。

「決してありえない話ですよ」

「そう、うちの母さんも、絶対にありえないって言ってたわ」

「だってしゃれになりませんぜそれ」

喉から出てくる言葉だけが軽い。

「昭代の顔は南雲家の血からなるものとは違うとか、もしかしたら昭代は南雲のお父さんの子じゃなくて」

「んなわけ絶対ありえませんってああた！」

妙子さんは秋世の言葉を否定しなかった。頷いて、

「そうよ、絶対、決して、ありえないことだから。ただね」

肯定か否定か、世慣れしていても読み取れないものがたしかに存在していた。

「真実を知っているのは、樹おばさんだけなの。私にはそれ以上、何も言えない」

第二部 25

逃げたくたって逃げられねえよ。

「うちの母さんがよく話してたわ。昭代はそっかしいから、生まれるおなかを間違えたんだって。子どもにはそれ以上詳しいこと教えてもらえないのよね」

妙子さんの言葉を、秋世は硬直したまま聞いていた。

嘘だろう？

妙子さんの言葉が正しければ、昭代の父はおじさんということになるし、妙子さんとも半分血が繋がることになるし、さらに言うなら瑞希おばさんとの関係も単なる姪っ子以上のものになるのではないか？ 父が同じの、腹違い。

そんな奴、可愛いと思うか？ 普通、憎むだろ？

瑞希おばさんの昭代にかける愛情の深さは、近い分母よりも濃くみえた。

「ありえないことってことで、話を進めたいんですけどいいですか？」

断りを入れて、秋世はきわめて静かに言葉を継いだ。

「妙子さん、そのこと何時ぐらいに気づいたんですか」

「大学に行ってからよ」

「それまでは？」

「わかるわけないじゃない」

埒があきそうにないので、話をそらしてみた。

「下世話なこと聞くようですけど、続教授とは何時頃出会ったんですか」

「入学してからよ、私はね。秋世くんのようにもてるタイプじゃないから」

「そんなこたあないでしょう」

客観的に見れば妙子さんは女子大生のサンプルみたいなタイプ。
よくいるけども、醜くはない。

「授業が一緒だとか？」

「いろいろよ」

言葉を濁したところみると、かなりどろどろしたものがあるの
だろう。中学生らしく秋世はそれ以上の追及を控えた。

「けど、うちの親たち、そんなこたごたが起こつた中で、よく平気
な顔してられましたよねえ」

「そうね、私もずっと不思議だつたわ」

過去形で妙子さんは呟いた。

「南雲のおばあさんが生きている間は、すべて秘密が守られてきた
のでしょね」

昭代を養女として瑞希おばさんに引き渡すことを拒みつづけた両
親。

「ばあちゃんに抵抗したかつたのかなあ」

「そうともいえるわね」

「俺がいなけりゃよかったつうわけですか」

「そんなことはないんじゃないの。ただ、秋世くん、君は南雲のお
ばあさんによつてずっと守られてきたのは確かよ。昭代が小さいこ
ろから見つめてこなくてはならなかったものを知らずにすんだんだ
から。半分くらい持つてくれたつていいんじゃないかって思っただ
けなの」

言葉は途切れることなく続いた。

「血液型を鑑定するとかいろいろあるでしょうな」

「そうね、はつきりするわね。だけど私たちは、昭代を自分たちの
家族として迎えることができさえすればいいの。南雲家の人たちを
ずたずたにしようとも思つてない。ねえ秋世くん。今、家に帰った
い？」

いきなりとつぴょうしもないことを尋ねられても困る。妙子さん

の言葉トーンが不自然に上がったのを感じた。しかたないので自分もばかっぽく、

「あすは期末試験だし、帰らないとまずいでしよう」

「そういう意味じゃないの。秋世くんはこのまま、南雲家に住んでいたい？ ご両親と一緒に？」

深呼吸した。心臓の位置に軽く手を置いた。鼓動しているのを感じた。

「本音言っちゃえば、あまりつてとこですね」

「そうよね、だったら、すべき」

「何をですか？」

「秋世くん」

凜とした声が、車内に流れた。

「あの家から、一刻も早く逃げ出しなさい」

逃げる？

あつけにとられてしまった秋世を、べとと押さえつけるような口調で妙子さんは続けた。

「私もね、高校卒業する頃くらいから、何かこの家はおかしいんだって思っていたのよ。気づき始めたのはもつと早かったけど、具体的に何かを理解したのは大学に入ってからね。私がずっと暮らしてきた世界が、実はどろどろした血まみれの牢獄だったなんて認めたくなかったわ」

さすが国文科だけあって、文学的表現を混ぜる。なんだか芝居がかっておかしい。

「いつ、妹がいなくなって、いつ、父さんが風俗通いを再開させていつ、母さんが嫉妬の鬼になってヒステリーを起こすか、それが毎日続くのか、そんなこと考えると気がおかしくなってしまういそうだった。それがかつての私なの」

「そんな風に見えなかったけどなあ」

「すべては昭代がいたから、私たちは救われていたの」

だんだん神がかりっぽい口調の妙子さん、なんだか狭い車内で息を潜めているのも落ち着かない。

「だって、父さんにとって昭代は自分のお父さん……おじいちゃんよね、私にとつては……とそっくりな昭代の顔みていつも和んでるし、母さんもいつも昭代のことを『この子はうちの末娘ですから』って何度も力込めて親戚に説明しているし。あの子がいたから、私たちは『家族』で入られたの。昭代がいなくなってしまったら、きつともとに戻ってしまう、そうなるのは見え見えなの。私が結婚して出て行ったら、残るのは昭代だけなの」

秋世は無理やり断ち切った。

「だから昭代を置いて、妙子さん、あなただけ逃げるってわけですか！」

なぜいままで妙さんが、秋世を真綿で締めつけるような責め方をするのか。

なぜ、妙さんが昭代を過剰に求めるのか。

なぜ、「ありえない話」を「ありえる」ようにするのか。

妙さんはただ、自分だけ逃げ出したかったのだ。

秋世にはすべてが読めた。

妙さんは、異常な自分の家から逃げ出たくて、だから続教授と結婚するんだ。

まだ大学生なのに、なぜ結婚に急ぐのか、その答えを妙さんは裏の言葉で語っている。

「そうよ、逃げちゃいけない？」

あつけない答えが返ってきた。

「私はまだいいのよ。昭代がいればまだ両親も、ずっと穏やかな空気の中暮らしていけることがわかってるから。でも、秋世くん。君は違うわ」

「何が違うんですか」

「南雲のおばあさんが亡くなるまで、ずっと何も知らず、何も考えずにきたわけでしょう。それは秋世くんのせいじゃないとわかってるし、だからこの十年以上の間うまく繋がってきたわけでしょう。バランスが取れていたというのかな。でも、南雲家にもし昭代が戻ったとしたらあの子も苦しむし、南雲家の人たちも同じ罪を見つめて地獄を見るだけだと思うの。秋世くんが覚えていなくても、昭代はいまだにリアルに感じているんだもの」

妙子さんは自分に酔いしれている風だった。演劇の台本を読み上げているような、抑揚のなさ。どんなに秋世が言い返してもあつさり流されてしまうだろう。聞くしかなかった。

「私たちにとって昭代は身代わりの子どもでもなんでもない、たった一人の妹なのよ。でも南雲家にあの子が戻ったら、『秋世くんの身代わり』としてずっと生きていけなくちゃいけないのよ」

「あのー、俺生きてます」

「『代わり』の文字は変わらないのよ。秋世くん、もう一度言うわ。ゆがんだ形の南雲家から一刻も早く抜け出すべきよ。どれだけゆがんだ世界に生きてきたか、きっとわかるはず」

「昭代と俺と一緒にしないでください」

だんだん自分でもいらだってきている、もし向かい合っていたら胸倉つかんでいるかもしれないくらい激しそうだ。

「だから、俺は最初から言ってるでしょうが。親同士でそのことはもうけりついてて、俺にはもう関係ないし口出しする気ないって。昭代がそっちに行きたいんだったらそれはそれでもいいですよ、なんでそこまでしつこく俺を責めるんですか！」

言い切りながら妙子さんのもくろみをもう一つ、読んだ。

俺に一生、忘れるなっということなんだな。

妙子さんの言う「ありえないこと」一部始終は、今、この車内にて、秋世の鼓膜に永久保存されてしまった。たとえ後から「ありえ

ないこと」と否定しようとも、記憶を意識的に失うことはできない。もう、「ありえること」として、焼きついている。どんなに耳をふさいでも聞こえてくる。

昭代は、おじさんの子？

ミラーに映る妙子さんの顔は、ただの黒い切り絵細工にしか見えなかった。

でもどうして、そこまで、しつこくこだわるのだろう？

秋世はもうひとつだけ、妙子さんのねらいを読み取り、乗ってみることにした。

「妙子さん、昭代は俺に何されたって言ってるんですか。ほら、その精神科医の先生、俺が何をしたって話してるんですか」

話したくてうずうずしているはずだ。秋世をとことん叩きのめしたくてならないはずだ。それならこちらから、最高のきっかけを作つてやるう。後部座席から息を呑む音がした。

「秋世くんは覚えていないのよね」

「けど五歳の退院直後のことは、細かいことまで覚えてますけどね。とこやさんごっこは覚えてねえけど」

「じゃあ、秋世くん、ひとつ聞きたいんだけど、それほどたいしたことないってことで、昭代を叱ったりしたことなかった？」

たいしたことないってこと？

入院生活が無事終り、意気揚揚と家に帰ってきた秋世、両親が入れ替わりに瑞希おばさん夫婦と旅行に出かけたらしいというのは後から聞いた。

今まで写真でしか見たことのない二歳の妹を、両親の言う通り「可愛がってあげ」ようとし、いろいろと連れまわそうとした。でもほとんど家の中ではあちゃんと絵を書いたり、折り紙をこしらえたり、本を読んだり、中遊びがほとんどだった。

「そう、この前もそう言ってたわよね。本当に記憶にないのならどうしようもないけど、確か遊んでいる最中に、おばあちゃんの飼っていた巨大金魚を殺してしまったとか、そういうことはなかったの？」

「ああ、それあったあった。思い出した」

「たいしたことじゃなかった。ちゃんと記憶に残っている。忘れるわけではない。」

「昭代、そんなこと言ってたんですか」

「確かたまたまおばあちゃんの飼っていた金魚の鉢に、ジュースが何かを入れて、みんな死んじゃってっ」

「すみません、それ、微妙にニュアンスが違います。事実説明しますよ」

「なんだ、こんなことか。てっきり幼女いたずらのてんこもりだと思っていたけれども、たかがそんなことか。秋世はすらすら話した。簡単だった。」

「つまりですね、俺がずっと家の中で絵の具使ってお絵かきしていたんですよ。これでも絵は得意でしたからね。ばあちゃんも一緒にくつついてやってました。けど、やつぱし二歳ですからね、昭代も一緒に描くつてのは不可能だったんですよ。しばらくばあちゃんと俺とが絵描きさんごっこしていたら、いきなり昭代が奇声上げて、俺の使っていた絵の具水入れを金魚鉢にまかしちゃったんですわ。その水、もう群青色なんだか紺色なんだか、とにかくすごいことになっていて、それにどう考えたって金魚の身体にいいものは入ってねえし。即、二十センチ大の金魚さま、みな、白い腹出してお陀仏」

「そう」

「かわいそう、とかもつと言ってくればいいのに。」

「ばあちゃん、さすがに昭代を怒るわけにもいかずに、ただ泣いてました。とにかく泣いてました。そりゃあそうっすよね。五年くらい飼ってたんですか？俺が生まれた年に、記念につがいで飼った

って話ですから。そりゃあ泣きますよ。もうそれ見てて、俺もめらめらと燃えてくるものがあってですね。それなりに教育的指導をしたと。お兄ちゃんとして、でしょうか」

「それが発端よ、きつと」

蘇った記憶のどこにも、自分を責めるべき場面は存在しないのに。

俺、そんなすごいことしたっけ？

ごくありがちな兄妹げんか。

妙子さんが呟くのが、後ろで聞こえた。

「そうね、きつと秋世くんにとつてはたいしたことなかったのね。」

大好きなおばあちゃんが宝物にしていた金魚を死なせてしまった昭代をおしおきしたただけですんでるのよね」

「おしおきなんて、そんなたいそうなものじゃ」

顔をつねったり、頭をはいたり、庭に連れ出して金魚に土下座しろと叫んだり。まあ、今やったらまずいだろが、それ以上に過激な行動は取らなかったような気がする。

「でもね、昭代は覚えているのよ。秋世くんがたいしたことじゃないと思っっている行動の後、何をし、何をされたのかみんな覚えているの。髪の毛を引っ張られた、蹴られた、服を脱がされおしりぺんぺんされたとか」

「俺そんなことしてないですよ」

「昭代の記憶が嘘言ってるって言うの！」

凄みのある声が返ってきた。

「そしてね、その間一度も、おばあさんは助けにきてくれなかったらしいのよ。秋世くんがしたいようにしている間、昭代はひとりぼっちだったの」

「いや、けどあれだけめんこがつてる金魚ですよ、二十センチくらいのでっかい奴ですよ。やっぱり、死んだら情も移るとか」

「孫娘がいたぶられているのを無視していいくらい、金魚が大切だったの？ あのおばあちゃんは」

「いやそれはないかと。たぶん、子どもの遊びの延長かと思ったんじゃないかな、ばあちゃんは」

「それが答えよ、秋世くん」

車の中ではない、ここは魔女の巣窟だ。

気づくのが遅すぎた。秋世は身動きとれないままだった。

「秋世くんと昭代の記憶は一生重ならないわ。何度も言うようだけど、それを責める気はないわ。ただ、昭代はこれからも、記憶にことん責められていきっていくの。病院の先生も話していたわ。今、表面的に問題なくても、大人になって恋愛したり結婚したり人間関係をこしらえていたりする時に、ひょいと問題として出てくるって。自分でそれを理解して生きていかなくちやならないの。私たち家族ももちろん、一生かけて昭代を守るわ。だから秋世くん。秋世くんは一生、昭代が感じている苦しみを理解することはないけど、ただ同じ程度の痛みは感じて生きていつてほしいの」

勝手な言い分だ。お釣りがきそうなくらいの、毒を飲ませたくせに。

秋世は妙子さんが車から降りるまで何も言わなかった。来るまでは、すべての罵倒を受け止めようと心に決めていたのに、たたきつけられたのは自分の許容範囲を越えるくらいの、毒だった。

教授が戻ってきた。一カートのタバコは手付かずのままだった。ポケットから手のついたタバコを一本抜き出すと、窓を開けてライターで火を点けた。

「話し合いは無事終わったか？」

「はあ、それにしてもずいぶん、濃すぎる話でしたね」

身体に回る毒の感覚を気づかれなくなかった。注射された時と同じような気分で、秋世は息を潜めた。やっぱりおちゃらけよう。それが自分には最も合っている。

婚約者と同じことを続教授は尋ねた。

「家に帰りたいかい？」

「こういう話を聞かせていただいた以上、かなりしんどいです」

わざと口元だけで笑ってみせた。軽い別人格として行動せざるを得ない。

「すいませんが、あの写真なんですけど探偵事務所にでも申し込んだんですか」

「ご名答だ。ご両親があれだけ憔悴しきっていたら、何かしなくてはと思うのも人の道だと思うんだが、どうかな」

「ずいぶん金かったでしょうねえ」

幸い教授は、秋世のふざけた言動を大目に見てくれた。こんなところで辛気臭い説教を聞くよりずっとよい。聞きたいことをまずはぱっぱと尋ねておいた。

「この写真、うちの両親には見せてないですよ」

「君の家を修羅場にしても、何も始まらないよ」

「ありがとうございます。けど、この写真どうするんですか？」

親に見せる気がないのならばラッキーだが、どうもこの人、何かたくらんでいるような気がする。用心深く探りの手を入れた。

「まあ、これからいとして、いい付き合いをしたいから、そのきっかけにだね」

教授はタバコを一本吸い終わると、また一本取り出した。肺がんになるぞ、このままだと。

「これから秋世くん、君のお家に向かうわけだが、今のところはおとなしくしておいた方が身のためだぞ」

「はいはい」

説教は笑顔で交わす。さほど気分を害したわけでもなさそうで、教授はタバコを持った片手を外に出し、煙を外気にくゆらせた。

「今の君が考えていることは、だいたい想像がつく。ご両親の顔なんぞ、本当は見たくもないだろう。本当は夜の街ですべてを忘れたいだろう」

「いや、今はちょっとまずいかなあ」

「でも今まで通りの反抗だったら、すぐ家に引き戻されるだけだよ。」

私のように、『大人』の方法によって、すぐに」

反抗、ね。

みしりと心にひび割れが走る。

「もつと利口なやり方を考えるべきだ。秋世くん。君は真剣にこれから、この家から逃げ出すことを考えるべきだ」

「なんでみんな同じこと言っんですか？」

妙子さんも教授も、みな似たようなことを口にする理由が、まだわからない。

「妙子さんも似たようなこと言ってるんですけど」

「君のご両親はもちろん君が可愛い。おばあさんも最愛なる君のためだったら白を黒と言い含めることくらい造作もないことだっただろう。君が見ていなかったものを、死ぬまで見せたくないと思死だろう。でも、君はそれを望んでいないだろう？」 秋世くん」

そうかもしれない。

秋世は頷いた。

「けど、この狭い青潟にどう逃げればいいんですか。俺もまだまだ金ないしなあ。せつかく青大附中に入ったんだから、このままでければエスカレーターで進みたいし、もう受験勉強するのはごめんだし、結婚するのはまだ早いしな」

声を上げて教授は笑った。

「そのノウハウについては、私も若干の心得がある。まずはゆっくり寝て、作戦を練るんだな。私の研究室には何時でも電話をかけてきなさい。もちろん妙子くんには話す気はないし、男同士、いろいろ知りたいこともあるだろう？ 私も、これから妙子くんに悩まされた時に、君からいこととしての助言もいただきたいしな」

名刺を渡された。大学名、国文学科教授と太文字で書かれているのは見えたが、名前は読み取れなかった。タバコの吸殻を窓から捨てた後、教授はゆっくりと車の発進準備を始めた。

妙子さんは逃げる事ができた。結婚という名の保護区に。ただ自分は。

逃げたくたって逃げられねえよ。

やたらへんなところがかゆくなる病気も治った気配はないし、他人様に迷惑をかける以上夜遊びも封じ込められたまま。街波とすれ違う年上の女性たちに甘えるわけにもいかない。

どこまで事実かわからないにせよ、心底腐りきった我が「南雲家」。

いとこや他人からも「早く逃げろ」と言われるような我が家。

逃げれなかったって逃げ場所ふさいでるの、あんたたちだろうが。秋世は窓を開けてかすかなタバコくさを外に流した。鬱陶しいくらい墨色の空が広がり、ところどころに星がちりばめられていた。天の果てにも秋世は逃げ路を封じられたような気がした。

第二部 26

世の中には悪い人なんて一人もいないんだって。
どんな人だってみんないい人だって。

期末試験が無事終わった。今まで「ほとんど勉強していない」ことはあったけれども、今回のように「全く」ということは一度もなかった。白紙答案にしないですんだのは、選択肢が揃っている問題が並んでいたからであって、正解の自信など全くなし。秋世は筆記用具を片付けた。隣で彰子がつこり話し掛けてきた。

「あきよくん、そうだ、今度ね」

鬱陶しい。さっさと離れるよ。そう言いたいのをこらえる。

「あさつての夜にね、七夕のお祭りをやろうって話になっているのよ。この前話したけど、ナツキーや時也、あとすいくんも来るのよ。秋世くんもぜひ来てほしいなあ」

この人、とことん、神経ぶつちぎれてるな。

かつては全く気にならなかった彰子の明るさが、今は突き刺さるほど痛い。

「いや、ちょっと俺、行けないかもなあ」

仮面を被って笑顔をこしらえるのも、この二週間ほどでだいぶ慣れた。

「うちのことがまだごたごたしててさあ、彰子さんごめん。あいつらにはよろしく言っというて」

「そうかあ、残念だけど、しょうがないよね。今度また誘うからね」
放置してくれ、放置！

「じゃあ、これから規律委員会があるからさ、先に行くよ。じゃあまた」

別に急ぎでもなんでもないのだが、三年D組の教室に長時間居座

わるのだけはごめんだ。秋世は耳元で軽く手を振り、作り笑顔のまま教室を出た。

家を出る、か。

あの夜以降、両親とは全く口を利いていない。

特に母とは、食事以外は一切目を合わせていなかった。

それが一番いいかもな。

いったい自分が入院している間に何が起こったのかわからないが、もし妙子さんの言う通り「昭代の父がおじさん」だとしたら……ありえない話と力を込めれば込めるほど、事実になることをどうして気づかないのだろう……母はいわゆる「不貞行為」をしたことになる。父を裏切ったことになる。

そのことを祖母が母にはつきりと伝えて、それがきっかけであつけない死を迎えたという事実……これも伝聞だし断言はできない。もし事実だとしたら、母は三つの罪を犯したことになる。父を裏切り、昭代を産むことによって周囲を傷つけ、祖母の命を奪ったという。

そんな女を、母親と思つてたのかよ俺は。

思えば、祖母の死以降母の態度は不可解なものが多すぎた。一緒に暮らしていたのだからもつと嘆き悲しんでもいいはずなのに、口から出る言葉はみな、「私たちは悪くない」といった保身の発言のみ。瑞希おばさんに責められて泣き伏すばかり。事実をありのままに伝えればいいのに、それすら拒む。祖母が消えてきつとせいせいしているのは、あの母だ。

しかもだぞ、俺が死んだら身代わりかよ。

もし秋世が病魔と戦っている時に、死ぬことを前提として子どもを作ることも常軌を逸している。自分が死んでも代りがいればそれでいいということなのか。

なによりも、父も。

そういうこと、どうして気づかなかった？ そんなことされ

たらさつさと別れるだろ？

秋世が気づかなかつたのはしかたないにしても、なぜ父は昭代の顔を見て、自分の子じゃないとぴんとこなかつたのだろ？ 妙子さんが気づくくらいなのだから他の人たちも「もしや？」と感じて当然じゃないだろうか。秋世は妙子さんのおじいさんにあたる人を知らないのわからなかつたけれども、実際全く似てない兄妹だと感じてはいた。

もしその認識が、他の人たちにもあつたとしたら、秋世と昭代を引き離す仕事を誰も違和感なく受け止めるのが自然だろう。だって許されざる関係の子なのだから。

頭の中がぐちゃぐちゃしてくる。そんなのはいやだからさつさと目を閉じる。

やっぱり、家を出よう。

貯金通帳にはどのくらいのお金が入っているのだろうか。あとで確認してみよう。

いざとなつたら本条先輩の部屋にもぐりこむというのも手だ。

規律委員会が行われる予定の教室に顔を出してみたが、誰もいなかった。そういえば集合をかけていなかったつけ。すっかり頭がボケてしまっている自分に腹が立つてくる。まあいい。試験が終わったんだし、のんびりと外で遊んでもいい。誰か遊び相手になつてくれそうな奴はいないものか。

東堂は今日いないのかな。

保健委員は期末試験後すぐに保健室当番が始まると聞いていた。予想が当たっていたらかならず校内のどこかにいるだろう。もしかしたら例の彼女にめろめろで追いかけてまわしているのかもしれない。まああいつを捕まえたら芋づる式で誰か遊び相手が見つかるに違いない。秋世は口笛を吹きながら三年教室へ向かった。すっかり解放されきつた顔をした連中がうろついている。あとはもう、夏休みを待つだけだ。

ずいぶんざわめいている三年教室前の廊下。窓際でいろいろと語り合っている女子の群れが目についた。男子連中はほとんどいない。みな、箱の中になんぞいられないのか、お天気もよろしいことだし、特段用事のない奴はさつさと外に出ているのだろう。東堂捕獲は無理か、少々舌打ちしたい気持ちでD組の前に向かうと、ひとりいた。りっちゃんじゃん。

評議委員長の立村がなにやら扉の前でうろろろしていた。誰かを待っているのか、それとも扉が前後とも閉まっているから入れないのか？ 何度かドアの隙間に顔を近づけては離れ、またドアノブをつかもうとしては離し、いかにも入りづらそうな格好だった。

「どうしたのりっちゃん」
声をかけて、思いつきりびびられた。そんなに驚かなくてもいいじゃないか。

「ちよつとな」

「なんか忘れ物？」

「まあ、そんなところ」

「誰かいるのかな？ 女子たち？」

あてずっぽで聞いてみた。立村が惑うのはだいたい、強いD組女子たちが教室内で吠えている時だろう。評議委員長ともあろうものがまさか、と思われがちなのだが、立村の性格はもともと内気、気の強い女子たちにながつとわめかれると大抵の場合、押されてしまう。最近はそうでもないらしいが……清坂相手にいろいろあった影響だろう……本質は変わっていないように秋世には思える。

「じゃあ俺と一緒にくつついてってやろうか？」

「いい、いいってば」

いきなり生腕をぎゅつとつかんで引つ張る。痛い。

「ははあ、なんか中でやばい話してたとか？ 顔を見るのがかなり恥ずかしいとか？」

立村をからかうのは面白い。気がまぎれる。

「もしかしてさ、清坂さんたちがいるとか？」

図星か。立村はうつむくようにして足元に呟いた。

「今、話し合い女子たちしているみたいだからさ」

「ははん、清坂さんとこれからデート」

「そんなんじゃないよ！」

向きになるところがさらに怪しい。

きつと余計な気を回しすぎているだけじゃないだろうか。別に女子たちからしたらたいした話をしているわけでもないのに、立村はいつも「機密情報」を扱っているのではないかと邪推して足踏みしているというわけだ。秋世だったらさっさとノックして「あ、ごめん、ちよつと用があつてさ」と忘れ物を持ってくるなり、用事のある女子に声かけるなりしてさっさと出て行くだろう。世の中の八十パーセントはそれでうまくいくものだ。百パーセントではないけれど。

女子たちの会話、となるとおそらく噂話だろうか。

立村の学校内での「姉」、古川こずえが混じっているのかもしれない。

「また下ネタでからかわれるからやなのかな？」

「そういうんじゃないよ。古川さんいないし」

秋世は思わず笑った。なんでこうもわかりやすいんだろう。

と、そこへ聞き覚えのある女子の声が、扉の隙間からこぼれてきた。

「だから、これは私たちの仲間として、当然したほうがいいことだよね」

きっぱり言い切ったその声は、かつての我が姫から発せられた。

「そうよね、そうよね、絶対そうよね！」

立村が唇をかんだままうつむいた。明らかに合いの手は、立村が恋人宣言した相手の声だった。立場なし。互いの彼女が語り合っている中、聞き耳を立てるのは気恥ずかしい。

「とにかく、このままだと東堂くんの彼女、退学になってしまつて気がするんだ。あのまじめな東堂くんが好きになつた子なんだもの、きつといい子だと思うの。学校終わってからすぐに二年の彼女がいる教室へ行つて、まっすぐ帰るかどうか見張つているとか、いろいろしているしね。けど、きつとこのままだとあの杉本さんのように、学校から無理やり追い出されてしまふかもしれないし。酷い噂も流れているし」

彰子の声は、噂話をしているような雰囲気ではない。きつぱりとはつきりと。意志を感じる。

「あれは嘘だね、きつと」

「私もそう思うのよ。彼女本人が聞いたらもつと傷つくはずよ」

なんで東堂の彼女の話してるんだ？

東堂と彰子が三年連続保健委員というのはもちろん理解している。それなりに仲良しでもあるだろう。なにかの拍子で噂でも耳にしたのだろうか。さらに続くがまずは立村に振る。

「中に東堂、居るの？」

立村は首を振った。

「お前知ってる？ 東堂大先生の彼女のこと」

「一般的情報としては」

口籠もるところみると、かなり本当のところ理解しているのだろう。

「それなら話早いわ。そのこと話してるってわけ？」

扉のノブを指差すと、立村はえらくゆっくり頷いた。

しばらく秋世も東堂の彼女については話を聞く機会などなかった。二週間前の「ミッドナイト・ベッド」にて奴が彼女を保護しタクシーで自宅まで連行したところまでは聞いているけれども、それ以上は何が起こったのかは見当がつかない。野郎同士よっぽどのことがない限り、その手の話を突っ込むことはしない。例外・立村というのもいるがそれはどうでもいい。とにかく東堂はあいつなりに、

懸命に彼女に尽くしているのだろうという予想だけはしていたけれども、どうもあいまいにごまかしていたところみると何か裏があったのだろう。その程度の想像はしていたけれどもだ。

噂って、やっぱりあんなとこでたむろしていたってことをかな。

東堂がかわいそうなのでずばりつつこむことはしなかった。あの「ミッドナイト・ベッド」なる喫茶店、後日秋世が例のお姉さんたちに聞いたところによると、やはり一種のナンパ場だという話だった。そういう店に慣れた格好で入っていったということは、やはり、それなりのことをしていたはずだろう。

しかも青大附中の制服のままでうろついていたら、もちろん噂にならないわけがないだろう。自業自得といえはそれまでだが、東堂の気持ちを思うにとてもだが口に出せない。

立村はそのあたりも聞いているのだろうか。

「とにかく、あの彼女がこれ以上路を踏み外さないようにするため、私たちが協力できることないかなって、思ったんだけどどうかな、美里ちゃん」

しばらくあいまいな言葉での会話が続いた。彰子が何かのきつかけで、東堂の彼女ご乱行を知り心を痛め、なんとか彼女を「女子パウ」で更生させられないかと清坂に相談したらしい。清坂もそのあたりはばりばりやってしまう女子だ。立村を尻に敷いたパワーでもって、きつとのりにのるだろう。東堂がかわいそうだと思うのはやはり男子心か。秋世は立村の顔を覗き込んだ。なんと立村、片手をドアノブにしっかりかけて、握り締めている。開けようとしなのが唯一の理性と見た。その手首を秋世は指先で叩いた。

「まあまあ、おちつきやしょうや」

「けどさ」

また言葉を飲み込む立村。秋世もささやき声で耳元へ。

「あの東堂先生がほれ込んだ子だもん、まあなあ。女子もやるよな

あ

「そんな、よくないよ」

早口に立村は呟いた。かすかに聞こえるか聞こえないかの声で。

「だってさ、そんなの二人の問題だろ？ 東堂たちの問題であつて女子たちが口に出すべきことじゃないよ」

「そりゃあそうだ」

胸に言葉がすんと染みた。そうだ、他人事のはずだ。

しばらく秋世は立村を無理やり窓辺に引き寄せ、じいつと顔を見詰め合つた。男同士で気色悪いと言われそうだった。立村も細い唇をぎゅつと結んだまま、片方の頬にえくぼをこしらえていた。こらえている、いかにもの表情だ。

「女子のおせっかいはいつものことだろ。どうせたいしたことじゃないよ」

「けどさ、よく考えてみるよ」

離れたせいか、立村は少しだけぶっきらぼうな口調で続けた。

「もし同じ立場に立たされたら耐えられるかよ」

「同じ立場ねえ」

他人事のように思う。

「もし、もしもだよ。人にあまりうるさく言われないようにって隠していることを、善意の顔して引つ張り出されたら、腹立たないほうがおかしいよ。東堂だつていやに決まってるよ」

「まあ、そりゃあそうだけど」

相変わらずすねる寸前の立村を眺めるのは面白い。不謹慎ながら和んだ。

「いったい清坂氏も何考えているんだろうほんとに」

「まあまあ、善意として受け取っておこつよ、りっちゃん」

「それにさ、なんでだよ、なんで杉本のことが出てくるんだ？」

「ははん、そこか。」

秋世は思わず笑みがこぼれるのを押さえられなかった。やっぱり立村も、すべてが見え見えだから面白い。ほんといい奴だ。清坂に

は悪いがもつたいない。

「そういえば言ってたなあ」

「そうだよ、要するにさ、杉本のような扱いを東堂の相手がされそうだからってことだろ？　だから三年女子がその東堂の相手に説教しようっていうんだろ？　けど、それは向こうにだって事情があるし、説教できるのは東堂が最優先だろ。なんで関係ない人たちがさ、そうやって押し付けがましいことするんだらうな。それに東堂の相手さんだって、それなりに事情があるってこと、どうして考えないんだらうな。きつと、そうしなくちゃいけない理由があるのに、それを全然考えないで、どうして自分らが正しいって決め付けられるんだよ！」

秋世は立村の手首を握り、もう一度扉の前に立った。

立村の言葉が途中から、自分の耳にじんわりと広がっていく。

きつと、そうしなくちゃいけない理由があるのに、それを全然考えないで、どうして自分らが正しいって決め付けられるんだよ！
彰子のぼってりした顔が目の前に浮かんでくる。

「東堂くんはね、きつと一生懸命彼女を立ち直らせようとしているんだよね。でも、肝心の彼女が不良のままだったら、青大附中の立場としても何かをしなくちゃいけなくなっちゃうよね。それに、気持ちにはわかるけど、叩いてはいけないうって思うよ」

彰子の声にあいまって、清坂の甘いトーンのしゃべり声が挟まる。
「うんうん、それわかるよね彰子ちゃん。本当は東堂くん、精一杯守ってあげたいんだらうなあ。だから、ひっぱたいちゃったんだらうね。でもそれは絶対よくない！　私もそう思う。二年の女子たちからも聞いたけど、東堂くんひっぱたいたり怒鳴ったり、彼女に対してはお父さんみたいな態度してるんだって。うちのクラスに居る東堂くんとは思えないこと、彼女にはしてるんだって。気持ちがあるからって言っても、私が彼女の立場だったら絶対怒る！」

「東堂くんは芯が熱い人だよ。私も一緒に保健委員していたからわかるよ。彼女が話していたらしいけど結婚して全責任を取るとまで言ってくれてたらしいんだ。中学三年なのだよ。すごいよね」

「うわーしんじゃない！ あのだう堂くんが？」

「私、すごいなうて思っただよ。東堂くんを本当に尊敬したよ。だうてひとりの人を命賭けて守りたい、うて証明みたいな言葉なんだものね。私にはそこまですひとりの人を好きになるうて理解できないけれど、気持ちだけはいっばい伝わってきたよ。でも、今のやりかただったら東堂くん、彼女にどんう嫌われていっうしてしまうだけだよ。東堂くんじゃなくて、今度は他の女子たちが一生懸命思いを込めて正しい路に戻してあげることが、今は必要じゃないかなうて思っんだ。これ、他の保健委員の子も話しているんだけどね」

「うんうん。もし協力できるなら、私も評議の子たちと相談してみる」

隣の立村が、「そんなことするなよ」ばそりと呟いたのを確かに聞いた。

片手がまたドアノブに伸びるが、秋世はまたその指をはたいて落とした。

「けど、どうなのかな。東堂くんにこのこと話しておこうと思っただけど、どうかな」

彰子がふと、思いついたという風に。

「ううん、それは絶対やめた方がいいよ！」

清坂の即、却下する声あり。立村がまたぴりりと唇をかむ。

「だうて男子たち、余計なことするなうて怒るに決まうてるもの。許可もらうなうて時間がもつたいないでしょ。そうだ、彰子ちゃんにさうき話したけど、二年の杉本さんのことね。あの時は立村くんが自分の判断で、女子たちにあの子の面倒を見なさいうて命令したのよ」

「命令なんてしてないよ」

またぼそりと小声。秋世なりに背中の中のシャツから背骨をさすってやった。

「今度は私たちが同じことを、東堂くんの彼女のためにしてあげたって何も悪いことないと思うの。彰子ちゃんが考えていることは絶対正しいよ。私たち女子評議は結局、杉本さんを助けてあげることができなかったけど、東堂くんの彼女だったらきつと救い上げられると思うんだ。今なら間に合う、そんなええつと、ばい、しゅん？なんて絶対よくないよって、みんなでちゃんと訴えればわかってくれると思うんだ」

清坂の声がまた高く響く。同時に立村ががりりと奥歯をかみ締めている。

「美里ちゃん、そうだよな。話せばきつとわかってくれると私も思うんだ。私、いつも思うんだけど、世の中には悪い人なんて一人もいないんだって。どんな人だってみんないい人だって。大丈夫。東堂くんの彼女の、いいところに一生懸命話をすれば、絶対にわかってくれるはずよ」

いい人ばかり？

耳の奥が破れるような気配がした。つんと響いた。

世の中には悪い人なんて一人もいないんだって。
どんな人だってみんないい人だって。

かつては秋世もそう信じていた。
嘘っぱちだ。何にもわかつちやいない。

いい人なんて、裏を返せばみんなどろどろだってこと、どうして認めねえんだよ！

いい人の顔していかなければ、生きていけないから演じてい

るだけだろうが！　いい人いい人って決め付けられて、息苦しくてならない連中のことを一度でも考えたことあるのかよ！

立村の緩んだ手をドアノブからはたき落とし、秋世は一気にその扉を引いた。

「いいかげんにしろ！」

廊下のざわめきが甲高く響くと同時に、扉を閉める気配がした。立村の気遣いだろう。

ちょうど廊下側の一列目に彰子が、その隣に清坂がびつくりした顔して座っていた。すぐに彰子が笑いをこしらえようとする様子が暑苦しくむかむかした。当然清坂の視線は秋世ではなく、扉に背中をくっつけて突っ立っている立村に向けられている。何か話し掛けられているのだがそんなのどうでもいい。秋世は彰子の前に立ちはだかった。

「東堂にはあいつなりの事情があるんだよ。なんでそんな人のことをほじくり出そうとするんだよ！　あいつの彼女のことなんか、関係ないだろ！」

「あるよ、あきよくん」

すぐに落ち着きを取り戻し、やわらかく返す彰子に、さらにいらだつ。隣ではもう一組が開戦寸前の静けさでもって見詰め合っているがそれはそれで勝手にやってくれ。一切無視だ。

「東堂が彼女をひっぱりたいのにはそれなりの理由があるんだよ。ラブホテル街で売春してたらそりやぶち切れるに決まってる。あいつはそうさ、確かに必死だよ。けど、他人が口出す権限なんてねえんだよ！」

言い足りない言葉がさらに溢れ出しそうだ。目の前で黙って顔をあげ秋世の言葉を待っているふやけた女子に、いったい何をぶつければいいのだろう。彰子は静かにゆっくり頷き、秋世のしゃべるのを受け止めようとしている。多少の罵詈雑言なんて気にしないさ、という風に。なぜそんなに自信ありげなのか。何様のつもりなのか。

「そりゃ、学校の校則には違反してるだろうな。いろいろ問題起こしてるだろうしな。東堂もプロポーズまでして振られてるんだもん。情けねえよな。けど東堂はそれを全部覚悟の上でやってるんだ。あいつにはそれなりの覚悟があるんだ。俺はあいつの親友だけどさ、それをまるまる応援してやることで十分だって思ってるんだけどな。どんなことがあつたってしつこくあいつの彼女を元の正しい道へ戻してやるうなんて思わねえよ。彰子さんは本当に、彼女側の事情とか聞いてるのかよ。なんで、彼女が、売春なんてしなくちゃいけなかったのかなんて、その理由まで聞いてるかよ」

彰子は穏やかな表情のまま首を振った。

「だったら口出す権利なんてねえよ。きつとあの子だって、不良になるにはなるだけの理由があつたんだ。売春するならするなりの理由があつたんだ。東堂みたいにくそまじめ野郎では満足できない理由だつてあつたんだ。全部、それはあいつと彼女しかわからねえよ。けど、それを丸ごとひっくるめて、東堂は彼女に惚れてるんだ。あいつが命がけで走り回っているのを先回りして、いい子ぶるのはやめろよな！」

「いい子ぶっているように、見えるのかな」

しんと、しっかり答える彰子。

「ああ、そう見えるよ、俺にはさ」

吐き捨てた。思いつきり床を踏んだ。彰子さん、と一度呼んだ。

「いっつも言ってたよな。周りの人はみんないい人ばかりだってさ」

「そうだよ、それは今でも変わらないよ」

「もしさ、俺が例の彼女と似たようなこととしてたとしても、『いい人』だって言えるか？」

彰子は首をかしげた。理解してないようすだった。

「あの女子と同じように、きれいなお姉さんたちとホテルに通つてるとか、そんなことしてても『いい人』だって言い切れるわけ？」

斜め隣で息を呑む気配あり。立村と清坂が自分らの戦をいったん

中止し、こつちを見ている。

「そうしたくなる何かが、絶対あるんだよ。いい人だとか言われても、悪い奴になりたくなる瞬間だって絶対あるんだ。その気持ちとはたぶん経験してみねえと絶対わからないはずさ。それに『正しい道』がそんなにいいことなのかよ。女子たちが考えている正しい道と、例の彼女が感じている正しい道とはたぶん、百八十度違ふはずさ」

喉がいがいてからむ。でも言わずにはいられない。

「彰子さん、世の中にはさ、ずっと見たくないものを見ないで、知りたくもないものを知らないですんでいる人がたくさんいるんだ。俺だってそうさ。けど、反対に見たくないものばかり押し付けられて気が狂いそうな奴だって絶対いるんだ。逃げ出したくてなんない奴だって、壊れたくてならない奴だって。それをみんな、ひつくるめて正しい人たちの観点から『いい人』って決め付けるのはやめろ！ いい奴だからって、いつまでも永遠に『いい奴』なわけねえんだよ。人間は裏表があって当然なんだ。汚いところがあってあたりまえなんだ。それを白々しく『世の中の人はみんないい人』だなんて抜かしたって、あの彼女が改心するわけねえよ。ただ、馬鹿みたいだと軽蔑して、笑うだけだよ。彼女を説教してぶんぐって命賭けて守りたい、って思ってる東堂と彼女の親以外は、口出すわけにはいかないんだ！」

空気が凍った。七月の夏気配が上方に固まっているようだった。

「清坂氏、話がある、外に出よう」

立村の静かな視線が清坂を射た。

「何よ、あんたも私がまた余計なことしたって言うわけ？ 杉本さんに対してした事と同じこと、私もしようとしただけじゃない！」

再び唇がきりりと結ばれた。黙って教室を出た立村を、清坂は、
「言いたいことあるなら言いなさいよ。それ以上にいい方法、何あるっていうのよ！」

罵りを続けながら追いかけていった。
残されたのは秋世と彰子のふたりだけだった。

「あきよくん、うん、そうだね。言いたいことはよくわかる」

罵倒の雨を降らせて泣きの涙でうつぶせてもおかしくないはずなのに、彰子の頬にはかすかな笑みが浮かんでいた。

「それは、あきよくんの考えなんだね」

「あたりまえだろ」

「同じように、私にも、私なりの考えがあるんだよ。あきよくんが正しいと思っっていることと、私が正しいと思っっていることは、少し違うかもしれないね」

なにいい子ぶってるんだよ！

またわめきなくなるが喉が疲れてやめた。彰子はそれを勘違いしたのか、もう一度目一杯の花笑顔で答えた。

「私はね、もし、あきよくんが同じようなことをして、悪いことをして、不良になったとしても、決して『悪い人』だとは思わないよ。どんなことがあってもね。私の周りにいる人も、世界の人も、みんないい人ばかり。それは、私が正しいと思っっていることだから」

正しい？

向けられた穏やかな微笑みは、かつて自分にとって彰子が「姫」だった頃と同じものだった。

昭代に一生消えない傷つけて、お姉さんたちといちゃついて、彰子さんをずったずたに切り付けて、南雲家の悪魔になりやがって、そんな俺が、『いい人』なのかよ。

本当のことを知っても、それでも『いい人』って言えるのかよ！

秋世はただ逃げるしかなかった。
教室を飛び出して初めて、ギャラリいらしき女子たちが心配そう

な顔でもって見送っていることに気がついた。果たして自分の背中に悪魔のマークが刷り込まれていることに気づいた女子はいるのだろうか。もしいたらすぐに、本当の彼女にしてやるのに。その場ですぐに、「不良」になってやるのに。彰子にちゃんと、「側にいた男子が、いい人ではなかった」ことを証明してやれるのに。

第二部 27

とことん、悪い奴になればいいんだ。

とことん、どぶくさい奴になればいいんだ。

とことん、踏み潰されればいいんだ。

それが本来の俺の姿なんだ。

秋世と彰子とのいさかいは、想像していたよりも噂になっ
ていなかった。

もちろん秋世に熱を上げているらしい女子たちは、いろいろ好き
勝手なことを話しているらしいが、今のところ特にアプローチして
くる気配はない。むしろ、もう一組のカップルが派手にやらかした
言い合いの方で、巷の雀たちは盛り上がっているようだった。

「いやあ、立村も言う時は言うよなあ」

B組評議委員の難波がホームズ気取りで腕組みしながら語るのを、
秋世は聞いていた。

「なんせ評議委員会だったろ、すぐに。委員長の立村がいつまでた
っても来ねえからさ、迎えにいったわけ。そしたらちょうど話し合
いのフィニッシュだったらしくってさ。『他委員会の話に評議委員
として口出しすることは、決してやってはいけないことだから、評
議委員長命令として一切かわるな』だとさ」

評議委員長命令、か。

あいつらしくない口ぶりだ。

「女子はとことん、勘違いしてるからそのくらいはつきり言えて
俺も前から思っていたんだが、とうとう言うべきことを言い切った
ってことで誉めてやっていいんじゃないかねえかと俺は思う。南雲、お前
もそう思うだろ？」

頷いた。難波の口調だと恐らく、秋世のやらかしたことも情報と

して流れているはずだ。

「清坂もかなりわめきちらしていたけどな、結局は『評議委員長命令』の一言でだんまりだ。立村もそれなりに気遣ってしゃべっていたけど、言うことかかないならこれもしょうがないんじゃないか。人様のことに勝手に口出して、ろくでもないことになるよかまじだよな」

特段、それ以上秋世に問うこともなく、難波はB組の教室に戻っていた。

隣の席の立村に軽く笑顔で声をかけた。

「りっちゃん、おはよう」

「ああ」

言葉が少ない。あの後自分はひとりでボーリングに集中していたが、立村はひとりで清坂美里に立ち向かっていたわけだ。教室内の女子たちが冷たい視線をぶつけるのを、あえて無視するように朝自習プリントに集中していた。ちなみに今日は数学だ。

「お互い、いろいろたいへんっすね」

「まあな」

そこへ下ネタ女王の古川こずえがひょっこり顔を出した。かばんを机の上にはたりと置いて、

「あんたもそうとうたまっていたんだねえ、立村」

相変わらずの「朝の漫才」をしかけてきた。秋世がにやにやしつづ様子を窺うと、不機嫌極まりない立村は、

「悪かったな」

いつものように返したただだった。そこで退くような女王様ではない。席について、プリントをぺたりを広げると、

「言いたいことがあるのはわかるけどさ、何も思春期の性衝動と一緒にぶつけることは」

「古川さん何誤解してるんだよ」

「だってあんたの爆発振り、もう伝説となってるよ。A組もB組も

「組も」

「そんな俺悪いことしてないし」

「美里の機嫌取る私の立場にもなってほしいよね。けどまあ、そのくらいはつきり言うのも悪くはないと思うよ。この機会に頭冷やしな。美里のありがたみがよつくわかるだろうしね。時間置いて、二人っきりのデートにでも誘ってやりなよ」

「余計なお世話だ」

他の女子連中に比べると、古川の落ち着きぶりはずいぶん目立った。

「ずいぶん落ち着いてますねえ」

「それよか問題はあんたじゃないの。南雲」

覚悟の上だ。秋世は頭を掻いた。

「ストレスがたまるとお互いたいへんですって」

「あんたは彰子ちゃんにあやまんな」

「そんな、いきなりなんですか」

片耳で彰子の様子を聞き取ろうとした。相変わらず脳天気には笑ってやがる。さつき教室に入ってきた時も、「あきよくん、おはよ！」ときた。一応片手を挙げたけど、笑顔は振り向けられなかった。どう思われようが知ったことか。

古川は立村を透過した視線でもって秋世を見据えた。

「たまに夫婦喧嘩するのもいいけど、あんた言い過ぎなんじゃないの。噂しか聞いてないしそれ以上は言わないけどさ」

「いろいろあるんですよ、人生は」

噂だったら本当のことなんて伝わっていないだろう。立村が手元に広げた朝自習プリントを古川へ滑らせてよこした。

「悪いけど古川さん、これ解いて」

うまく会話が途切れた。朝自習の際、数学の手ごわい問題が出るたびに、古川が立村の代りに解いてやるのがいつものパターンだった。

もちろん、言い過ぎたとは思っている。

東堂の耳にも入ってるのかな。

まだあいつとは話をしていない。

奴だって怒るにきまつてるだろうさ。冗談じゃねえよな。せっかくひとりでがんばってるのに、余計なちゃちゃ入れられたら切れるに決まってるし。

その点においては、秋世は彰子に謝罪するつもりなどない。

ただ自分が彰子を一方的に罵ったことにより、別のところへ火がつく可能性だってあるわけだ。このあたりを計算していない秋世ではなかった。

もともと彰子さんは鼻につくと思われてるらしいしな。

彰子に嫌悪感を持つ女子たちの本音と、自分が同調しているのに気づいていた。

だけど今までが今までだ。

彰子にのめり込んでひたすらちやほやしていて、いきなり手の平返したような態度を取るのはいけません。正直、今までのようにべったりくっついていたいとは思わないし、できれば一切顔を見たくないのだが、それをしてしまうとずっと周囲の女子たち、これをチャンスとばかりに彰子へ辛く当たるだろう。

元恋人として、というよりも、規律委員長として、いじめには反対だ。

手を下すのではなく言葉だけのいじめも、本来は許してはならない。

おちゃらけた南雲秋世規律委員長でも、いじめに関する考えだけは揺らいでいない。青大附中規律委員会総意としても。

とかいって、この俺がやってることは、いじめとしか思えねえよな。

しよせん、「いい人」の仮面を被りながらやっていることは最低野郎の自分がいる。

こんな奴でも「あきよくん、いい人だね」と笑顔を向けられるの

が、ただ、むかつく。

とにかく、規律委員長として、だな。

秋世は自分なりの考えを絞り込むことにした。次の授業は国語だった。試験結果が返ってくるのだろう。ろくでもない点数だろう。知ったことか。

立村と大喧嘩したらしい清坂は、いつものパターン通り羽飛に話し掛けていたし、羽飛は立村との間を取り持とうとしている。

「あのなあ、立村。お前もなあもう少し頭冷やせよなあ」

「うるさいな、だから人のことには口出すなって言ってるだろ」

「ったくなあ、古川、お前どう思う？」

古川もこくこく頷きながら、羽飛に向かって答える。立村は無視だ。

「そうねえ、羽飛の言うことの方が正論だとは思っけどねえ。でも、しよせん弟だしねえ、まだまだ幼いのよ。大目に見てやんなよ、美里。あれ？ 美里いないの？」

「あいつどこ行きやがった。ったく逃げ足はええの」

いきなり立村も立ち上がり、さっきまで清坂がいた方へ足を向けようとする。羽飛に肩をぽんと叩かれ慌てて座り直す。

「そうあわてんなって」

「慌ててるんじゃないよ。また変なことされたらさ。奈良岡さんもないし」

そつえば彰子の声が聞こえない。今度は秋世が腰を浮かしかけた。

「いいじゃんいいじゃん、美里にいくら言ったって、あんたが押さえられるわけないじゃん。やりたいようにやらせてさ、それで痛い目にあって、それでわかってもらえばいいじゃん。それにさ、彰子ちゃんがついてるんだから悪いことにはきつとなんないよ。暴走止めてくれるよ。大丈夫」

大丈夫なわけねえだろうが！ ああ善意塊の人にさ。

明らかに古川の言葉は、秋世に向けられている。礼を言う必要もない。秋世はすぐに廊下へ出た。ちらつと視界の隅に、立村の戸惑った表情が映った。

女子たちが集まるとしたら、たぶん図書館だな。

確か去年の十一月頃だったか、後輩の杉本梨南をクラスから守るために、立村が女子評議たちに指示を出し彼女を図書館へ連れ出すようにしたことがあった。このあたりはさすが頭がいいと思う。

昨日の会話を思い返してみると、清坂はきつと杉本をあいてにした際の経験を生かして、東堂の彼女に接しようとしていたらしい。この辺の気持ちについてはあえて秋世も何も言いたくなかった。どうせ今の段階では、清坂は立村の彼女だと思っっているだろうし、当然気持ちも自分に向かっていいると思いきんでいる。本当のところはどこにあるのか？ 男子の視点から立村を眺めている秋世としては、その気持ちはどこからきているのか手が取るようにわかるのだが、言う必要は今のところないだろう。

ただ、彰子たちが余計なことをして、東堂の彼女が学校にいつらくなるようなことはあつてはならない。精一杯東堂は自分のできることをしようとしている。男として当然のこと。それを割り込まれていい気持ちする奴なんて、いやしない。

水口に呼び出されたのは放課後だった。

「南雲」

一言、声を掛けられた。その後は無言のまま、あごを扉側に向けた。

そろそろ来るかとは思っていたが。

「なんか用か」

さっぱりと答えてみた。

「訳はわかるだろ」

ははあ、彰子がらみか、と合点はいった。しかし水口の奴、珍し

く言葉が少ない。

「わからなくもないが、どうした？」

作り笑いを浮かべ、口をほぐしやすくしようと試みたが失敗したみたいだった。水口は妙に大人びた口元でもって、秋世に背中を向けた。

「外に出ろ」

彰子の方を水口は一切見なかった。声を掛けないわけにもいかなかったとちらりと見れば、まだ教室に残って、東堂と楽しげに語っているではないか。東堂もさほど腹を立てたでもなく、保健委員会のノートを開いて頷きつつメモをしている。噂は耳に入っているはずなのだが、もしかしたら自分よりもはるかに出来た奴なのかもしれない。我慢しているのか、それとも知らん振りしているのか。しばらく迷ったが、知らん振りして後ろ扉から出ることにした。水口も秋世の後ろに続き、廊下に出るやすぐ、先頭に立った。

まだ他の生徒たちがうろろろしていた。昨日開く予定の規律委員会をもう一度集合掛けてもよかったのだが、昨日が昨日だっただけに、忘れてしまった。まあいい、一日くらいずれたって大事にはなるまい。

「用って、教えてくれたっていいじゃん、なあ、すい」

「黙ってついて来い」

「あ、もしかして噂、聞いたのかなあ」

そう告げた。似合わないすぎる。秋世は思わず吹き出した。

あのお子様すいくんが、「黙ってついて来い」とか「外に出ろ」

とか、いっぱしの男めいた言葉使うのだから、そう変えさせる奈良岡彰子はやっぱりすごい女子なのだろう。

決闘でもするつもりなのだろうか。

まあ、そうされたら受けるしかないよな。

水口があたりを見回しながら、学校裏の林へと歩いていくのを秋世は追っていった。人気のない、「女子は夜間立ち入り禁止」とさ

れている場所だった。ひとり、A組でよく見かける男子と女子ふたりがどつき漫才っぽいやり取りをしながら砂利路の方へ歩いていったのを見たつきり、あとは誰もいなかった。決闘には最適の場所だろう。

「あのさあ、すい、すいくんな」

「うるせえな」

「いいよ、言いたいこと、言っちゃまえ」

とりあえず立ち止まったでかい松の木の前で、秋世は水口に呼びかけた。

「俺、もう逃げも隠れもしねえから。お前の男気に免じて、何でも受ける」

言葉を詰まらせているらしく、水口もしばらくうつむき足元でつんつんと土を掘っていた。よく観ると心持、肩幅が広がっている。ガキ扱いされていた水口がこうやって大人になっていくもんなのだと、父親みたいな気持ちになっってしまう。

すいに彰子さんを奪われた、間抜けな南雲規律委員長ってシナリオでもいいかもな。

むしろそれの方が一番いいような気がしてきた。

しばらく秋世と水口は向かい合っていた。

「絶対、逃げるなよ」

念押しされて、少しむっときた。ばかかい、水口。お前でもあるまいし。そう言いたくなるけど、がまんする。

「俺が逃げるわけないじゃん」

「少し待て」

ぶん殴るために、心の準備でもしたいんだろうか。水口の視線を何気なく辿ると、秋世の肩をすすつとすり抜けるような感じで見ている様子だ。

「誰もいねえだろ」

秋世がそこまで口にした時、砂利路の方から油を差していないよう

な自転車のきいきい声が響き渡った。思わず振り返った。まだ姿のない相手を探そうとした時、水口が勢いよく砂利路へと駆け出し、手を振った。

自転車。

かばんを置いた。手ぶらのまま、秋世は動かずにいた。空は青く雲は白い。時折しやらしやら鳴り響く葉のすれる音。だんだん近づいてくるもうひとりの気配に、秋世はすべてを理解した。

隊長かあ。

秋世は軽く敬礼した。

「花散里の君ファンクラブ隊長」、夏木宗がいつもの迷彩色自転車と共に、そこにいた。

それにしてもこの時期にまだガクランとはなんとかならないものか。白線の入った裾の長い学生服姿は見るからに暑苦しかった。一緒に立っている水口が一気にかすんで見える。

「すい、どうということだ？」

まずは水口に問う。悪びれもせず、水口が答える。

「修学旅行の時、会っただろ、それから帰り、ねーさんと一緒に」要領を得ない説明だ。とにかく顔見知りで、手を振って迎えるような間柄なのだろう。彭子繋がりだろう。秋世も似たようなものだ。しょうがない。

「じゃあ、みんな、しゃべったわけか」

返事がなかった。そういうこと、と解釈していいだろう。自転車を松の木裏に無理やり寄せ、ガクラン姿の夏木はまず秋世をにらみ据えた。受けるしかないので黙っていると、次に視線を水口へ向け、「話す相手は奴だけだ。お前はさっさと帰れ」

どすの利いた声で言い切った。当然すねる水口の姿あり。

「そんなあ、俺だって、言うことあるってのに！」

「時也にも同じこと言われたけど置いてきたんだ。あきらめろ。これは男と男の話し合いだ。ぐちぐち言うんじゃない！」

どうやら夏木、水口をファンクラブ会員に迎え入れる代りに、自分の手下として使っていたに違いない。学年トップ頭脳を持ち「水口病院」のお坊ちゃまたるすいくんをパシリにする夏木宗、あっぱれなり。

「悪い、すい、お前とは後でちゃんと落とし前つけるから、安心しろよ」

わざとやさしい声で秋世も続けた。両方の頬がぼっこり膨らんでいる。さんざん悪言葉使っていないながら、やっぱりこいつは「D組の赤ちゃん」のまんまなのかもしれない。夏木がいなければ爆笑していただろう。

もう少し砂利路から離れたところで、夏木とは話した方がいい。顔の形、歯の一、二本折られることは覚悟の上。

しばらく殴り合いのけんかはご無沙汰だったし、勝ち目はないだろう。

すべて受け入れよう。

「ちくしょう！ 嘘つき野郎があ」

「それとだ、忘れんな、明日絶対来い！」

半べそかきながら砂利路の向こうへ去っていく水口を二人で見送った。

「邪魔もんは消えたってことでだ、南雲」

完全に第三者の気配が消えた段階で、ようやく夏木は口を開いた。「お前、俺に言いたいことあるんじゃないかねえのか」

「あれ、もう聞いたんじゃないっすか？ 水口からいろいろと」

夏木がわざわざ、青大附中テリトリーまで足を運ぶということは、それなりに重大事件なのだと判断したからだろう。途中経過は彰子がいりいろ説明したのか、それともパシリ・水口がしゃべったのか、どちらかかと思う。どちらにしても、喜ばれる話ではないはずだ。

「それをそのまんま、信じていいのかよ、あほんだらが」

まだ波打たぬ言葉だけが流れた。夏木も修学旅行前に脅しを掛け

た時とは、ずいぶん雰囲気が変わっている風に見えた腹の中に大量の怒れる火の玉を抱えて自爆させたような雰囲気。

「お前、まじか」

どうせ半殺しの目に遭うのなら、早い方がいい。

秋世はゆつくりと言葉をつないでいった。感情にできるだけ添うように。

「修学旅行中の彰子さんにかかわるごたごたあつたろ。俺、あの時彰子さんちで何が起こったのか、彰子さんの父さんがどうしてぶっ倒れたのかとか、全然知らないんだ」

ぎろんと瞳が動いた。

畳み掛けるように秋世は続けた。

「別に、聞く必要もないし。聞きたいとも思わないし」

夏木は無言だった。ガ克蘭のまま、両腕を組んだ。

その腕を思いっきり動かしてやりたかった。

「彰子さんのことが、どうでもよくなったんだ。俺」

止めを刺したかった。

「フアンクラブから、抜けるわ」

とことん、悪い奴になればいいんだ。

とことん、どぶくさい奴になればいいんだ。

とことん、踏み潰されればいいんだ。

それが本来の俺の姿なんだ。

じっと見据える夏木の顔に、じんわりと汗が噴出してきた。

顔だけ太陽に見えた。

何かが脳を沸騰させているのだろう。怒りなのか、形にすること出来ないほどの感情が渦巻いているのだろうか。

秋世がおそろおそろ見やると、夏木はあごでぐいと突き出すようなしぐさをした。

「なんか？」

「訳があるなら、言え」

「花散里の君ファンクラブ隊長たる奴の性格上、即、鉄拳をお見舞いされるのは計算済みだったのに、なぜそうしないのだろう。秋世には夏木の真意が読めなかった。仕方ないからそれを、言うしかない。」

「言つとくけど、彰子さんはちつとも悪くないんですよ。ええほんと。俺がすべて何から何まで悪い。それどころか、俺なんかが近寄るなんてとんでもないって感じのミス・パーフェクトだと思ってます。嘘じゃないし。『いい人』ほんと、今この一瞬においても、彰子さん以上の人はいねえって思いますよ」

「いい人」。

喉を熱くただれさせるような一語。足元の青草を引きちぎり、ぱらりと落とした。

「俺も本当は、『いい人』でいられたらずっと、ファンクラブの隊員でいられたんだろうなあ。すっげえむかつくくらい、今までの俺は『いい奴』になろうって思ってたんですよ。彰子さんにふさわしい男になりたかったから。けど、もう戻れないんだよなあ」

空を見上げた。緑の木々が伸びている先に、青い空が広がり白い雲が浮かんでいる。

「あのさ、隊長。俺思うんだけど、こういう青空って今の俺らにはすごく気持ちよく感じるんだけど、その一方で雨が降らないからってことで日照りになっちまってる場所もあるんだよなあ。水不足でどつかの地域、給水制限出ているってニュースでやってたし。けどそんなの俺ずっと気づかなかったんだよなあ。俺ひとりが何も知らなくて楽しくすごしているその影で、毎日酷い目に合わされた夢をみてうなされている子だっている。そんなことに、どうして俺今の今まで気づかなかったのになって、そう思うわけ」

彰子の顔は思い浮かばなかった。代りにクラスメートの立村や東堂が、するするっと記憶の隅から浮かんでいく。かつて付き合った女子たち、そして水菜さんのひと時も。

秋世は、「夏木」と呼びかけた。

「もしさ、自分が犯罪者だったとしたら、どうする？」

全く夏木は身動きしなかった。

「万引きでも、痴漢でも、なんでもいいさ。自分がどう考えたって『いい人』だって思えない時にさ、それでも信じますなんて言われたらさ、どうする？」

なんでこんなこと、元恋敵なんかにしやべらねばならないのか。自分を押さえられない。

「自分が有罪だってわかりきってるのにさ、見え見えなのにさ。『あきよくんはいい人よ』って、ずっと言われてみるよ。俺、どうすりゃいいのさ。実の妹にスケベなことしたりとかさ、年上のお姉さんたちとホテルで遊んでもらったりさ、そんなことつらつとした顔でやってる俺がだぜ」

ここでどうして殴りかかってこないのだろう。さらに、激しく叫びたくて、舌がうねる。

「彰子さんは完璧なんだよ。俺、彰子さんと付き合ってきていつも思ってたよ。俺がさんざん前に馬鹿やってたから、そのとばかり受けてかなり嫌がらせされて、どうしてもいつも笑顔でいられるんだろうなって。今だってそうさ。ほんと、彰子さんってどうして傷つかないんだろうなあって、不思議でなくなくてさ。今まではそんなの全然気にならなかったよ。修学旅行が終わるまではさ。いきなり修学旅行で訳わかんないまま帰されても、誰も責めたりしなかっただろう？ 本当の気持ちなんて絶対見せないようにしてしてるよな。そういうところが俺めちゃうくちや好きだったんだよ。ほんと、夏木、そのあたりわかるだろ？ 『世の中の人はみんないい人ばかり』って断言する彰子さんの性格のよさ、俺は大好きだったんだよ」

「世の中の人みんな、いい人ばかり、か」

夏木が呟き、すぐに口を結んだ。

「そう、彰子さんの口癖だよ。どんなに嫌がらせする奴でも、悪口言う子でも、本当はみんな善ばかり、悪なんてない、そう言い張ってるんだよ。俺も前はそう思ってたからな。けど、人間誰だってそうだけだよ、裏表があるんだよな。どんなに俺の前ではやさしい人だとしても、影では人殺しみたいなことしてたりするんだ。『いい人』なわけねえじゃん！ どっかでみんな、嫌ったり馬鹿にしたり軽蔑したり、してるんだよ。嫌いな奴には蹴りを入れたり、嫌がらせしたらぶん殴ったり、みんなそういう感情、どっかで持ってるんだよ」

「裏表か」

「世の中の人間がすべていい奴だったらいい。俺だってそう思ってたさ。俺はその時まで『いい奴』だと思い込んでたおめでたい男だったからなあ。けど、その言葉ってさ、いい奴になりたいんだけど悪い奴になっちまう奴、いい奴のつもりなんだけど悪い奴、そういう連中を跳ね返すんだよな。俺も自分がそうなるまで想像したことなかったし」

秋世は首を振った。これ以上呟くと彰子の悪口になってしまう。

それだけは避けたかった。

「夏木、水口が何を報告したのかはわからんけど、今回は単に俺が彰子さんをずたずたに傷つけただけなんだ。殴られて当然、それは重々覚悟してる。俺は彰子さんが思っているような『いい奴』なんかじゃないんだ。彰子さんのようなミス・パーフェクトになれなくてみっともない姿をさらけ出してる連中と一緒にいる方が、俺は楽だっってことに気づいただけなんだ」

夏木は黙りこくっていた。

何かを言い足そうなのはわかる。顔が限りなく燃え滾っているから。

ただ、押さえようとする風に小さく喉を動かしているだけだ。

こくつと喉仏をうねらせ、秋世に一步、また一步と近づき、ぶっこわれんばかりの眼力でにらみつけた。

秋世もそれを、受け止めた。

「南雲」

来るか。

ぎゅつと目を閉じた。足を踏ん張り、来るはずのこぶしを受ける準備をした。

何も来なかった。五秒数えた。汗がこめかみから流れるのを感じた。

「よつくわかった」

喉の奥から出すような、がらがら声が聞こえた。

「お前が言いたいことは、よつくわかった」

俺は、お前らのマドンナをぼろくそき下ろした男だ。ほら、早く。

「それでも、今だけは、彰子の側を離れないでいてくれ」

耳を疑った。

時空が一瞬移動したかと思った。

目を開けて、目の前の夏木が汗だらだらになって突っ立っているのを見た。

「今、なんと？」

「卒業まででいい」

夏木は繰り返した。

「青大附中にいる間だけでいい」

ひざを着き、夏木は両手を草の上に置いた。秋世が思わず見下ろしたガクラン姿には、でかく汗染みが浮かんでいた。

「彰子を守ってやってくれ」

秋世の足元に、静かに夏木は頭を下げた。

おい、これって、世間一般で言う「土下座」って奴じゃないか？

「夏木！」

花散里の君フアンクラブ隊長が確かに、秋世の足元に這いつくばっていた。

秋世は、目の前で信じ難い姿をさらしている夏木を、力いっぱい見下ろした。そうしないと、船で激しくゆられた時のようにぶっ倒れてしまいそうだったから。

第二部 28

本気を出した男への、本気の約束だ。

夏木が顔を上げると同時に、秋世は片ひざを着いた。

「あのさ、夏木」

言葉が続かない。

「なんで、そんな、するんだ？」

ガクランから強烈な汗の匂いが漂ってくる。太陽に似た夏木の頬から汗が流れていた。首を振った。

「俺じゃあ、やれねえ」

ぼそりと呟いた。

「俺じゃ、彰子たちを守れねえんだ」

「どうしてなんだよ」

純粹一途に彰子のことを想っている男は、現段階において秋世の知る限り、夏木しかないだろう。こいつ以上の適任者はいないはず。

夏木は鼻を思い切りすすり上げ、秋世に「立て」といわんばかりにあごで前を差した。片手でしっしと追い払うしぐさをした。

再び秋世が立ち上がる。見下ろす形にどうしてもなってしまう、落ちつかない。

お代官様にお許しを請うポーズに見えるが、もちろんそういうせりふは夏木から出てこなかった。

「お前も知ってると思ってたから言わねかったけどな。去年の五月から今までずうっと、なら先生の家、近所の変人どもから嫌がらせされてるんだ」

「それは聞いたことある」

ほんとに、ちらっとだけ、彰子から。

「発端はみんな俺だけだな。俺がやらかした暴力沙汰がきっかけなのに、なぜか全然うちには手を出してこねえんだ。たぶん怖いんだろな。うちの父ちゃん団体にすこまれたら木っ端微塵だと思ってるんだろな。そのくせ、弱い方にはたかつてくるってわけだ」

夏木の父は確か、右翼の活動家だと聞いている。日の丸の旗をつたてた黒い車。サングラスをかけた、かなりアウトローな雰囲気

の男だった。

「庭に毛虫投げ込まれるわ、変な脅迫状送りつけられるわ、無言電話はするわ、ほんととお前らひまだよなつて言うようなこと、平気でしてやがる。俺と時也、あとその他の連中集めてパトロール隊こしらえて片付けているんだけどな。全然やめる気配ねえよ」

唇をかむようにして、また続けた。

「なら先生も学校の中で、すぐえ悪口言われてるみたいでさ。生徒じゃねえよ。先公同士でだぜ？ よくわかんねえ団体まで動き出してな。うちの父ちゃんとこじゃねえ。けど、似たようなもんかな。けどそんなのどうでもいい。なら先生は学校で何かあるとつるし上げられ、悪口の書いたチラシをばら撒かれ、近所の伝言版に名指しで悪口かかれるんだ。知ってるか？ 彰子のうち近くで放火あったの。すぐ消しとめたけど、ありゃあ絶対、狙ってたよなつて巷じゃ評判だ」

「どうしてそんなことするんだか」

「俺をかばったからだ。簡単だろ。学校側でいろいろと思想のややこしい問題が被ってて、しかも俺は、右翼の息子だ。右でも左でも所詮うちの父ちゃんのことだろ？ 息子の俺は直接関係ねえだろ？ なら先生、俺をかばうはめになっちまってから、こんなことになっちまった」

「それで、倒れたのか」

心労が祟ってなのか？ そう考える方が自然だ。夏木も頷いた。

「そういうことだ。心臓がすげえ悪くなつてたけど、学校休めない
つてことでなら先生、ずっと無理してたんだって父ちゃんが言つて
た。職員会議やらPTAやら、くだらないことあげつらつてなら先
生をいじめてたら、いきなり心臓押さえて苦しみ出したつて言うん
だ。すぐ彰子に知らせようつてそりゃあなるだろ、いくら修学旅行
でも」

確かに。

「なら先生、彰子がせつかく修学旅行楽しんでるんだから、そんな
こと知らせるなつて言つてたけどそんなわけいかねえよ。父ちゃん
がたまたま手、空いてたからすぐ車出して船乗つて向かつたつてわ
けだ。男として当然のことじゃねえか？ 南雲」

「それは確かに」

「だろ。けど帰つてみたら、なら先生の手術が成功していて意識も
回復してて、すぐに彰子を旅行へ帰すようにつて。なら先生が命令
したんだ。一生に一度の修学旅行なんだから、少しでもみんなと過
ごせつてな。どっちにせよなら先生死にかけてたんだ。なのに、平
気で旅行したがる彰子じゃねえよ。最初はいつだつていやがつた
けどさ。けどなら先生は絶対にそうしないとだめだつて言い張つて、
かえつて言うこと聞かないと今度はバイパス手術になるぞつて脅か
されて、仕方なく戻つたんだなら先生、いい人過ぎるんだよ」

だからか。

彰子がなぜバスの中で待つていたのか？ 謎が解けた。

「なら先生、あんなおっさん、いねえよ。彰子の父ちゃんだった時
から知つてるけどさ。ほんと、俺のこと、変な眼で見ねえ大人つて
そんないねえよ。なら先生だけだつて。あんなにさ、うちの父ちゃ
んのことも差別しないでさ。ムシヨに父ちゃんが入つていた時も差
し入れしてくれたりしてさ。そんな人がだぜ。なんでこんな嫌がら
せされねばなんねえんだよ。父ちゃんだつてすげえ悔しがつてるっ

てのによ」

言われた通り、彰子の父は穏やかな人だった。秋世に対してもやはりそうだった。

掛け値なしの「いい人」だった。

「あいつも、なら先生も、おばさんもいっつも言ってるさ」

夏木は彰子の口癖を繰り返した。

「世の中に悪い人なんていない。だから責めちゃいけないってさ」
一呼吸置き、また燃え上がりそうだなざしで秋世を見上げた。
ちりちりと焼かれそうだった。

「南雲、お前の言う通りだよ。この世の中は、ろくでもねえ連中のすみかだってこと、俺が知らねえわけ、ねえだろうが」

世の中に悪い人なんていない。

彰子の言葉を思い出す。

重たい石が胃袋にどかんと納まった、そんな居心地の悪さがある。

「じゃあなんか？ お前に嫌がらせしてる奴は彰子、ほんとにいい奴か？ そう聞いたさ。けどあいつにとっては、自分の周りにいる人間が悪い奴だったら困るんだよ。絶対にいい人でなくちゃいけないんだよ！」

叫び声に近かった。夏木の言葉。

「あいつはいっつもそうだ。小学の頃だってさ、あいつのことをデブだとかとろいとか言って馬鹿にする女子は結構いたんだ。彰子はそんなの気にしねえでさ。知らん振りするんだよ。普通だったら一発ぶん殴ったりするだろ？ それをしねえで、相手にも都合があるんだと決め付けたようなこと言いやがるんだ。こいつ少しばかりやねえかって最初は思ったさ。お前のようにな。けど、違うんだよ」

秋世をじっと見据えた。

「彰子は、『いい人』だらけにすることで、戦ってるんだ。昔も今もずつとだ」

いい人だらけにすることで戦う？

言われた意味がよくわからない。

「だからな、俺は決めてるんだ。彰子がそう思いたいんだったら、どんなにとんでもない悪人ばっかだったとしても、俺の眼の届く範囲内では百パーセント天国にしてやるってな。それしか俺出来ねえんだよ」

「いや、だって俺、もうフアンクラブ抜けたわけであって」

言葉をはさむと、かぶりつくようにさえぎられた。

「あいな、南雲、よく聞け」

また汗がたらりと一滴。

「俺は中学卒業したら、父ちゃんのいる会に入るんだ」

「会？ なにそれ」

意味がわからず秋世も問い返すと、

「『君が代』がなりたてて、天皇陛下万歳ってやってればなんとかなるってさ。父ちゃんも反対してるけど、俺はもう決めてるんだ」

恐ろしいことを言う。秋世には右も左もよくわからない。それに

「会」に入るということは、高校に進まないってことだろうか？

「それ、まだ未定だろう？」

「他の連中がなんと言おうが俺はやる。そんな奴がだ。彰子の側にいていいとお前、思うのか？」

真剣なのは伝わってくるのだが、なんだか間抜けに見えてくる夏木の顔を、秋世はまじまじと見つめた。

「今の俺は、まだ何にも思想なんたらに染まっていいねえ、単なる中学坊主だ。だから彰子やなら先生たちと一緒に『いい奴』の顔して混じってられるってわけだ。彰子を青大附中へ迎えに行っても問題はない。けど、一度『会』に入っちゃったらもう、世間一般では父

ちゃんと同じ扱いをされるんだ。そんな奴が彰子の周りをうるついでみる。さらに嫌がらせがエスカレートして、今度は家燃やされるかもしれねえぞ」

「俺はあまり思想のどうたらこうたらはわからないけどさあ、少なくとも俺はそういう差別意識もちたくないなって思うんだけど」

「売るせえ、黙って聞け！ とにかく、これ以上俺は彰子に近づくことができねえんだ。守ってやることもうできねえんだ！」

夏木は言葉を切って、鼻をすすった。

「卒業しちまってからならどうにでもなるさ。あのやぶ医者息子も、なんだかんだ言って彰子にベタばれた。俺がなら先生の事情をひとくさり説明したらな、すげえ納得して、本気で彰子を医者養成高校に進学させるよう手伝うって言いやがった。ま、今はまだまだちゃんまい奴だが、俺に弟子入りするって言い張ってるからこれからしごけばなんとかなる」

「すい、がかよ。弟子入り？」

「そつだ。ま、もしその学校に滑ったとしてもだ。青大附高に進んだ時のことを考えて、時也が行く。そうしたらお前もさっさと彰子から縁切ったつていい。あいつの方がお前よか、本気で彰子のことを考えてるからな」

秋世を皮肉つぽくにらんだ。

「けど、今の段階では、南雲、お前しか彰子を青大附中で守ってやる奴はいねえんだ。水口はまだまだ使えねえし、俺は青大附中には手出せねえし。噂によると彰子にまだちよつかい出しているばかり女子どもがいるって聞け。きつと彰子は靴の中に画鋲を一箱詰め込まれても『いい人』だって思い込みたいんだろ。うな。そうなんだよ、あいつはそうやって、戦ってるんだよ。死ぬまであいつ、すべての人間を『いい人』だと決め付けるしか、できないんだ」

戦ってる？

逃げてるんじゃないのか？

問い掛けたかった。口の中で噛み砕いた。

『いい人』って決め付けて、自分の都合がよいように解釈してるだけじゃないのか、夏木。

「お前が彰子にあれだけ熱を上げておきながら飽きたっていうんだつたら、普通は顔の形が崩れるくらいぶん殴ってやるのが筋だ。だがな、俺もお前がなんで彰子に嫌気さしたのかはわからねえでもねえよ。俺もたまにぶちぎれる時あるけどな」

「嫌いになったわけじゃないけど」

夏木は聞こえないふりをしたようだった。

「ただの友だちだったら問題ないけどさあ」

「だったらそれでいい。それでいけ！」

両手で草をむしるようなポーズを取り、夏木は一度顔を下げ、そこから持ち上げるようなポーズを取った。どことなくへびに似ていた。

「あいつはお前のことをまだ友だちだと思っててるんだな。だったらそれに合わせる。好きになれとは言わない。ただ嫌いな顔だけはいらないでやってくれ。あいつが今、ぎりぎり壊れる寸前まできていることは俺も見えていてわかるんだけどな。彰子本人が全然平気の平左って顔をしてやがる。自分で自分がわかってねえんだよ。だから、今まで通り友だちって顔してやってくれよ、南雲。高校で縁切っちまってもいい。水口か時也か、どっちかが彰子を守ってくれる時まで、あと半年、頼む、今はお前だけなんだ」

秋世はそのまま夏木の顔を見下ろしていた。なんだか居心地が悪くて、ゆっくりとしゃがみこんだ。つま先で身体を支えるのもしんどくてひざをついた。夏木の眼にかすかな涙が浮かんでいるのを見つけ、そのぬめった光に見入った。

夏木、お前だけだ。

彰子のことを隅から隅まで見尽くして、その上で守りたいと叫ぶ

奴は。

かつては自分も、夏木よりも深く彰子を想っていたと信じていた。でも本当は、小指の先ほども夏木に追いついていなかった。

許せない彰子の美德。「世の中の人はみんないい人」、その言葉を受け止めてはつきり拒絶することが出来る奴なのに、それでもすべてをかなぐり捨てて彰子を守りたい、そうはつきり言い切ることが出来るのは、きっと夏木だけだ。

どうしてそこまで想えるのだろうか？

秋世はもう一度夏木の汗まみれな顔を見つめた。

こいつ、本気だ。嘘ついてない。

鋭い目つきも、汗まみれのガクランも、半ば泣きそうなのその瞳も。こいつには、嘘がない。

「わかった、夏木。引き受けた」

わざと気取った口調で秋世は答えた。息を止めたまま夏木は秋世を見返した。

「けどな、それは俺が彰子さんファンクラブに参加したいからじゃあないんだ」

嘘のない言葉を、秋世も発したかった。

「夏木、お前の男気に惚れたのさ」

「てめえざけんなよ！」

泣き顔っぽくゆがんだ表情には気づかない振りをした。

「いやほんと。だって俺、本気の奴には男女関係なく惚れちゃうのさ。あ、そっち系統じゃあないから安心してくだせえな」

もう一度両膝を着き直した。気色悪そうに夏木が視線を逸らし、舌打ちした。

「夏木の言う通り、彰子さんは俺を『ファンクラブの一員』としか観てねえよ。ほんととはそっちもさっさと抜けさせてもらうつもりだったけど、夏木がそこまで言うからには、俺もとことんお付き合いさせてもらいまっせ。今まで通りの友だちづきあいを続ければいい

だけなら、そんなの簡単だ。夏木の、本気の、相手として。俺はとことん彰子さんを青大附中の毒牙から守らせていただきますぜ。卒業まではきっちりやります、安心しろよ」

しばらく夏木は口を半開きのまま秋世の言葉に聞き入っていた。

「南雲、いいのか」

頼みこんだのはそつちだろ、そう言いたいのを我慢して秋世は取っておきの笑顔で答えた。

「男に二言はない。俺は本当の意味で、彰子さんのガードマンになる」

お互い息を合わせたわけでもないのに、同時に立ち上がった。

「すまない。彰子を頼む」

夏木の言葉にもう一度秋世は大きく頷いた。

ロボットっぽい礼をして背を向けた夏木を秋世は見送った。

ひざについた青い汁を指先でつまみ、こすってみた。染みが抜けそうにない。きっと夏木のガ克蘭がびしょびしょになったあの汗も、簡単には湧かないだろう。

小学校の頃、血判書をこしらえたことを思い出した。あの時は指の腹をつんと針で刺し、血をにじませて何かの約束事をつづり、拇印を押したはずだった。男同士の友情の証だった。

似たものが、確かに残っている。

本気を出した男への、本気の約束だ。

決して、「世の中の人はいらない人ばかりよ」と白々しくのたまう女子のためではない。

惚れた女子を本気で守ろうとした男子への、畏敬の念だけだった。

夏木の想い人を守るため、ならば。

第二部 29

もう一度、ばあちゃんに会って話したいんだ、俺は。

学校へ出発する前に、秋世は仏壇の前に正座し、合掌した。

父はすでに事務所へ出かけていたが、母だけが食卓の片付けをしている様子だった。

朝食を要求する以外何も話すことはなかった。

秋世と祖母との対話を邪魔するものは誰もいなかった。

ばあちゃん、俺のために、全部悪いことかくしてくれたって本当なのかなあ。

信じろってみんな言うけどさ。俺全然覚えてねえしさ。ばあちゃん、みんな知ってるんだろ、俺が本当は何をしでかしたのかってさ。

まぶたを閉じて、秋世はうす赤い視界から祖母との思い出を蘇らせた。

まだ入院生活が長かった頃、ひとりでベッドにねんねしたまま、TVアニメに出てくる超合金ロボットをだっこして遊んでいたこと。「秋世が元気になったら、もっといっぱい買ってあげるからね。ちゃんとお薬と検査がんばって、身体げんきげんきにしようねえ」ある時は、「秋世が元気になったら、おばあちゃんと一緒に世界一周しようねえ」とか。

枕もとで何度もささやいてくれた祖母の言葉が、じわじわと浮かび消えていく。

ずっと忘れていたことばかり、線香の匂いに引き出されるように、

湧いてくる。

もう二度と、ばあちゃんは戻ってこないんだよな。ならもう二度と、本当のことなんてわからないんだ。俺には。

妙子さんや教授が話したことが本当のことなのか、昭代の精神状態を不安定にした張本人が自分なのか、どうしてもひっかかりを見つけないままだった。結果として昭代は、妙子さんたち家族として迎えられたのだから、祖母に厭われたままこの家で育つよりも幸せだったのかもしれない。昭代をとことん嫌悪していた祖母や、えげつないいじめをしたらしい兄貴の自分と一つ屋根の下過ごすよりは、まだましだろう。

ばあちゃん、なんでさっさと死んじゃったんだよ。

しばらく遺影を見上げていた。秋世の中学入学式時に撮影したカラー写真だった。

いわゆる葬式用の写真といえば、白黒で喪服をしつかりまとった、下手したら指名手配写真に近い表情のものと相場が決まっているはずなのに、なんとなく写真だけが浮き上がっているようだった。まだ祖母は生きている、少なくとも幽霊としてその辺に座っているような気がした。祖母の霊ならちつとも怖くない。むしろ、早くお盆になって、たくさんのお化けたちと一緒に遊びに来てほしいくらいだった。

「秋世、そろそろ行かなくていいの？」

母の遠慮がちな声が飛んだ。

もう朝早く行く必要ねえよ。

彰子を迎えに行く必要はなくなったのだから、飛び出さなくてもいい。

夏木との話し合いでは「彰子を守る場所は青大附中」のみなのだ

から。

母と顔を合わせているのもうんざりなので、時間に追い立てられるような振りをして秋世は家を出た。それほど青大附中から遠い場所ではないので、のんびり歩いて大丈夫だ。委員会やら部活動やら、準備で忙しい連中が自転車で脇を通り過ぎていく。知り合いには愛想よく手を振ったりしていくうちに、また声をかけられた。振り返らなくても水菜さんだとすぐにわかった。

「南雲くん、おはよ！」

「朝もはよから、ご苦労さんです。あれ、水菜さんって部活やってたっけ？」

水菜さんは自転車から降りると、秋世に並んで歩き出した。他の女子たちがちらと秋世たちを眺めてひそひそやっているのが見える。またあとで面倒なことになりそうだが、まあいいかと流しておいた。高校生の雰囲気はどことなくまめかしい。

「バトン部はねえ、体育系だから厳しいのよ。そろそろ秋の新人戦も始まるしね。応援たいへんなんだ」

「で、柔道部の彼氏にも応援しちゃうってわけっすか」

軽くつつこんでみた。いつもながら凹凸のはつきりした身体つきだとチェックしている自分がいた。もし街で出会っていたら、あっさりホテルへお付き合いしているタイプかもしれない。そんな眼で見ている自分に一瞬恥じた。

「それにしても、南雲くん、最近元気ないってもっぱらの噂だけど」「やっぱわかりますか。悩めるお年頃なもんで」

喪中だとかまかすつもりだったけれど、なぜか水菜さんにはにっこりと、

「そろそろ、高校の進学時期だもんね。南雲くんはやはり、青大附高へエスカレーターでしょう？」

「もちろん、受験しなおしてどこが拾ってくれますって。面倒なの俺、やだし」

ほっとして笑顔を貼り付けた。しめっぱい話はやっぱり、朝っぱらからいやだ。

「そうかあ、じゃあ、来年一年は学校一緒なわけなんだね。私もあと一年はお世話になるわけだし」

ふと思ひ立ち、秋世は付け足した。

「あのー、もしよかつたらんだけど、これからもいろいろと先輩として、相談に乗ってもらってほしいんだけどなあ」

「あらら、ずいぶん弱気ね、どうしたのよ」

顔では笑っているけど水菜さん、声が上ずっている。このあたりの理由を問い詰めたいけれども、あえて何も言わず。

「俺も人生、いろいろ悩めるお年頃なんですよねえ。ぜひ、先輩としてご教授賜りたいなあ」

重たくならないようにおどけて返してみた。その辺を読んでくれたのかどうかはわからないけれども、水菜さんはブレーキにかけた親指をつんと立ててみせた。

「それにしても、こういう風の吹き回し？」

「いやなんとなく、ほら、今日みたいな感じで、帰り道とかどうですか？」

笑顔で流した。

シーソーみたいにあがったりさがったりしているバランスが、水菜さんと話すことでうまく取ることができたような気がした。

三年D組の教室に入ると、珍しく東堂が机の上に腰掛けていた。

こいつの自宅も学校からそれほど離れていない。自宅との距離と遅刻ぎりぎり率は反比例するもので、東堂もいつもだったら鐘の鳴るすれすれに飛び込んでくる奴だった。

「よお、東堂大先生！ 早いつすねえ」

「相変わらずハイテンションだなお前」

閉まったままの窓ガラスを一気に開け放った。教室の中よりはひんやりした風が流れ込んできた。少し頬に落ちる日光がまぶしくて

目を細めた。

この前彰子と激しくやりあったことについて、まだ東堂とは話をしていなかった。東堂からしたら、彰子は保健委員の相棒だし、あまりトラブルを起こしたくはないだろう。しかも秋世の「恋人」であるならば、あえて触れないようにするかもしれない。もう「恋人」ではないという意識の変化を説明するのは、秋世も面倒くさかった。ただ、隠し立てするのはもっとしたくないことだったし、一通り事実だけ伝えておいた方がいいだろうか。

「東堂、そっぴゃあ、あの彼女、どうしてる？」

「ああ、相変わらず。それと、どうも」

よく話が繋がらない返事が返ってきた。なにが「どうも」なのだ？

秋世は窓辺のレール上に昇って、足をぶらつかせた。

東堂は鬼瓦みたいな顔でにらんだ後、いきなり破顔一笑、ピースサインをしてみた。

こういう奴ではない。わざとおどけてみせるような奴ではない。なにかがあつたはずだ。

「おいおい、どうしたんだよ」

「実はさ、お前のハニーにさ、今夜の七夕誘われちゃってさ」

「はあ？」

ハニーという言葉の違和感に苦笑しつつも秋世は相槌を打った。

「おつとிட்டか、奈良岡ねーさんから電話がかかってきてなあ。七夕の夜、晴れたら仲間内で花火大会やるから、あいつを連れてきなつてな」

「あいつって、お前のハニー？」

「付き合ってもいねえのに、なあ」

それでも鼻の下を伸ばしているところみると、かなり嬉しくはあるのだろう。おめでたい奴である。拍手してやった。

「水口も来るし、ねーさんの小学校時代の友だちも来るし。うちのクラスの女子はみんな用事があるから来ないとは言ってたけどなあ。けど、男女比はちゃんと半々だし、ねーさんのかーさんがしっかり

と監督してくれるから親たちにも安心つてわけだ」

「ふうん、俺は行く気ねえけど」

秋世はわざと何気なく伝えた。

「それは意外。なんでだ？」

「まあいろいろと」

少し間を置いてから、事実関係だけ教えておけばいいだろう。秋世はあえてごまかした。気づいているのかいないのか、東堂はひとりでしゃべり続けていた。

「ねーさん言うには、女子のまっとうな友だちがあいつには少ないから、ここいらで少し仲良しを増やしてやったほうがいいんじゃないかってことなんだ。正直だよなあ、ねーさん。ほんとにはクラスの女子たち集めてあいつをめんこがってやろつてことだったらしいけど、そんなことされちゃあ迷惑だって誰かさんに意見されたらしくて、素直に反省したんだと」

「誰かさん、ねえ」

当てこすられているのかどうかもわからない。

「その、どこの誰かさんには感謝感謝。まずは男としての面子が立っただってことよ」

東堂は一人でしゃべり続けた後、時計に目を走らせた。

「そろそろ誰か来るよな、あ、そうだ。奈良岡ねーさん言うにはな、今夜の花火大会、飛び入り参加も大歓迎なんだとさ。じゃあとりあえずそんなところで」

入れ違いに立村が入ってきたのを確認すると、東堂はもう一度ピースサインを送って教室から出て行こうとした。

「ちよつと待てよ」

秋世は飛び降りた。東堂に近づいた。ちょうど立村も困り顔のまま立ち尽くしていた。タイミングが悪かったのだろつ。でも言わずにはいられない。

「東堂、それ、お前本気で行きたいの？」

「行きたいもなにもOKしちまったから」

「当然、断る権利だってお前にあるんだぞ」

「あるったって」

そうか、東堂はまだ知らないのだ。秋世が彰子にすっかり冷めてしまったことを。付け足すべきかどうか迷った。まだ教えるべきではないと心の中で判断した立村が側にいるだけだしどうするべきか。秋世は首を振って余計な思惟を断ち切った。

「あのさ、東堂。お前そういう風に押し付けがましくされるの、ほんととは好きじゃあねえだろ。惚れてる子にくつつくのは好きだけど、同級生なんか余計なお世話されるのって、はつきり言っただろう？ 二年來の長いお付き合い、そんなことも気づかないほど俺おばかだと思ってたか？」

完全に凍り付いている立村に、秋世は付け加えた。

「りっちゃんもそう思うだろ？」

驚き顔で東堂が立村を見下ろした。申し訳なさにうつむく立村に、秋世は畳み掛けた。

「りっちゃんが一番わかってるはずだよな、善意の押し付けってほんと、ぶっころしてやりたくなるくらいだって。無理やり感謝しろなんて言われても、とつてもだけどんなことできねえよな」

すつと立村が顔を挙げた。東堂へ向かいゆつくりと頷いた。

「東堂、お前、もしかして彰子さんが俺の彼女だったから、気使ってくれてるんだったらそんな心配無用だぞ。野郎同士なに遠慮することあるかよ。向こうがいいことって思っても、俺たちにははた迷惑だつてこともあるんだ。きっぱり断っちまえよ」

状況を飲み込めずに数回目をぱちくりさせつつ、立村が秋世と東堂を交互に見やった。

かすかに外から生徒たちの通り過ぎるしゃべり声が聞こえてきた。三人の沈黙が続く中、先に口を切ったのは東堂だった。

「南雲、サンキュ。麗しき友情をありがとよ」

かすかに笑顔を浮かべた後、立村にも視線を投げ、

「別に俺は、ねーさんのすることが善意の押し付けとは思わないけどなあ。ただ、できたら俺と向こうだけってのは勘弁してほしいってのが本音だな。ねーさんはすげえ気遣いの人だし、きつとあいつにもよくしてくれると思うけど、なにせまだ、不良化の兆しプリントそのまんまの顔してるだろ？ かえってあいつがいじけちまうような気がしてさ。俺がべつたりしてても絶対嫌がるしな。だから、もしよかったら誰かかしらうちの学校の連中とつるんでほしいなんてのが本音だったわけ」

「つまり、意図するところは？」

立村が投げかける。待つてましたとばかりに東堂がにやつと笑う。「南雲、お前、飛び入り参加してくれねえかな？」

合点がいった。東堂は本音を言えば、例の彼女のために、断りたかったというわけだ。

そりゃあそうだろう。秋世も奴の立場だとしたらそうしたに違いない。

すでにラブホテル近くの喫茶店で客待ちするような子だ。彰子の友だちがどんなにいい子ぞろいであっても、かもし出す空気が違うのはどうしようもないだろう。いきなりなじめるかどうかは未知数だろう。それを考えて彰子は誘ったのだろうか？ 単純に「私の友だちはみない子ばかりだから大丈夫！」と判断したのだろうか？

なんもわかってないんだ。あの人は。

そんな中でひとり孤独感を感じ、自分が救い様のない出来そこないなのだと感じる時、その惨めさまで彰子がフォローできるとは思えない。いくら彼氏未満の東堂がいるとはいえ。

俺に何ができるんだろうな。

廊下のざわめきが増えてくる気配あり。すぐに決断した。

「わかった、俺も一緒に付き合うわ」

東堂が秋世の片手を取り、さりげなく握手してきた。軽く握り返した。

席に戻ると一気にクラスの連中がなだれ込んできた。明るく「おはよう！」の繰り返しに、秋世は適当に答えていた。立村の隣にさつさと座り、朝学習のプリントをざっと眺めた。今日は国語の書き取りだった。まあまあ、なんとかかなるかなって感じの四字熟語だった。

遠慮深くシャープで答えを書き込んでいる立村に、秋世はもう一声かけなくちゃという気分になった。もともと人の心に敏感な立村のことだ、先日のバトル現場に立ち会った段階で、秋世の本心には気がついていいるだろう。その辺秋世も確信ずみだった。それを繰り返したいのではない。もっと別のことを伝えなかった。

「りっちゃん、今後の規律委員会の方針を今、ちらと考えていたところださ」

他の連中に気づかれないように、会話の中身を選んだ。立村が顔をあげた。真っ白い顔で秋世を見つめた。

「委員会か？」

「そ。俺としてはこれから、できるだけ、『善意』という名でおせっかい』をなくしたいって思ってるわけなのよ。俺もいままでりっちゃんにさんざん、『小さな親切大きなお世話』ってことやらかしてきたけど、やっぱ、それって、辛いよな」

「いや、なぐちゃんがそんなこと」

唇に指を当てて黙らせた。

「俺、ずっと『いい人』でいたかったからさ、そうしてきたけど、人によってそれって大迷惑になるってことも最近自覚したんだよね。俺も氣、つけるけど、さっきの東堂先生のようなことがまた起こったら、その時は南雲規律委員長として、それなりの処置を取ろうと思ってるんだ。もし、女子がらみでりっちゃんが迷惑こうむったことがあったら、即、規律委員会へちくつてくれよな」

「なぐちゃん、お前」

言葉をとぎらせ、掬い取るようなまなざしで秋世を見据える。

「それと、たぶんりっちゃんは勘付いていると思うけど、しばらく内緒にしてくれると嬉しいなあ。俺もまだ、これからどうするか、まだ決めかねてるんだ」

立村はそれ以上尋ねることもなく、静かに頷いた。

「感謝するよ」

言い残し、再び朝自習プリントめがけてうつ伏した。

「あきよくん、おはよう！」

いつもの元気なあいさつ、一緒に腰ぎんちゃくの水口もくつついてきた。

「あれれ、今日もおふたりですか？」

さりげなく探りを入れてみた。以前だったら水口がべったりくつついてうるついているのを見て、かつとなっていた自分なのに今は穏やかに眺めていられる。旅行前・旅行後、自分に起こった心境の変化に戸惑った。昨日の今日でまだ目が三角な水口はさっさと自分の席に戻ってしまった。果たして夏木との対話について報告しているのだろうか。

相変わらず汗の匂いが漂う、脂ぎった顔の彰子。

夏木の最愛の女子。

約束したんだからな、俺は。

今まで使ってきた仮面をさつと被りなおし、秋世は聞き返した。

「水口と勉強会でもしてたんだ？」

「うん、そうだよ、すいくんナツキと仲良くなってね。それで私とすいくんが同じ高校目指してるんだって話、しててね。それ以来毎朝勉強するようにしてるんだ。すいくんいろいろ教えてくれるから、だんだん私も頭が良くなってきたような気がするなあ」

そうですか、そうか。

彰子が青大附高ではない別の学校へ進学を希望していることを、すでに知っているという前提のもと、話題に出してきているんだろ

う。秋世は穏やかに受けた。自然と、波打つものも全くなく、さらりと流せた。

「そっかあ、彰子さん別の学校に行っちゃうんだ」

「まだ合格圏内に入っているかどうかわからないから、これから準備なんだけどね」

「彰子さん、そうなると、青潟から出ちゃうわけ？」

かつての自分だったら気がおかしくなりそうだった質問なのに。

「うん、寄宿生って形になるかな」

「そっかあ、行っちゃうんだ」

淋しいな、俺。そう以前だったと言えたのに、今は、

夏木が泣くのも無理はないよな。わかる、わかる。

目の前の彰子よりも、白線ガ克蘭男の夏木へ思いが飛んでゆく。「そうそう、ご心配かけたけどね、東堂くんにはちゃんと話をしたからね。あきよくんの意見も一緒に話して、それで一番いい方法として考えたんだけどね」

先に東堂が話したことを、彰子は繰り返した。

東堂の彼女をお招きして行っ七夕会。

秋世はふんふんと聞きながら、もう一度彰子を見上げた。何も疑いのない、正しいことをしている、当然のこと、喜んでくれると信じきっている視線。かつてはこの瞳がいとおしかった。触れなくなるようなあまんほっぺも、やわらかそうな身体も。おそらく街角ですれ違っても振り返ることはないだろう。

「あきよくんは用事があるって言ってたから、無理にとはいえないけど、もし少し余裕があれば来てくれるとうれしいな。だって東堂くん、うちに遊びにくるの初めてだし、今回集まるのすいくとナツキーたちと、小学校の時の友だちがほとんどだからね。どうかなあ」

秋世はこっくり頷いた。こういう時は、素直に流すのが一番だ。

「じゃあ、もしも、空いてたら、行くよ。お誘いサンキュ！」

東堂には行く約束をしたけれども、今のところは内緒にしておき

たかった。

期末試験結果の悲惨さに頭を抱えたりしているうちに、ようやく終業の鐘が鳴った。

「東堂、お前ら先に行ってる。俺もあとで行くからさ」

秋世は東堂にちらと声をかけると、ひとり教室から出て行った。まずは着替えをしないとまずいので、家にダッシュで戻った。別の目的もある。もう一度、居間の引き出しをひっくり返して、健康保険証を掘り出す作業が待っている。気にしなくてもいいのかもしれないけれども、本条先輩に「お前、肝心なものの切られたらどうすんだ！」どやされたらやっぱり心配だ。前はへましでかしたが、今日ならば。たぶん両親も教授も戻ってこないだろう。

靴を脱ぎ捨て、秋世は素早く真新しいレモン色のＴシャツとデニムシャツを羽織った。面倒なのでいつものジーンズにただけ。アクセサリーはつけなかった。

東堂がどういうかつこしてくるか、見物だな。

街に繰り出すわけでもないのだから、ジャージでもかまわないのだが。ちらつと想像してひとりで受けて笑った。まずは今のうちにすべきことをせねばならない。居間に降りてすぐ、先日あけなかった引出しをひっくり返し続けた。ない、ない、ない。思いついて仏壇の引き出しも……まあ、まさかろうそくの並んでいる中に挟まっているとも思えないが……開けて見ることにした。線香くさい匂いの中、祖母の遺影がしかと飾ってあるのを見上げ、

ばあちゃん、悪いけど、どこにあるかなあ。

ひとつ念じようとした。

おい、あれなんだよ！

秋世は絶句した。ろうそくパックの入った引出しを閉めるのも忘

れた。

今朝まで笑顔のカラー写真で秋世を見下ろしていた祖母が、真っ黒い白黒写真に化けていた。すぐにでも「あらあら、秋世、あんたって全く悪いことしちゃだめだよ、困ったねえ」と話し掛けてくれそうな写真が、消えていた。

空気がぴちぴちと身体を締め付けてきた。中学入学式の、笑顔でいっぱいだった祖母がいない。かかっているのは陰気な表情の喪服姿でいる、一応は祖母の顔だった。

空気が身体をぴちぴちと締め付けるようだった。窓から流れるやわらかい風の音がしゅうしゅうと聞こえた。幽霊もいつけそうになり、全く何も生命体を感じない場所だった。時計の針が動く音だけだった。

むしように全身が震えた。秋世は階段を駆け上がり、自分の部屋に隠しておいた祖母の小箱を引っ張り出した。ひっくり返した。なんでそんなことをしたかったのかもわからない。母と昭代が人型に切り抜かれた写真が入っていた。初めて目にした時、手が震えて取り落としたものばかりだった。あの時と同じ動揺が今の自分に来るだろうか？ 秋世はじつと見据えた。じんじんと心臓を糸のこぎりですすられるようないざさを感じた。

妙子さんから聞いたこと、教授が教えてくれたこと、両親の言葉、すべてを思い出した。

ばあちゃんは、俺に絶対生きてほしかったんだ。

だから、一瞬でも俺が死ぬって前提で昭代をつくった母さんを許せなかったんだ。

だから、昭代のことも嫌いだったんだ。

俺のことを絶対、命がけで守りたかったんだよな、ばあちゃん。

無機質な部屋の空気が漂う。秋世は一枚一枚それをしまいこんだ。

捨てることはできなかった。

秋世を百パーセント信じてくれた祖母の気持ちが残っているから。ばあちゃん、ありがとう。俺のことを守ってくれて、ありがとう。

合掌し、引き出しを閉じた。

ばあちゃんのおかげで、俺、本当にいい奴でいられたよ。ありがとう。

仏壇の前にもう一度座り込み、鐘を鳴らし、目を閉じ伝えた。ろうそくの灯を手で払い消し、立ち上がった。立ちくらみがして世界が一瞬白黒写真にはや代わりした。すぐに色は戻ってきた。

これから先は、俺がやらかしたこと全部、自分で責任取るからさ。もう心配すんなよ。

どう責任を取ればいいのか、それはこれから考えよう。

秋世は外へ出た。結局、保険証は見つからなかった。まさか父の会計事務所内に保管されているなんて言わないだろうか。どうにかして手に入れないとまずいだろう。一刻を争う病気でないのが救いだし、もう少しいい方法を考えることにした。

しばらく、ああいうお遊びは控えないと病原菌増やすだけだしなあ。

空を見上げた。いつか本条先輩と一緒にダンスパブへ出かけた時と似たような夕焼け空が広がっていた。今の時間だとそろそろ夕闇も落ちるころだろう。彰子の家にたどり着くころにはきつと、真っ暗だろう。

きつと、彰子さんってばあちゃんのタイプだったからかもしれないな。

橙色に染まった空を見上げた。一年前は彰子のふくらあんな顔を思い浮かべて歩いた道だった。今はたくさんの男女問わず数限りない顔が浮かぶ空に変わった。

今の秋世ならば、水菜さんと先輩後輩のお付き合いをしなすこ

ともできるし、告白してきた女子たちの顔もたぶん見分けることができる。好き嫌いはともかくとして、すべてが彰子一色に染まることはないだろう。また水口と仲良く図書館で受験勉強する彰子を覗き見て嘸み付きたくなるほどの嫉妬にとらわれることもなくなるだろう。心やさしい天真爛漫な女子だけど、友だち以上の感情を持つとはもう考えられなかった。一気にモノクロ写真に変わった祖母の遺影と一緒に、彰子から色が抜けていくのを秋世は押さえようとしなかった。

そしてかつての自分が、彰子のように、「いい人」の仮面でもって傷つけてきたことを、改めて見据えたかった。今自分が彰子に対して感じている不快感を、きっと秋世は昭代や妙子さん、瑞希おばさんを感じさせてきたのだろう。秋世を「いい人」として守るため祖母が命を張ってきたために、とぼっちりを食った昭代たち。彼女らが秋世を憎むのも、それはしかたのないことに思えた。

だから、責任を取るんだ。

昭代の戸籍問題については自分でもどう対処していいのか正直わからないし、大人にすべて任せておくしかない。ただ、昭代が望んでいないのだったら秋世はこれ以上、かかわる気はなかった。

ただ、自分が今まで、「善意」でもって傷つけてきた人たちに謝って、彼ら彼女らを守ることはできるはずだ。たとえば立村のような奴とか、東堂の彼女とか。たくさん秋世と彰子によって心を切り裂かれた人たちを、どうすれば楽に呼吸させてあげられるのだろうか。そのために、規律委員長として自分は、何ができるのだろうか。

夏休みの宿題として、心に留めた。

奈良岡家門前までたどり着いた。

すでに夜の闇は完全に落ち、空にはららんと星が瞬いていた。織姫も彦星も、無事再会できそうなめでたい空だった。秋世は見上げた後、耳を済ませて東堂たちの気配を感じ取ろうとした。やっぱ

り気の合う奴がいてほしかった。

あいつら、まだいかなあ。

一応、飛び入りも可とは聞いているけれども、彰子たちからしたら秋世は来るか来ないかわからない客だ。やはりためらうものがある。かすかに焼肉の匂いがする。たぶんバーベキューパーティーの真っ最中なんだろう。

秋世は振り返った。夏木が立っていた。手にはスーパールの白いビール袋をぶら下げていた。秋世を上から下までじっとなめまわした後で、

「なんだ」

そっぽを向きたそうに、はす向かいで尋ねた。

「もう、七夕パーティー始まってるっすか、隊長」

「タレが足りないから買いに行っただ」

なんだか間抜けな会話で、笑えてきた。こんなかつこうで買い物に喜んでいくなんて、男子、そうとう惚れた子相手でなければやらないだろう。かつこ悪いかもしれない、でも夏木は彰子のためならちつとも恥ずかしいと思わないのだろう。

彰子は戦っているんだ、と夏木は言った。

たぶん、そうなのだろう。

懸命に「いい人」だと決め付けて、絶対に自分は悪い人になりたくないと努力している家族なのだろう。かつての自分だったらいとおしくも思い、応援したいとも感じただろう。

でも、今の秋世にそれはできなかった。

「いい人」でいるために、どのくらいの犠牲が払われているかを秋世はもう気づいてしまった。

彰子は気づいているのだろうか。

夏木が土下座して秋世に、ボディーガードを頼んだこともきつと知らないのだろう。

他のファンクラブ連中が懸命に彰子をサポートしようとしている

ことも、表向きは気づいているのだろうが、本当のところを理解しているとは思えない。

きつとかつての自分もそうだったに違いない。だから、恨まれ、憎まれた。

闇を見ずに幸せ一杯に生きていつてほしいと願う夏木の想いを、彰子はどのくらい理解しているのだろう。奈良岡一家がバッシングで戦っていることに同情するよりも、秋世は夏木たちファンクラブ会員たちの一途な想いに両手を合わせたかった。

「言つとくけど、俺、お前らのファンだから、覚えといてくれよな」
「るっせえ、さっさと入れ」

背中をどんと押されて秋世は奈良岡邸の門をくぐった。焼肉の匂いが立ち込める庭の中、星が湯気でかすかにかすんでいた。後ろで真赤なふりふりエプロンをまとい走り回ってる彰子とその母の姿を見つけた。東堂カップルも地味に肉をつまんでいるのが見えた。水口ぼっやはなぜか、顔の四角い男子と二人で真剣に語り合っている。その他複数の男女が交じり合っていた。

「わあい！ あきよくん、来てくれたんだね！ よかった、ちょうど焼けたところなんだよ、みんなで仲良く食べようね。そうそう、ナッキー、どうもありがと、たれ高かったでしょう？」

空は真っ暗闇だけど、庭の中の集団だけはてらてらした光に満ちていた。

いきなり祖母の顔が夜空に浮かんだような気がした。家の中で完全モノクロームに染まった祖母の色が蘇ってくるようで胸が詰まった。修学旅行直後、セレモニーホールで締め付けられた痛みを感じた瞬間と同じ感覚だった。

立ちすくんだまま、空を仰いだ。織姫さまと彦星さまに願いをかけた。

もう一度、ばあちゃんに会って話がしたいんだ、俺は。

「あそこに東堂くんもいるんだ、早く食べようよ。食べたらみんな
で花火やることになってるしね！ あれ、あきよくん、目に煙入っ
ちやった？ かゆい？」

彰子が勘違いして秋世の顔を覗き見ようとした。煙で目がかゆく
なっただけ、そうとも言える。でなかったらどうしてこんなに泣け
てくるのか、言い訳ができない。

「彰子さん、ありがと。やべえなあ、かゆくてかゆくて、涙出ま
く
り」

秋世はそっと目をこすった。彰子の瞳をじっと見つめた。

やわらかそうなまんまるほつぺたと、浮かぶ微笑みが懐かしく、
どうしても目を逸らすことができなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6727e/>

星まつり～青潟大学附属シリーズ中学編

2010年11月16日00時50分発行